ドラゴン騎士団戦記

赤城康彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴン騎士団戦記

【Ｎコード】
Ｎ８９６１Ｏ

【作者名】
赤城康彦

【あらすじ】
オンガルリ王国随一の強さを誇るドラゴン騎士団。ドラゴン騎士団を率いる団長こと大龍公ドラヴリフト、小龍公コヴァクス、小龍公女ニコレットは英雄として、オンガルリ王国の国防の要として活躍していたが。不穏な陰揺らぎ、試練の嵐が吹き荒び。兄と妹はドラゴンの誇りを胸に、乱世を、革命と戦いの風雲を駆け抜ける……。世界史を元に描く長編ファンタジー及び、架空歴史小説。連載中。

第一章　ドラゴン騎士団　？

オンガルリ歴三百十六年の秋。

オンロニナ平原。

オンガルリ王国において最強の誉れ高きドラゴン騎士団一万五千は、オンガルリ王国の南東に位置する帝国、タールコよりの侵攻を受け、これを返り討ちにせんと陣を張る。

ドラゴン騎士団を率いる大龍公・ドラヴリフトは威風も堂々と陣頭に立ち、今か今か、と号令を待つ騎士たちに呼びかけた。

「王国の命運、この一戦にあり。おのおの命をかけて、我が王のため、悠久の大義と名誉のために、戦おうではないか」

裂帛の気合をこめた叫びは、騎士たちの肝っ玉を強く打ち、

「応」

と大地が揺れるような掛け声、天まで届くかとばかりに響き分かった。

ドラゴン騎士団を率いるオンガルリ王国の貴族でもあり、大龍公と称されるドラヴリフト、このとき四十五歳の男盛り。

顎は獅子のような髭で覆われ、黒い瞳はひときわ輝き、掲げる剣に鉄甲の鎧兜からは銀波があふれ、騎士団の騎士ひとりひとりを包み込むような威厳があった。

十六歳での初陣より常に陣頭に立ち、幾多の戦場を駆け巡っては華々しい戦功を打ち立て。

その勇猛果敢さは国王バゾイィーより、

「その強さはまさにドラゴンのごとし」

と、大龍公の称号をたまわり。

また彼の率いる軍勢は、ドラゴン騎士団と呼ばれるようになり。

ドラヴリフトの指揮のもと、勇敢に戦い、周辺諸国からの侵略をいくたびとなく退けた。

このたびの戦いも、ドラヴリフト率いるドラゴン騎士団の栄光に

磨きをかけるものと、オンガルリ王国の誰しもが疑わなかった。
またドラヴリフトにふたりの子あり。
ひとりは長子コヴァクス二十歳。
その面影に父と同じ鋭くも黒く輝く瞳をそなえ、いまだ幼さを残すも、大龍公の子息として小龍公と呼ばれるだけあり、父譲りの勇敢さをそなえ。馬上、その鎧姿も凛々しく、将来を期待される青年将校であった。
またひとり、次子は女であった。
名はニコレットといい、母エルゼヴァス譲りの美しい金髪は今は鎧の中におさまるも、敵軍鋭く見据える瞳は、左は父譲りの黒にして、右は母譲りの碧眼という、左右ことなる瞳の色の持ち主であった。
花も恥らう十八の乙女の身ながら、これも父譲り勇敢さをそなえて白馬にまたがり戦場を駆け巡り、兄に続き小龍公女と呼ばれていた。

中央にドラヴリフト率いる五千、その右翼にコヴァクス率いる五千、左翼にニコレット率いる五千。
三列の陣列を組み、騎士歩兵ともに身をつつむ鉄甲、太陽の光受けて輝き、鼓動打つようにきらきらときらめき、タールコの軍勢向かい足並みをそろえて前進していた。
風にはためく、ドラゴン騎士団の旗。
三本のドラゴンの牙の描かれた龍牙旗は、敵に恐怖をあたえ、味方には勇気をあたえた。
龍牙旗たなびく様を見て、タールコの将軍、ヨハムドは我が軍勢三万であることを声高に叫び。
「おそれるな。今日こそ忌々しきドラゴン騎士団の牙を、へし折ってやれ」
と大喝し、中軍に位置する戦車（馬車）隊にあり、華麗な装飾をほどこされた戦車の上、槍を振るい自軍を鼓舞していた。

その装いは白布を頭に巻き、その上に半円の鉄の帽子をかぶり、頭上には赤く染められた鷲の羽が飾られていた。

身にまとう鎖帷子（くさりかたびら）の上には、鷲の紋章を描いた袈裟が首からかけられて、明らかにドラゴン騎士団と違う装備であった。

他の将卒も、それぞれ同じ装いをもって戦場にのぞんでいた。

オンガルリとタールコの因縁は深く、双方の国が建国されて以来、双方土地を奪い合い、その戦い、いつ果てるとも知れず。

オンガルリとタールコ双方の国において、宿敵国を攻め滅ぼした者こそが、真の英雄となれる、と周辺諸国の人々でさえささやくほどであった。

もともとオンガルリとタールコ周辺地域は、西にも東にも、果てしなく大地の続く大陸の中継地点に位置し。人の行き来も多く、民族の融合や分裂、さらに国家となってからもまた融合と分裂を繰り返した、戦乱の土地であった。

さらに、国境一つ過ぎれば、文化も宗教も生活習慣も違う異世界が広がる。いわば東西文化圏の玄関口でもあった。

かつて西方にも、東方にも、大帝国が興り。タールコは東方の帝国に支配され、オンガルリは西方の帝国に支配されて、それぞれ先鋒として刃をまじえた歴史があった。

だが東西の大帝国が滅び各国が独立し、集合離散を繰り返す群雄割拠の様相を呈している今においても、それぞれがそれぞれを一番の宿敵と見定め、戦争を繰り返している。

第一章　ドラゴン騎士団　？

水と油が混ざり合おうとしながらも、混ざり合えずに分かれるかのように。

それはまるで、水と油が同じうつわに入れられて、揺れて双方泡立つように。

そのうつわを揺らすは何か。

人々は気付きながらも、気付かぬようでもあり。

同じことがあるとすれば、両軍とも肌の色、髪の色も様々な人々によって編成されているということであり。

どちらかにしかない、というものはなかった。

人は、水と油のように分かれない。

小龍公女ニコレットの両眼が、それを物語っていた。

軍鼓管楽風を揺らし、双方の軍靴に騎馬の蹄、兵卒の掛け声、地を、天を揺らし。

戦いの緊張感は、心の昂ぶりとともに高まってゆく。

太陽は中天にのぼり、下界を見下ろす。

それを隠すように、双方より無数の矢が飛び空を覆い。双方盾を上に掲げて矢の雨をしのぐも、運の悪い者が射抜かれて、たおれ臥した。

やがて互いの目と鼻のかたちや肌の色がはっきりとわかるほどに両軍勢は近づき、

ドラヴリフト、ヨハムド両将の、

「かかれ」

という号令のもと、激突した。

双方天地を揺るがす怒号を轟かせ、騎馬・戦車が駆け、歩卒が走り、剣が閃き、槍は風をつらぬき。

草千里を走るような緑広がるオンロニナ草原は、たちまちのうち

に人馬の屍たおれ草花は血に染まっていった。
大龍公ドラヴリフトにその子ら、小龍公コヴァクスに小龍公女ニコレットも剣を振るい、おのおの力の限り戦い敵陣深く切り込んでゆき、ドラゴン騎士団の騎士たちも遅れをとるなと、勢いを増してつづく。
ことに若きコヴァクスとニコレットの血気は盛んなもので、敵を一騎、また一騎と討ち果たしては愛馬を突き崩してゆく。
コヴァクスがゆけば、それは疾風怒涛となって戦場を駆けめぐり、敵兵ことごとく風に吹かれる古木のごとくたおれてゆき。
ニコレットがゆけば優雅な剣さばき、剣光のもと血風かわって戦場に赤い薔薇が咲き乱れるかのよう。
龍牙旗も同じく戦場を駆け、我が身に吹き付ける風を糧として堂々とたたずみ、敵を威圧し。
数の上では有利なタールコは、徐々に圧されていた。

「数は我が軍が多いのだぞ。取り囲んで、握りつぶしてやれ」
ヨハムドは槍を振るい、自軍を叱咤し怒涛のように押し寄せるドラゴン騎士団とぶつかり合った。
さすが彼もタールコの軍勢の全権をまかされる将だけに、戦車揺れるをものともせず両脚をふんばり、槍で敵騎を薙ぎ倒し、あるいは突き殺し。
一丸となるドラゴン騎士団の一角を突き崩そうと奮戦し、ヨハムドに随うタールコの諸将も、三万の軍勢がドラゴン騎士団の気風に圧されぬよう声を張り上げて将兵らを叱咤していた。
が、オンガルリ王国最強を誇るドラゴン騎士団は強く上手く馬を乗りこなすに軽やか。いかに戦車から槍を繰り出し、車輪の刃で攻め立てようとも、攻めをするりと馬とともにかわし隙を見て剣を、槍を繰り出し戦車の御者を、戦車の勇者を討ち取ってゆく。
そのそばには、かならず龍牙旗があった。
二倍の兵力差にもかかわらず、タールコの軍勢は後退をしないの

がやっとの状況で、ここから敵を圧し前進するのは困難に思われた。
「おのれドラヴリフトめが」
ヨハムドは忌々しくうめいた。
大龍公ドラヴリフトの名が轟く前まで、タールコとオンガルリは互角であった。それが、ドラヴリフト以下ドラゴン騎士団が現れてからというもの、タールコは徐々に圧され。
領土もドラヴリフトの初陣のころより削り取られ、奪われた城は大小あわせて十五にのぼる。
国王バゾイィーなど怖れずとも、ドラヴリフトの名を聞けば、泣く子も黙る、といわれるほどその勇名とどまることを知らず。
また戦果も勇名の轟きにあわせとどまることを知らなかった。
「どうするべきか」
と、悩みあぐねているとき、左翼のニコレットの軍勢が急に衰えたかと思えば、左翼の龍牙旗は、突如として後退してゆく。
「むっ」
ニコレットの勇名も、父と同様に轟き、誰しもが小龍公女とおそれていたが。
「やはり、所詮は小娘ということか」
ヨハムドは槍を采配に左翼を指し、
「それ、小娘が崩れた。そこから突破しろ」
と号令をかけた
ニコレット率いる左翼の軍勢は厚みがなくなり、後退してゆき。
ついには、背中を見せて走り出す。
ついにドラゴン騎士団の一角を崩せたと、そこから中軍右翼と突き崩してやる、とヨハムドは意気込み全軍をもってニコレットを追わせた。
が、当の小龍公女ニコレット、
「そうよ、ついてらっしゃい」
とおそれるどころか、笑って敵を誘っている風であった。
この戦いでタールコの第一の勇士の誉れを手に入れたいヨハムド

は、血相変えて、
「追え」
を繰り返し、馬を鞭打つ御者を鞭打ち、自らの戦車を敵味方の別なく跳ね飛ばしながら、速度を上げさせた。
そのため、タールコの軍の陣形は一丸となったものから、触手をのばすようにニコレットを追いはじめて、やがて細長いものになってゆく。

第一章　ドラゴン騎士団　？

ヨハムドの鼻息は荒く、ニコレットの背中は常に視界にとらえられ。タールコ第一の勇士の誉れを、あと少しで掴み取れそうであった。

後退する左翼を追うヨハムドを見て、小龍公コヴァクス、うんとうなずき、

「馬鹿め！」

と一喝すれば、「我に続け」と馬を駆けさせ右翼を率い、雑魚を捨て急速にヨハムドの背後に回りこもうとする。そこへ、父ドラヴリフトの中軍も加わろうとする。

ニコレットを追うことに夢中だったヨハムドは、背後の気配怪しきを察し後ろを振り向けば。龍牙旗が背後より我を追いかけてくる。自分を先頭に細長くなった陣形は厚みがなくなり、脇の甘さを相手に見せつける格好となった。

そこで、

「しまった」

と気付いたが、遅きに失した。

細長くなったタールコ軍の陣形は縦横に駆け巡るコヴァクスとドラヴリフトの軍勢によってずたずたに分断され、各個撃破されてゆく。

ニコレットはおとりとしてわざと後退し、ヨハムドの気を引いたのであった。それに気付かず、陣形の崩れを意に介することなく、左翼退くをを好機と追ったのはまさに罠にはまったのであり。好機は己になく、ドラゴン騎士団の方にこそあったのであった。

「お、おのれ」

とうめくも、細長くなった後続はちりぢりになって踏みしだかれ。蜘蛛の子を散らすように、兵卒らは逃げ惑っていた。

「雑魚はかまわず、大将ヨハムドを狙え」

と、散らばるタールコ軍を掻き分けながら、こちらに迫りつつあるは、泣く子も黙る大龍公ドラヴリフト。
勇敢な者は一矢報いんと立ち向かうも、それことごとく剣風の前の塵のように斬り払われてゆく。

「将軍、ここはお逃げください」
そばの戦車の近習の進言を、忌々しそうに奥歯を噛みしめヨハムドは聴いていたが。
もうしれしかないようで。
「退却」
と号令をくだすと、一目散に戦車を走らせた。それを血気盛んなコヴァクスが追いかけ、次子ニコレットも馬首をかえし、自軍をひきつれヨハムドの戦車を追った。
大将が逃げ出せば、もうあとはもろいものだった。兵卒らは我先にと駆けて。戦車が横並びに逃げるその様は、まるで戦車競争をしているようであった。
それでも勇敢なタールコの将校が三騎、ドラヴリフトの前に立ちはだかり、行く手をさえぎろうとする。
「己が命と引き換えにしても、我が軍の将を逃そうとするか。討つには惜しい勇士ではある」
ドラヴリフトは嘆息するも、彼らが降伏しないことは知っている。むしろ死に花を咲かせてやることこそが、その勇気に報いることだと、自ら剣を振るい、しんがりに立ったタールコの将校を刃を交えた。
側近たちは大将をひとりで戦わせまいと加勢しようとするが、
「手出し無用！」
とドラヴリフトは叫んだ。
このときのドラヴリフトはドラゴン騎士団を率いる大龍公であるとともに、彼もまた一人の勇士として戦っていた。

タールコの将校は三名、こちらはひとり。値打ちのつりあいはとれている。

剣光閃々、火花散り。タールコの将校、勇将の誉れ高いドラヴリフトと刃を交える名誉をさずかり。その心昂ぶり、瞳は輝いてゆき。ひとり討たれ、またひとり討たれ、最後のひとりも、剣の閃きとともに、名誉の戦死を遂げた。

その間にコヴァクスとニコレットは右翼、中軍、左翼の軍勢をうまくまとめ、背中を見せて逃げ出すタールコ軍を飲み込むかの勢いで、ヨハムドを追っていた。

戦局は決した。

が、決して追撃の手は緩めない、疾風怒濤、顔を真っ青にして生きた心地もないヨハムドの背中は、徐々に迫りつつあった。

（こんなことなら、皇帝の言うことを聞き入れるのであった）

と、ヨハムドはおそい後悔に胸を掻き乱されていた。

タールコの皇帝、ドラグセルクセスは、無理をするなと何度もヨハムドに助言していた。

そなたはドラヴリフト率いるドラゴン騎士団と当たるのは初めてであるが、彼らは強く、決して侮ってはいけない、と。

美しい黒髪に、鼻の高い秀麗な顔立ちをし、強靭であるとともに鍛え抜かれたその肉体美は性別を越えた美しさを誇り。その美しさ、神々しさは、まさに神がこの地上に降り立ったがごとしと言われ『神美帝』と呼ばれるタールコの皇帝、ドラグセルクセスには、胸に秘策を秘めているようで。

その秘策が何か、ヨハムドは聞かされていないが、さすがに皇帝に対して言ってくれというのは気後れして言えなかった。

が、それよりも武人としてドラゴン騎士団と戦える喜びが勝った。

その喜びは、今はどこかへ吹き飛ばされてしまった。

ヨハムドはたしかに勇敢な将軍であるが、功名心が強く、ドラゴン騎士団の強さは危機というより好機とうつって、常に皇帝ドラグセルクセスに対し戦わせて欲しいと要請をしていた。それだけに、

出兵の許可が下りたときには天にも昇る気持ちであったのが、今は、どうだ。

今さらながら、どうして皇帝が自分を今までドラゴン騎士団と当たらせず、他方への進出にばかりいかせていたのか、やっとわかった気がした。

ふと後ろを振り向いた。

白馬を駆るヘテロクロミア（虹彩異色症）の少女、小龍公女ニコレット。

兄コヴァクスも、負けじと続く。

この戦いで敵を完膚なきまで叩きのめせば、以後あるであろう、和平交渉を有利に進められる。そのためには、最低限ヨハムドの首を獲る必要があった。

だから、コヴァクスとニコレットは必死だった。

が、勢いに任せて突き進みすぎるきらいがあり、

「我らが小龍公女を、命にかえてもお守りせよ」

と副官、ソシエタス三十二歳は部下を叱咤しニコレットを孤立させまいとその周りを囲み鉄壁の守りをなす。兄コヴァクスの方は、副官が追いつかずどんどんと突っ走ってゆく。無論これを阻むものはあったが、それことごとく剣風に吹き飛ばされた。

「おのれ」

とヨハムドの戦車のそばで駆ける騎馬の側近は、弓を取り出しながら大きく振り向き、コヴァクス目掛けて矢を放った。

「！！」

風を切りこちらに向かってくる矢を、コヴァクスはすんでのところでかわし。不幸なタールコの兵がひとり、矢の犠牲になってたおれた。

それを尻目にコヴァクスは叫んだ。

「敵将ヨハムド、観念して我らに首を差し出せ！　それが勇士としての潔さではないか」

ヨハムドはドラゴン騎士団に囲まれ、その中を右往左往している

有様だ。ニコレットをおとりとした策にのり、敵陣崩れたとこれを追ったばかりに我が陣形を崩し、気がつけば取り囲まれぬけ出せない。

いかに戦車を突っ込ませようが、騎士らの鉄壁の輪を崩すことはならず。

ドラゴン騎士団の右翼中軍左翼崩れをなすと見せ、ヨハムドの周囲を崩し取り囲んでいたのだ。

数の上では有利なはずのタールコ軍ではあったが、一旦陣形が崩れるやこれを立て直すことかなわず。草葉が車輪に踏み砕かれるようにして、激しく回転する鉄壁の輪に突き崩される一方であった。

（おかしい）

これに違和感を感じたのは、ドラヴリフトであった。

今まで戦ってきたタールコの軍勢はもっと手ごたえがあったはずだ。それなのに、今戦っているヨハムドの軍勢には、てんで手ごたえが感じられない。ヨハムド自身も、今までの敵将に比べれば三流の武将だ。

なぜ神美帝ドラグセルクセスは、こんな武将を大将として三万の軍勢をあずけ、オンガルリに攻め込ませたのであろう。どうにも合点がいかない。

が、かといって、手をゆるめるわけにはいかない。

ドラゴン騎士団の奮戦の甲斐あって、因縁のタールコとオンガルリの戦いは一進一退の状況だったのが、オンガルリ有利に進められ、タールコの領土を削りつつある。その戦力と士気を決定的なものにし、無駄な戦争をしないようにするため、ここで敵を完膚なきまでに粉砕せねばならぬ。

タールコの勇士を討ち、追悼の意を表して、ドラヴリフトは猛然とヨハムドに向かった。

鉄壁の輪の中でコヴァクスとニコレットに追われ右往左往していたヨハムドは、ドラヴリフトがこちらに向かうのを見ていよいよ狼狽して、遮二無二に戦車を駆けさせた。悪あがきであった。これは

およそ将たる者の見せる姿ではない。
そんなことだから、タールコの軍勢はもう軍隊としての態をなさず、敗残兵駆け回っては討たれる一方の惨めさばかり。こんなことで勝ったとて、なんの手柄になろう。
その時であった。
危険も顧みず、彼方から馬を飛ばしてくる一団あり。彼らはしきりに、
「オンガルリ王国の勅旨である」
と叫んで、ドラゴン騎士団に呼びかけていた。その顔は蒼白そのものであった。
何事だ、と騎士団はこの快勝の最中の突然の勅旨に驚きいぶかしがる。勅旨を無視することは、国王を無視する不忠行為となる。
せっかく勝っているのに、と。
ヨハムドの三流たるを知ったドラヴリフトは、無理にその首を求めず、敵の逃げるにまかせ、ふたりの子に遺いをやって呼び寄せ、勅旨を携えた王の遣いのもとまでゆく。
それこそ、敵兵は面白いように剣風に吹き飛ばされてゆく。その真っ只中に父の遣いに来られて、コヴァクスは興をそがれること甚だしく。
天に向かい、わっ、と獣のように咆えて、
「なぜだ」
と遣いにかみつく。
あと少しで敵将を討てるというのに。

第一章　ドラゴン騎士団　？

しかし、

「ヨハムドなど討つに値せぬ将。それよりも国王のお言葉を拝すべきでございましょう」

と言うので、やむなく、舌打ちしつつ、逃げる敵兵など捨て置いて王の遣いのもとまでゆく。

もう背後を狙おうとする者はいないほど、戦局は決していた。

ニコレットも異なる左右の色の瞳に、敵将を討てぬ悔しさをにじませて、後ろをソシエタスに任せて父のもとまでゆく。

ヨハムドは今こそ好機と、どんどん遠ざかってゆき、やがては姿をくらませ、それに合わせタールコの軍勢も屍を残して、他は皆逃げ去っていった。

それらを尻目に、ドラヴリフトにコヴァクス、ニコレットの指揮のもと。ドラゴン騎士団は隊列を整え、勅旨を携えた王の遣いの前に勢ぞろいする。それはまるで、盆より散った水がふたたび盆にかえるかのように。

歴戦の勇士たちの、その息の合った隊列の動きに、さすがは、と王の遣いは息を呑みながらも。下馬し跪く三人に、勅旨を読み上げる。

「王国東方、ワリキュアより神美帝ドラグセルクセスの親征軍およそ五万余りが侵攻せり。ドラゴン騎士団すぐさま眼前の敵を払い、ワリキュアに駆けつけるべし」

この報に、さすがのドラヴリフトも目を見開き耳を疑った。

「お察しでござろうが、ヨハムドはおとり。ドラゴン騎士団を引き寄せ、その間隙を突いて、わが国の領土を侵したる模様」

「……」

三人は静かに聞いている。にがい思いを噛みしめながら。

「国王のお怒りは、それはそれはたいへんなもの。王自ら軍を率い

てご親征なされてござる」
「なんと……」
ここハンロニナ平原は王国の南側に位置し、タールコとの交通の要所ゆえ幾度となく激戦が繰り広げられた地でもある。ワリキュアは王国の東方に位置する地であり、同じく交通の要所ながら、遠く迂回する経路となる。
はたして、今から駆けつけて間に合うかどうか。
「……」
ドラヴリフトは一瞬迷い、黙り込んだ。ふたりの子は、父のただならぬ様子に、どうしたのだろう、と思わず顔を見合わせる。
が、やられた。
ドラグセルクセスにいっぱい食わされたのだ、ということばかりが脳裏をよぎり。勝利もぬか喜びに終わったことも、またわかった。だが戦いに疲れた身体を鞭打ち、遠くのまた戦場へと駆けつけたところで、どれほどの働きができるというのだろう。
神美帝ドラグセルクセスは、ドラヴリフトに劣らぬ戦上手。これまで何度か親征軍をもって領土を侵そうとしたのを、ドラゴン騎士団が返り討ちにしたが、一歩間違えばこちらが負けた、と思わされることも一度や二度ではなかった。
なるほど、ドラグセルクセスは考えた。
オンガルリに勝とうと思えば、ドラゴン騎士団と戦わないようにして領土を侵攻すればよい。
と、そのためにヨハムドをおとりとしてドラゴン騎士団をおびき寄せ、自身は別経路をたどりオンガルリの領土に侵攻する。
おそらく、前々から周到に用意されていた策であろう。
オンガルリ王国にドラゴン騎士団あり。だが、逆に言えば、ドラゴン騎士団しかいない。
一番の問題は、国王の安否である。
自ら軍を率いて戦うことに関しては、ドラグセルクセスにはかなわない。いかに最上の愛と忠誠を誓えど、戦争における素質という

ものを考えたとき、どうひいき目に見ても、国王は戦場よりも宮廷において内政に専念する方が向いている人物であった。

だから、今まで何度か、親征を見送るように直言したことも、一度や二度ではなかったが、国王はなぜか、何かにつけて親征を望んだものだったし。

ドラヴリフトには、なぜ己の立場や危険を顧みずに国王が戦場に赴こうとするのか、わからなかった。

なにか、嫌な予感がした。

「父よ、ゆきましょう」

「ことは急を要します。国王の御身に万一のことがあれば」

と、ふたりの子、コヴァクスとニコレットは言った。

様々なことが脳裏をよぎるが、かといってとどまることなどできるわけもなく。

ドラヴリフトは天を仰いで、

「ゆくか」

と言った。

兵数を少し割いて、負傷兵や死者の埋葬をまかせると、オンロニナ平原をあとにして、ドラゴン騎士団は一路ワリキュアを目指し駆け出した。

野を越え山を越え、ドラゴン騎士団は一大決戦場となろうワリキュアをろくに休みもせずひたすらに駆けに駆けた。

その間にも、バゾイィー率いるオンガルリ王国軍はドラグセルクセス率いるタールコ軍と刃を交えているであろうが、さてその戦況やいかに。

オンガルリ王国は全体的に標高の高い内陸部の台地がほとんどを占める地域を領土とし、冬こそ厳寒に襲われるものの、年間の平均気温は穏やかな方で四季もある。

万年雪覆うような高い山はなく、今の時期、行軍は他国に比べて比較的楽な方であった。

それでもヨハムドと一戦を交え、休む間もなく次なる戦場へと馳せる騎士団の疲労はいかばかりか。やはりというか、脱落をする者が出始めてきた。

気の毒に思うものの、今回ばかりはかまうことは許されず、無事を祈りながら置いてゆくしかなかった。

都、ルカベストは丁度オンロニナ平原とワリキュアの間にある。ワリキュアへゆくということは、都を通ることになる。

都には、エルゼヴァスがいる。

が、会ういとまなどあろうはずがないが、女王とは謁見をせねばならぬであろうか。

兎にも角にも、ドラゴン騎士団は王の安否と宿敵タールコとの一大決戦場を胸に抱いて、ワリキュアを目指していたが。

出発をして四日目の夕方、都まであと三日、ワリキュアまであと七日というところで、様相は一変した。

ひたすら進軍するドラゴン騎士団の前に、またも騎乗の一団が現れる。その高貴なよそおいからして、勅旨を携えた王の遣いのようだ。

ドラヴリフト、コヴァクス、ニコレットは下馬して跪き、国王の言葉を拝せば、愕然と王の遣いを呆けた目で見つめていた。

勅旨いわく、

「タールコ軍は国王自ら率いられる親征軍によって撃退す」

三人は狐に化かされたかのような顔をして、じっとしていた。まさか、と言いたげに。それを、王の遣いは見逃さない。

「ふむ、まるで王に軍才なしと言いたそうなお顔をしておられるが。この勅旨をよもやお疑いではあるまいな」

「まさか、決してそのような」

とドラヴリフトは取り繕うも、ふたりの子は黙すといえど父ほど芝居は上手くなく、顔には満々とその疑いが濃くあらわれていた。

やってられん、とコヴァクスは跪く振りをして顔を下げてはいるが、ニコレットのふたつの色を持つ瞳は、鋭く王の遣いを射抜くよ

うに見据えていた。
　王の遣いは、あからさまに、忌々しそうに舌打ちし、さらに追い討ちをかけるように、
「ドラゴン騎士団は、遣いと相見(あいまみ)えた地にて宿営をし、王よりの沙汰を待つべし」
　と勅旨を読み上げた。
　さすがにこれには、他の将卒からもざわめきがおこった。ドラゴン騎士団は忠誠一途で国王に仕えてきており、疑われるような覚えはないし、都に快く迎えられこそすれ、行軍途中で野宿をしろなどといわれる覚えはなかった。
「失礼ですが、その勅旨を見せていただけませぬか」
　と言うのはニコレットであった。
　兜を副官のソシエタスに預けて。その金髪はくすんでいるものの、くすみとくすみの間からはかすかに光りをはなって獅子のたてがみのように逆立ち、両の目の黒碧ふたつの色の瞳は、らんらんと輝き炎でも噴き出さんがばかりだ。

第二章　反逆者　？

「ニコレット、無礼であるぞ」
と父が咎めるも、
「ご無礼は戦功をもってお償いいたしまするゆえ、勅旨を見せていただきたいのです」
と言って聞かない。
王の遣いはあからさまに不機嫌な顔をして、勅旨を手渡しながら。かつてニコレットが国王を愛していながら、それが報われなかったという話を思い出した。
（女の愛憎とは、怖いものよ）
ニコレットが女の身ながら戦場に立つのは、国王へのあてつけだと、宮中でなぜかそんな噂が流れて。知らぬはニコレットばかりなりであった。
勅旨を丁寧に持ち、じっくりと筆跡に蝋印を見定めてみれば、確かに国王よりの勅旨である。ニコレットは、「確かに」と言って王の遣いに勅旨を返す。
「ニコレット殿、このことは王にお伝えしますからな」
と王の遣いは背中を見せて遠ざかってゆき。先に戦場に来た遣いたちも、一緒に帰ってゆく。
ドラゴン騎士団は突然の霧につつまれたような不安にかられ、あちらこちらでざわめきが起こっている。
ドラヴリフトは落ち着き、
「やむをえぬ、ご命令どおり、沙汰あるまでここで過ごすしかない。さあ、宿営の準備をせぬか」
と将卒らにハッパをかければ、指示通り近くの森の木を切り、テントを張り、にわかの集落がつくり上げられてゆく。
嫌な気分を紛らわせたいのか、疲れも構わずいつにも増して、作業時の掛け声は大きかった。

その間にも、ドラヴリフトはふたりの子を引きつれ、宿営地をまわり、

「元気を出せ、王はわかってくださる」

「我らは、誉れ高きドラゴン騎士団ではないか」

と、将卒らを励まして回る。

ドラゴン騎士団への大衆の人気は高い。戦場においても敵を必要以上に殺さず、辱めず。また戦争につきものの略奪暴行も厳しくいましめ。いかなる国の民であろうと民族であろうと、決して差別せず、平等に、人間として接してきた。

それが騎士としての振る舞いであると。

宿営地を造営する最中にあっても、どこからか近隣の町や村から、住民の差し入れが届けられてくる。将卒らはそれを丁重に感謝して受け取る。

このおかげで、戦争に行っても餓えることがなかった。

オンガルリの軍人の中には、ドラゴン騎士団に入団することを夢とする者が多い。

今も、ドラヴリフトの眼前で、近隣の民からの差し入れを将校が丁寧に礼を言いながら受け取るところが見られた。

民は、ドラヴリフトとコヴァクス、ニコレットを見ると、まるで神を崇めるように喜ぶ。

それに笑顔でこたえながら、

（ゆえに、他からの妬みも尽きぬか）

と内心憂えた。

気がつけば夜の帳が落ちて、三日月が無数の星たちを引き連れて夜空に浮かんで地上を見下ろしていた。

そのころ、辺境の町ワリキュアにおいて近衛兵団の勝利の宴がささやかながらも、もよおされていた。

ワリキュアはオンガルリ東方、東端の地方の名で、中心となる町の名も同じワリキュアであった。

かつてここは百年前まで、ワリキュアという小さいながらも歴と

した独立国であった。それがオンガルリの支配下に置かれて以来、その国名は地方の名になり、王は地方貴族となってオンガルリに仕えた。

素朴で小さなワリキュアの町は森のしげれる丘陵地帯の台地にぽつんとある寂れたところであったが、この親征軍来たるによってにわかに賑やかになっていた。

ワリキュアの東端にダノウ川が流れていて、現時点においてこの川が国境の役割を果たしていた。

国王バゾィィーは町を治める領主のオスロートの、（国王から見れば）小さな城の大広間にて側近たちと飲めや歌えやの、無礼講の大はしゃぎ。

田舎ゆえにこれといった馳走もなく都から運んできた山海の珍味も少ないが。

戦勝の心地よさは、それをおぎなってあまりあるほど胸の中でときめいていた。

「うむ、猪肉のなんと美味いことよ」

と脂ののった猪肉をフォークでぶっ刺しては口に放り込み、もりもり食べては、ルカベストから持ってきたワインを浴びるように飲む。オスロートやその召使いたちは、国王や側近の接待できりきり舞いだ。

「王よ、あまりはしたないお真似は……」

と、酒と戦勝の効用で頬を赤くした側近のイカンシが、そばに来てそっとたしなめるが、

「なんの、無礼講よ。あのにっくき神美帝ドラグセルクセスを、予の力で追い払ったのだ。こんな愉快なことがあるか」

「左様」

イカンシが苦笑いをふくんで微笑むと、オスロートが自分で新しい鹿肉の料理を運んできて王の前にうやうやしく差し出し、丁寧にテーブルに置いた。

他の側近らも召使いたちの運んでくる酒や料理を、笑い声をこだまさせながら次から次へとたいらげてゆくから、もう大変な賑わいであり、騒ぎであった。

ワリキュアの城の周辺、町中には、親征軍や近衛師団の兵卒たちが町民のもてなしを受けて、やはり同じように飲めや歌えやの大騒ぎ。

若い兵士たちは酒で顔を真っ赤にして、若い娘たちと陽気に踊っていた。

なにせ五万の大軍である。

ワリキュアの町だけでは人も物も足りないのは言うまでもない。だから近隣の町や村からも大勢の人手が出て、兵卒たちをもてなしていた。

森の中に小さな木造家屋が建ち並び、庭があって二階以上ある大きな建物といえば、防衛線となる小さなワリキュア城と、鋭い槍のような屋根を天に向けるようにしてたたずむ教会くらいなものだった。

都から来た面々から見れば、可愛らしいものであったのは言うまでもない。

今は戦勝の気分に浮かれて、退屈極まりない田舎の素朴さすら愛嬌と、いとおしく感じる。

ドラグセルクセスがおとりをもってドラゴン騎士団をひきつけている間に迂回して、その大軍が国境の川を越えようとしている。との報告を受けて、バゾイィーは、

「さればゆかん」

と、すぐさま自らの近衛師団ら軍を率いて迎撃の決断をくだした。日ごろの軍の訓練にも自ら加わり、武術の修練も欠かさなかったバゾイィーにとって、この報は驚きよりもむしろ日ごろの訓練の成果を発揮できる絶好の好機であると、王の胸をときめかせた。

いざワリキュアと、五万の軍勢とともに疾風怒濤の勢いで来てみれば、対岸の敵は川を渡ろうとしているところであった。その中に

は、確かに神美帝のふたつ名に相応しい美丈夫、ドラグセルクセスもいた。

これを見て鎧姿も勇ましく、騎乗にて指揮を執るバゾイィーは、

「それ、敵の渡河をゆるすな。今日こそドラグセルクセスの首を獲ってやれ」

と意気込み自らダノウ川に飛び込み、槍を振るい先頭に立って敵に突っ込んだ。

兵卒たちも雄叫びを上げて王に続き川に飛び込み、タールコ軍に立ち向かった。

ダノウ川ははるか西方に源をもつ長い川で、大地を裂くようにしていくつもの国をまたいで、一旦北上して、また東南方向へ向かいオンガルリの国を北から東南方向へなぞるようにして通り抜け、海へと流れてゆく。

この川が東南に下っている部分が、国境の役割も果たしていた。が、なぜかその部分だけは川幅は狭く全体的に浅く、せいぜい大人の胸までしか深さがないから、自然の堀の役目はあまり果たせないでいた。

ドラグセルクセスはそこに目を着け、今まで幾度となく川越えを試みたのだが。それはことごとく、ドラヴリフト率いるドラゴン騎士団によって退けられた。

そしてこの時、国王バゾイィー率いる親征軍が、ドラゴン騎士団にかわってタールコ軍を退けたのだ。

残念ながら首は獲れなかったものの、奮戦の甲斐あって、敵はろくに刃を交えずに背中を見せて逃走し。対岸の向こうへと姿をけしていった。

王は叫んだ。

「ついに予はドラゴン騎士団と肩を並べたぞ」

と……。

第二章　反逆者　？

その会心の叫びを思い起こしては、うんうんと頷き、グラスを傾けワインで喉をうるおす。

そのとき、ひとり侍従の者が近づき、イカンシに何か告げる。

イカンシはうんうんと頷き、侍従の者を側に控えさせて、バゾイィーに、

「ドラゴン騎士団を、足止めしたそうにございます」

と言った。それから、オンロニナ平原での戦いの戦果も報告された。

敵軍勢は追い払ったが、敵将ヨハムドは討ちそこねた、という。

「そうか」

それまでご機嫌であったのはどこへやら、ばん、とテーブルをたたいて立ち上がると、

「諸君！」

と宴席の側近らに呼びかけた。

側近らは飲み食いをやめ、じっと王の言葉を待っている。広間は水を打ったように静かになった。

バゾイィーは、こほんとひとつ咳払いをすると、周囲を見渡し。威厳たっぷりにまた咳払いをすると、

「ただいまドラゴン騎士団とタールコ軍の将ヨハムドとの戦いの報せがまいった。敵をすんでのところまで追いつめながら、ヨハムドは討ち損じたという。これが、何を意味するのか」

側近らは互いに顔を見合わせ、宴席はにわかにざわつきだす。

「言うまでもない、討ち損じたのではなく、逃がしたのよ。ドラゴン騎士団はタールコと通じておったからな。まさに、この戦果はその証しではないか」

「まったくです。ドラヴリフトは百戦錬磨の勇将。その子ら、コヴァクスにニコレットも、父の器を受け継ぐ若き龍。その気になれば

たやすく討ち取れるものを、逃がしたなど。これはまさに、タールコと通じていたという、何よりの証し」

とイカンシが言葉を継げば、側近らも異口同音に賛同する。

バゾイィーは酒の勢いも手伝って鼻息が荒い。

「今宵は存分に飲み明かし、翌朝、あの忌々しき裏切り者を討ち取りにゆこうぞ」

と言うと、その場が沸騰するかのように、わっ、と雄叫びが上がった。イカンシは厳かにしかめっ面しながら、うなずく。

「裏切り者に制裁を、死を」

「ドラヴリフトは龍公にあらず、悪魔公なり」

「その子らは、小魔公に小魔公女なり」

「報いを。やつら忌まわしき一族に、恐ろしき報いを」

と、側近らは口々にドラヴリフトらを罵りだした。

それを、右手を挙げて制す。

「もうよい。この喜びの席であまり殺伐たることを口にするのは、よくない。口直しせよ」

バゾイィーはどっかと椅子に座りなおし、口直しとワインで喉をうるおす。側近らも言われるまでもなく、口直しする。

(思えば、ドラヴリフトは何かにつけて、予に戦場に出るよりも都で内政にいそしめなどとほざいておったが。そうか、予を引き篭もりの腑抜けにするつもりだったのだな)

つらつらと、頭の中に色々よぎり、鹿肉を口に放り込み噛み砕きながら、頭の中で思考をめぐらす。

(イカンシに教えてもらわねば、予はあのまま引き篭もりの腑抜けになっておったわ。ふん、オンガルリで戦ができるのは、ドラゴン騎士団だけではないわ)

側近たちを見回す。彼らは王に忠誠を誓い、命を賭けて戦ってくれた。その実力は、ダノウ川の戦いでいかんなく発揮され。ドラゴン騎士団に頼らなくても、国を守れることを十二分に証明してくれ

た。

（さも我こそ忠臣なりと振る舞いおって。予もまんまと騙されて、あやつをドラゴンの如しなどとおだてて、多大な恩賞をくれてやった。その結果、つけあがったあやつは、いまや一万を越える軍隊を持つまでにいたった。迂闊であった。なんでそれが、反乱の兆しであると見抜けなかったのであろう）

はっと、脳裏に閃いたもの。

バゾイィーは、いいことを思いついたと喜び「そうだ、そうだ」と愉快そうに笑って言った。

「まずは、都に人質として住まわせておるエルゼヴァスの首を、刎ねてしまえ」

「ご名案でございます」

「ドラヴリフトめ、忠誠の証しに妻を人質にしたが、そうか、妻を使って我が国の内情を探らせるのが目的か。迂闊、迂闊。裏切り者と知らず、予は凶刃を懐にしまっていたのか。イカンシ、そなたには感謝しておる。このまま捨て置けば、オンガルリはドラヴリフトに乗っ取られていたであろう」

「何を言われます。王の忠実なるしもべとして、当然のことをしたまでございます」

「謙虚なやつよ、まあ飲め」

とバゾイィーは酒をついでやる。もったいない、と言いながらイカンシはまんざらでもなさそうに、酒を飲む。

皆明日の出陣の景気づけと、存分に楽しく飲み食いしていた。

そしてその翌朝、オスロート以下町の人々の見送りを受けながら、威風堂々と、国王バゾイィーの親征軍五万は龍退治にゆくのであった。

ドラゴン騎士団は、勅旨のとおりに、その場に駐屯し、空の雲が流れてゆくのを見上げながら時がすぎてゆくのを待っているしかなかった。

王命である。

これに背いて動けば、ドラゴン騎士団はたちまちのうちに不忠の騎士団となってしまう。と、ドラヴリフト以下騎士団の将卒は王の沙汰を待っていた。

忠実なるしもべとして。

王の気持ちなど知らず。

ドラヴリフトは自分の幕舎で、必要な仕事をする以外は書物の読書にふけっていた。コヴァクスは自分の幕舎でじっとしていることが出来ず、副官をともなって部隊をまわり将卒らと暇をつぶすなどしていた。が、なにかにつけては眉をつりあげ、腕を組んでは指で二の腕をとんとんと叩く。

そんなときに、ニコレットも副官のソシエタスをともない部隊まわりをしていてコヴァクスとでくわした。

左右違う瞳を兄に向け、

「お兄さま」

とコヴァクスを呼んだ。

鎧を身にまとってはいるものの、兜はなく。母親譲りの美しい金髪は陽光に照らされ、風になびきながら光り輝いていた。小龍公女と呼ぶに相応しい美しさと強さをあわせもつニコレットを、ソシエタスやドラゴン騎士団の将卒らはまさに女神のようにうやまっていた。

「ニコレット、お前もひまそうだな」

コヴァクスがからかうように言うと、ニコレットは帯剣の柄をたたき、いたずらっぽく微笑みながら、

「ええ、退屈で退屈で。剣を握り戦場を駆け巡った方が、よほど幸せですわ」

と、かえすと、兄の顔を見てくすりと笑う。

「まあ、お兄さまったら、怖い顔をして」

「当たり前だ。王は一体何を思って我らをここに足止めさせるのか」

「きっとお考えあってのこと。時が経てば解決いたしますわ。それ

より、もうそろそろ花嫁を迎えねばならぬ身。何かのたびにそのようにぷりぷり怒った顔をされては、誰もお近づきになりませんことよ」

「余計なお世話だ」

「妹の親切心を踏みにじるなど、ひどいお方。そんなことでは、私は友人たちに、兄に嫁ぐなと言わねばなりませぬわ」

「馬鹿にするな。嫁くらい自分で見つける。決してお前の世話にはならぬ」

「あら、そう。クリスティンカはよく私に、お兄さまのことをお聞きになるわ。どうしたのかしらねえ」

「む、クリスティンカが……。いや、いや、からかうな」

「あら、お顔が真っ赤ですわ」

「これは戦いを求める戦士の顔だ」

「ふふ、まあそういうことにしておきますわ」

「どういう意味だ」

ニコレットは真っ赤になるコヴァクスを完全にからかって遊んでいる。熱くとも単純な兄は暇つぶしにはうってつけだ。

が、ソシエタスは苦笑いをしながら、ごほんと咳払いをし、

「そういえば、奥方さまは、今ごろどうなされておられましょう」

とさりげなく言うと、コヴァクスとニコレットは、はっとして気まずそうに都の方へ顔を向けた。

が、確かに、母は、エルゼヴァスはどうしているだろうか。

そのエルゼヴァスも、ドラゴン騎士団のことを知らないわけではなかった。敵を迎撃するもそれはおとりで、急ぎワリキュアに向かう途中で行軍を中止し王からの沙汰を待っている、と。

都、ルカベストはオンガルリ建国以来、国の中心地として栄えていた。中央に王城がそびえ立ち、陽光を受けて石壁は輝き、それがまた都に降りそそがれている。

またそれを幾多もの貴族の邸宅が取り囲み。またそれに従うように一般市民の家々も軒をつらね、そのあいだあいだに、教会のとが

った屋根が神よりの言葉を受け取るようにして突き出ている。
その四方をなだらかながらも山々が取り囲み、自然の城壁の役割をなしている。山々の緑のところどころに、赤みがまざりこみつつあり、涼やかな空気とともに季節の移り変わりと、冬近しことを教えてくれている。
エルゼヴァスは王城の一室の窓から外の景色をながめて、ためいきをつく。山の向こうに、夫と子どもたちが騎士団とともにいる。
年すでに四十になるというのに、紅いドレスに包まれた身、きりりと背筋は伸び。碧い瞳に金髪は陽光を受けてきらりと輝き。美しいというだけでなく、大龍公の妻として、自然に慈愛と威厳がそなわり、かぐわしき薔薇の香りをはなつよう。
だが、口元は引き締められて手を合わせ、じっと窓から景色を眺めているばかりだった。
嫌な予感がする。どうも、最近周りの様子がおかしい。自分も、夫も子どもたちも騎士団もどうなってしまうのか。考えると胸が締め付けられそうだった。なにより、これから寒くなろうとしているのに、都に入ることを許されず、野営を強いられているとは、夫はともかく、子どもたちは今ごろどうしているだろうか。
戦争にゆくという、それだけでも試練であるというのに。その上にまた、試練が重ねられるのだろうか。
武人の妻である。心配はしても安易な同情はしない。
だが……。
召使いたちの少女らが心配そうに見つめるのを背中に感じながら、手を合わせ、神に無事を祈らずにはいられないでいた。

第二章　反逆者　？

エルゼヴァスはまた、外出を一切禁じられていた。いつのころからか、大臣イカンシが国に不吉の蠢動（しゅんどう）あり、ご用心のため外出は控えられるように、と言ってきた。

それを律儀に守り、部屋からは一歩も出ていない。

しかし、不吉の蠢動とは、一体なんであろう。イカンシは教えてくれなかった。タールコがオンガルリに攻め込んできた、ということで、ドラゴン騎士団がゆき、また王も親征軍をもって迎え撃ちにいった。

その戦果は、まだエルゼヴァスのもとにもたらされていない。召使いに聞いても、わからない、という答えがかえってくるばかり。

窓から眺める都は、ぱっと見いつもと変わらないように、路地に人が行き交いいつもの賑わいを呈している。が、どことなく、空気がかたまっているように、緊張感があるのは感じられた。

人々はタールコとの戦争のことをひどく気にかけているようだった。

（負けはしないだろうけれど）

夫の、子どもたちの、そして王の武勇によってタールコはしりぞけられ、オンガルリは守られる。と確信したかった。

このとき、都の様子が一変した。

タールコ軍を迎え撃ちにいった王の軍隊が帰還したのだという。

ということは、タールコはしりぞけられたのだ。

早馬が王の帰還を告げ、都は、城は勝利の歓喜につつまれながら、王を出迎えるために途端に慌しくなった。これにエルゼヴァスも加わらねばならないのだが、部屋から出ようとすると、衛兵が、外出は禁じられていると、出してくれなかった。

（まるで罪人扱いではないか）

とエルゼヴァスをはじめとする召使いたちも思ったが、どうしよ

うもなかった。
確かに、ドラヴリフトの忠誠の証しとして、エルゼヴァスは都に人質としているが。帰還した王の出迎えの列に加われぬとは、どうであろう。
なにより、ドラゴン騎士団はどうしたのだろう。
勝利の喜びを味わうどころではなく、やむなく、自室に帰って、凱旋の様子を窓から眺めるしかなかった。
突然、他の召使いが慌てて「奥方さま」とエルゼヴァスを呼んだ。何事だろう、とその方を振り向けば、開け放たれた部屋の扉から、イカンシが部下を引き連れ鎧姿のまま入り込んでくるではないか。
王のお気に入りなのに、凱旋式はどうしたのだろう。
「何事でしょう」
といささか驚きはしたが、平静を装いエルゼヴァスはイカンシに何事かと問えば、イカンシはうっすらと不気味な笑みを浮かべ。
「お美しい」
と言った。
突然何を言い出すのか。と、エルゼヴァスもその召使いたちも背筋が寒くなる気持ちをおぼえれば。イカンシはまたも唐突に、
「エルゼヴァス様は、いかにして、そのお美しさをたもたれておられますか」
と言うではないか。
そんな美容の話をするために、武装して部下を引き連れて来たのか。
といえば、そんなわけはないだろう。その真意をはかりかね、言葉につまった。まさか口説きにきたのでもあるまい。
だがその方が、どれだけましだったか。
「最近、都において若い娘が次々と行方不明になる事件が起こっておりましてな」
「……」
そんな話は初耳だ。イカンシは何を言いたいのか。

エルゼヴァスと召使いたちの困惑は深まるばかりであった。
「その行方不明になった若い娘の一人が、突如として姿を見せたのですが。これがまた、全身傷だらけのむごい様で、こう言うのです。エルゼヴァス様に、血を抜き取られた、と」
「そんな馬鹿な」
召使いの一人が言った。
「私どもは常に奥方さまと一緒に過ごしておりますが、そのような可哀想なことをするわけがないではないですか」
「ええ、私も何かの間違いかと思い、何度も問い直したのですが、その娘は確かにエルゼヴァス様に虐げられたと言うのですな」
召使いの言葉など歯牙にもかけず、ぬけぬけとイカンシは言う。
「口にするのもおぞましいですが……。美しさをたもつため、誘拐した若い娘を殺し、その血を浴び、飲んでいる、と娘は言いまして」
「戯言を！　イカンシ殿、いくらあなたでも、それ以上わたくしを愚弄することは許せませぬ。何を根拠に、そのような禍々しいことを」
エルゼヴァスは武人の妻らしく、声を張り上げ抗議する。言うまでもなく、美しさをたもつためにそんな惨たらしいことをするわけがない。美容にしても、普通に食事や化粧品選びに生活習慣に気を配っているにすぎない。
なにより、今は喜ばしき凱旋のときではないか。

なぜそんなときにイカンシはそんなことを言うのか。
「ソレアという娘をご存知ですかな」
「……。ええ、先日までわたくしに仕えていましたわ」
嫌な予感がした。
「その娘がソレアだとしたら、どういたしますか。いや論より証拠、ソレアよ、おいで」
とイカンシは後ろを振り向いて言うと、おどおどと、包帯だらけの痛々しい姿の少女があらわれた。

エルゼヴァスも召使いたちも、あまりのことに、驚きの声を上げる。

「ソレアよ、どうしたのですか。その姿は一体……」

エルゼヴァスは心配そうに声をかけた。しかし。

「わ、私を殺そうとしたのは、お、奥方さまです」

ソレアは恐怖に震えもれるような声で言った。

「奥方さまの髪を櫛でといているとき、粗相をいたしまして。奥方さまは大変お怒りになり、私を何度もぶって、『この罪をお前の血であがなえ』と言われて……」

「それで、お前を殺して、その血を抜き取ろうとしたのだな」

とイカンシが言い足す。

「はい、そうです。でもすぐには殺されず、ひどくいたぶられて、この部屋に監禁されて」

「馬鹿げたことを、ソレア、あなたは好きな人が出来てお嫁に行きたいというから、いとま乞いをしたのではなかったのですか」

「うそ、うそ。そんなのうそです。奥方さまは、黒魔術に染まった魔女です！　そのお美しさも、若い娘の血を浴びたり、飲んだりしてたもっているではないですか。私も、そんなことを手伝わされて。血のいっぱい入った瓶を運ばされて……」

ソレアは目を見開き、真っ赤な口を開けて狂ったように叫び、エルゼヴァスの罪を声高に叫んだ。その様は、まさに気が触れたとしか言いようがないほど、恐慌をきたしていた。

気がつけば、部屋に多数の衛兵がつめかけ、じっとエルゼヴァスを見据えている。

「おお、なんというかわいそうな。このいたいけな少女をここまで狂わすとは。すんでのところで隙を見つけて逃げ出し、私のもとまで助けを求めて来ねば、今ごろはどうなっていたか」

さも同情するように、イカンシはソレアを優しく抱きしめてなだめて落ち着かせようとするが。ソレアはイカンシの腕の中で、ひたすら、「魔女、魔女」と叫んでいる。

エルゼヴァスも召使いたちも、あまりのことに言葉もない。もはやどう弁明しようとも、問答無用なのは明らかで、どうあってもエルゼヴァスを魔女に仕立てあげて、捕らえるつもりだろう。

「さあ、衛兵たちよ。この魔女を捕らえよ」

衛兵はどっと部屋に押し入り、エルゼヴァスを取り囲んだ。悔しさのあまり、両の拳を握りしめ、目を固く閉ざして奥歯を噛みしめ、ややうつむき加減に頭を垂れた。

（あなた、コヴァクス、ニコレット。……さようなら！）

衛兵のひとりがエルゼヴァスの腕をつかむ。だがそれを力任せに振り払う。

「や、逆らうか、魔女め」

ソレアを抱きしめながらイカンシが言うが、エルゼヴァスは顔を上げ、きっと鋭い眼差しで、イカンシを見据えると。

「喉が渇いたので、ワインを飲んでもよろしいかしら」

と言って、衛兵たちが取り囲むのも知らぬ顔で、つかつか歩き包囲の輪を抜けて歩き出す。そのついでのように、ひとりの衛兵の足を踏んだ。

「む、おのれ」

「あら、ごめんあそばせ」

怒る衛兵など構わず、そのまま素通りする。彼女からは、気迫がみなぎり、衛兵は位負けして動けない。なんと不甲斐無い者どもよ、と思いつつ、イカンシ自身も同じように位負けして、エルゼヴァスを見据えるしかなかった。

しかし、何のつもりだろう。

召使いは慌てて部屋の棚に置かれていたワインの瓶を取って、エルゼヴァスに捧げようとする。が、その召使いに平手打ちが飛んだ。

「馬鹿ね！　そのワインじゃないわ。あれよ！」

と言って、別のワインを指差す。召使いはぶたれたことに衝撃を受けるより、エルゼヴァスの指差したワインを見て、ぶるぶると震

え出してとまどっている。
「お、奥方さま、あれは」
「いいから、あれが飲みたいの。あなたって、気が利かない愚かな人ね。ああ、こんな馬鹿な女を今まで雇って給料をあげていた自分が情けなくなるわ」
と言うと、周りを見回し。
「前から思っていたけど、あなたたちなんか、大嫌いですわ。いつもいつも愚かな粗相を繰り返して。それでも堪えていたけれど、もう我慢ならない。みんな、暇をやるから、出ていってちょうだい！」
目をいからし、エルゼヴァスは突然召使いの少女たちを罵りはじめた。
（おやおや。いかにエルゼヴァス夫人といえど、この瀬戸際にやけくそになっておるわ。所詮、女なぞそんなものだ）
イカンシと衛兵たちは冷笑しながら、面白いものを見物するつもりで事のなりゆきを見守っていた。
召使いたちはというと、ただぶるぶると震えてばかりでひとつも動かない。いよいよ堪忍袋の緒が切れたと、エルゼヴァスは召使いひとりひとりに、強い平手打ちをあたえてまわった。
平手打ちを受けた召使いたちは、涙を流しながら、
「申し訳ございません、奥方さま」
と泣きながら出てゆく。
衛兵が、あっ、とこれを止めようとするが。
「捨て置け、小娘どもなぞ」
とイカンシは制して、ゆくにまかせた。これで残るはエルゼヴァスのみ。
「ワインが飲みたければ、どうぞ」
と厭味たっぷりに言う。
それに応えず、ふん、と傲然と指名したワインの瓶をとり、栓を自分で抜いてグラスに注ぐ。それは、やけに不気味に赤みがかったワインで、まるで血のようだ。

（まさかほんとうに血を飲んでいるのではあるまいな）

などと、イカンシは少し驚きながら、そのワインの紅さに眼を見張った。衛兵は、血を飲むだの、やはり魔女であったかだのと、不気味そうにつぶやく。

エルゼヴァスは、一気にこれを飲み干した。なんとも女性ながら気風のよい飲みっぷりであり、それはまこと貴族の夫人と思われぬ豪快さであった。

それから、イカンシに衛兵たちは、

「あっ！」

と気を荒げて、急いでエルゼヴァスのもとまで駆け寄る。

あろうことか、エルゼヴァスは口から血を流し、身体がやや痙攣したかと思うと。赤い蝶々が地に落ちてゆくかのように、ドレスの袖や裾をひらめかせ、たおれて。

ぴくりとも動かなかった。

「しまった、このワインは毒入りだ！」

権謀策術渦巻く宮中にあって、万が一にそなえて、エルゼヴァスは毒入りのワインを用意していた。やけに血のように赤みがかっていたのは、毒が入っていたからだろう。

「魔女め、この期に及んで自害するとは」

と衛兵が悔しそうにつぶやけば、イカンシは苦しそうに、うむ、とうめいた。まさかこのようにして出し抜かれるとは。夢にも思っておらず。これは、いかなる手段をもちいようとも、ドラゴン騎士団を潰さねばと、あらためて腹をくくらざるを得なかった。

エルゼヴァスはイカンシの腹のうちなど知らず、閉じられたまぶたから、うっすらと涙をにじませていた。

第三章　クンリロガンハのわかれ　？

ドラゴン騎士団を討つ前に、景気づけに凱旋式を執り行うため、都ルカベストに向かっている途中。新事実発覚と、イカンシより、エルゼヴァスが黒魔術に染まった魔女であったことを知らされ、王は。

「なんと、反逆者の妻は魔女であったのか」

と激怒して、都につくやいなや城には入らず凱旋式の準備を命じるとともに、イカンシにエルゼヴァスを捕らえにいかせた。

五万の軍勢はすべては都に入らず、大部分は郊外で待機をし。都に入ったのは、王と側近、将軍らとそれを護衛する近衛兵団と、百騎ほどの騎兵隊と、資材を乗せた馬車を曳く工作兵。それらが城の真正面にある円形の公園広場に入ると、工作兵が凱旋式のための演壇の設営にとりかかった。

王の四方は幔幕をめぐらし、外から様子はうかがえないようになっている。幔幕の中は王のほかに、イカンシをはじめ、その他お気に入りの側近や大臣に、屈強な護衛兵が数名控えている。

エルゼヴァスを捕らえに行ったイカンシと入れ替わりに、妻である女王ヴァハルラとふたりの娘、第一王女アーリアと第二王女オラン、末っ子の王子カレルが護衛兵や侍女に付き添われてやってきて。王に戦勝の祝いを告げた。

バゾイィーはご機嫌で家族を出迎え、ひと時の団欒をすごした。

女王ヴァハルラはバゾイィーと同い年の三十四歳。最初の子どもアーリアは十歳、次子オランは八歳、末っ子のカレルはまだ五歳であった。

タールコを迎え撃ちに行った王が、勝利の凱旋をもって帰ってきたことで、妻子は大変喜んだものの。ドラゴン騎士団がタールコと通じ反逆を企てていたことをに、非常に残念な気持ちだった。

（あれだけ我が夫が信頼を寄せていたのに。それを裏切るなど。人

はわからない）

イカンシは「非常に信じられませんが」と涙ながらに、王と王女にことを訴えた。

奮戦百勝すること、これすべて反逆のため。王よ、王女よ、思い起こしてくだされ、ドラヴリフトが今までどう王に接してきたか。

と言われ、それまでのことを思い起こせば、なるほど、ドラヴリフトは何かにつけて、王に内政に専念することをうながしていた。この国で戦のできる者は、ドラゴン騎士団のみと言わんがばかりに。

またエルゼヴァスは魔女であったという報せが、心に二度目の杭を打ち込まれたような衝撃であった。

ヴァハルラはエルゼヴァスとともに紅茶をたしなんだことがあるほどの仲だけに、内に秘められたおぞましさに心胆寒くなる思いであった。とともに、報せをくれたイカンシに感謝すること尽きない。

忠臣のイカンシなくば、奸臣ドラヴリフトに国をのっとられていたところであった、と。無論三人の子どももそれを信じている。

王とその家族は、国と我が身、我が家族の安堵に喜び、団欒に花咲かせていた。

しばらくして、エルゼヴァスを捕らえに行ったイカンシが城から帰ってきた。が、うかない顔をしている。

「おそれながら、女王様と王女様、王子様は、お席を外していただけませぬか」

と言うので、女王と三人の子どもは別の場所へ行かせて。イカンシの話をうかがうと、魔女は毒入りのワインを飲んで自害したという。

エルゼヴァスの自害に驚いたイカンシであったが、毒入りワインが赤いのを幸い。

「ご覧下さいませ、この赤さ。おそらく毒とともに血も混ぜられているのでしょう」

と、その瓶を差し出した。

王が都に到着し、石畳敷き詰められた城下の公園広場には凱旋式

のための演壇が着々と造られている。演壇といっても、もちろんただの演壇ではなく、小さな城が一つ出来あがったような大きさに高さ、広さ、壮麗さがあり、

壮麗な演壇にて、威風も堂々と王は城を背景にして民衆に訴えかけるその姿は、まさに国家元首としての威厳をよく表現し。またそうすることで、権力によって力でねじ伏せるだけでなく、民衆に畏怖と畏敬を与える政治的効果もあった。

人々も戦勝の喜びを胸にいっぱいつめこんで、公園につめかけて。あとは、演壇の完成と国王バゾイィーがその演壇に上がって、威風も堂々と力強い演説をし、民衆を沸き立たせるのみ。

「してエルゼヴァスのなきがらは、いかがいたした」

「はい、首を刎ねるということでしたので、なきがらは、こちらの方に運びましてございます」

なるほど、それで家族には席を外してもらったのか、と納得しながら、

「左様か、見せよ」

という王の命令に応じて、白い布のかけられた担架が衛兵によって運び込まれる。

王は、布を取るように命じると、それに応じて、衛兵は布をとれば。

たしかに、そこに眠るはエルゼヴァスであった。

「む、エルゼヴァス……」

瞳を閉じ、静かに永久の眠りについているエルゼヴァスを目にし。バゾイィーの心に、わずかばかりの、憐憫の情がわいた。

「魔女を娶ったために、ドラヴリフトは反逆を企てたのか。ドラヴリフトに嫁いだから、エルゼヴァスは魔女になってしまったのか……」

最初、なきがらといえど、その首刎ねて、戦神への供物にしようかと思っていたが。実際に目にして、その気が薄れてしまったよう

だった。
　これはいかんと、王の様子を察したイカンシは、
「魔女といえど、哀れに思われるそのご寛大さ。イカンシ感服のいたり。ただ、これより龍退治にゆかねばならぬことを思えば、そのご寛大さが仇となるやもしれませぬ」
「む……」
　イカンシの言い分はもっともようではあるが、やはり死せる者をまた傷つけることには、抵抗を感じて仕方なかった。躊躇する王に、イカンシはたたみかける。
「それに、魔女でございます。死ぬも生きるも自在であれば、いかがなされます。お情けをかけ手厚く葬ったところで、蘇って墓より出てこぬとも限りませぬ」
「そちの言うとおりだ。だが、やはり首を刎ねるのは、気が進まぬ。神父に命じ、悪魔祓いの儀式を執り行えば、それでよかろう」
「悪魔祓いの儀式……」
　拍子抜けしながらも、それをさとられぬよう平静を装い、王の言葉を繰り返すイカンシ。バゾイィーは、うむ、と頷く。
「マーヴァーリュ教会のルドカーン筆頭神父に命じて、民衆の前でエルゼヴァスのなきがらから悪魔を祓わせよ」
　これ以上の説得は無理だと、イカンシは命令に服し、マーヴァーリュ教会のルドカーン筆頭神父を呼びにいった。
　その一方、王はエルゼヴァスを手厚く葬るため、都で一番大きな教会であるマーヴァーリュ教会管轄の墓地に立派な墓碑を建てる事を他の側近や大臣に命じていた。
　いかに魔女であろうと、マーヴァーリュ教会管轄の墓地に家族とともに丁重に弔えば、恨みはすまいと思ったが。
　もしこれをイカンシが聞けば、
「悪人はどのように親切にしても善人にならず。つけあがるのみでございます」
と反対をしただろう。が、その反対をする本人が出て行ったので、

ことは簡単に決まった。
やがて演壇の設営も済み。ルドカーン筆頭神父もやってきた。王の家族はと言えば、女王はともかく子どもに死体をみせたくないからと、今いるところで待つよう命じた。
バゾイィーを先頭にルドカーン、その後ろに担架に乗せられ横たわるエルゼヴァスのなきがら、、瓶をもったイカンシと続く。葬儀の件は、すでに王が他に命じたので、イカンシは何とも言えなかった。
演壇に王やルドカーン、エルゼヴァスのなきがらがあらわれて、つめかけた群衆はにわかにざわつきだす。
あれは、大龍公の奥さま、エルゼヴァス様でないか、と。
英雄に賢婦あり。その賢婦の変わり果てた姿に、群集は驚き動揺を禁じえない。何事があったのだろう、と。それを察し、王は右手を挙げ、
「静粛に！」
と声を大にして言えば、やはりそこは王であった。
威厳を感じさせる底力ある声は群集の耳朶に響き、さわめきは潜んで、水を打ったような静寂があたりをつつんだ。

第三章　クンリロガンハのわかれ　？

群集は王の言葉を心待ちにして、咳一つない。

「民よ、聞け。国境を侵したるタールコの軍勢は、返り討ちにしてやった」

どっ、とどよめきが起こり。安堵と歓喜がたちまちのうちに、城下に広がってゆく。だが、王は気も顔も緩めない。安堵と歓喜の一方で、人々は変わり果てたエルゼヴァスが気になって仕方がない。

「これより、重大事を諸君に申し上げねばならぬ。これを聞けば諸君は我が耳を疑い、心は早鐘のように鳴り響くことであろう。だが、それでも言わねばならぬ予の辛さも察してくれい」

と言うと、親衛隊兵士は担架を高く掲げる。そばのイカンシの持つ瓶の中は、血でも入っているのかやけに赤い。

「遺憾ながら、予がその強さドラゴンのごとしと全幅の信頼を寄せていた大龍公ドラヴリフトは、あろうことか反逆を企て、またその妻エルゼヴァスは黒魔術に染まった魔女であった」

王の言ったとおり、信じられぬと民衆は耳を疑い驚きのあまり心は早鐘が鳴るように昂ぶりだし。静寂は一気にやぶられ、またざわめきがあたりをつつんだ。

「その気持ち、予もよくわかる。予とて、その報せを初めて聞いたときは、信じられなかった。だが悲しいかな、それは事実であった。事態の発覚におよび、エルゼヴァスは自ら毒を飲んで自害して果てた」

さりげに、少し後ろに控えていたイカンシは群集に見えるように瓶をかかげた。

「エルゼヴァスは、おぞましいことにその美しさをたもつために、黒魔術に身を染め、若い娘をあやめ、その血を好んで浴び、また飲んでいたという」

エルゼヴァスの天性の美貌は、都のみならずオンガルリ王国内で

も評判であった。だが、なるほど四十にさしかかるというのにその美しさ衰えぬは、黒魔術のためだったのか、と気の早い者は納得し。噂好きな者は意識するしないに関わらず話に尾ひれをつけて、隣からまた隣へど話を膨らませて広めてゆく。

（エルゼヴァスはまこと美しい女であったが、美しくいてくれ、本当に助かったわ）

と、瓶をかかげながらイカンシはほくそ笑む。

それをルドカーンはなんとなく察した。イカンシ殿は嬉しそうで、なにか様子が変だ、と。これは裏がありそうだ、と。

「魔女なればその生き死にも自在であろう。ゆえに、これよりマーヴァーリュ教会筆頭神父ルドカーンによって、悪魔祓いの儀式を執り行う。さあルドカーン筆頭神父よ、哀れな女より悪魔を祓いたまえ」

とうながせば、ルドカーンはまず王に一礼をし、次に群集に一礼をすれば、群集はありがたやと厚く彼を敬いはじめて、ざわめきは潜んでゆく。

ルドカーンは神の代理人として、王と並ぶ権威を認められ。また信仰により、民衆に心の安らぎを与えていた。だから民衆の人気は、ドラゴン騎士団とルドカーンで二分していた。

動のドラゴン騎士団に、静のルドカーン、とでもいおうか。

ともあれ、静寂の中、ルドカーンは聖水をエルゼヴァスのなきがらにふりかけ、神の言葉をとなえ、悪魔の追放およびエルゼヴァスの魂の安らかなることを祈った。

祈りは唱える神の言葉が進むにつれ、余人の声出すことを厳としていましめるだけの厳粛な雰囲気をかもし出す。

エルゼヴァスのなきがらは、静かに聖水の雫と、祈りの言葉を受け止めていた。

それを安堵した表情で眺めるバゾイィーに対し、しかめっ面で眺めるのはイカンシであった。

やがて儀式は終わる。

ルドカーンは王に儀式の終わることを告げるど、静かに後ろに下がった。

「これにて悪魔は祓われた。さあ次は我が剣をもって、龍退治である」

と言うと帯剣を抜きはなって、高々とかかげ。

「我が故国を守るのは、所詮王たる我のみ。神よ、守りたまえ」

バゾイィーの叫び。群衆は、さっきと打って変わり、どっと沸いた。

ドラゴン騎士団が、まさか。と思わぬ者がいないでもない。しかし、ルドカーン立会いのもと、王がドラゴン騎士団を反逆者と宣言するのであれば、そうなのだろうと、多くの者が信じた。またその討伐を望んだ。

「ドラゴン騎士団に神の裁きを」

「もはやドラゴンは神の遣いならず、悪魔の遣いなり」

と言うような叫びが、城下にこだました。イカンシはそれを心地よく聞き、ルドカーンはいたたましそうにエルゼヴァスのなきがらを見つめていた。

群集の叫びは最高潮に達しようというとき、かねてからの打ち合わせ通り、都の各所に配置された親征軍の軍楽隊が管楽軍鼓を天まで届けとばかりに轟かせて。また王家の紋章である赤、白、緑の三色に彩られた王冠の紋章が描かれた旗が立ち並んだ。

群集のどよめきにまじり、王とともに都入りした将卒らもまた、

「ドラゴン騎士団に制裁を」

と叫び。

人々の叫びにこだまして止むことを知らず。都は、ドラゴン騎士団討伐すべしという雰囲気一色に染まっていた。

その中に、どくにバゾイィーがドラゴン騎士団に次ぐ精鋭ぞろいと期待をよせる一団があった。

彼らはイカンシが組織した新たな騎士団であり、彼らは王自らが

率い。先ごろの戦いにおいても、王の指揮のもと善戦した。
この一団には、まだ騎士団名はなかった。
「諸君、ここで提案がある。我がいとおしきこの勇敢な者たちに、フェニックス騎士団という新たな命を与えようではないか」
賛同の拍手と声が、ひときわ高く轟いた。この瞬間、ドラゴンは勇敢さや忠誠の象徴から悪魔や反逆者の象徴となり。フェニックス＝不死鳥がそれにとってかわった。
都の人々の興奮高まる最中、イカンシとエルゼヴァスのなきがら、ルドカーンは演壇を降り。入れ替わりに、女王ヴァハルラに第一王女アーリアに第二王女オラン、末っ子の王子カレルが演壇に上がり、王とともに群集の声に応えて手を振った。
「王家に栄えあれ」
「オンガルリ王国万歳！」
「勝利を、栄光を！」
天空を揺るがし城をもつつみこむかと思われるほどのどよめきは尽きることなく。賑わしくも最高潮のうちに、バゾイィーやその家族は演壇を降りて。
バゾイィーは馬上の人となり、王であり戦士でもある勇姿を群集に見せつけ、フェニックス騎士団を率いて、都を出て威風も堂々と駒を進めて進軍するのであった。
それからややしばらく、バゾイィーが進発してから教会にもどったルドカーンは自分の執務室に急ぎ、ペンをとって羊皮紙に風雲急を告げることをしたためる。
「クネクトヴァ、これ、クネクトヴァ」
と、弟子の少年を呼んだ。
「はい、何のご用でしょう」
と呼ばれて来たるは、まだそばかすの目立つあどけない少年であった。彼は捨て子で、十四年前に教会の前で捨てられていたのを、教会のルドカーン神父一同哀れに思い、教会の管理する孤児院に神弟子として育ててきた。

茶色の髪に茶色の瞳の、ぱっと見愛らしい少年ではあるが。その瞳は神の書を読むよりも、いたずらを好みそうな、どこは溌剌すぎる輝きをはなっていた。そしてそのとおり、外に出ては餓鬼大将とつるんで喧嘩騒ぎを起こす腕白ぶりを発揮することが多く、教会の神父たちはクネクトヴァを持て余した。

が、筆頭神父のルドカーンだけは、なにがあろうと彼を突き放さず慈愛をもって接した。そのためか、他の神父の言うことは聞かずとも、ルドカーンの言うことだけはしっかりと聞いた。

だから、最近になってようやく神の書を熟読し、外で喧嘩騒ぎを起こすこともなくなってきた。さらにいえば、つるんでいた餓鬼大将らも、クネクトヴァに触発されたか、神の教えに従い生活習慣を改めるようになって。

周囲はこの変化に驚くことしきりで、さすが筆頭神父ルドカーンさまよと、その名声一団と上がった。が、ルドカーンにはそれはさほど大事ではなく。もっと大事なことがあると、真剣な眼差しでクネクトヴァを見つめた。

その眼差しは優しくも慈愛に満ち溢れていた。それとともに、悲しみにぬれているようでもあった。

（子羊を狼さまよう山野に解き放たねばならぬのか）

しかし、使命をまっとうできそうなのは、彼、クネクトヴァしかいないようであった。

（ここは彼には狭い。もっと、広い世界に羽ばたくがよい）

クネクトヴァは跪き、ルドカーンの言葉を待っている。それをいとおしげに見つめて。

「お前に頼みたいことがある。ただ、前もって言う。これは秘密である上に、ともすれば命を失う危険もある。それでも、引き受けてくれるか？」

「え？」

クネクトヴァは、師とも親とも慕うルドカーンからそんな言葉を

聞き、やや驚いているようだった。命を失う、とは。何事であろう。
「驚いたか。無理もない。だが、これはお前にしか頼めないのだ、だから言うのだ」
「それは……、私の腕白が過ぎているから、言うのですか？」
クネクトヴァは何か思い違いをしているらしい。クネクトヴァなら、死んでもいいから、というような。ルドカーンは苦笑する。
「いやいや、それは違うよ。言葉の通りだ。お前を信じているから、言うのだ。それに、危険なのは私も同じ。そなただけに危ない橋を渡らせようというのではない」
内心、やめておこうか、と思いはじめた。やはりまだ十四の少年にまかせるには、荷が重過ぎるか。
「お引き受けします。なんなりと、ご用命ください！」
クネクトヴァはルドカーンの目をじっと見つめて、言った。その言葉の一途さに、涙が出そうだった。が、感傷にひたっていることはできなかった。
「うむ、ちこう……」
と決意して、手招きして、そばに来させると。さっきの羊皮紙を、そっと差し出した。
「これを、ドラゴン騎士団のドラヴリフト殿まで届けてほしい」
「ドラヴリフト様」
クネクトヴァも、さっきの城下でのことは知っている。ドラゴン騎士団は反逆を企て、ドラヴリフトの妻エルゼヴァスは魔女であった、と。にわかには信じられないことだった。
「悲しいかな、王は奸臣にたぶらかされ、国の行く末を誤られておる。こともあろうに、功績あるドラゴン騎士団が反逆者であるなど、なんでそんなことがあろうか」
もしドラヴリフトが反逆を起こすなら、英断の人物だ、とっくに起こして国をのっとっている。王からの寵愛に驕ることなく、一途に国に尽くした彼らを、どうして信じ切れなかったのであろう。
「私も疑問に思っていました。なぜ王はドラゴン騎士団を反逆者で

あるなどと」
「うむ。王は英雄願望の強いお方であった。最初こそドラゴン騎士団を信じて、憧れていたのが、やがて嫉妬に変わり。そこを、心悪しき者につけこまれたのであろう」
「その心悪しき者とは……」
「イカンシじゃ。前々から王におべっかを使って、お気に入りとなったが。あやつこそ国を私物化する悪臣じゃ」
「でも……」
少年は光る瞳をルドカーンに向け、まだ何か言いたそうにしている。よい、言うてみよ、とうながせば。
「都の多くの人々までが、それを簡単に信じるなんて」
「そうじゃな。悲しいかな、ひとりを騙すのは難しいが、大勢を騙すのはさほど難しいことではない。王がタールコを退けた歓喜の波に乗せて、ドラゴン騎士団は反逆者なりと決め付ければ、浮かれた人々の心は、簡単にそれを信じてしまう」
言いながら、エルゼヴァスのなきがらを思い浮かべる。悪魔祓いの儀式を執り行いながら、彼女が哀れに思えて仕方がなかった。
袋小路に追いつめられ、武人の妻として潔く死を選んだのであろうが。功績があるがゆえに、死なねばならなかったのかと思うと、国のために戦うとは、何なのだろうと思わずにはいられなかった。

第三章　クンリロガンハのわかれ　？

そして、それを問答無用で押し通すことの出来る人の心の移り変わりの怖さも思った。

なきがらは、マーヴァーリュ教会が引き取り、手厚く弔うよう段取りが進められている。

「これには、大事なことが書かれてある。ドラゴン騎士団は、センナピクエト山を越えたクンリロガンハの地にて宿営しておるらしい。さあ、ことは急を要する。王が先かお前が先か。ゆくがよい」

「は、はい……」

と言いつつ、やはり名残惜しいか、その動きはなんだかにぶい。

それを見て、「おお、そうであった」と机の引き出しから、短剣を取り出し、手渡す。

それは職人の手作りによる小奇麗な装飾がほどこされて、値が張りそうな代物だった。

それでいて、柄はもちろん鞘もとてもにぎりやすい。手に、肌にじっくりとなじんで、まるでにぎっただけで短剣と一体になれるようだ。

抜いてごらん、と言われ短剣を抜けば。きらりと輝く刃が、クネクトヴァの瞳を映し出す。

「これは……」

その短剣のかもし出す輝きに、えもいわれぬ雰囲気に、少年はやや気圧されているようだ。

「これは私がお前ほどのころにもちいていた短剣だ。これをお守りにあげよう」

手入れはされているが年季の入った短剣で、ずしりと重みが少年の手にかかる。その重みが、ルドカーンのクネクトヴァに託す気持ちなのだと、思えてくる。

「クネクトヴァよ、そなたは内に大器を秘めておる。その大器を開

くのは、教会では狭い。広い世界に出て、大きく羽ばたくがよい。
それでこそ、神もお喜びになるであろうし、師匠としてお前を育てた甲斐があるというものだ」
「……。はい、いってきます！」
意を決し、クネクトヴァは行った。
羊皮紙の手紙を懐にしまい。用命を果たさんと、いざクンリロガンハと都を駆けた、が。
「あ、クネクトヴァ！」
と呼び止める声。なんだと思って振り向けば、赤毛の少女。それは幼馴染のカトゥカであった。
「大事な用事があるんだ。あばよ！」
と振り切ろうとするが、カトゥカは追いかけてくる。
「なんだよ、ついてくんなよ。大事な用事があるって言ったろ」
「その大事な用事ってなに？」
「言えるわけないだろ！」
「じゃ言わなくてもいいけど、あたしついていくもんね」
「ええー」
もう、とやむなく立ち止まる。カトゥカはクネクトヴァの気など知らず、お気楽ににこにこしている。かと思えば、腰帯に短剣をさしているのに目をつけるや、
（あら、生意気に）
といたずら心が湧いて、さっと素早い動きで短剣の柄をつかんで抜き放った。
「あ、こら！」
しまった！　とクネクトヴァはカトゥカに掴みかかろうとするが、さらりとかわされた。
「へへーんだ。悔しかったら取り返してごらん」
短剣を手に、カトゥカは逃げ出し。クネクトヴァは顔を蒼白にして追いかけるが、追いつけない。
カトゥカは幼馴染であるとともに、一緒につるんで遊んだ餓鬼大

将のひとりでもあり、また教会管理の孤児院で暮らす孤児仲間であったが。今は成長して、ある商人のもとで住み込みの奉公をしていた。

彼女もまたクネクトヴァとつるんで遊んだだけあって、男勝りなおてんばな性分で、喧嘩で男の子を泣かせたことも一度や二度ではなかった。

が、短剣の柄の手触りが手に馴染むにつれて、かなり高貴なものであることがわかり、その高貴さが怖く感じられた。

（まさか、どこかの貴族から盗んだの？　クネクトヴァって、そんな大胆なことを！）

下手をしたら自分も連座で罪を問われる。冗談じゃない、と急に立ち止まるものだから、クネクトヴァはその背中にどかんと勢いよくぶつかってしまい、ふたりそろって転んでしまった。

人々が呆れて見る中、きゃあきゃあとふたりは騒ぎながら立ち上がり。その直前、クネクトヴァはカトゥカから短剣を取り返し、無事鞘におさめる。

「まったく、急いでいるのに、この、泥棒！」

「泥棒はあんたでしょ、その短剣をどこで盗んだのよ」

「盗んだ？　人聞きの悪いことを言うな。これはルドカーン様からいただいたものだ」

と言いながら、しまった、余計なことを言っちゃった、と慌てて。

「じゃあな！」と背中を向けて走り出そうとするが、咄嗟に手を掴む手。言うまでもないカトゥカだった。

「何があったの、教えて、教えて」

と瞳を輝かせて興味津々だ。が、大事な秘密の用事を簡単に言えるわけがない。なにより、下手をすれば死ぬのだ。

「やめとけ、オレに関わると死んじゃうかもしれないぞ」

と言うが、

「どうせ親もない身だし、奉公先もいつクビになるかわかんないし、

関係ないわよ」

と素っ気ない。本気にしているのかどうかは別として。だが無駄に時間を食うわけにはいかない。仕方がない、と。

「急ぐんだ。行きながら話すよ」

と駆け出せば、わかったわ、とカトゥカもついてくる。道中話を聞き、それは大変！　と突然何か使命感にとらわれてか、クネクトヴァとともにクンリロガンハを目指した。話をして、怖がって別れられればよかったのだが、なぜかそうはいかなかった。

勇敢なのか鈍感なのか。

ともあれ、センナピクエト山を越えねばならない。

主要道は、王自ら率いるフェニックス騎士団をはじめとする親征軍がいるのでつかえない。やむなく、裏道をつかって、山越えをせざるを得なかった。

気がつけば夜のとばりは落ちて、闇夜があたりを包んで視界が悪い。それでも、カトゥカとクネクトヴァは若さにものを言わせて目を凝らして、山の夜道を手探りでゆっくりゆっくりでも進んでいった。

少年の手は、短剣の柄を握りしめていた。そうすると、闇夜も怖くなく、勇気が湧いた。

夜空は漆黒の闇に覆われて、月も星もない。

が、目が闇夜になれるに従い、センナピクエト山の姿が影絵のように浮かび上がってくる。

その太古の昔、勇者センナとピクエトがこの地で覇を競い合ったという伝説が残っている。

クンリロガンハの地は、ともにセンナとピクエトの故郷であった。勇者が同時に二人も出たわけだが。両雄並び立たず、同郷の勇者二人は、どちらが強いのか戦って決着をつけたいという欲求から逃れられず、激しく鎬（しのぎ）を削りあった。

それは故郷を二分し、同じ故郷で暮らしていた人々がわざわざ同郷の人から他者を見出して、センナとピクエトの側に立って、兵火

をまじえて争いあった。
その結果、土地は荒れて農作物は育たず。家も焼かれ人も住めなくなった。それでも人々は争い、ようやくピクエトが勝利をおさめたものの。心身ともに疲れ果て、また宿敵をなくして気が抜けたのか、センナのあとを追うようにして死んだ。
争いがおわって、人々に残されたものは、廃墟となった故郷と、悲しみと憎しみ。
やがて人々も、新たな糧を得るため廃墟を捨てて新天地を求めて旅立ったという、戦いの空しさを伝える伝説が、残っていた。
センナピクエト山はそのふたりが、まだ仲たがいする前によく武術の修練を積んだ地で、それを記念してふたりから名前を拝借したのだという。

だが、辛気臭い話だ。今いるところに、そんな伝説があるなんて気分のいいもんじゃない。
コヴァクスはその辛気臭さを振り払うように、剣を素振りしていた。
平服のズボンにブーツ以外は身にまとわず、鍛えられた身体を夜の冷たい空気にさらし、汗をかく。
いったい、いつまでここでじっとしていなければいけないのだ。
王は何を考えているのか。
脱落した者は、ここにとどまっている間に人をやって連れ戻していた。帰ってきた者は、ただ死ぬのではない、国のための尊い犠牲になるのだ、と自らに言い聞かせてそのわびしさを堪えていたという。
その者たちの、安堵の笑顔をみて、申し訳ない気持ちと、理不尽に感じる王命に憤りを覚えていた。
周囲ではかがり火をたいて騎士団の将卒らが輪になってカードゲームをしたり酒を酌み交わしながら暇を潰している。
コヴァクスも一時はその輪の中に入っていたのだが、そのうち剣

の素振りをするようになった。
「やっておるな」
と言うのは父ドラヴリフトであった。
幕舎を出て様子見の見回りをしているようだ。
「や、父上」
コヴァクスは剣を背中に回して跪く。夜の冷たいはずの空気が、父が現れたとたんに、温度が上がったように思われた。
「丁度よい。私も、剣を振るいたいと思っていたところだ。コヴァクス、相手になるぞ」
「望むところ。いざ」
ドラヴリフトは帯剣を抜き、コヴァクスも父の方に剣を構え。両者視線をまじえ、剣先を向け合う。
大龍公と小龍公が稽古で剣を交えようとしているのを見て、周囲の者たちは遊びを中断し、ふたりに熱い視線をそそぎ。稽古のことが、騎士団の将卒たちにたちまちのうちに広がり。ニコレットはそれを聞きつけ、自身も剣を片手に駆けつければ、父と子は、激しく剣をまじえていた。
かがり火は暗夜からドラヴリフトとコヴァクスをすくい出す様に照らし出し、握られる剣もまたかがり火の火に照らされて輝き。時折双剣まじわれば、暗夜の中で光る火花を散らす。
「やっているわね」
とニコレットは微笑んで、勝負の行く末を見守るようなおとなしさは見せず。
「お兄さま、助太刀！」
と叫んで、父と子の間に割って入り。ドラヴリフトと剣をまじえる。
「こら、オレと父上の試合に割り込むな」
コヴァクスは小言を言うが、ニコレットは、お兄さまのけち、と言うだけで聞きやせず、構わず父に剣を繰り出す。
「よい。ふたりでかかって来るがよい」

ドラヴリフトは娘のお転婆さが、いとおしく感じられるものの。甘やかさず、その剣技は笑顔とは違い鋭い。剣光の閃き、兄と妹の剣の間を行き交い、翻弄する。

コヴァクスに来た、と思えばニコレットにゆく、と思えば急に返してコヴァクスの剣を打つ。

剣は真剣、一つ間違えば、命に関わる。が、父はふたりが成長し実戦に出てからこの真剣での稽古試合をとってきた。

いついかなるときも、身も心も戦場にあると心得よ。それはすなわち、いついかなることで命を落すかもしれないから、それをしかと心がけよ、という父からの厳しい教えだった。

コヴァクスとニコレットは、父からの教えを受け止めようとし、またせめて一撃でもと剣を繰り出すものの、ことごとく父の剣に弾かれる。

剣と剣が触れるたびに、まるで自分の剣ではないような衝撃を受けていた。

第三章　クンリロガンハのわかれ　？

最初は楽しそうにしていたニコレットも、色違いの瞳をいからせて本気になってくる。額にはびっしょりと汗をかいている。それはコヴァクスも同じだった。

もし父がその気になれば、いともたやすくふたりは斬られてしまう。が、さすがにそこまではせず、危ないと思ったら寸止めする。これに対して、父が気兼ねなく剣を振るえるようにすることが、ふたりの子の課題であった。

が、その課題達成まで修練はまだまだ必要そうである。

ドラヴリフトの目が、夜であるのに、きらりと光ったのがはっきりとわかった、ような気がした。それとともに、父の剣、唸りを上げて風を切り。

「あッ！」

「う、おわッ！」

とニコレットに続きコヴァクスが声を上げれば、ニコレットはやうずくまり気味に件を落として左手で右手の手首をおさえ。コヴァクスは剣こそ落さなかったものの、両手で柄を握りしめ、石にでもなったかのように身動き一つしない、いや、出来ないようだった。

強い衝撃が走っては首筋から背筋にかけてすさまじく駆け抜けたようだった。

「馬鹿者！」

ドラヴリフトの怒号。

「王よりの沙汰を待つと見せて、怠惰を貪っていたようだな。我が跡を継ぐ者が、そんな体たらくでどうする。恥を知れ！」

そんな、とコヴァクスは父をにらむ。怠惰を貪っていたなど言われるのは心外であった。鍛錬怠らずにいたのは、さっきまで素振りをしていたのを見れば明らかではないか。

ニコレットはじっとうつむいて父の言葉を聞いている。まるで平

手打ちを受けたような気持ちだ。
「ソシエタス！」
ドラヴリフトは他の将卒らとともに稽古を見学していたソシエタスの方を向くと、
「今夜一晩中、ふたりの稽古を監督せよ」
と言うと、今度はふたりに向き直り。
「言ったとおりだ。怠惰の罪として、今夜寝ることは許さん。日の出まで、ふたりで稽古をせよ」
背中を見せて自分の幕舎へと戻るドラヴリフト。ふたりの子、コヴァクスとニコレットは呆然と互いに目をやり、それから憮然とする。
「大龍公の言われたとおりです。さあ」
ソシエタスは剣を拾い、ニコレットに差し出す。
父からの命令は王命に次ぐ重さ。ニコレットは剣を受け取り鞘におさめると同時に、稽古用の刃引きの剣が手渡される。ソシエタスが配下に命じて用意させたものだ。
いいとばっちりだと苦笑しながらも、自身も同罪であるとの解釈をもってふたりの稽古を監督するソシエタス。
闇夜の静寂の中、剣の交わる音が響きわたり。時折光る火花散る。
コヴァクスとニコレット、振るう剣の重さに、将来背負うものの重さをも感じ取っていた。
そのとき、センナピクエト山では、ドラゴン騎士団討伐のバゾイィー王率いる討伐軍、あるいはフェニックス騎士団が、闇夜の静寂に包まれてやすらかに眠っていた。
その一方、カトゥカは松明で闇を切り開き、クネクトヴァは片手に短剣をもち、気を張りめぐらしおぼろな夜目を利かせながら手探りで、森の中の道を進んでいた。
松明は途中の集落で譲ってもらったものだが、いつまでもつのか。おぼろげに闇よりすくい出される木々の向こうはまた闇で。進めど

進めど、闇から生い茂る木々に草花が闇から姿をおぼろげにあらわすばかり。
「きゃあ」
とカトゥカが声をあげれば、
「うわ！」
とクネクトヴァも声を大にして叫ぶ。
木のくぼみが、人の顔に見えて、幽霊だ！　と恐怖を感じたらしいが、その正体がわかると、
「なーんだ、ただの木かあ」
とことさら馬鹿馬鹿しそうにつぶやくクネクトヴァ。
「木かあ、って怖がってたくせに」
「先に声出したのはカトゥカだろ」
「あれは威嚇の声を出したの」
「うそつけ！　きゃあ、が威嚇かよ」
「あたしの場合はそうなの。あんたはあんたで、うわ、って言ってたじゃないの。あれはほんとうに怖そうだったわよ」
「それは聞き間違いだ。うわ、じゃなくて、うお、って言ったんだ。盗賊かと思って、来るなら来いって気合を出してたんだ」
「はいそれうそ！　あんたも……」
と言い合いになろうとするとき、風がふたりと森の木々をなで、風のささやきに応じて木々に草花のざわめきが闇夜に響いた。かと思えば、ほう、ほう、と梟（ふくろう）が静かに鳴いたかと思えば、空（くう）を弾くような羽ばたきの音をさせて、突然ふたりの頭上をかすめていって。
「わあ！」
と梟の羽ばたきに弾かれるように、ふたりは遮二無二に駆けた。
手をつないで。
が、はっ、として立ち止まると、互いに目を合わせて。それから手をつないでいたことに気付き慌てて離して。
「ここどこ！」
とそろって叫んだ。

あろうことか、道から外れて森で迷子になってしまった。クンリロガンハへの道は知らぬでもない。ルドカーンとともに、郊外の町や村などの集落へ出向いたこともあるし。かつて腕白ざかりのころ、よく冒険に出かけては、ルドカーンを心配させた。

都ルカベストから少し外れると山に入り、森に分け入ることになる。軍隊が通るような道は森の中でもよく整地されているが、そこから外れた裏道は細く昼でも暗い、でもだから、子供心をわくわくさせる冒険を与えてくれていた。

クネクトヴァにとって、都から外は見るも聞くもなにもかもが初めてのように、いつも新鮮な気持ちにさせてくれる居場所のようなものだったし。心の中ではいつも、広い世界を夢見ていた。

だから危急の遣いを託された。

が、咄嗟のこととはいえ、それからも外れてしまった。

うまくいけば、王より先に、クンリロガンハにいるドラゴン騎士団と合流できるはずだったのに。

「どうしよう」

と途方にくれた。

周囲を見渡しても、森の中、闇の中。いま自分たちがどこにいるのか、皆目見当もつかない。動けない。

そんなふたりをからかうように、そよ風がふたりの頬をなでた。

(あれ)

カトゥカはふと、風上に向かって歩き出す。クネクトヴァは、どこにいくんだ、と呼び止めるが。

「いいから、着いてきて」

と止まらない。かと思えば、松明が闇からすくい出す景色にふたりは、あ、と声を上げた。

「道だ!」

突然足の感触が、しっかりしたものにかわった。松明をかざして、周囲をよく見渡す。森の中に、よく整地された道が走っている。それはクンリロガンハに通じる道だ。そこに、いる。

「やった、道に出れた！」
第六感とでもいうか、そよぐ風がどこか力強く感じられた。それは障害となる木々の少なさを物語っているように、カトゥカには思えたのだった。
「えへん、感謝しなさいよね」
「えらそうにいうな」
得意なカトゥカに、クネクトヴァはほっぺをぷっと膨らませて、ずんずん進む。もう、けち、と言いながらカトゥカも進む。いつでもすぐ隠れることが出来るように、道の端を歩きながら。
しかし、疲れた。不眠不休だった。それだけ必死だった。
だけど、王より先にドラゴン騎士団と会えそうだ。その期待を胸に秘め糧として、ふたりはひたすら歩いた。
だが、しばらく歩いて、ふたりは石になったように動かなかった。

オンガルリ王家の紋章の旗が、向こうに見えた。王の親征軍が、ここに駐屯していた。
「そんな」
震える足をどうにかあやつり、森の茂みに隠れた。幸い見張りは居眠りをしていたので、ばれずにすんだ。
クンリロガンハへの道は知っている、と思って得意になって歩いていたが、こんな深夜になっても森の中にいたのは初めてだった。そのせいか、道を間違えてしまったようだ。
知っているという慢心が、過ちに導いたようで。クネクトヴァは悔恨の念に駆られて頭をかかえる。だけどカトゥカは勇ましいもので、
「もうこうなったらしょうがないじゃない。森の中を歩いて、軍隊を追い越しましょうよ」
と言う。
「もしばれたらどうするんだよ。オレばかりかルドカーン様も危ない目に」

「でも、ほかの道がわかるの」
「……」
わからない。クネクトヴァは黙り込んだ。どうしようと、思案に暮れていると、
「誰だ、出て来い！」
という声が聞こえた。とともに、おい居眠りするな、という叱咤の声も聞こえた。他の見張りに見つかっていたようだ。
ままよ。
と、弾かれるように、ふたりは森の中をひた走りに走った。
「曲者だ！」
闇夜をつんざく警笛の音が響いた。それにともない、駐屯する軍隊がにわかに賑やかになってゆく。
もうふたりは走った、走りに走った。
どこをどうとかどこに向かうとか、考える余裕もなく。気がつけばカトゥカは松明を捨てて、真っ暗闇の中を、ふたり手をつないで、木にぶつかり草に足をつかまれながら、走りまくった。
そこには、
「死にたくない！」
という、生々しいまでの生存本能だけがあった。
光りがふたりを追ってくる。それは死をもたらす死神の光りのように感じられた。と思ったら、足の感触がしっかりした。森を抜けたようだ。でも真っ暗闇なのでわからない。光は執拗にふたりに迫ってくる。その光が、今いる場所を照らす。
さっきの道だ。が、前にも後ろにも旗がない。光が動いて、道が照らし出される。ふたりは後先考えずに、光の指し示した道をひた走った。
はるか後ろで、すばしっこいだの、馬を曳けだの、と叫んでいるのが聞こえた。が、そんなもの意識するゆとりもなく、ただ走った。
すると、前方で何か聞こえたような気がした。本能のなせる業が、とっくに足を止めて聞き入る。それは馬の蹄の音だった。

「おわった」
とふたりは力が抜けて、その場にへたりこみ、死神の到来を待つのみ。馬の蹄の音は、近づいてきて、松明の明かりも見え出す。目を凝らしてみれば、騎士が三騎、一人は松明を持ち、一人は旗を持っている。声がする。遠くに来すぎてしまっただの、もうそろそろ引き返そうだの。
でもどうでもいいやと、静かに来るのを待っていれば、
「人がいるぞ」
という声。それから蹄の音が早くなり、「おい」という呼びかけの声。無気力に顔を上げれば、
「あ、ああ！」
と抜けた力が戻ってくるような気分だった。一人が持つ旗は、三本の牙の紋章、ドラゴン騎士団の龍牙旗だ。
「ど、ドラゴン騎士団の方ですか」
「そうだが、お前はだれだ」
嬉々としてたずねるクネクトヴァとカトゥカに不審を抱きつつ、騎士団の騎士が問い返せば。
「私はマーヴァーリュ教会のルドカーン筆頭神父様に仕えるクネクトヴァという者です。火急の報せがあり、ルドカーン様より言伝を預かっています。是非、ドラヴリフト様に……」
お目通りを、と言おうとしたが、安心しすぎたためか、へたりこんで何も言えなくなった。カトゥカも一緒だった。
「なに。ルドカーン筆頭神父からの言伝？　これはただ事ではない」
騎士は一騎ずつクネクトヴァとカトゥカを乗せると、本陣へと引き返していった。それはまるで風になったかのような速さで。クネクトヴァとカトゥカは、風に乗った気持ちで目を閉じていた。
風に乗ることしばし。目を開ければ、陽は昇ろうとし。森を抜け騎馬は下り坂を駆け下る。
やれやれ、遠くへ行き過ぎてしまったな、と自分に呆れる騎士の

声が耳に入った。
どうやらドラゴン騎士団の偵察隊らしかった。王の沙汰を待つ間も用心怠らず、偵察を四方に放ちいざというときに備えていた。が、この三騎は遠くに行き過ぎてしまったらしい。でもそのおかげで、クネクトヴァとカトゥカは助かった。
追撃の手は来ない。ぎりぎりまいたようだ。
やがて三騎は速度を落としゆっくりと進んでいた。ぱっかぱっかと蹄を鳴らしながら、クネクトヴァとカトゥカは、ゆりかごに揺られているような気分になって、激しい睡魔に襲われ抗うことができず、そのまま寝入ってしまった。
それからまた時間が経って、頬を軽くたたかれて目を覚ました。とろんととろけそうなまなこに写るのは、獅子のような威厳ある髭面の男性。これこそ誰であろう、ドラゴン騎士団団長ドラヴリフトであった。
それに気付いて、弾かれるように起き上がって、慌てて跪いた。
「ルドカーン様より言伝が……」
と震える声を出しながら手紙を差し出した。
ふと、腰帯に差していた短剣がないことに気付いた。
手紙を受け取り、じっくりと目をやるドラヴリフト。威圧感があり、クネクトヴァは一言も発することができず、短剣のことを聞くことができなかった。
（あっ）
そういえば、カトゥカがいない。どうしたのだろうか。
というより、今さらのように、そばにいるのはドラヴリフトだけではなく、騎士団の将卒ら数人いることを気付いた。そして自分は今、ドラゴン騎士団の陣営の中にいるのだ。
よほどぼけているようだ。
「……」
ドラヴリフトは手紙を目にしたまま、黙して語らず。手紙に書かれていることを読んで、どう思っているだろうか。と思うと、何も

言わずに手紙を懐にしまいこむと、それと入れ違いに短剣を差し出す。

それはルドカーンからもらった短剣であった。

「あらためさせてもらった。確かにそなたはルドカーン筆頭神父に仕えるクネクトヴァだな」

短剣を受け取りながら、「はい」と応えれば。

「ともにいた少女は、ニコレットに預けてある。案ずるな」

ニコレット。ドラヴリフトの娘で、小龍公女と称せられる女将だ。それを聞いて安堵のため息をついた。

「色々問いただしたいことはあるが、ルドカーン筆頭神父に免じて許してやろう。だが、感心せぬことだな」

何か勘違いされているようで、ちょっと、むっとした。が、まさか大龍公に刃向かえるわけもなく、ただ「はい」と返事をすることしかできなかった。

「それより、そなたたち見つかりはしなかったか」

と言われて、心臓が胸から飛び出しそうだった。額から汗がにじみ出る。それを察しドラヴリフトは、

「みつかったようだな」

と言う。将卒らは、見つかったとは何だ、と互いに隣人と目をあわす。

「召集をかけよ。全員集合だ！」

そう号令をかければ、電光石火の速さで将卒らは部隊内を駆け回り、大龍公のもとに集まれ、と言ってまわる。クネクトヴァはあっけにとられて成り行きを見守っている。

やがて陣営の騎士たちは、コヴァクスにニコレットは言うに及ばず、騎士団幹部から下っ端までが、一箇所に整然とドラヴリフトの前に並び、点呼を取る。

一万を越える人数である。たなびく数本の龍牙旗が、我らドラゴン騎士団なりと、無言の名乗りをあげて、見るものを威圧する。

クネクトヴァはよく訓練されたドラゴン騎士団のその動きの冴え

に、ただあっけにとられるしかなかった。号令一つで、これほどまでの人数がこんな動きをするのか、と。

それが騎士団というものだが、クネクトヴァは初めて見るので、何もかもが驚きの連続だった。

カトゥカといえば、ニコレットの隣にいるのを見て、ほっとする。

点呼が終了すると、

「父上、ドラゴン騎士団全員集合いたしました」

とコヴァクスが言うと、ドラヴリフトは、うむ、と頷く。

「皆の者、一大事が起こった。心して聞け」

と叫ぶ。図太くもよく通る声で、獅子吼というに相応しいものだった。

大龍公の獅子吼を受け、将卒たちは身構えして続きを待てば。

「王が、我らを討伐に来られている。もう近くまで来ているであろう」

その言葉を聞き、コヴァクスにニコレットはもちろん、ソシエタスや騎士団の者たちほとんどは聞き間違えたか、と思ってにわかには信じられなかった。

ほとんどの者たちが、何を言うんだ、と戸惑いの表情を浮かべている。

第三章　クンリロガンハのわかれ　？

無理もない、とドラヴリフトは歯噛みをした。が、伝えねばならない。

手紙を掲げて、

「マーヴァーリュ教会の筆頭神父ルドカーン殿が弟子の少年に手紙を託し我らに伝えてくださることを、いま一度言う」

と言う大龍公のその言葉に、周囲に緊張が走った。

「この手紙には、あろうことか、王はイカンシにたぶらかされて、我らドラゴン騎士団を反逆者とみなし、親征軍をもって討伐に向かわれている。手遅れにならぬうちに、逃げよ。としたためられている」

「王が？」

「私たちが反逆者ですって！」

コヴァクスにニコレットは信じられないと声を上げた。信じられないことで、どう反応してよいかわからない、そこへ、

「さらに、エルゼヴァスは魔女の嫌疑をかけられ。もはや逃げられぬと自害をしたという」

と、さらに信じられないことがたたみかけられる。

母が、自害？　まさか。

「なきがらは、マーヴァーリュ教会管理の墓地にて手厚く葬られるということだが、王はそこに我らも加えようとお考えであることも、したためられている」

「馬鹿な！」

コヴァクスが叫んだ。

「ルドカーン様も、こんなときに下らぬ戯言を」

「口を慎め！」

「しかし」

「ルドカーン殿が、戯言を言うようなお方か」

「でもお父さま、そんなこと、いきなり言われても、信じられません」

ニコレットは色違いの瞳を揺らして父に訴える。だが、父は無情にも、

「これは事実だ。実際に、手紙を託されたこの少年は王の軍勢を見たという」

と、クネクトヴァを指差した。

クネクトヴァは、一万を越えるドラゴン騎士団に威圧され、金縛りにあってしまっている。それはニコレットのそばにいるカトゥカも同じだった。

噂に聞き憧れもしたドラゴン騎士団であったが、今のこのただならぬ雰囲気に飲み込まれてしまった。

「では、我々はどうすればよいのでしょう」

と言うのはソシエタスであった。

王がドラゴン騎士団を討伐するという、それがいかに信じがたいことであっても事実というなら、その対処はどうすればいいのだろうか。

刃を交えるのか。しかしそれでは、反逆者であることをこちらから認めてしまいかねない。

ならば、このまま討たれるというのか。

騎士団に影か覆う。

死すはいとわず。いや、死ぬのが怖くないといえばうそになる。だが、なにより怖いのは、わけもわからぬうちに反逆者にされて討たれるということだった。そこに何の意義があるというのだろう。

意味も意義もなく死ぬのは、ドラゴン騎士団ならずとも、人間ならば一番の恐れとすることだった。だがそんな理不尽な死を押し付けられることは、この長い歴史の中で数え切れないくらいあることだ。

人はそれを悲劇といって涙を流す。

それが己の身に降りかかったとき、南方エラシアのポリス（都市

国家）郡に伝わる悲劇物語に感動するような気持ちになるだろうか。
思い沈黙が立ち込める。いかなる強敵に出会うとも、太陽のごとく光り輝いていたその瞳は、勇姿は、今は影を潜めていた。
「コヴァクス、ニコレット、来なさい」
というと、我が子を引き連れ、己の幕舎へとゆく。ふたりの子は、互いに目を合わせながら、父についてゆく。
幕舎に入る。他の者はいない。
「お父さま……」
ニコレットは声が震えている。
「お母さまが自害なされたのは、まことでしょうか」
「まことだろうな」
色違いの瞳が揺れ、溢れる涙が頬をつたう。コヴァクスは奥歯を噛みしめ拳を強く握りしめている。
うそなのか、ほんとうなのか、わけがわからなかった。
「まあ、落ち着け」
という父の目にも、涙が浮かんでいた。苦楽をともにした妻の、突然の訃報。いかに大龍公ドラヴリフトといえど人の生き血をすすっていきているわけではなく、やはりひとりの人間であることを、その涙は物語っていた。

ドラヴリフト涙を打ち払い、我が子コヴァクス、ニコレット呼び寄せて。
「父は死ぬであろう」
と言った。
王に討たれよう、というのだ。
さらに言う。
「お前たちは、故郷へ帰れ。と言いたいが、これではそれもままなるまい。皆と力を合わせて国を出よ」
「父上、何を言われます」
「お父さまに見捨てられ、どうしてわたしたちだけがのうのうと生

きながらえましょう」
「我ら年は若くとも、ドラゴン騎士団として、父上とともに死ぬ覚悟です」
父とともに死出の旅という我が子らを、ドラヴリフトは鋭い眼差しで見据えると。
「お前たちに国を出よと言うのは、我わたくしのために言うのではない。私が死なねば、世は奸臣のままにされてしまう」
もしこのままおめおめと討たれれば、オンガルリ王国は奸臣の好きなままにされてしまう。
大龍公ドラヴリフトは、我が命を賭けて王への忠誠を示すとともに、その死に様をもって、王をたぶらかした奸臣に痛恨の一撃を食らわせようというのか。
では残された者たちには、どうせよというのか。
「国を出て、春の到来を待つ冬の木々や草花のように風雪をしのび、機を見てオンガルリへ舞い戻り、奸臣を討ち王を立て、国をただせ」
コヴァクスとニコレットは、目に涙をたたえて父を見つめるだけであった。
「まだわからぬのか。奸臣のために王は道を誤り国を滅ぼし、愚君のそしりも免れまい。またこれまで、国のために、何人の者が死んだのか。お前たちのような数多の若者もまた、国のために戦って死んだ。ここで我らすべてが死ねば、死んだ者たちの名誉もどうなる。未来永劫、愚君、反逆者の烙印をおされ続けられてもよいのか。それを挽回するのは、生ける者しかおらぬ。またそれは若者に託すしかないのだ」
その、意志を託す若者のためにも、ドラヴリフトは命を捧げるという。
そこまで言われて、コヴァクスにニコレットもなにも反論はできなかった。
涙を呑んで、父の遺志を受け継ぎ一時の恥をしのぶ道を選んだ。
ドラヴリフトは幕舎の奥にある執務用の机のそばに立っている龍

牙旗を手にし、コヴァクスにそれを差し出す。
「これは、バゾイィー国王陛下が我らのために特別に仕立てられた旗だ。お前たちに託そう。これを旗印に、また勇気と忠誠の証しとし、志を完遂せよ」
その龍牙旗は前線に出す他の龍牙旗と違い赤く、ドラゴン騎士団の象徴である龍の牙が銀糸によって刺繍さて、赤い地の旗の中で厳かな輝きを放っていた。
ドラヴリフトはこれを傷つけまいと前線には出さず、つねに後方に置いて護衛をつけて、あたかもそこに王がおわすがごとく守ってきた。
いままで何度も目にしたものの、今こうして眺めていると、赤い龍牙旗の赤は、まるでいままで国のために戦って死んだ者たちの血で塗られたように赤く。銀の龍牙はその赤い血に浮かんでいるようだ。
コヴァクスとニコレットは、自身の命もまたこの龍牙旗のように、オンガルリ王国はじまって以来の勇者たちの血の上に存在するのだと、そこはかと思わざるを得なかった。
コヴァクスは鋭い眼差しを旗に向け、もの言わず受け取った。かたわらのニコレットは、旗を保管する長箱を素早く用意し蓋を開ければ、コヴァクスは丁寧に旗を竿に巻いて箱に入れた。
そして親子三人幕者を出、将卒らにドラヴリフトは己の意を伝えた。
大龍公の意志を聞き、騎士団は騒然となったのは言うまでもない。中には、
「もしそれが事実なら、そんな王に従う義理はない」
とまで言う者もあった。しかしドラヴリフトは、
「なら貴様一人でそうせよ」
と言って突っぱねた。
動揺は隠し切れず、騎士団を包み込んでいた。国を出るといって

も、どこへゆこうと言うのだ。ソシエタスも、知恵を絞りこれからのことを懸命に考えているようだ。

クネクトヴァもカトゥカも、無言で成り行きに任せるしかなかった。年少の自分たちに、何が出来るというのだろう。

「一旦は国を出、よい場所を見つけ、騎士団をもって集落をつくり新天地を開拓してゆくがよい。必要ならばタールコ以外の国に傭兵として雇われてもよい。無論、騎士としての誇りは捨てぬうえで」

とドラヴリフトは言ったが、動揺はおさまらない。妻子をもつ者もいる。これまでの生活を捨てるなど、はいそうですか、とできる相談ではなかった。

ドラゴン騎士団にいるからこそ、名誉も与えられ、それとともに安定した生活も保障されてきたのだ。だからこそ、命を賭けて戦えた。

人は夢や理想だけで生きることは出来ない。いや、夢や理想をみなもととし、現実の生活を築き上げてゆく。そのせっかく築き上げた現実の生活は今、音をたてて崩れ去ろうとしている。

騎士団の動揺を見てドラヴリフトは、やはり、と言いたげにすこしため息をついた。毀誉褒貶（きよほうへん）は世の常とはいえ、いざそれが自身に迫ってきたとき、人はどうなるか。

そのときだった。

天より雷響（いかずち）くような軍楽の音が鳴り響いたかと思うと、天まで届けと言わんがばかりな雄叫びと馬蹄の音が、地と空（くう）を揺らした。

それはバゾイィー率いる親征軍だった。

見慣れていながら、心を打ち砕くものが、目に飛び込む。

親征軍はオンガルリ王国の紋章旗を高々と掲げるとともに、女性のドレスをも先頭に掲げられていた。

「お、おお……」

ドラヴリフトが不意に声を漏らした。それに続き、

「あれは、あれは……」

「お、お母さま！」
コヴァクスもニコレットも絶句した。いや、ドラゴン騎士団すべてが絶句した。
先頭に掲げられるドレスは、エルゼヴァスのドレスだった。それが、見せ付けられるように、紋章旗とともに掲げられている。
エルゼヴァスは討った、次はお前たちだ、と。
それまでタールコに向けられていた刃は、まさにいまドラゴン騎士団に向けられていたのだ。
不審者の発見の報告を聞いたバゾイィーは進軍速度をはやめたのであったが、まさに王よりの沙汰が討伐であると信じられなかったドラゴン騎士団は、クネクトヴァに託された手紙にしたためられた旨が事実であったことにより、ひどい衝撃に襲われ、対応も遅れた。
「それ、反逆者どもを討ち取れ！」
馬上剣を采配にして配下の軍勢を叱咤するバゾイィー。ことに直属の親衛隊、フェニックス騎士団は王を守りながら龍牙旗目掛けて突撃をしかける。
進軍中に急ごしらえではあるが、白地に金糸で刺繍されたフェニックスの旗がひるがえり、龍牙旗を押し倒す勢いで向かっている。
王もさるもの、不審者の報告を聞き進軍速度をはやめるにおいて、ドラゴン騎士団の不意を突けたこと用兵の心得十分にあることを実証した。
これはドラヴリフトから学んだことであったが……。
「王が我らを討つというのは、まことであったか」
「なぜ、我々が討たれる？」
ただでさえ動揺していた騎士団の将卒らは、ここに来て完全に精神の破綻をきたしてしまい、おろおろする間に親征軍やフェニックス騎士団は、ドラゴン騎士団と激突し。またたく間に剣戟の響き野獣にも似た咆哮が響きわたり、流血が地を染め上げてゆく。
五万の軍勢である。いかにドラゴン騎士団といえど、不意を突かれたことにくわえ数の不利もあり、たてつづけに討たれてゆき、屍

をクンリロガンハの野にさらしてゆく。
「私から離れないで！」
咄嗟にニコレットはカトゥカの手を掴み、愛馬向かって駆け出し。
コヴァクスは反射的に剣を抜き、反撃に出ようとした。しかし、
「刃向かうな！」
という大龍公ドラヴリフトの怒号。
「刃向かいせず、逃げよ！」
ひたすらそればかり繰り返す。不意に、ソシエタスが視界に入る。
大龍公の言葉をよく聞き、剣を抜き馬上の騎士と渡り合っているが
防戦一方で相手を傷つけようとはしない。が、ドラヴリフトの視線
を感じてその方に振り向けば。
「ソシエタス、子どもたちを頼む！」
頷くソシエタスは、相手の騎士の足をつかんで引き摺り下ろし、
「ごめん」
と相手の顔面に蹴りを入れ気絶させる。それを尻目に、まずコヴ
ァクスのもとに向かった。
コヴァクスは三騎の騎士に囲まれ、馬上からの攻めをかわしたり
受け流したりしていた。そばにはクネクトヴァがいる。腰が抜けて
動けなさそうなのを、コヴァクスが必死にかばっていた。
これにソシエタスが助太刀に入れば、「許せ」とまず一頭の馬脚
を斬ってたおし。わっと悲鳴をあげて騎士が転び堕ちる。その間に
コヴァクスはさっきのソシエタスのようにひとりの騎士の足をつか
んで引き摺り下ろして、顔面に蹴りを入れた。
残る一騎は、小癪なと叫びながら鋭い斬撃を繰り出すも、コヴァ
クス難なくかわしざま、剣を持つ手を掴んで引き摺り下ろし。仰向
けにたおれたその腹を思いっきり踏みつけ悶絶させる。
その気になれば斬れるのだが、そこまではせず、せいぜい骨折で
済むよう苦心しながら手加減した抵抗は、思った以上に神経を使い、
相手を討つ以上にしんどいものだった。

第三章　クンリロガンハのわかれ　？

クネクトヴァは、あわわ、と身動きできないものの。
「カトゥカは」
と首を左右に振って赤毛の少女の姿をさがせば、白馬を駆るニコレットの背中にしがみついているのが目に入った。そのカトゥカの背中には、長箱がくくりつけられている。赤い龍牙旗の長箱だ。さすがに長箱をもって馬を駆り混戦を抜け出すのは容易ではないので、カトゥカに託したというわけだ。
その白馬を駆るニコレットは他に二頭曳いていた。兄とソシエタスの愛馬だ。
「お兄さま、ソシエタス！」
と叫び馬に乗れとうながせば、コヴァクス素早く駆け出し馬に飛び乗る。ソシエタスはクネクトヴァを担いで駆けて、馬に飛び乗った。
「ゆけ！」
父は叫んだ。ふたりの子は名残惜しそうに、動きが鈍る。そこへソシエタスが、剣の横っ面でそれぞれの愛馬の尻をたたく。
馬はいななきをあげて駆け出し。
「小龍公と小龍公女に続け！」
とソシエタスはわめきちらしながら、ふたりの後を追った。
（あとを、たのむぞ！）
遠ざかる子らを見送りつつ、ドラヴリフトは心で叫んだ。
その間にも、攻め手はひっきりなしに向かってきて、剣や槍をかわしながら相手を無手で投げ飛ばし、決して剣では斬ろうとはしなかった。
「なんたる男よ」
フェニックス騎士団の鉄壁の守りに囲まれながら、かつてドラゴンのごとしと賞賛したドラヴリフトに、王は心を射抜かれる思いで

あった。
圧倒的多数の王の軍勢に襲われながらも、無手で抗い、決して相手をあやめない。
だが、さすがに無傷というわけにはいかず、無手で抗うごとに傷ついてゆく。傷つきながらも、
「王よ」
とドラヴリフトは叫んだ。
「我らは反逆者にあらず、誰かは知らぬが、奸臣の言葉に踊らされたもうな」
叫び声とともに、血も吐いた。言葉通り、血を吐く思いでドラヴリフトは王に訴えていた。
「我が命を所望されるならば、喜んで捧げよう。されど、若者たちは、どうか」
「戯言を抜かすな！」
ドラヴリフトの叫びを遮断するイカンシの叫び。壊滅状態のドラゴン騎士団の龍牙旗は地に捨て置かれ、土と泥と血にまみれていた。さらにそれを踏みしだきながら、王の軍勢はドラゴン騎士団の騎士たちを討ち取ってゆき。
ドラヴリフトに群がった。
これがイカンシの指示なのは言うまでもなかった。
「ドラヴリフトを討ち取った者には、ドラゴンスレイヤーの称号を与えるぞ！」
イカンシは周囲にわめきちらした。騎士に称号を与えることは、王が決めることなのだが、少しでも早くドラヴリフトを討ちたい焦りから独断先行で、称号を叩き売りしだした。
もっとも、肝心の王はドラヴリフトの迫力に圧倒されてそのことに気付かず、呆然としていたんので、イカンシを叱り飛ばせなかった。
またこれをいいことに、野心溢れる騎士たちは雄叫びあげてドラヴリフトに群がり、その、王への訴えは掻き消されてしまった。

称号を与えられるということは、名誉は無論のこと、将来の保障ともなるからだ。

無数の剣と槍がドラヴリフト一人に繰り出される。それをかわしていたドラヴリフトだったが、もはや命運尽きたと観念し、動きを止めた。とともに、巨躯を貫く剣、槍。

天を見上げて、かっと吐血し。血涙を頬にしたたらせた。

（エルゼヴァス、いまゆくぞ）

エルゼヴァスはドラヴリフトにとって、四十五年の人生の中で、我が身に華を飾ってくれた唯一の女性であった。だがその彼女は、先に天国へ逝ってしまった。

婚礼の際、願わくば死するときは同年同月同日を望まんと、神に祈ったのだが。祈りはかなわなかった。祈りは妬みの心によって、へし折られた。

天国のエルゼヴァスが見えるのか、ドラヴリフトは天を仰いだまま、巨躯に剣と槍を貫かせたまま、身動き一つしない。

ドラヴリフトは、仁王立ちのまま息絶えていた。

これには誰しもが息を呑み、思わず後ずさってドラヴリフトを遠巻きに見つめた。さすが大龍公よ、という声も聞こえた。

そこから、ひとり馬を降りて抜け出した男は、剣を閃かせて何のためらいもなく、ドラヴリフトの首を剣で刎ねた。

ようやくその巨躯は崩れ落ちるようにたおれ、地に横たわった。

そばでは、男がドラヴリフトの首を掲げ、王やイカンシに見せつけ。

「フェニックス騎士団の騎士にしてドラゴンスレイヤーのカンニバルカ、逆賊ドラヴリフトを討ち取った！」

と誇らしく宣言した。

王は、こくりと頷いた。

まわりを騎士に守られながら、ドラヴリフトの首を掲げるカンニバルカを、バゾイィーは呆然と眺めている。

ドラゴン騎士団の将卒らは、団長、大龍公と仰ぐドラヴリフトが討ち取られてしまい、

「もはや、すべてが終わった」

と奈落の底へ突き落とされる絶望感に襲われ、残りの勇気も遺言もなにもかもが風に吹き飛ばされる霧のように、ちりじりばらばらに逃げ惑い。

そこには、かつて王国最強とうたわれた面影はなく、完全な敗残兵としての惨めさしかなかった。

（ドラヴリフトは確かに、すぐれた男であった。だが、それゆえに、ドラゴン騎士団の連中はドラヴリフトになにもかもを頼りすぎていた）

と、カンニバルカは思った。掲げるドラヴリフトの首の、なんと重いことよ。

その重心を失って、ドラゴン騎士団は雨散霧消するのみ。

無論、王の軍勢、フェニックス騎士団がこれをみすみす逃すわけもない。残党狩りと、ドラゴン騎士団の将卒らは背中から斬り払われて、討ち取られてゆく。

ドラゴンスレイヤーと言いながらも、どっちがドラゴンだと言いたくなりそうなほど鋭い眼光。岩を顎にしたように思えるように顔面は強張り、また鼻も形がよいながらも岩を突き崩しそうな張りのよさである。

鎧兜に覆われていても、その巨躯は筋骨たくましい様を想像させ。右手に握る剣、身にまとう鎧兜は朱に染まり。顔面もまた返り血にぬれ、まるで血涙を流したかのように昂ぶって真っ赤になった顔の上にまた赤が上塗りされている。

剣も主に劣らず赤く染まって、斬ったのはドラヴリフトひとりではないことを物語っていた。

吹き付けるような豪傑の風情が、カンニバルカの四肢から熱風のように発せられるようで。

まさに、容貌魁偉（ようぼうかいい）

騎士としての総合的な能力はともかく、剛毅さにおいてはドラヴリフトをも上回るのではないか。

（こんな豪傑が、オンガルリにいたのか）

バゾイィーは、夢の中にいる心地だった。

これなんカンニバルカ、見つけ出したのは他ならぬイカンシであった。

「よくやった、よくやった」

と上機嫌で馬を駆ってやってくる。

もとはイカンシの治めるオンガルリ北方の、チュラヴァカイア地方に流れてきた流浪の旅人であるが、氏素性は語らないのでわからない。

彼はある日、チュラヴァカイアの中心都市プラティシェヴァナに流れてきて。自慢の怪力をもって土木工事や荷役などの力仕事をしてその日稼ぎの日雇い労働者として生活していた。

容貌魁偉であるため、近づきがたい雰囲気はあるが、真面目に働くので周囲の評判もよかった。

その生活が一変した。酒に酔ったイカンシ配下の騎士が、仕事仲間を、肩がぶつかっただけのことで激情し、酔った勢いに任せて斬り殺し。

これに激怒してカンニバルカは騎士を殺してしまった。素手で、殴り殺したのだ。

理由はどうあれイカンシの領土内で平民が騎士を傷つける、あるいは殺す行為は反逆罪として死罪であった。駆けつけた数名の騎士により、ようやく押さえつけられたカンニバルカは死罪を決する裁きの場に引き出されようとしていたが、運命のいたずらか、たまたま近くを通りかかったイカンシは、そのカンニバルカのただならぬ雰囲気を察して、

「まて」

と引き止めて、その容貌をしげしげと眺めて、

「これは、面白そうな男だ。どうだ、わしに仕えてみぬか」

と仕官をもちかけてきた。さすがにこれには、死を覚悟したカンニバルカも驚いたが、死罪から一転騎士になれるのを、なんで断る理由があろう。

「はい」

と素直に答え、イカンシの部下となった。

氏素性の知れぬ身で居ながら、剛毅な骨柄。不気味に思う気持ちもあったが、イカンシなりに利用価値を認めたのだろう。王に捧げる騎士団、フェニックス騎士団を結成した際にも、カンニバルカはそれに編入された。

そして今、ドラヴリフトの首をかかげている。そう、これが一番の目的であった。カンニバルカを求めた理由の。

たとえ返り討ちになっても、もともと捨て駒、惜しくもなかったが。並大抵の者に、ドラヴリフトは討てない。しかし並大抵でない者なら、あるいは、という期待は大当たりだった。

カンニバルカは、周囲が呆気にとられるのもかまわず、寄ってくるイカンシをじっと眺めていた。

「まだそんな怖い顔をしておるのか」

にこにこ顔で、イカンシは馬から降りて、もろ手を広げて、抱きつかんがばかりにカンニバルカに歩み寄る。

イカンシの近習がカンニバルカに駆け寄り、ドラヴリフトの首をあずかる。

それを見てイカンシはもうご満悦であった。

(これで一番の邪魔者は失せた。さあ、いよいよわしの時代のはじまりじゃ)

様々な思惑が脳裏を駆け巡る。イカンシには野望があった。オンガルリ王国の王になる、という野望が。そのためには、宿敵タールコと手を握ることも辞さなかった。

ヨハムドが攻め込んできたのをドラゴン騎士団が迎え撃つ。それとは別口からタールコの皇帝ドラグセルクセスが攻め込み、これを

国王が追い返す。
すべては示し合わされたことであった。
王は英雄願望が強かった。そこにつけこみ、
「ドラヴリフトが王に内政に専念せよと言うのは、あるいは王を取るに足らぬと軽視するためでござろう」
と言えば簡単に、
「言われてみればたしかに」
と納得するものだから、次から次へと、根拠のない憶測を吹き込んだ。ニコレットが戦場に出るのは、王に心を寄せていながら、王はめかけを持たぬ主義ゆえに想いを果たせず。あてつけに、女を捨てて剣を握っているのだ、ということまで信じた。
そして、とどめとばかりに、
「あるいは、反逆を企てておるのやもしれませぬ」
と言ったとき。
「確かに。あやつの言動は、裏があってのことか」
と、王はドラゴン騎士団を反逆者と簡単に決め付けてしまった。
(なんとも、御しやすい王よ)
と小躍りする気持ちだった。そこへ、タールコからの密使。いわく、我らと手を握り、ともに栄耀栄華を味わおう、と。そのために、まずドラゴン騎士団を倒す。それから、オンガルリを攻め、占領し、バゾイィーを廃してイカンシを王に立てる、と。
(わしが、王に)
それは刺激的にして甘美な誘いで、考えただけで空飛ぶ絨毯で冒険旅行をするような爽快感があった。
(そうだ、たかがバゾイィーごとき男の下にはいつくばる人生に、なんの面白みがある)
いっそのこと、王になってやれ。
野望は決定的なものとなった。
ダノウ川の戦いで王は自信をつけ、ドラゴン騎士団を必要としなくなった。しかしこれは、偽りの勝利であった。もともと、王を偽

りの勝利により偽りの自信をつけさせた滑稽な人物にするため、タールコは負けたふりをして引き返したのだ。

そしてヨハムドは予想通りドラゴン騎士団に敗れたが、討ち取られはしなかった。無理をするな、という皇帝の言葉どおり、無理を悔いて逃げ去ったのだ。おかげで、ドラゴン騎士団に疑惑をひとつ上塗りさせることができた。

そしてついにドラゴン騎士団は、ドラヴリフトの死によって壊滅した。ふたりの子は逃げたようだが、父を見捨ててさっさと逃げるなど、たかが知れた若造どもで、放っておいても害はなさそうだった。とはいえ、念には念で、指名手配は怠らないつもりだ。

我が子に抱擁するように、イカンシはカンニバルカに歩み寄っていた。

王を無視して。

バゾイィーもこの時になってようやく異変に気付いた。イカンシはドラヴリフトを討った者にドラゴンスレイヤーの称号を与えると言ったが、それを決めるのは王であり、イカンシではない。なのに、イカンシは勝手にそんな約束を騎士にした。

ドラヴリフトを討ったカンニバルカという騎士もまた、王のゆるしもなく、勝手にドラゴンスレイヤーを名乗った。

これは、どういうことか。

ドラゴン騎士団を反逆者と見抜いた忠臣は、今、戦勝祝いの一言もなく、王を無視している。

（まさか）

はっと、閃いた。と思ったときであった。

カンニバルカの眼光鋭い目が、かっと見開かれたかと思うと、剣風唸りをあげて。

イカンシの首を跳ね飛ばした。

絶頂にあってか首を刎ねられたことに気付かず、その顔は上機嫌に笑っていて。

イカンシの笑顔は、鈍い音を立てて地に落ちた。

またそれを、カンニバルカは蹴飛ばした。

第四章　彷徨　？

ドラゴン騎士団の残党狩りの熱気もどこへやら。
カンニバルカがイカンシの首を跳ね飛ばし、さらにその首を蹴飛ばし。一瞬にして、周囲の空気は凍りついた。ドラヴリフトの首を預かったイカンシの近習も、魂が抜けたように呆けている。
おのれ、という喚き声が響き。ドラゴン騎士団の残党に向けられていた剣が、カンニバルカに向けられた。
バゾイィーは、身も心も凍りついたように、馬上でかたまったまま動かない。あまりの事態の急変に、ついていけなかった。だがそれは、他の将卒らも同じようで、見えない幽霊に抱きしめられているかのように、ぽかんとカンニバルカを眺める者も多かった。
「王よ」
己に凍りついた視線と殺意のこもった視線が混ざり合って、そそがれているのを感じながら、朱に染まった己の姿で王に迫り、カンニバルカは咆えた。
「もうオンガルリは終わった。潔くタールコに膝を屈するしか、道はござらぬぞ！」
バゾイィーは、わなわなと震えている。
震えながらも、うすうすと、内実をさとりつつあるようだった。
（予は、イカンシにそそのかされて、国を誤まったのか……）
その通りであった。
イカンシにそそのかされて、国防の要であるドラゴン騎士団を壊滅させたのだ。これが、どういうことか。
「貴様、ふざけるな！」
と大喝し、槍を振るってカンニバルカに猛然と迫る騎士があった。これなんフェニックス騎士団の団長にして、イカンシの腹心であったウドジカであった。イカンシによく仕え、勇猛果敢な男であった。
主が討たれ、その仇を討たんと蹄の音を響かせて腹の底から轟く

怒号を発し。馬上よりカンニバルカの顔面めがけて槍を繰り出す。
が、カンニバルカ、かっと目を見開いたかと思えば、鼻先まで迫った槍の穂先を流れるようにしてさらりとかわしざま。空いた左手でその槍の柄をつかむや、
「えい！」
怒号を発しながら槍を力任せに引っ張り、ウドジカを馬上より引き摺り落とした。
わっと声を上げて地に叩きつけられたウドジカは、体勢を立て直そうと慌てて起き上がろうとするが。眼前に剣が閃いたかと思う間もない。その顔面に剣が叩きつけられて、血を撒き散らしながらのけぞり、仰向けにたおれて。そのまま動かなかった。
あっという間に、ドラヴリフト、イカンシ、ウドジカといった、内情はともかくとして、オンガルリの主要人物が三人も死んだ。それも、同国人同士で戦った果てに。
王は、衝撃が心を強く打ちつけ。それまで中天に昇っていた太陽が、真っ逆さまに地上に墜落したような気持ちだった。
もはやカンニバルカが、どういった人物なのかという疑問も、心の外に吹っ飛ばされていた。
「静まれ！」
得体の知れぬ恐怖が周囲を駆け巡り。恐慌をきたした者が続出し、その場から逃げ出そうとしていた。彼らがさっきまで討っていたドラゴン騎士団の残党のように。
カンニバルカは、それらに「静まれ！」と叫ぶ。
そうすればほとんどの者が死神に襟首をつかまれたかのように、走るのをやめてその場にへたりこむ。
その中には、王の姿もあった。
カンニバルカはイカンシの首をにらみつけ。
「馬鹿一人のために、よくぞここまで国をめちゃめちゃにしたものだ。王よ、イカンシが国を売ろうとしていたのを、ご存知なかったか！」

「……」

バゾイィー、言葉もない。やはりそうだったのか、という不安が的中して、凍りついた心は砕けそうだった。

が、それでも気力を振り絞って。

「それならば、なぜうぬは予にそのことを告げなんだのか。なぜ今になって、イカンシを討った」

と返すも、カンニバルカは不適な笑みを浮かべ。

「王がいつイカンシの正体を見抜くか、待っていたのよ。また、イカンシのような男はオレも嫌いだが、恩人ではある。ある程度役に立ってやってから、討ったのよ」

と言い、さらに。

「奸臣を見抜けず、忠臣を退ける。ふん、国が滅ぶときの、君主の振る舞いそのままだな」

と言うと、大槌で頭を打たれた衝撃だった。王は、強い衝撃を立て続けに受け、崩れるように馬から降りて、へたりこんだ。

このとき、カンニバルカが容貌魁偉ながら教養のある人物であることをさりげに見抜いた者もいないではなかった。教養のない、粗野な人物であるなら、そんなことを言うことはまずない。

王は衝撃のあまり気付くことはなかったが。

なにより、王の五万の軍勢は、たった一人の人物によって身動きを封じられてしまっていた。

遠慮なく、カンニバルカは続けた。

「その器では、ドラゴン騎士団があろうとも、いずれタールコに負けるは必定。いっそ、早々に神美帝に使者を送り、従属の誓いを立てるより生き残る道はなし。いかがか！」

オンガルリの歴史がはじまって以来、ここまで堂々と王にタールコに屈せよと言った人物はいないであろう。だがそういう人物が出ることをゆるしてしまうということは、確かにオンガルリは終わろうとしていることなのかもしれない。

バゾイィーの目から、とめどもなく涙が溢れた。もはや一国の王

ではなく、ひとりの男の姿であった。
だが不思議なことに、なぜか胆も据わり。無言で愛馬にまたがったかと思うと、ドラヴリフトの首とカンニバルカを交互にひと睨みして。
「このたびのことで、予の器がよくわかった。潔く、この首をドラグセルクセスにくれてやろう」
予期せぬ言葉に、将卒らは声を失った。カンニバルカに好き放題言われてすごすご都に帰るのかと思っていただけに。
「ほう」
カンニバルカは、少し見直したようにバゾイィーを見た。バゾイィーは、もはやカンニバルカなど眼中になさそうであった。それどころか拳を振り上げ、
「だが、ただではやらぬ。予にも誇りがある。タールコの者どもを道連れにして、今ごろ地獄の番犬になっているであろうドラヴリフトの餌にしてくれよう。カンニバルカとやら」
「なんじゃ」
「うぬは只者でないと見た。あとのことは、頼んだぞ」
カンニバルカは、王の言葉を聞き、不適に笑った。
「王よ、あんたは存外面白い御仁だな」
「なんの、お前には負ける」
涙で濡れた顔を天に向け、バゾイィーは高笑いした。乾いた中にもほどよい湿り気をおびた、なんともいえぬ哀愁と潔さのこもった笑い声であった。
「ああ、そうそう。ドラゴンスレイヤーの称号を、そなたに与える。これが、お前にしてやれる、王としてのささやかな心遣いじゃ」
「痛み入る」
この時になって、カンニバルカは王にうやうやしく一礼した。
王はいつしかすっきりした顔になり、周囲を見渡す。
「命が惜しいものは好きにせよ。物好きは、予に続け」
そういうと、馬を返してどこへともなく駆けてゆき。あとに「物

好き」な者たちが、少数ながら続く。それらの中から、王の命を受けて、バゾイィーからの挑戦状をドラグセルクセスに叩きつけるための使者がさらに馬を飛ばして、王に先んじてタールコに向かった。

遠ざかる王の影を見送り、カンニバルカも周囲を見渡し。

「これより、ドラゴンスレイヤー・カンニバルカが陣頭指揮をとる。不満のある者は立ち去れ！　なんなら、剣をもって訴えるのもよいぞ」

雷鳴のような怒号であった。

一体、このカンニバルカは何者なのであろう。

オンガルリ王国は、柱を立て続けに失った。敵国からの侵攻をふせぎ、国も安定し内乱もなかった。にもかかわらず、わずかな人間の心があらぬ動きを示したことにより、国は背骨を抜き取られた。

意気軒昂に敵国の侵攻を防ぎ、反逆者を討ち取った五万の軍勢はいまや、腑抜けた烏合の衆となりはてていた。

いかに人を集めようとも、集まって何をなすか、という意義や大義がなくば、烏合の衆でしかなかった。今の彼らは、まさにそうだった。

となれば、王にあとのことを託されたカンニバルカに従うしかないであろうが。ドラゴンスレイヤーのこの男は、オンガルリ王国をどうするつもりであろうか。

「まったく、面倒をすべてオレに押し付けて、王もいい気なものだ」

とつぶやいたかと思えば、大きく息を吐き。

「全員整列！」

と天地揺らす雷鳴のような大喝を発し、軍勢に電撃ほとばしるような衝撃が走ったか、馬蹄に足音地に響き、鎧兜のゆれる金属音も撒き散らしながら、カンニバルカの前に整列し、馬上の者は下馬した。

その内意はともかく、軍勢の指揮全権は完全にカンニバルカがにぎって。誰もそれに逆らえなかった。

武勇も教養もあり、軍隊を引っ張る力もある。かつて流浪の旅人であったはずのこの男、軍人として軍隊を率いたことがあるのか。それも相当の。そうでなくば、どうして王の軍勢が、言うことを聞いてしまうのか。

「まずは、都にかえるぞ！　あとはそれからだ！」

「は、ははぁ！」

戸惑い気味に、全軍返事をし、隊列を整えルカベストに帰還する。その先頭に、誇らしげにカンニバルカ。

そして、捕虜となったドラゴン騎士団の騎士たちも、力なく歩みながらその隊列の中にくわわって、ともに王都ルカベストに向かっていた。

陽は雲をも紅に染めながら、反対側に見える月に光を当てつつ、そびえ立つ山々に沈もうとしていた。

夕陽照らすどこかの峠道。三騎、影をながく落としながら蹄の音もけたたましく駆けている。

まさか王の軍勢に異変が生じたなど知らぬコヴァクスにニコレット、ソシエタスは遮二無二に馬を駆けさせ、できるだけ遠くへ逃げようとしていた。

軍としての統率はなくなり、ドラゴン騎士団は支離滅裂。それでも百騎ほどは着いてきてくれるかと思っていたが……。

気がつけば、誰も着いてきていなかった。

追っ手がないのを確認して、すこし速度を緩める。

「誰もいないのか」

コヴァクスはうめくようにつぶやいた。今そばにいるのは、妹のニコレットにその副官ソシエタス。それぞれの背中にしがみつく、クネクトヴァにカトゥカの五人だった。

さっきまで一万を越える人数の中にいたというのに。

「小龍公、追っ手はまいたようです。馬を休めましょう」

駄馬ではない。それぞれが良馬を愛馬としているが、休みなく走

らせていたので、息も上がり力強さがない。これ以上無理をすれば、つぶれてしまう。

それは人間も同じだった。コヴァクスはもちろん、ニコレットにソシエタスも、追っ手をまいたと思った途端にどっと疲れが溢れたのだから、クネクトヴァとカトゥカの疲労おして知るべきであった。

手綱を引き、ニコレットは馬を止めた。背中にしがみつくカトゥカは全身でぶるぶる震えていた。いかにおてんばであろうと、突如戦乱に巻き込まれれば、有無を言わさぬ恐怖に身を縛られるのはどうしようもない。

それはソシエタスの背中にしがみつくクネクトヴァも同じだった。やむをえん、とコヴァクスも馬を止めて下馬した。

辺りを見回す。どこをどう走ったか、覚えておらず、周辺に見える山野の様子から位置を探ろうとしたが、咄嗟にはわからなかった。どっかと、腰を下ろし、肩で息をし。深くため息をついた。

ソシエタスとニコレットは、背中にしがみついていたクネクトヴァとカトゥカの手を取りながら、馬から降ろしてやってから、自分が降りた。

疲労に襲われながらも、地べたに座り込みうつむくコヴァクスを、四人はいたたまれなさそうに見つめた。

（なぜこんなことに）

問答無用の怒りと哀しみが、コヴァクスの肩をぶるぶると強く震わせて、拳はかたく握りしめられていた。

つい先日まで、ドラゴン騎士団は王国のために命がけで戦ってきたというのに。その報いが、反逆者として討伐されることとなろうとは。

ニコレットも、ふっと崩れて膝と手を地に着け四つんばいになり、身体中を震わせていた。色違いの瞳から、涙が溢れ出て、地に落ちしみこんでゆく。

最年長のソシエタスはさすがに落ち着いたものだが、それでも衝撃は隠せなくて。沈む夕陽に目をやり、拳を握りしめて、心で夕陽

に何かを訴えかけているようだった。
クネクトヴァとカトゥカは、呆然と立ちすくんで、へなへなと地べたにへたりこんだ。
ドラゴン騎士団の小龍公コヴァクス、小龍公女ニコレットといえば、オンガルリの若者の憧れのまとであり。少年はコヴァクスを、少女はニコレットを慕い、その活躍を聞くたびに、我が事のように胸を弾ませていたものであったし。
幼い子どもたちは、コヴァクス、ニコレットを勝手に名乗って戦争ごっこもしていたし。ふたりの活躍を尾ひれをつけて、これまた己を誇るように語り合ったものだった。
その小龍公と小龍公女が、見るも不憫な、いやもっと率直に言って無様な姿をさらし、涙を流している。
こんな姿、今まで考えたこともなかった。
なにより、ドラゴン騎士団が、大龍公ドラヴリフトが反逆者として王から討たれようとするなど、もっと夢にも思わなかった。
（オンガルリ王国は、どうなってしまったのだろう）
と思っても、十四の少年少女にわかるはずもない。ただひとつわかることがあれば、今日を境に国が変わり、これからどうなるのかわからない、ということであった。
三頭の馬は、寄り添い合って静かに疲れを癒していた。
「やむをえません。今夜はここで野宿をし、明日新たな行き先を求めることにしましょう」
追っ手の心配もあるが、馬も人も疲れきっているためこれ以上進むのは無理だったが。幸い身を隠す森がそばにあるので、そこに身を潜め夜を明かそうとソシエタスは言った。
コヴァクスとニコレットは力なくソシエタスの言葉に従い、馬の手綱をとって森の中に入り。そこでまたへたりこんでしまった。
まるで魂が抜けているようだ。
（大龍公のご遺志を託されているというのに……）
兄と妹の様子を見て、ソシエタスは内心穏やかではない。それに、

なによりも現実的な問題もあった。

秋も深まり冬が刻一刻と迫りつつある。我が身を包む夜気のなんと冷たいことか。この天地には春夏秋冬の四季があり、冬の寒さは肌を裂き空は灰色に染まり白い雪を降らせて地を埋める。

うかうかしていれば、王に討たれずとも雪に埋もれて凍え死ぬことすら考えられた。

（まずは、冬をどう越えるかが問題だ）

大龍公ドラヴリフトの遺志は一朝一夕に成し遂げられるものではない。おそらく十年は覚悟せねばなるまい。遺志の完遂を思えば、自然という困難にも打ち克たねばならなかった。

「これが敗残者というものか」

ドラゴン騎士団ありしころ、いかに冬を越えるかなどどこまで真剣に考えたかわからない。むしろ冬は休養の季節であった。

いかにタールコがその野心を燃やそうとも冬に降り積もる雪までは溶かすことかなわず。主要道もまた雪に閉ざされているため、進軍を控えて春の訪れをまたねばならなかった。

冬の雪は国を閉ざすとともに、外敵よりの侵攻を防ぐ天然の防壁でもあった。その間、自身の鍛錬に専念できるし。なにより暖炉の燃える火を眺めながら、暖かいスープを飲み、窓越しに見える白雪の銀世界を眺めながら、雪化粧した山野を愛でながら、春の息吹を心待ちにしていたものだった。

ドラゴン騎士団があったころは、それができた。

それらを失った今、天然の防壁が、自分たちを生き埋めにしようとしている、と考えただけでも恐ろしい。

まさに敗残者にとっては、敗残者になった瞬間から、人はおろか自然までが敵に回るのだ。

思えば、恵まれていた。

色々と考えるが、やはりソシエタス自身も大変疲れている。ふう、とため息をつき、戸惑うクネクトヴァとカトゥカをともない森の中に入り。

やがて身を縮めて、夜闇に包まれて眠りをむさぼった。

第四章　彷徨　？

幸い追っ手に発見されることなく朝日を迎えられ、三騎は再び旅に出た。

あてどもない旅ではあるが、まず第一に、国を出ねばならぬことははっきりしていたが。国を出るといっても、どの方向から出るか、それが問題であった。

どの方角にゆくかが決まらぬためか、蹄の音は重く、その歩みは遅い。いたずらにうろうろして、追っ手に見つかれば何にもならないので、やむなく森の中に身を潜めて思案に暮れねばならなかった。

越冬の問題はコヴァクスもニコレットも考えていた。

クネクトヴァとカトゥカも考えるものの、こちらも名案は浮かばない。

コヴァクスはかなり苛立っているようだ。脳天がきしむような思いに駆られながら、檻の中の豹のように、眉をひそめ腕を組んで森の中をぐるぐる回る。かと思えば、森の木を思いっきり蹴飛ばし苛立ちをあらわにする。

コヴァクスは何度も気に蹴りをいれ、そのたびに木は音を立ててゆれ、蹴られて痛くて泣くように、葉を落とす。

「お兄さま、追っ手に見つかっては一大事。ここは落ち着いて」

とニコレットがなだめれば。かっと目を向いて妹の色違いの瞳を睨み据える。

「オレに命令するな！」

「なんですって？」

「妹の分際でしゃばるな、と言うんだ」

ニコレットは絶句した。

これまできょうだい喧嘩はあったが、そんなことを言われたのは初めてだった。どんなに怒っても、相手の尊厳を傷つけることは言わない兄だったのに。

遺志を受け継ぐ心はあるといっても、やはりそこはまだ人生経験の浅い若者であった。それに対しどう対処してよいのかわからず、精神が迷子になってしまっているようだった。

「いっそイカンシを斬りに、王都へゆくか」

「それは危険です。みすみす死ににいくようなものです」

とソシエタスがたしなめた。

昨日のことを思えば、オンガルリ王国においてドラゴン騎士団は完全に反逆者となり、居場所が失われたどころか。ドラゴン騎士団の残党を狙って、各地に探索の兵が練り回っているのは容易に想像できた。

そんな中、何の根拠もなくただルカベストに赴きイカンシの首を求めたところで、ソシエタスの言うとおり、みすみす死ににゆくようなものだ。

それでは、遺志を託された意味がなくなってしまう。

「ソシエタス、お前、臆病風に吹かれたか」

と、コヴァクスは目を血走らせ、剣を抜き。カトゥカはにぶい光を放つ剣と、そのあまりの形相に、きゃあ、と思わず悲鳴を上げてクネクトヴァの後ろに隠れ。

ソシエタスは、無言でコヴァクスの剣を見据えている。

「臆病風に吹かれたから、剣でどうするおつもりなの」

と言うはニコレットであった。

「どうもこうもない。臆病者は邪魔になるだけだ。そんな足手まといになる者は、斬る」

「小龍公、何を言われる。お考え直しを」

ソシエタスは驚きコヴァクスをいさめる。しかし、

「お前逆らうか！」

と剣を握りしめ、聞かない。

「臣下の分際で……」

「直言こそ臣下の名誉。主が道を誤られようとしているのを、どうして黙って見過ごせましょう。ことに大龍公よりのご遺志を託され

たお方ならば、なおさら」
　ニコレット見かねて、
「そうよ、ソシエタスの言うとおりよ。ここで血気にはやったところで、無駄死にをするだけ。お兄さま、どうかお考え直しを」
　と間に入って言う。
「ニコレット、お前……。どいつもこいつも！」
「足手まといは斬る、だなんて。お父さまが、そんなことを教えてくれたの？　足手まといになる者こそ、守れ、というのが、お父さまが教えてくださったことでしょう」
　とニコレットは言うが、
「教えは教え、現実は現実だ！　この餓鬼どもも……」
　とクネクトヴァとその背中に隠れるカトゥカを指差し、
「邪魔となれば、斬る！」
　と咆えた。もし追っ手が近くにいれば、その声が聞こえそうだった。
「なにが小龍公よ！　がっかりだわ！」
　と叫ぶのはカトゥカだった。びっくりしてクネクトヴァはおろおろしている。
「お、おいカトゥカ」
「あんたの言ってること、結局ただの餓鬼大将だわ。こんなのが小龍公だなんて、笑っちゃう。これならあたしやクネクトヴァがドラゴン騎士団の団長になった方が、まだましな気がするわ！」
「な、なに。赤毛の餓鬼、オレを愚弄するか！」
「愚弄なんていっちょまえに小難しい言葉使って、やーね！　あたしはただほんとのことを言っただけよ。ねえニコレット姉さん、そうでしょ」
　突然振られてニコレットは苦笑するが、うろたえる兄の姿に、カトゥカと同じように軽蔑の念を抱いていた。
　彼女自身もうろたえていたのは同じで、コヴァクスが先に無様な姿をさらしたものの、それより先に自分が無様な姿をさらしたかも

しれないのだ。
　ニコレットは兄が先にうろたえて、それを見てかえって落ち着きを取り戻し。兄が爆発してカトゥカやクネクトヴァに斬りかかったときのために、すかさず、その前に立ち、コヴァクスを見据えている。
「残念だけど、カトゥカの方が正しいと思うわ」
「ニコレット、お前までオレを愚弄するか」
「誰もお兄さまのことを馬鹿にしていないわ。お兄さま、どうか落ち着いて話し合いましょう」
「話し合いなど生ぬるい！　我らは剣に生きる者。舌先三寸で、剣が振るえるか！」
　剣を握りしめ、一歩踏み出すコヴァクス。このままでは、ほんとうに斬ってしまいそうで、ソシエタスははっとしてこちらも一歩踏み出す。
「斬るなら斬ればいいわ。私を斬って、お兄さまの勇気を証明すればいいわ！」
　ニコレットは叫んだ。その背中の後ろにかばう少年と少女も、瞳を揺らしながら、コヴァクスと剣を見据えていた。
　ニコレットの黒い左目と、碧い右目の瞳が、コヴァクスを映し出す。
　色違いの瞳に映し出されて、コヴァクスは両親にも見られているような思いに駆られた。
「くっ……」
　剣を鞘におさめ、どっかと座り込む。
　無様な姿をさらしたことを、恥じているようだった。
「お兄さま……」
　ニコレットは兄のそばに駆け寄り、肩に手をかける。言葉はない。
　クネクトヴァとカトゥカは気まずそうにしていたが、
「ぐぅ」
　とふたりして腹の虫がないてしまい、顔を真っ赤にした。

「そういえば、何も食べておりませんな」
と言って、ソシエタスは場の空気をほぐす。が、たしかに、何も食べていない。
その何にも食べていないことを、いま思い出した。それほどまでに、皆切羽詰っていた。
「それなら僕に任せてください」
とクネクトヴァは言うと、手ごろな小石を拾い、ひゅっと風を切るように石を投げれば。木の上にとまっていた小鳥が、ぴっと悲鳴を上げて落ちてくる。それに続きカトゥカも同じように小石を投げれば、また小鳥が落ちた。
機転を利かせたソシエタスは木の枝を拾い集め、懐から火打石を取り出し火をつける。
「あなたたちって、狩りが上手ね」
とニコレットは感心しきりだ。狩りの経験はあるものの、それは弓矢を用いてのこと。いま誰も弓矢をもっておらず、小鳥を捕らえることはかなわない。たとえ猪や鹿があらわれて、それを剣でしとめようとしても、逃げ足早く逃してしまうだろう。
「まあそりゃ、お腹が空いたらこうしていたんだ」
腕白な、そして満足に食うことが出来なかったふたりは、郊外の森に出てはこうした狩りで空腹をしのいでいた。
孤児院はもちろん食事は出たが。朝昼晩の三度だけ。おやつやおかわりはない。
ルドカーンがけちなのではなく、孤児の皆に平等に食を与えるために、節制せねばならなかったのだ。
が、腕白ざかりの子どもには足りず。ふたりは、自らの努力で食を得る必要性を幼いころから心に叩きつけられ、またその技も身につけていた。
「父上は言っていたな。なまじ恵まれると、自分の足で歩くことも出来なくなる、と」

コヴァクスは、恥じるとともに、最初足手まといと思っていたクネクトヴァとカトゥカがこんなところで優れた手腕を見せたので。しみじみと、父の教えを思い出していた。

「オレはそうまるまいと心がけていたが。いざとなれば、お前たちの方が便りになりそうだな」

「いやあ、そんなあ」

とクネクトヴァとカトゥカは、コヴァクスとニコレットに感心されて、照れ笑いをしている。まさか憧れの小龍公と小龍公女から、こうして褒めてもらえるなんて夢にも思わなかった。

ともあれ食の問題は、まずは問題ない。が、冬はそうもいかない。このまま手をこまねいていては、行き場なく雪に埋もれてしまう。

ソシエタスは眉をひそめながらも、何か思いついたようだった。それを察したニコレットは、

「何か考えがあれば言ってちょうだい」

とうながし、ソシエタスは迷い気味に、では、と口を開いた。

「オンガルリより南西方向の、旧ヴーゴスネアにゆこうかと、思っておりました」

「ヴーゴスネア」

オンガルリ王国の南西に、ヴーゴスネアという国があった。ターレルコとも国境を接し、オンガルリと同じように敵対関係にあったが、内乱が起こり今は七つの小国に分裂している。

この内乱は別にターレルコが何かをしたわけではなく、ヴーゴスネア国内での権力闘争が高じて内乱となり、国を七つに分けへだててしまった。

その七つの国は互いに反目しあい、今も内戦が絶えず、各地で毎日のように戦火があがっているという。

そのため人心は荒み治安も悪化。内戦のどさくさに紛れて白昼堂々と盗賊山賊のたぐいが暴行略奪をほしいままにし、旧ヴーゴスネアの地は、混沌としているという。

またターレルコも、オンガルリという優先事項もあり、旧ヴーゴス

ネアの七つの国が結託してタールコに敵対することもないので混沌とするにまかせて、手を出していないという。

「ヴーゴスネアか……」

とコヴァクスがつぶやく間に、火の燃える熱気が肌に触れるとともに、肉の焼ける煙も触れ、香ばしい匂いも鼻に触れる。

「危険は多けれども旧ヴーゴスネアにゆくより他に道はなしと思います。北方は、冬の厳しさを思えばゆくべきではありませぬし、東と南はタールコの支配下に置かれ。オンガルリより西方諸国は安定し、かえって我らの居場所はないでしょう」

「どうして西には私たちの居場所がないの？」

とニコレットが問えば、ソシエタスうなずいてこたえる。

「西はオンガルリがタールコよりの侵攻を防ぐ防壁の役目をなした甲斐あり、平穏な暮らしを享受していると聞きます。これからどうなるかわかりませぬが、ドラゴン騎士団が反逆者として討伐されたという話は、いずれ西方にも広まるでしょう」

コヴァクスとニコレット、クネクトヴァとカトゥカは、肉を手にしたまま押し黙って聞き入っている。

西方にはかつて西の大帝国の属州であった地域がそれぞれ独立し大小様々な国家郡をなしている。これらの中の隣接する国々はタールコよりの侵攻を防いでもらいたいがために、オンガルリと同盟関係にあった。

「となれば、平和な暮らしを壊されたくないと、タールコとの戦いを避け和平案が起こり。あるいは我らを災いの種と忌み嫌い、捕らえようとするかもしれず。またこれに抗い流血の沙汰になれば、怨みが残りオンガルリに対しての印象も悪くなり。西側に新たな敵ができるとなれば大龍公のご遺志を遂げても意味がないというもの」

ソシエタスの話を聞き、コヴァクスはうーんと考え込む。

「でもウィーニアやソルティエヴルグ、ヴゥルノはやはり同盟国。真実を語れば、受け入れてくれるかも」

とニコレットはもっともな疑問を呈した。同盟国である。実際に

行ってみなければわからないではないか、と。
「その疑問はごもっとも。希望もあるでしょう。ただそれだけに、失望もありうるのです。大龍公のご遺志を、いちかばちかの博打のように扱うわけには、まいらぬのです」
「むしろ混沌としたヴーゴスネアにゆき、どさくさに紛れて新たなドラゴン騎士団をつくりなおす方が、確実性はあるな」
「小龍公の言うとおりです！」
ソシエタスはコヴァクスがうまく自分の考えを察してくれて、顔をほころばせた。コヴァクスも汚名返上ができたと、すこし自信を取り戻した。
「どうせ危険は避けられぬ。ヴーゴスネアに跳梁跋扈する盗賊どもを退治するなどして、その地の民や王に恩を売れば、重くもちいられ、一兵団でも貸してもらえるかもしれないな」
「あるいは、我らの剣にかけて義勇兵をつのることもできましょう。それらを訓練し、新生ドラゴン騎士団とできる望みもあります。それも混沌としているがゆえに、できることなのです。なにより、冬を過ごす場所もみつかるやもしれません」
幸いに、というのも妙な話だし、他国の不幸につけ入るようでもあるが、その方が確実性があり、またそれゆえに希望の光も強く輝くように感じられた。
「ただ……」
「まだなにかあるの？」
ニコレットはコヴァクスとソシエタスの言葉を聞き、色違いの瞳を輝かせていたが。踏ん切りのつかないようなソシエタスにやや苛立ったようだ。
「まあ、ふたりをどうするか、という問題もありまして」
とクネクトヴァとカトゥカを見つめた。
「この旅は危険極まりなく、まだあどけない少年と少女に耐えられるかどうか」
なるほど、とコヴァクスとニコレットもふたりを見て。見られる

クネクトヴァとカトゥカは、気まずそうにうつむいているが。
「連れて行ってください！」
とふたりそろって言った。
「私はルドカーン様から使命を託されたそのときより、すべて覚悟の上です」
「あ、あたしは、どうせ居場所なんかないし」
「居場所がない、というだけでは、連れてゆけぬよ」
ソシエタスはカトゥカに優しく諭す。クネクトヴァはともかく、どうしてこの赤毛の少女はついてゆきたがるのだろう。危険がよくわかっていないのか。
「で、でもお願い！　連れて行ってください！　足手まといになりませんから……」
「そう言われても……」
「住み込みで働いているところのご主人さまは意地の悪い人で、いつもあたしを棒でぶって、それに、もっと大きくなったら身売りさせる、って」
「なんだって！」
声を上げたのはクネクトヴァだった。ある商人に孤児院から引き取られて、住み込みで働いていたのだが。
「お前、どこかに売られちゃうのか。人をもののように売るなんて、なんてひどいんだ」
身売りというのは、おそらく男を相手の商売をさせるつもりなのだろうが、まだ幼いクネクトヴァには、そのことがよくわからなかった。単にどこかの店の働き手として売り買いされる、というくらいにしか想像できなかった。
そんなクネクトヴァに苦笑しつつ、仮にも王都最大の教会管理の孤児院の孤児を引き取りながら、そんな下卑たまねをしようとする輩がいることが、コヴァクスとニコレット、ソシエタスには衝撃的だった。
（教会の権威も、地に落ちつつある）

思えばイカンシが王に近づいてから、妙に都の雰囲気がかわった。柄が悪くなった、というか。

大きな教会管理の孤児院の孤児が引き取られる場合、しかるべきところが引き取り、大切に面倒を見るのが通例であった。それが教会への帰順の意思表示でもあり、神の教えが浸透しているという証しであった。

が、それが崩れつつあるようだ。

もともと欲深なイカンシは厳格な教会とはそりがあわず、もっぱら商人たちと、それもあまり根性のよくない商人とばかり付き合って、金銭や高価な品々を仲間内で増やしながら流し合っていたようだ。

その中には、人身売買をする者もあったろう。

最初こそはそれは隅っこに少し浮かんだ染みのようなものだったろうが、イカンシが商人たちとともに欲を満たすにつれて、染みは商人からその使用人、労働者などの裾野に広がり、王都を侵蝕しつつあったようだ。

クネクトヴァは知らなかった。ルドカーンは孤児が根性のよくない引き取り先により不当に売買されている実態を掴んで、その保護や対応に苦慮していたことを。

弟子の少年に伝えるのは、俗すぎるため、伝えられなかったのだ。

またその取り引き先がイカンシとつながりがあることも、うすうすながら勘付いていた。

そういうこともあって、エルゼヴァスの悪魔祓いの儀式のときに、疑惑は確信へと変わり。ドラゴン騎士団に危機を知らせられたのだ。

まったくイカンシという者は、何を望んで生きていることやら、である。

「ここで見放されたら、あたしは、身を売るか流れ者になるかの、どっちかしかないんです。だから、連れて行ってください……」

「わかったわ」

とニコレットは言った。同じ女性の身だから、というのもあるだ

ろうが、クネクトヴァ同様狩りもうまく、またコヴァクスにきっぱりと啖呵を切ったりする気風のよいところがあるのも気に入った。
「お兄さま、ソシエタス、この子は私が守りますから。一緒に行ってもいいでしょう？」
「わかった。好きにしろ。ただそう言う以上は責任を持てよ」
「もとより承知ですわ」
兄と妹のやりとりを聞き、カトゥカは涙を流してニコレットの手を握り、
「ありがとう、ありがとう、コヴァクス兄さま、ニコレット姉さま」
と何遍も礼を言った。
それを微笑ましげに、あるいはすこしもの悲しげに、コヴァクスとソシエタスは見つめていた。
危険に飛び込むのだ、よかったと言い切れるものではない。かといって、このまま帰しても結局は不幸な人生しかない。
この世には、そんな選択肢のない境遇に置かれた人もあることを、カトゥカを見てて改めて思い知ったのだった。
ともあれ、話は決まった。
善は急げで五人は旧ヴーゴスネア目指し南西の方角へと駆けた。
「しばしの別れだ」
コヴァクスは切なそうに山野にささやき。ニコレットはふるさとを思い出していた。
秋深まり冬迫り、山野の木々は常緑樹を押しのけるようにして紅く染まりつつあった。やがて木の葉も落ちつくした裸木の上に、分厚い雪が覆って、雪化粧の銀世界を織り成すようになる。
そんな少し先の冬の景色を脳裏に描きつつ、頭上の太陽に見守られながら、五人はオンガルリの山野に対し、しばしの別れ、とつぶやきあっていた。
まだ短い人生とはいえ、思い出のいっぱいつまった故国の山野を目にするのは、これが最後になるかもしれずとも。
しばしの別れであった。

さてカンニバルカ。

オンガルリに急転、激変をもたらしたこの容貌魁偉な男は王の軍勢をまるで我が軍勢のように従えて、王都ルカベストに帰還したものだから。

その混乱は容易に想像できた。

国防の要ドラゴン騎士団は実は反逆者だった。と、王はこれを討伐したはいいが。いや実はそうではなく、あれは下心あったイカンシのでっちあげだったという新事実が都を駆け巡った。これだけでも混乱ものなのに、さらに、イカンシは軍勢を従えて帰還したカンニバルカという謎の男によって討たれ。

王といえば己の器量を思い知って、あとのことはすべてカンニバルカにまかせて、物好きを引き連れドラグセルクセスへ首の押し売りにいったという。

マーヴァーリュ教会のルドカーンもさすがにこの急転ぶりには目が回る思いだった。

ドラゴン騎士団の捕虜からことの次第を聞いたカンニバルカが、教会に赴きルドカーンに面会を求めた。

その容貌魁偉さに驚きつつ、只者ではないことも見抜き、ルドカーンは覚悟を決めてカンニバルカと会ったが。

「餓鬼どもはしぶとく逃げた。死者の葬儀を頼む。また、以前のまま、民に安らぎを与えよ」

と、まるで王のように命じながらも、その一言だけで終わったので拍子抜けする思いでもあった。

が、運ばれてきたドラヴリフトの変わり果てた姿には、さすがに涙はこらえられず。妻エルゼヴァスと同じ墓所に手厚く弔うとともに、コヴァクスとニコレットの無事を、弟子のクネクトヴァの活躍を祈らずにはいられなかった。

イカンシは、これもやはり手厚く弔った。奸臣であったとはいえ、死者に鞭打つは人のすることではないと。

オンガルリ王国の運命の歯車は大きく動いていた。
女王ヴァハルラは、カンニバルカと会い、事の次第を打ち明けられると卒倒し、侍従たちは大慌て。
無理もないことであった。
王のことはもちろん、カンニバルカはドラゴン騎士団なきオンガルリ王国の無力さを説き、神美帝ドラグセルクセスに臣従を誓う使者を出すように言ったのだから。
「もはやこれより他に道はありませんぞ」
と、カンニバルカは確信をもって言った。さらに、
「かつてのドラヴリフト卿の所領を所望したい」
とまで、ぬけぬけと言った。
どうにか気を取り直した女王は、完全に心を挫かれ。
「王にすべてを託されているのなら、お好きなように」
と投げやりなことを言って、奥へ引っ込んでしまった。
早速カンニバルカは王宮を取り仕切り、タールコへ使者を派遣し。自らは、文官につくらせた任命書を片手に、かつてのドラヴリフトの領地である、ヴァラトノに向かった。
ヴァラトノはルカベストよりおよそ百キロの西南方向にある地域で、ヴァラトノ湖という大きい湖を擁して風光明媚な、漁業の盛んな地域であった。
ヴァラトノには、湖は人にすべてを与える、という箴言があり。人々は湖とともに生きてきた。
ドラヴリフトはこの地を治める貴族であり、私兵を持つことを許されこれを訓練し、ドラゴン騎士団を結成した。
ここにマジャックマジルというドラヴリフト配下の将校が代官として、少数の留守居役の兵士とともにヴァラトノを治めていた。無論彼はドラゴン騎士団の団員であり、代官を任せるだけあり、良識と勇敢さを兼ね備えた初老の人物だった。
余談ながら、マジャックマジルは、珍しい名前であった。
というのも、オンガルリ王国は建前こそ西の大帝国のもとの属州

であったが、そこに住む人間ははるか東方より来たりて土着した遊牧民族、マジャクマジール族とする言い伝えがあった。

土着といっても、現地人を征服しての侵略であったかもしれないが……。

ともあれオンガルリ人は民族的にはマジャクマジール族を称しており、このドラヴリフトの代官は民族名をもとにした名前をつけられていた。

といっても、それから長い年月が経ち、ニコレットの瞳がしめすように異民族との混血も多々あり純血が残っていることはまずないだろうが。

オンガルリ王国を祖国とする者は、マジャクマジール族を称するのであった。

小さく質素ながら、小奇麗な湖畔の館が、行政庁舎をつかさどり。またそこはドラヴリフトの棲家であった。

その館にて、マジャックマジルはカンニバルカがヴァラトノに来て、任命書を突き出すのを見て。

「ついにこの時が来たか」

とため息をつき、女王と同様、

「お好きなように」

と言った。

ドラゴン騎士団の壊滅は、すでに聞き及んでいた。その時点で、自分の人生も終わったと覚悟を決めたが。

「じいさん、あきらめるのは早い。小龍公と小龍公女は、まだ死んでおらん」

とカンニバルカは何を思ってなのかそういった。

小龍公と小龍公女はまだ死なずとはいえ、死なずだけでは気休めにもならないと、憮然としたが。

「お前さん、付き合いが長いのに、ふたりを信じておらんのか」

などと言うものだから、開いた口がふさがらなかった。

この男、何を考えているのやら、皆目見当がつかぬ。

そのとらえどころのなさに、マジャックマジルは当惑し、歴戦の勇士らしからず怖さまでおぼえた。

「オレは、小龍公と小龍公女には、けっこう期待しておる。何かをしでかすかもしれぬ、と楽しみにしている」

人の気も知らずのん気に笑うカンニバルカは、マジャックマジルの肩をぽんぽん気安くたたき。

「その何かが出るまで、ここで厄介になる。じいさんには、是非とも統治の仕事を手伝ってもらいたい。頼んだぞ」

と言って。

マジャックマジルはまさに夢の中にいるような心地で、地元にいながら、心の方は、知らない土地を彷徨っているようだった。

いや、それはオンガルリ王国の人民すべてが、そうであったかもしれなかった。

短い間に、王が、ドラゴン騎士団が、まるで悪魔に連れ去られたように消え去り。入れ違いに得体の知れぬ男があらわれて、王国を我が物顔で闊歩する。

そんなことは、三百年以上続くオンガルリの歴史はじまって以来はじめてのことで。その歴史は、もうすぐ閉ざされようとしている。

我が道をゆくカンニバルカはやはりというか、人々の心が彷徨うのを横目に、館のベッドの上でさっそくいびきをかいていた。

第四章　彷徨　？

国境を越えると、そこは戦場だった。
幸いに追っ手と遭遇することなく、国境の山を越えてヴーゴスネアにたどりついた一行を待ち受けていたのは、荒廃した戦場だった。

ある村落は家屋ことごとく火を放たれたか、むき出しにされた柱は黒こげになり、また黒こげの柱が何本も横たわり戦乱で命を落とした人々の、多数のむくろが横たわる悲痛極まりない光景を、容赦なく一行の瞳に投げかけた。
まさに死の世界さらけ出す廃墟であった。
だが山野の景色は人のおこないなどかまわずに、冬支度と葉を紅に染めてゆき。川は淡々と流れ。紅に焼ける夕陽は山々に沈んでゆこうとする。

クネクトヴァとカトゥカは、生まれて初めて見る悲惨な光景にひどく心をいため。言葉を発することさえ不自由する有様であった。
ここでは、どのような戦争が繰り広げられたのであろう。
オンガルリでは、ドラゴン騎士団がよく守り、こういった集落を巻き込んだ戦争はほとんどなく。常に人の住まぬ高原などでおこなわれるのが常であっただけに、コヴァクスとニコレット、ソシエタスの衝撃も小さからぬものがあった。
「ひどい」
と一言、ニコレットは痛ましげにつぶやいた。
「誰だ」
という声がした。
声の方を向けば、村落の生き残りであろうか、二、三十人ほどの人々が姿をあらわした。戦争から逃げ出し、落ち着いた様子なのをみて、もどってきたようだ。
「……」

我らはオンガルリ王国のドラゴン騎士団の者たちだと、コヴァクスは名乗ろうとしたが、人々の凍りついたと思わせるほど冷たい瞳の光に射られて、言葉が出なかった。

「そうか、お前ら略奪に来たんだな」

と一人言って石を拾うと、また一人一人と石を拾い、

「出ていけ！　汚らわしい盗賊ども」

と口汚くののしりながら、石を投げつける。相手が五人しかおらず、また戦争によりすべてを奪われた怨みを、一行にぶちまけようとする。

「ちがう、我らは……」

と言おうとしても彼らは聞かず、怒りのまま投石し、中には鍬をかかげて飛び掛る者まであった。

その気になれば造作もなく勝てる相手だが、斬ることはできず、馬をけしかけその場から逃げ出すしかなかった。

人々は怒声を上げて追いかけてくるが、馬脚にはかなわず。しばらくして、声は消え、追ってこなくなった。

オンガルリでは考えられないことであった。バゾイィーは戦争がないときは、国内をよく治め、人民の生活に気を配っていた。だから盗賊のたぐいは出ず、騎士たちはタールコとの戦いに専念できた。

また国境を越えてくるヴーゴスネアからの難民も受け入れ保護もした。

ドラヴリフトが、バゾイィーに、内政に専念せよと助言するのも、根拠なきことではなかったのだ。

冬も近づく中、陽も落ちれば途端に空気は冷たくなり。闇が世を覆う。

一行やむなく野宿をする。

旅立ってから屋根のあるところで寝ることなく、寒さを堪え身を寄せ合って野で夜をすごしてきた。

混沌の地に希望を見つけ出そうと思った。

困難なのは百も承知であったが。いざとなれば、そこにただよう

絶望に飲み込まれそうだった。
オンガルリではドラゴン騎士団がよく守り、人の住む集落を巻き込まずに戦争をしてきただけに。
戦場とは、戦争をしている真っ只中のことばかりをいうのではなく、戦争という嵐が竜巻が通り過ぎて傷ついた地も含まれることを知った。
冷気に当てられながらの旅は続く。その中で幸いであったのは、南へくだるにつれて比較的冷気がやわらぎ、過ごしやすいことだった。それでも、山から吹き降ろす風は冷たく肌を裂くようで、やはり寒いことにはかわらない。
かといって、帰る場所もなく。
進むしかなかった。
戦場の中を。
何度悲惨な光景を目にしただろうか。
彼らはドラヴリフトの遺志を受け継ぎ、新生ドラゴン騎士団を結成しオンガルリに秩序を取り戻すことが目的だった。その目的は、戦場の悲惨な光景を目の当たりにして、形を変えつつあった。

「ゆくぞ！」
コヴァクスは叫んだ。
それまで、戦いそのものにぶち当たることはなかったが。ついに眼前で刃閃き血煙あがる戦いに出くわした。
それは彼らにとって、異様な光景であった。
正規軍と思えぬ貧相な軍装をしながら、目は餓えた狼のようにぎらつた集団が、老人子供をかかえ、戦える者の少ない一団を襲っていた。
それは戦いと言えるものではなく、一方的な殺戮だった。
幼い子供が斬られて、悲痛な声を上げて絶命した。一方で、相手を斬るより抱えている荷物を奪い取ることに血眼になる者がいた。
それは盗賊が難民を襲っているところであった。

老人や子供まで手にかけられることを見たコヴァクスは、電光石火、怒りに燃えて剣をかかげて馬を飛ばした。それに、ソシエタスにカトゥカを預けたニコレットも続く。

「なんだてめえら！」

人の声とも思えぬだみ声の怒号が響き、楽しみの邪魔をされた盗賊はコヴァクスらにも襲い掛かった。クネクトヴァは短剣を握りしめつつ、カトゥカとともにソシエタスにしがみつく。

コヴァクスとニコレット駆け抜け、剣光一閃するごとに、盗賊はたおれゆく。それはあまりにもあっけなく、手ごたえなく、その弱さにかえって驚くくらいだ。

が、数は向こうが上。およそ三十人は越えるだろうか。それを相手に戦うのはコヴァクスとニコレット、ソシエタスを含めてもわずか七人程度だった。

戦える者は剣や槍を握りしめ、必死に応戦するが、いかんせん数の不利があり、一人たおれ、また一人たおれる。

「ガジェンさん！」

と女が叫んだ。たったひとり褐色の肌をし、長い黒髪を振り乱して右手で小斧を振るい左手で盾をもち盗賊の攻めを防いでいた。

たおれた男は馴染みだったのだろう、女は怒りの声をあげてめちゃめちゃに小斧を振りまくった。それで二人ほどたおしたが、

「このアマ！」

と怒鳴りながら、敵は次から次へと襲いかかってきて、一瞬の隙をつかれ、後ろから羽交い絞めにされる。

しまった、と思う間もなく、剣が振りかざされたとき。突如あらわれた騎士がまたたく間に女を囲む盗賊を斬り伏せ、間一髪で命を取り留めた。

（誰だろう）

と思ったが、今はゆっくり考える暇はなく。戦列にくわわりなおし、小斧を振った。

「きさまが大将か！」

コヴァクスはただ一人馬に乗る大将らしき盗賊に向かって駆けた。他の雑魚はニコレットが討ち果たしてゆく。ソシエタスもカトゥカとクネクトヴァを守りながら善戦し、その甲斐あって誰も近づかない。

「ち、ちきしょうめ」

大将らしき男は気迫みなぎるコヴァクスに恐れをなしてうめき、

「おぼえていやがれ！」

と捨て台詞を吐いて、我先に逃げ出す。慌てた雑魚どもも、奪い取った物を捨てながら一斉に逃げ出した。

それを追いかけようとしたコヴァクスであったが、

「お兄さま、それよりも襲われた人たちを！」

とニコレットが呼び止めるので、「ちぇ」と舌打ちしつつ、馬を返して人々のもとに戻った。

勝った。しかし、そこに嬉しさはなく、悲しみがあった。

死んだ子どもを抱きしめ、号泣する母親をはじめ。盗賊に殺された家族や友人のなきがらにすがり嗚咽する人々の姿を目にして、なんと言ってよいのかわからない。

馬を降りたものの、コヴァクスとニコレットは手綱を持ったまま立ちすくむ。

勝っても喜べないなんて、初めてのことだった。ただすこし離れたところで、人々の悲しみを眺める以外、なにもすることがないように思われた。

ソシエタスも下馬し、カトゥカとクネクトヴァをともなってそばまで来たが、これも言葉なく、悲しみを堪えてるようだった。

クネクトヴァは手を合わせて祈りの言葉をつぶやき、亡くなった人々の冥福を祈る。コヴァクスとニコレット、ソシエタスにカトゥカもそれにならい、冥福を祈った。

「あの……」

ひとり声をかけてくるものがあった。褐色の肌の女戦士だった。

「助けてくれて、ありがとう」

と女は言った。言いながら、一行を不審そうに見ていた。
「いや、我らはただ義によってあなたたちをお助けしたまでのこと」
とコヴァクスは言うが、助けてくれる者がいるなど信じられない、という風に、感謝の色薄く女は、難民の人々は一行を眺めている。
(助けられて、嬉しくないのか?)
それほどまでに、戦争で傷ついているのか。と思わざるを得なかった。様々な感情をないまぜにした視線が、一行に突き刺さり。決して放そうとしなかった。
それが心苦しい。
女は一旦後ろを振り向き人々を見てから、
「私はバルバロネ。流れ者の傭兵だが、縁あってこの人たちと一緒にいる。あんたたちは?」
と言った。
「オレはオンガルリ王国ドラゴン騎士団、コヴァクス」
「私も同じく、ドラゴン騎士団のニコレット」
「そして私は、おふたりに仕えるソシエタスでござる。この少年と少女はクネクトヴァにカトゥカ、縁あってともに旅をしている」
自己紹介を聞き、バルバロネは呆気にとられた思いで一行を見ていた。オンガルリ王国のドラゴン騎士団といえば、その強さドラゴンのごとしと讃えられるほどのもので、その名は広く伝わっているから、バルバロネも知っていたが。
まさか、という疑いが沸き起こるのも無理はない。コヴァクスにニコレットといえば、小龍公、小龍公女とも称される貴族の貴公子に令嬢ではないか。それがわずかな共とこの戦乱の国に、どうしているのだろうか。
だが、小龍公女ニコレットは色違いの瞳を持つといい。その通り、色違いの瞳の少女騎士が、いま目の前にいてニコレットと名乗った。
剣の腕も確かで、人格もよさそうだ。
が、それだけに、いっそう頭は混乱しそうだった。これが一介の流浪の剣士であれば、問題はなかったのだが。

「ドラゴン騎士団?!」
バルバロネだけでなく、難民の人々すべて、驚き一行を凝視する。
「どうしてドラゴン騎士団がこんなところにいる」
「それは……」
言いづらそうにしていたコヴァクスとニコレットだったが、ソシエタスはやむを得ぬと頷くのを見て、すべてを打ち明けた。
国のために戦いながらも、奸臣イカンシのために反逆者の烙印を押されて王の軍勢に討伐されて壊滅したこと。そこで大龍公ドラヴリフトは命を落としたこと。やむなく国を出て大龍公の遺志を遂げるべく、新生ドラゴン騎士団を結成してオンガルリ王国に秩序を取り戻そうとしていること。
バルバロネをはじめとする難民の人々は、呆然と話を聞いている。
「私たちは、オンガルリ王国に行くつもりだった……」
というバルバロネの言葉を聞き、コヴァクスとニコレットの心はひどく痛んだ。
「そんなことがあったというなら、オンガルリに行っても、意味はないのか」
オンガルリはヴーゴスネアからの難民を受け入れ保護している。この難民の人々も保護を受けるため、オンガルリにゆく途中であったのだが、そんな政変があったとなれば、保護政策もどうなることか。
私欲の強いイカンシが、難民に慈悲をかけるとは考えられない。今ごろは王を操り、オンガルリを自分に都合のよい国に変えていることであろう。
となれば、難民保護政策も、打ち切られるおそれは十分にあった。いや、最悪の場合タールコに攻め落とされるかもしれない。と、コヴァクスらは思っている。
「ちきしょう、終わりだ。何もかも終わりだ!」
と誰かが叫んだ。
「逃げ場などない。結局オレたちは戦争で死ぬしかないんだ!」

男は泣き喚いて、落ち着けという声も無視し、手足をばたつかせ地面を転がりまわっている。

見苦しい姿ではあったが、誰もいさめられなかった。

我が子を殺された女性が、眠る我が子を抱きしめながら、天を仰いで子守唄をうたう。ぼうや、お母さんももうすぐいくからね、と悲しげな歌声は天に向かってそう語っているようだった。

人々に絶望が広がり、それは見えない手で底なし沼に引き摺り落とされているようだ。

さきほど武器を取って戦っていた男たちさえ、絶望に飲み込まれ力なくうつむいている、

バルバロネは肩を震わせ。

「落ち着けみんな！」

と叫んだ。戦いを生業とする傭兵だけに、声には張りがあり、耳とともに心さえも打つほどの威勢があった。そのおかげか、皆バルバロネの方に目をやり、一旦は泣き止む。

「まだ終わったわけじゃない！　オンガルリがだめなら、イヴァンシムの『赤い兵団』を探そう！」

と難民の人々に言う。

難民の人々の絶望ぶりに言葉もなかったコヴァクスらではあったが、赤い兵団がなにかわからないながらも、新たな希望の種であることくらいは察しがついた。

「あんたたちにもお願いしたい。赤い兵団のもとにゆくまで、この人たちを私と一緒に守って欲しい」

バルバロネは相手が高名な貴族でドラゴン騎士団であることなど頭にないように、敬語も一切使わず無遠慮にずけずけと頼みごとをしてくる。

しかしその目は必死だ。

突然のことに、戸惑うコヴァクスとニコレットであったが、バルバロネの眼差しにえもいわれぬ熱気を感じ取り、断れないのをさとっていた。

が、まず赤い兵団がなんなのか知りたい。
「それはいいが、まず赤い兵団のことを教えてほしい」
「ああ、そうだったね。赤い兵団ってのは……」
ヴーゴスネアに戦火広がり、国が七つに分かれて激しく刃を交えて国土は荒廃し、また人心の荒廃も著しく、すさんだ弱肉強食の世界が繰り広げられ盗賊が跋扈する中にあって、戦争の破壊や盗賊から人々を守っている義勇軍のことだという。
頭領はイヴァンシム、副頭領はダラガナといい。ともにヴーゴスネアの軍隊にいた将校であるが、王族や貴族が私欲のために戦争を繰り広げるのに嫌気が差し、私財を投じてどこにも属さない義勇軍を結成し、人々を守るため各地を転戦しているという。
赤い兵団は、当初名などなかった義勇軍だが装備一色を赤に統一しており、戦いを重ねるうちに、いつの間にかつけられた名であるという。
赤はヴーゴスネアにおいては勇者の色とされ。誰でも使うことのできない色だった。赤い装備を使えるのは、戦場において戦果を挙げ、認められた者のみに許される色だった。いわば戦士の証だった。
かつては、ヴーゴスネアの赤備えの戦士と呼ばれ、ヴーゴスネアの象徴ともなっていた。
イヴァンシムに副官ダラガナもまた赤備えの戦士であり、功績あって国の重要人物のひとりとなった。
しかし今はその赤備えの勇士たちも国と同じように分裂し、刃を交える有様だ。
そんな中で自分で結成した義勇軍に赤い装備を使わせるのは、ヴーゴスネアの戦士であるという誇りからだろう。
イヴァンシムにとって戦うとは、人民を破壊から守ることであった。
「赤備えのイヴァンシム殿でござるな。ご尊名はうかがっている。どの国にも、義の人はあるものですな」
ソシエタスは感心しながら言う。コヴァクスとニコレットも、隣

国の功労者の名を知らぬではない。たしか、戦争で敵に勝つよりも、窮地に陥った味方を救うことで武勲を立てた武人である。

「それなら願ってもないことだ。オレたちもイヴァンシム殿のもとに行こう」

とコヴァクスは乗り気になった。他も依存はない。

だがバルバロネは心配そうだった。

「だが、一箇所にとどまらず各地を転戦しているから、いつ会えるかわからない。だからこそ、あんたたちが頼りなんだが」

「なるほど……。だがわかった。イヴァンシム殿と出会えるまで、この人たちを守ろう」

戦いには大義がいる。

ヴーゴスネアを彷徨い行き場を見失いかけていた一行だったが、弱者を守り義の人と出会うという大義、目的を得て、心がいくらか潤いと熱気をおぼえたようだった。

「ありがとう。恩に着るよ」

端正にして勇敢そうな顔を明るくし、バルバロネはよほど嬉しくて、みんなの手を握って礼を言った。

かくして、五人のドラゴン騎士団はバルバロネの守る難民とともに、イヴァンシムの赤い兵団を求めて、戦乱の地を旅することとなったのであった。

ヴーゴスネア。

オンガルリ王国の南西に位置する国であり、南方に海を臨む。南方とはいえ、海岸線は南東方向に伸び。国土もそれに沿って南東方向に伸びている。

さらに南へ下れば、都市国家＝ポリスが群れをなすエラシアにたどりつき、海岸線はエラシア南部をなぞって北上したのち、一旦南下して、西に向かっている。

ヴーゴスネアの気候はオンガルリに比べて変化に富み、南部北部ともに四季はあるが、北部の冬は厳しく南部は穏やか。逆に南部は

夏暑く北部はゆるやか。
とくに海に面した南部はオンガルリよりはるかに過ごしやすいと旅人はささやく。
オンガルリ同様、かつての西の大帝国の西端の属州であるが。過ごしやすい気候とあいまって、人の行き来も盛ん。それは、川と川が交わるようにして、大陸の東西文明が融合することを意味した。
だがそれは、興亡の多さも意味した。
国境定まることは十年と続くことまれで。
西の大帝国が滅びてからというもの、さまざまな民族がさまざまな方角から流れては交わり合い渦巻き合い、土着する者、新天地を求め旅立つ者をと振り分けて。その流動は今もなお続いている。
それらの民をまとめ、ヴーゴスネアを建国したのがレスサス王であった。
オンガルリ歴で見れば二百八十九年、二十七年前のこと。
統一王と称されるレスサスは善政を布き、国の特徴を生かし様々な国の出身者や民族の人民を受け入れ、才能さえあれば王宮に仕えさせもした。
また土地を拓きさまざまな産業を興し経済や「分け隔てない」文化興進にも力を入れ。またヴーゴスネアの各都市を国際都市とし、諸外国との貿易も盛んにおこない。
地域によって多少の格差はあれど、国は比較的豊かであった。
無論軍事力の維持もおこたらず。これもまた出身国や民族の別なく採用した才能溢れる軍官の率いる強力な軍団を擁していた。
タールコはドラグセルクセスの先代の王に当たるアンドレイオスの時代に、幾度となくヴーゴスネアを攻めたが、レスサス率いる多民族融合軍により撤退を余儀なくされ。以後は敵対しながらも、国境の警備を強化し隙をうかがうことに専念し。
そのおかげでヴーゴスネアは平和を享受していた。
オンガルリ歴で見れば二百九十六年の、二十年前までは……。
ちょうどコヴァクスもその年に生まれた。その年に、レスサス王

は死去。これを機に、王宮内での権力闘争が激化し、内乱が起こった。

それまで抑えられていた、王宮内でうごめく魑魅魍魎が顕在化し、人々を権力欲に駆り立てて。

われこそ正当なる後継者と、まっさきに乱を起こしたレスサスの三男トレイヴィンは、以前から器量劣ると批判し続けていた長男のスウボラと次男のエムアルーニを攻め殺し。

その仇討ちとの大義名分でスウボラ派とエムアルーニ派の貴族たちは挙兵しトレイヴィンと激しく刃を交えたが、この両派は手を組むどころか互いを邪魔者扱いし、三つ巴の戦乱を巻き起こし、戦火を国土に広げた。

その混乱に、あざとい者が黙っているわけもなく。一番南東端に位置するソケドキアの貴族、フィロウリョウはすかさず独立し、ソケドキア王国を建て自身は王位についた。

これをきっかけにして、各地方の貴族は続々と独立し王国を立て、ついには国は七つに分裂し。統一の歴史に幕を閉じた。

またレスサスが統一王と称される根拠であり、苦心してつくりあげた最高傑作である、民族融合策も、無に帰し。

一旦まとめられた諸民族は七つの国に別れ住むようになり、互いに牽制するようになった。

それぞれの民族は、自分たちを大事にしてくれる王につく。諸王もまた、自分の出身の部族や自分を支持する部族を大事にし権力闘争の道具とし、敵対する部族には容赦ない制裁を加えた。

人の心は不思議なもの。自由と平等を求める一方で、差異も求めた。

それは同じ人の心から発するものなのに、外にある、言葉や習慣の違い、肌や髪、瞳の色の違い、信じる神の違いのせいにしながら。

皆と同じように人間として生きることを望みながら、他者は人間とみなさず。皆と同じように人間らしい生き方をもとめ、今日もまた、他者をふみつけにする……。

それが一番楽に、己の人間性を自覚できる生き方であるからだという。

第四章　彷徨　？

形見のために髪の毛の束や爪を切り取り、死者の埋葬をすませ、神弟子であるクネクトヴァが冥福を祈る神の言葉をたむけて。

五人のドラゴン騎士団を加えたバルバロネの守る難民の一行は山野を踏みしめ旅を続けた。

難民は二十人おり、男は三人だけで、女子どもは十七人いる。最初はもっといたのだが、戦乱や盗賊との戦いで、その人数は減る一方であった。

ことに男は、戦争にとられたりしたこともあったためなおさらだった。

破れ目のある幌をかけた三台の粗末な馬曳き車に、老女と女性、子どもが分乗し、男とバルバロネは武器を携えて徒歩でゆく。

いざという時に備え、コヴァクスは騎乗で先頭に立ち、右後ろにニコレット、左後ろにソシエタスがつく。

クネクトヴァとカトゥカは馬車に乗り、子どもたちの面倒を見ていた。

戦えるものは、七人。先の戦いで三人が死んだが、新たに三人くわわったので、数字的にはおあいこ、どころか、ゆえありとはいえ勇名轟くドラゴン騎士団が守ってくれているとなれば、これほど心強いことはない。

最初こそ緊張に震えていた人々も、日が経つごとに表情が和らいでくる。

ことにドラゴン騎士団の一行は、破れている幌とはいえ夜休むときに久々に屋根の下で寝ることができ、また毛布も借りられて、まこと久しぶりとなる安眠を得ることが出来た。

幸い盗賊や戦争に遭遇することもなく、旅が続けられて。このまま赤い兵団と出会えれば、と希望も抱きはしたが。叶えられぬものであるのも、また希望。

思わぬところで足止めを食うこととなった。
それまでなるべく無人の野を選んでいたが、やはり馬曳き車が三台もあると道を選ぶ贅沢は出来ず、やむなく切り開かれた道を通らねばならなぬときもあったが。
その道を通れば、集落にたどり着く。集落には人がいる。
強そうな四名の戦士がいる難民を見て、集落の人々は、その周囲に群がってくる。人が群がれば、道をふさがれ進むに進めない。
何事か、とコヴァクスらは警戒したが。
杖をつき頭の白い、集落の長らしき老人が、
「どうか我らも一緒に連れて行ってくだされ」
と懇願する。
「そう言われても……」
その集落も、戦乱の傷痕深く、元の姿をとどめている家屋はなく、新たに建てられたと見られる墓碑が多数見受けられた。
集落といっても、そこに住む人々は古くから住んでいるわけではなく出身はばらばらで、戦争で難民となって荒廃したふるさとを捨てて、新天地を求めているうちにこの集落にひとまず落ち着いたようで。コヴァクスらが、その新天地に導いてくれると信じているようであった。
自分たちはイヴァンシム率いる義勇軍、赤い兵団を求めて、先行きの見えない旅をしているのだ、と説明したが。それならなおさら、連れて行ってくれとすがってくる。
赤い兵団、イヴァンシムの名は、この戦乱の地において絶大な吸引力があるようだし。なにより、コヴァクスにニコレット、ソシエタス、そしてバルバロネといった頼りになりそうな者の姿にもひきつけられるようだった。
そこへきて、ゆえあってドラゴン騎士団の騎士がいるとなると、オンガルリの政変に驚きつつも、
「このような人がいるなら、守ってもらえるかも」
という、淡い希望が濃さを増したようだった。

いたずらに人が増えれば移動が困難になる。かといって、見捨てるのもしのびない。

どうするべきか、とバルバロネと相談した結果。いざというとき、まだ身体が十分に動く男は武器を取って戦うことを条件に、旅に加えることをゆるした。

人々は神が降臨したかのように喜び、仕度を整えて、難民の一行に加わる。そこで総数は六十人を越え、その中で戦える者はようやく二桁の十二人になった。といっても、もとは素朴な農民やきこりであるため、武器らしい武器はなく、斧や鍬といった農耕具を代用して、いざというときにこれを得物とする粗末さであったが。

馬曳き車も増えて、難民はにわかに賑やかさを増した。

話せる人、苦しみを共有できる人、そして互いに力を合わせられる人が出来ることで、心にうずまく絶望感がいくらかやわらぎ。

無事に赤い兵団に合えるといいね、と希望を口にしだしてきた。

仕度するうち、日も暮れた。

その晩は休んで、翌日陽が昇ってから出発することになった。一行は、家で寝れると大喜びであった。

集落の人々は、

「もう皆ボロ家ですが……」

と恥らうも、贅沢は言ってられない。なにより、もっと悪い環境の中で旅をしていたのだ。家屋の中で寝られることほどの幸福があろうか。一行は感謝することしきりだった。

食事は粗末なもので。乾いたパンのかけらに豆、干し肉数切れだったが。足らぬ分は、希望でおぎなった。

コヴァクスらは空いていた一軒家をあてがわれて、謝意を厚くあらわし喜んでくつろいだ。が、ランプが灯す部屋の中で顔を影にうずめるように、ソシエタスは浮かぬ顔をしていた。

使命感に燃えるコヴァクスとニコレット、クネクトヴァにカトゥカ、バルバロネは、どうしたのだろう、と浮かぬ顔をするわけを聞いてみれば。

「いや、人が増えれば移動が難しくなります。いざというとき、我らとバルバロネ殿の主だった四人以外は戦う訓練も受けておりませぬ。それで、どこまで守りきれることか」
「なんだい、しけたことを言うじゃないか」
とバルバロネは頬をぷっと膨らます。コヴァクスにニコレットも、自分が懸命に戦えば守れぬこともない、と言う。
だが、ソシエタスは首を横に振った。
「なにより、どこにゆけば赤い兵団に出会えるのか。見当がおつきか？　この広いヴーゴスネアで、弱い者たちを守りながら、風に漂う一羽の鳥を見つけ出すことがいかに難しいことか」
と、かなり手厳しいことを言った。
言われて、想像力をはたらかせて、一同は黙り込んだ。
「じゃ、じゃあソシエタスさんはどうしてもっと早くそれを言わないの。今さら言われても、どう難民の人たちに説明するの？」
カトゥカは反論する。それに対し頭をかきながら、
「いやあ、皆さんの嬉しそうな顔を見ていたらつい言いそびれてしまいまして……」
面目なさそうにこたえるソシエタス。コヴァクスは腕を組んでうーんとうなり考え込む。
「なら、ここにとどまって赤い兵団を待つというの？」
とニコレットは言った。
いつ来るとも知れぬ、風に漂う一羽の鳥を待つのもまた非現実的だ。
皆から責められている視線を受けて、ソシエタス非常に気まずく、頭をかきながら、急いで考えをめぐらす。
「まあ、その方が一番安全かと」
「その間に食いもんはどうするんだ。戦争と盗賊のせいで食いもん獲られちまって、畑も荒れてなんにも採れなくなっちまったってのに」
「その間は、狩りをするなどして、しのがねばなりますまい」

「狩り？！　鹿や猪だって戦争だの盗賊だののせいで追い立てられて近くにいるって保証もないのに、悠長なことを言うねあんた」
　噛み付くバルバロネにソシエタスはやや焦ったが、そこはドラゴン騎士団の騎士であった。
「我々が一番大事にせねばならないのは、人々の安全です。勇に逸りいたずらに冒険をしては、犠牲を免れますまい。まかり間違っても、尊い犠牲などという言葉で済ますわけにはいかぬのです。おわかりくだされ」
　と踏ん張る。バルバロネ、舌打ちし顔をそらす。確かに一番大事なのは、安全だ。犠牲はやむなしと下手な旅を人々にさせるのも、これまたむごいことだ。
「とどまるのはいいとして、赤い兵団をどうするか、だな。赤い兵団がこの近くに来てくれれば問題はないだろう」
「いい考えがあるのかい。小龍公さんよ」
　ソシエタスへの怒りをコヴァクスに向けなおすバルバロネ。ニコレットは苦笑し、クネクトヴァとカトゥカはちょっと、怖がる。
　こいつ、無礼だな、と思いつつそれを抑えて、
「いや、今はないが」
「じゃ明日になれば出るってのかい」
「そうだな、出るかもしれない」
　コヴァクスも勝ち気なだけに、バルバロネに一歩も引かない。気がつけば、ふたり視線を交わす間には、火花が散っているようで。空気はにわかに緊張感を帯びる。
　知らず口元を引き締めたクネクトヴァであったが、今までの疲れがもよおす、内からにじみ出る睡魔に口をこじ開けられて。
「ふわあ」
　と大あくびをしてしまい。はっとして、気まずそうに手で口を覆う。
　緊張でかたまりつつあった空気も、クネクトヴァのあくびに吹き飛ばされてか、途端にゆるみ、バルバロネは、

「ふん、やってられないね」
と床に転がり不貞寝を決め込んだ。
他にも、互いに顔を見合わせて苦笑いをし、とりあえず今は疲れを癒すため寝ることにした。
部屋を灯すランプの火が消されて部屋は真っ暗になり、それぞれ得物をかかえながら毛布にくるまり、眠りについた。
剣を抱きしめ、頭ごとすっぽり毛布で覆って目を閉じたニコレットは、はっと目を見開き耳をそばだてたが、
「気のせいだったかしら」
と、ふたたび目を閉じた。

もしこの中に千里眼を持つ者がいれば、得体の知れぬ一団が牙から血をしたたらせる肉食獣のように獲物を求めて、闇に紛れて集落をさまよい歩いていることに気付いただろう。
「オンガルリ王国のドラゴン騎士団と、確かに言ったな」
「左様。小龍公に小龍公女と」
「なぜこんな辺鄙な集落で難民とともにいるのだ」
「オンガルリになにがあったのだ」
オンガルリの政変を彼らは知らないようで、彼らもまた千里眼ではないようだ。とはいえ、闇夜の中光る目は、氷を瞳とするかはたまた冬の月を瞳にするかのように冷たく光る。
「グニスッレーよ、そなたはどう思う」
「さあ、わからん。オナリハトク、おぬしは？」
「わかっておれば、すでに応えておるわ、アンダルゾンよ」
「言っておくが、このブラモストケもわからぬ」
「ふん、えらそうに言うことかしら。あなたはいつも一言多いわね」
「おお、それはオレに対する挑戦かな、アッリムラックよ」
「お、やるのかやるのか。面白そうだなあ」
茶化す声のあとに、氷がひび割れるような緊張が走る。闇夜が揺らぐ。

「よせ、我らには役目がある。無用ないさかいは、グニスッレーが許さん。ルクトーヤンよ、貴様も余計なことを言うな」
「へーいへい」
気の抜けた返事がするが。女はおさまらない。
「ふふ、その役目が果たせなくて、八つ当たりに罪なき者を手にかけようとしているのは、どこのどちらさまかしら」
肌をなぞる冷笑が漏れる。だが、グニスッレーと名乗った声は無言。無言が無言を呼び、重い沈黙がのしかかる。
「わ、わかったわよ。言うことを聞けばいいんでしょ。はいはい、聞きます聞きます」
アッリムラックと名乗った女の声は、何かが肩にのしかかったような気だるそうな声で、グニスッレーにしぶしぶ服従を誓った。
「それでよい。ブラモストケ、お前もつまらぬ挑発に乗らず、黙っていろ」
「……」
ブラモストケの声は無言で、頭を縦に動かし空気を揺らした。
「それで、どうするんだ。こんな辺鄙な集落まで来たが、得るものはなし。と思ったが、思わぬ魚が網に迷い込んでいる。このまま放すのか、それとも食うか？」
「それよ。オレもまさかオンガルリのドラゴン騎士団など目に見、耳に聞こうとは思わなんだでな」
「小龍公女は、たしかにヘテロクロミアであった」
「でも、にせものだよ」
ルクトーヤンの声は軽く言い、さらに声を弾ませて続ける。
「オレたちの役目は、敵の領地を荒らして混乱させることと、あいつをしとめること。命令遂行に頑張ってるんだからよ、ご主人さまも文句言わねえよ」
「だが、もしあれがまことドラゴン騎士団の小龍公に小龍公女で、殺した後オンガルリといさかいが起これば」
「知らねえよ、ブラモストケの臆病もんが」

それから、はっとして沈黙が流れる。
「やるか」
グニスッレーの声が響いた。闇に波紋が広がるように揺れた。
「なぜドラゴン騎士団の小龍公と小龍公女がいるのか。オレにもわからぬ。本物か偽者かもな。だがいずれにせよ、我らは誰一人として逃がさぬが信条。誰であれ、我らに狙われたのが運の尽きよ」
「ならば、いまから」
「いや、ただ闇夜に紛れて暗殺ばかりするのも面白みに欠ける。たまには、太陽の下で堂々と渡り合って敵を殺したいものだ」
闇に紛れようとも、そこはやはり人間であるのか、相手の素性から欲が出たのか。吐き出す息凍りつきそうな冷たさをたたえつつも、湿り気も帯びているようだった。
それから合意したか、闇揺らす気配は消えた。

闇は払われ、暁がのぼる。
人々は、心にも暁のぼる気持ちで朝を迎えた。
赤い兵団への期待を胸いっぱいにみなぎらせて、皆出発の仕度をしている。それを、気まずそうなソシエタスによって、手を止めねばならなかった。
「じゃあ、ここにいろってことですか！」
と誰かが言った。ソシエタスは首を縦に振らざるを得なかった。
理由は、昨夜語った通りのことだった。朝になって、この話をどうするか、と話し合った結果、言いだしっぺのソシエタスが、責任をもって皆に説明することになった。
案の定、人々の顔はにわかに曇った。
頼もしい人に守られて、赤い兵団と出会う旅をするのだ、と夢にまでみたというのに。
人々はいい加減戦争や盗賊によって難民となり荒れ地をさまようのに嫌気が差していただけに、反感も大きい。
「そんなうまいこと言って、結局は怖いんだろう」

という声があがった。ソシエタスは、さにあらず、と思いつつも、苦い顔をして。

「その通りだ」

と言った。

「旅の危険はまぬがれえず。少なからぬ犠牲も出るであろう。まったく犠牲を出さずに守りきれる保証もない。ともすれば全滅もあるかもしれん、わかってくれ」

「ならもっと早く言ってくれよ。昨日あれだけ人を期待させといて、土壇場になってやめたなんで、あんまりじゃないか！」

「それは百も承知。我らももっと早く気がつくべきであった」

人々に詰め寄られ、ソシエタスは閉口し、助けを求めるようにコヴァクスにニコレット、バルバロネに目をやった。が、バルバロネはソシエタスと反対意見なのでそっぽを向いて知らん顔。

コヴァクスとニコレットは互いに目を合わせてやむなしと頷き助け舟を出し、一緒に説得に当たった。

クネクトヴァとカトゥカは、ここは出番じゃないと、黙って見ているだけだった。

「とにかく、旅はとりやめだ！　皆をより安全に守るためなんだ。ただ、知恵を出し合って赤い兵団と出会えるようにするから、それで勘弁してくれ！」

コヴァクスの言葉に、一応人々は静まったものの、まだ納得しきれていないようだった。が、かつて小龍公と呼ばれ人々から憧れと畏敬の念をもって接せられた貴公子なだけに、人々の態度には、心の奥底から屈辱が滲むのはいかんともしがたかった。

いかに小龍公といえど、それはドラゴン騎士団が、大龍公ドラヴリフトの存在があったればこその話で。今は流浪の身にすぎぬことを、嫌でも痛感するのだった。

ニコレットは兄に比べて物事に柔軟に、素直に対応できる。そのおかげで、

「みんな、気持ちはわかるわ。でも、みんなを守るためなの。傷つ

いたあなたたちが、さらに傷つくのを見るのは、私はとても悲しいから……」

詰め寄る人々の前で、色違いの瞳をうるませ美しい金髪を揺らし、ニコレットは旅をやめる一番大きな理由を強調していた。それは、人々を危険から遠ざけるためだ、と。

目を潤ませた少女の言葉には慰撫されてか、人々は落ち着きを取り戻し、

「わかった」

とようやく言ってくれた。

「ありがとう。みんな、ごめんね」

ニコレットはほっとした途端に、目から涙がこぼれ落ちた。慌てて、恥じらいながら涙を拭う小龍公女の姿を見て、

「この方は、そこまで我らのことを……」

と感激する者まであり。この人がいるなら、とすべてを任せる気になった。

雰囲気は一変し、空気はやわらぎ和やかになってゆく。

「涙は女の一番の武器とは、よく言ったものね……」

苦笑しながらバルバロネがささやく。傭兵として生きた彼女には、涙を流すなど考えられない。でも、怒る人々を説得するのも考えられなかった。もしこれが自分なら、短気を起こしていただろう。

無論ニコレットも計算づくで涙を流したのではない。

ともあれ、この場は一段落着いた。と思う間もない、どこからともなく拍手の音が響きだす。

第五章　激突　？

なんだ、とコヴァクスとニコレットは帯剣の柄に手をかけて警戒するも、拍手の音の主は見えなかった。

人々は突然の拍手に驚き、首をきょろきょろさせるが、誰が拍手をしているのか、またはどこからするものかわからず。身を寄せ合って怖がっていた。

「いやあ、いい、いい、いいもん見せてもらった」

と、誰か、黒装束をまとった若い男がひょっこりと家屋の陰から姿をあらわした。この近辺では見ない顔だ。

それに続いて、続々と見慣れぬ顔が現れて、しめて六人の人間。ひとりは女で、みな二十代から三十代の間のようで。皆、男女の別が咄嗟にはつかぬほど、顔立ちのよい、ぞっとするような美貌の持ち主だった。それでいて、目は異様に冷たい。

皆、黒装束を身にまとい、顔つきも暗い。手にはそれぞれが剣を握りしめられているが、腰にぶら下がる鞘も、柄も鍔も、衣装と同じように黒かった。

瞳の色も、髪の毛こそそれぞれが色が違うものの、皆腰まで伸ばした髪を紐で首の後ろでまとめ。なおかつ背中でまた紐でまとめている。その紐の色も黒かった。

「何者だ」

ソシエタスは相手から冷気のような殺気を感じ、咄嗟に剣を抜き放てば、続いてコヴァクスとニコレットも剣を抜き。バルバロネは盾で身をかばいつつ斧を構える。

彼らはどう考えても、まともな者たちではない。それどころか、害を加えようという悪意に満ち満ちている。

人々は六人の姿を見て、驚愕の声をあげてうろたえている。かろうじて、年配の者は落ち着けと言いながらコヴァクスらの後ろに集まるようながし、人々は恐慌をかろうじて抑えてそれに従った。

クネクトヴァとカトゥカもその中にいる。朝起きてから、自分たちに出番はないと思っていたが、本当になさそうだった。
それと入れ違いに、コヴァクスらは六人の前に進み出て、人々を背後にかばう。
その途中で、
「六魔」
と言うのが聞こえた。バルバロネははっとする。
「六魔っていう悪趣味なのは、お前らのことか」
「ふん。人が我らのことをなんと呼ぶかは知らぬが、それはおそらく我らのことであろうな」
と、黒目に黒髪の男が応えた。
「それより」
男は六人の頭領なのか、一歩前に進み出る。
「そこの男と女、お前たち、オンガルリ王国ドラゴン騎士団の小龍公に小龍公女というのは間違いないか」
コヴァクスとニコレットを指差して言う。
なぜ自分たちのことを知っている。と、驚きを隠せない。しかしなめられてはいけない、と平静をよそおい、「そうだ」と一言応えた。
「一つ問う。なぜヴーゴスネアの、こんな辺鄙なところにいるのだ。大龍公ドラヴリフトか、国王バゾイィーより何かの密命を帯びてのことか」
ぞっとするような声だった。が、父と王の名を得体の知れぬ者に軽々しく口に出された怒りと不快感で。
「応える必要はない」
とコヴァクスは強く突っぱねた。
「左様か。なら、いい。これよりお前たちを、抹殺する！」
その唐突さに驚く間もない。六人は剣をひらめかせて一斉に飛び掛ってくる。
戦わねばならぬだろう、とは思っていたが。ここまで問答無用で

来られるとは思わなかった。こっちだって、相手が誰なのか知りたいというのに。

悲鳴が響く。それを包むように剣の音が響く。

四人は人々の壁になり、六人に立ちはだかるも、もとより六人は主だった四人しか狙っていないようで難民の人々を無視し、四人を取り囲む。

「案ずるな。お前たちを殺すまで、他には手を出さぬ」

確かに、難民の人々には手出しをしようとしないが。それをどこまで信用してよいのやら。四人背中合わせなれればよいが、人々を守るためには、四人横に並び壁にならざるをえなかった。

また数も向こうが二人多い。コヴァクスには頭分らしき黒髪の男と、灰色の髪をした男が二人がかりで襲い掛かり、ソシエタスにも、金髪の男と赤毛の男が二人がかりで襲い掛かり。

ニコレットには白髪の女が来て。バルバロネには茶色の髪の男が襲い掛かる、この男は六人の中で一番にやけている。

（こいつら、強い！）

コヴァクスは内心唸った。その剣の威力は、父に稽古をつけられた時とほぼひとしく思えた。それでいて風と同化したかのように自在に舞い、どこに来るのかわからない。それが、二人がかりでだ。

常に相手の動きに気を配り、我が剣を攻めより守りに用いるのが精一杯。ソシエタスも無論のこと、一対一のニコレットとバルバロネも同じようだった。

クネクトヴァは短剣を握りしめ、カトゥカを背中にかばって戦況を見守っているが。それ以上のことは出来なかった。

いざというとき、鍬や斧をもって戦うはずだった男たちも、六魔こと六人の異様な迫力に圧されて身動きままならず、一難民として身を寄せ合って成り行きを見守るしかなかった。

（おのれ！）

ソシエタス相手の剣をかわしながらも、一方的に攻められるをよしとせず、咄嗟に足を振り上げた。とともに、相手の足に当たる。

と見えたがその直前、相手は後ろに飛びのき足は空しく風を切る。
対照的に、コヴァクスは二つの剣に翻弄されてあがくうちに体勢をくずし不覚にも後ろに転びそうになり。その顔面に切っ先二つ迫って、やむなく咄嗟にたおれて地に伏し後ろに転がりながら急ぎ片膝をついて、左手も地に着けながら、右手で剣を握り横に構えて相手をにらみつける。
六魔の黒髪と灰色髪はあざけるように笑って距離をとり、コヴァクスを見下している。
他二人も、仲間に合わせて相手と距離をとり、コヴァクスを見下している。
コヴァクスらは、冷や汗で額を濡らしているというのに。
「ふん。他愛もない。お前らは本当にオンガルリ王国の誇るドラゴン騎士団か？」
「偽者でしょ」
白髪の女がニコレットの目を見つめながら、手で口をおおいあからさまに高笑いする。
「だって、どう考えても騎士だなんて言えない女も一緒にいるし」
指差されて馬鹿にされたバルバロネは、褐色の肌を赤く染めるような怒りをあらわすが、女は意に介さない。
ふと、黒髪の男はカトゥカが持っている長箱に目をやった。
「……」
この少女は、長箱を大事そうにかかえている。何が入っているかまではわからぬが、よほどのものに違いない。
ドラゴン騎士団には、バゾイィー王より下賜された紅の龍牙旗があると聞いたことがある。なら、あの長箱の中には。
「少女よ、その箱には、紅の龍牙旗があろう」
と問えば、カトゥカは怖じ、がたがたと身を震わせ、長箱を持つ手には、さらに力がこめられる。
「図星のようだな」
彼ら彼女らは、まことドラゴン騎士団であった！

事情は知らぬが、一国の重要人物がいる。これだけでも、大ごとというもの。オンガルリで何かがあったのは、間違いない。

そのドラゴン騎士団の小龍公に小龍公女が、異国の地で斃れたとなれば、オンガルリ王国に強い衝撃が走ろう。

（ならば我が王は大変喜ばれよう）

それまで冷徹であった黒髪の男が、にわかに顔をゆがめ、えもいわれぬ笑顔になった。

「お前たちを斃して、紅の龍牙旗をいただこうか。ならば、この血塗れた手と剣も報われようというもの」

男の歪んだ笑顔に、皆背筋が凍りつく思いだった。ここまで美しくも、醜い笑顔があるのだろうか、と。

皆類希な美しさを持ちながら、その目の語る心は、醜さは、千の夜をもって語ろうとも語りつくせぬ濁りをたたえていた。

（こいつら、何者だ）

コヴァクスは六人と対峙しながら、嫌悪感を感じつつ睨み合っている。瞳の奥に、光届かぬ闇が広がって、ひきこまれそうなのを気力を振り絞ってこらえている。

バルバロネは、六魔と言った。ヴーゴスネアでは、多少なりとも噂になっているようだ。オンガルリにもヴーゴスネアの情報は入ってくるが、六魔は聞いたことがない。

そんな暗殺集団でもあるのだろうか。

「誰に殺されたのか知らぬまま死ぬのも、くやしかろう。せめてもの情け、名前くらいは教えてやる。オレの名は、グニスッレー」

と頭分が名乗ると。

「我が名はオナリハトク」

と灰色髪は名乗り。続いて金髪、赤毛、白髪の女、茶色髪の順で、

「我が名はアンダルゾン」

「我が名はブラモストケ」

「私はアッリムラックだ」

「オレはルクトーヤンだ」
と名乗った。
名乗りの声も、声が出るたびに空気が凍てつきそうな冷たさをたたえていた。
「さあもういいだろう。これで地獄の獄卒どもに、誰にやられたのかくらいは告白できる」
グニスッレーは言うや再びオナリハトクとともにコヴァクスに襲い掛かり、ソシエタスにはアンダルゾン、ブラモストケ。ニコレットにはアッリムラック。バルバロネにはルクトーヤンが仕掛ける。
「なめるな！」
最初こそ不覚をとったが、今度こそはとコヴァクスは叫んだ。
激しい剣戟の響きが鳴り響く。
コヴァクスも渾身の力を振り絞って剣を振るう。ふた振りの剣の動きをよく見切り、すかさず隙を見つけて刺突を送り、あるいは横になぐ。
しかし相手もさるもの。コヴァクスの攻めを難なくかわし、もてあそぶように剣先を突きつける。
それは他も同じだった。ことにソシエタスも二人がかりで来られ防戦一方だった。おまけに相手は騎士ではないから、人数に頼ることを恥ともなんとも思わない。
それは猫が鼠をもてあそぶのと、同じことなのかもしれない。
ニコレットもアッリムラックの斬撃をかわすのが精一杯。顔面迫る剣をかろうじてかわしざま、その金色の髪が数本切り払われて宙に舞う。
「ふ、楽に殺しはしないよ。髪の毛を全部切って顔の皮を剥ぎ取って、その目玉をえぐりとってやるんだから」
嘲弄がもれる。アッリムラックの目は冷たく光り。色違いの瞳を射通す。背筋がぞっとする。今までの戦いの中で、こんな冷たい目をした者を相手にするのは初めてだった。
集団対集団の戦争と違い、これは一対一の剣の戦い。思えば、こ

ういった一騎打ちは初めてだった。ニコレットとて剣の腕が未熟というわけではない。だが、大将として軍勢を率いて戦うこととは勝手が違った。

バルバロネもルクトーヤンに苦戦しきりだ。斧よりも盾で剣を防ぐ方が圧倒的に多い。

「うぬっ」

ソシエタスははっと閃き、ニコレットのそばに寄った。ニコレットも意を悟り、ソシエタスと組んで三本の剣を相手取る。

これで一対二から二対三。

「小癪な真似を」

オナリハトクが憎憎しげに言う。どうせ人数で不利。なら無理に一人で我慢せず、誰かと二人で一緒に戦った方がいい。ソシエタスはニコレットの副官として戦っていたので、息はぴったりだった。

その手があったか、とバルバロネもすかさずコヴァクスのそばへ駆ける。

が、こちらは知り合って間もないせいか、動きはちぐはぐのばらばらだった。それでも、コヴァクスにすれば受けて立つ相手が半人減ったのでたいぶ楽ではあったが、バルバロネは相手が半人増えたのでかえってわずらわしかった。

「しくじった」

思わず口走る。コヴァクスは思わず「うるせえ！」と咆える。

「はっははは！　お前ら面白い。すぐに殺すのは惜しい、しばらく遊んでやる」

グニスッレーあからさまな嘲笑。

難民の人々はこのざまに絶望をおぼえる。

「くそったれ！」

大きく振った斧は空しく風を切る。バルバロネはむきになって、さらに斧を滅茶苦茶に振り回す。これでコヴァクスとの息が合うわけがない。

グニスッレー、オナリハトク、ルクトーヤン、にやにや笑いながらかわすばかり。言ったとおりに相手の無様さを楽しんでいた。

ニコレットとソシエタスはアッリムラック、アンダルゾン、ブラモストケを相手にどうにか互角だったが、もう一方の危険な様子に胆を冷やす。

ともすれば二対六なのだ。

「も、もうだめだ」

絶望の声が難民から漏れる。

行くも死、かといって、とどまっても災厄が向こうからやってきて、死。所詮、期待も一夜の夢であったのか。

「へへーへー！　あのアマにくらべりゃあ、てめえらなんざ屁だぜ、まったく！」

ルクトーヤンが悪態をつく。それをグニスッレーが鋭く睨む。

「余計なことを言うな！」

咄嗟に叫ぶグニスッレー。目もわずかにルクトーヤンに向けられている。

コヴァクスはすかさずグニスッレーめがけて刺突を繰り出す。と同時に他の二本はバルバロネが盾で弾く。

しまった、と思う間もない。

反射神経を生かし咄嗟によけたものの、相手の反射神経もさるものだった。

どうにかかわすも、コヴァクスの剣はグニスッレーの右肩をわずかだがかすった。

黒装束の肩の部分が裂け。血が飛び散る。

「くっ！」

思わずうめく。

戦いの最中に視線をわずかでもそらせば、どうしても隙が出来てしまう。ことにそれが咄嗟のことだっただけに、相手に好機を与えること大であった。

場数を踏んでいるだけあって、これしきの傷と物怖じせず、すぐ

に体勢を整えなおすも、屈辱であった。
「もう遊ぶのはやめだ！」
それはまさに悪鬼の形相ともいうべきものだった。
迫る斬撃威力を増し、閃くたびに強い衝撃がコヴァクスとバルバロネに走った。たとえ剣で、盾でふせごうとも、さけようとも、同じ衝撃が身体に走った。
（なんて攻めだ！）
奥歯を食いしばり、やられないようにするしか出来なかった。
心のどこかで、もうだめか、という気持ちが頭をもたげた。
父の遺志を遂げられず、早々に凶刃に果てるか。無念が広がる。
そのときだった。
「おやめなさい」
という声がした。
同時に斬撃がやんだ。剣六振りすべて。
六魔の六人は、すべて声の方を向いていた。
コヴァクスらも声の方を向けば、そこには雪のように白い白装束をまとった女がいた。
不安定な屋根の上に立ちながらも、足は大地を踏みしめるように安定し。太陽を背に、じっと下を見下ろしている。
（いつの間に）
と驚くとともに、その容姿にも見入る。
黒い瞳に長い黒髪は珍しくはないものの。その顔立ちは、あきらかにここにいる誰とも違っていた。
顔の彫りは皆に比べて浅いものの。その顔の線は、肌の白さは、匠の手による陶器のようななめらかさを感じさせ、美しかった。
いやそれ以上に、どこか儚げな面持ちをし、小さな口をつぐんで黙ったままでいると、そのまま風に吹かれて、消えてしまいそうだった。
（誰だろう）
と思うや、女はひらりと跳ぶ。あ、という声が難民の人々から漏

れた。

女は風に乗ったかのように、姿勢を整え。風に遊ぶ木の葉のように宙を舞い、音も埃も立てず、静かに地に舞い降りた。

第五章　激突　？

もの言わず、すずやかにも思える眼差しの黒い瞳を六魔の六人に向けると、静かに言った。

「あなたたちが狙うのは、私でしょう」

目を剥いたグニスッレーが憎憎しげにこたえる。

「おお、そうだとも。我らの狙いはお前だ」

「でも暇つぶしに、人殺しをしてもいいってご主人さまからのお達しだから、お咎めを受けるいわれはねえぜ」

とルクトーヤンはおどけるが、その目は心なしか震えているようだ。

「そうかお前だな。我らのことを、六魔と言いふらしているのだな」

女に人差し指を突きつけるオナリハトク。彼もまた目をやけにいからしている。アンダルゾンもブラモストケも、それまで見せていた余裕はどこへやら。

女の出現から、がらりと様子はさまがわりをしていた。

女は六人の視線をかわすでもなし、目をそらしつつ、相手の言葉を聞き流し。黒い瞳は、足元を見つめて。意識は遠くに飛んでいるようで。

仕掛ければ、簡単に勝てそうだった。

と思ったルクトーヤン、すかさず剣を振るい女に斬りかかる。

「よせ！」

グニスッレーの制止も間に合わず、鋭い斬撃が、女の頭をかち割るかと思われた。しかし、次の瞬間には、剣は女の右手の人差し指と中指にはさまれていた。

いつ手を上げて、剣を指で挟んだのか。誰も動きを見切れなかった。無論ルクトーヤンも。それでいて、張り付いたように剣は指からはなれず動かない。

「な、くそ」

と剣を引き離そうとするが、うんともすんとも動かない。
「剣をはなせ！」
オナリハトクは叫んだが、叫びきらぬうちに女の左手が翻ったかと思うと、その掌がルクトーヤンの顎に打ち付けられ。
白目を剥いて天を仰いだルクトーヤンは、顎を砕かれ、どお、と仰向けにたおれて動かなかった。
（なんだあれは！）
コヴァクスにニコレットらは、唖然となってたおれたルクトーヤンと女を交互に見やった。見たこともない武術、とでもいおうか。
「パンクラチオン、ではない……」
ぽつりとソシエタスはつぶやく。
文明発祥の地といわれるエラシアから、無手で戦う格闘術パンクラチオンも文化文明のひとつとして伝えられ。それは大陸西部に広く流布されている。コヴァクスやニコレットも、ソシエタスも、たしなみはあるが。
女の動きは流麗で、しかも掌で相手を打つ。彼らが知る限り、そのような動きはなかった。
ルクトーヤンは白目を剥いたまま、仰向けにたおれ、動かない。
「おのれ、ロンフェイ……」
我を忘れたように、オナリハトクがつぶやき。グニスッレーがその顔をしたたかにはたいた。
「余計なことを言うな！」
「……」
オナリハトク無言。
グニスッレーは拷問を受けているかのように、顔をゆがめる。なまじ美しい顔立ちをしているだけに、そのゆがみっぷりは醜さをひときわ印象付ける。
ひとり斃され六魔が五魔になった。人数にしても、コヴァクスら四人にロンフェイと呼ばれた女が加われば不利なことこのうえない、と見たか。

「引け！」
と言うや、五人はルクトーヤンのかばねを捨てて駆け出し背中を見せて、逃げ出した。コヴァクスらは追おうとするが、五人の手から光るものが飛んだ。と思うと咄嗟に身を伏せてそれをかわす。それはナイフだった。
ロンフェイと呼ばれた女にもナイフが迫っていたが、彼女は簡単にそれを指で挟みこんでとめた。
その間にも五人は逃げて影もかたちもなくなった。
もの言わず横たわるルクトーヤンのかばねを横目に、コヴァクスにニコレットらは無言で女をながめた。
女も、じっとコヴァクスらを見回している。
見れば見るほど、不思議な女だった。ことにその容姿。
服は手作りのようでいささか砂埃もかぶっているようだが、袖を通して着るというより白い薄布が女の身体の一部のように纏わり着き、その息吹にふれて流れているような軽やかさを感じさせた。
またその顔立ちは彫りも浅くも、大理石の女神像が人間になったのかと思わせるほどに白く滑らかであった。しかしその黒い瞳。何かを瞳の奥に秘めているように、冷たく光っている。
女は指で挟んだナイフを、忌々しそうに地に打ち捨てれば、きっさきは地面を突き刺して立った。
「あ、あなた誰なの……」
おそるおそる、ニコレットがようやく声を絞り出す。女は黒い瞳で相手を見据え、
「ロンフェイ」
とこたえた。
本当は名乗りたくなかったが、ばれてしまったから仕方なくこたえた、という感じだ。
続いてコヴァクスが何か言おうとしたが。
「私は行くわ。縁があればまた会えるでしょう」
と言うや背中を見せて駆け出す。待ってくれ、と咄嗟に呼びかけ

たが、スカートの裾が地面の上で流れているようにゆれ、まるで女を運んでいるように見えた。
いや実際には足で駆けているのだろうが、あまりにも流麗な動きで、宙に浮いているのかと思うほどだった。
そうして皆が驚きの目で見守る中、ロンフェイも姿を消した。それはまるで、風のようだった。

ルクトーヤンのかばねを忌々しそうに集落から離れたところに捨てて、コヴァクスとソシエタスが眉をしかめて帰ってくる。
それからまた、話し合いがはじまった。
あの連中はロンフェイを狙っているようだが、どうしてなのかは無論わからない。
それと、赤い兵団、イヴァンシムをどうやって探すか。
混沌としたヴーゴスネアには安全な場所などなさそうで、とどまっていても災いがやってくることを知った。だからといって、集団でほっつき歩いても、やはり同じように危険だった。
そこで、意を決したコヴァクスとニコレットが、二人で行くと言い出す。
大勢で動くのがまずいなら、少数で動けばいい、と。
最初渋っていたソシエタスは、クネクトヴァ、カトゥカはバルバロネとともに集落に残ることになった。
紅の龍牙旗は、ニコレットが背負ってゆく。イヴァンシムに会ったとき、まことドラゴン騎士団の小龍公に小龍公女であるとの証しのために。
ただ、来てくれるかどうかはわからない。
それでも、何かを動くことでつかめれば、という希望を持って。
留守の間は、ソシエタスやバルバロネが集落を守り、かつ男たちを訓練し有事に備えるようにする。
「とりあえずひと月。ひと月経っても戻らねば、ソシエタスで判断し、なんとかしてくれ」

「小龍公、そのような縁起でもないことを」
「オレだって、帰ってくるつもりさ。だけど、万が一ってことがあるだろう」
「だめ、絶対帰ってきて！」
と言うのはカトゥカだった。置いてけぼりにされるという悲しみを込めて、じっとふたりを見つめていた。
ニコレットは微笑み。
「うん、きっと帰ってくるわ」
とカトゥカの手を握った。クネクトヴァも寂しそうにしているが、
「無事を祈っています」
と言ってくれた。集落の人々も、希望と不安の入り交じった眼差しをしていた。
（オレの命は、オレだけのものではない、ということか）
自分は責任ある人間なのだ。と思うと、おのずと気が引き締まる。そして万一と言わず、必ず帰ってこようという決意が、胸に湧き起こるのであった。
それと、できればロンフェイと再会し、味方に引き入れたいという気持ちもあった。正体がつかめていないものの、悪人ではないのは確かだろう。
（あの哀しいような瞳は）
あれ以来、あの瞳が、なぜか胸に去来し、脳裏に幾度となくひらめく。
「では、ゆくか！」
「はい、お兄さま！」
景気づけにと、元気よく声を出し愛馬を駆ってイヴァンシムを捜し求める旅に出るコヴァクスにニコレット。その背中に、
「生きて帰ってこいよ！」
と言うバルバロネの声が人々の見送る声にまざってぶつけられる。
「コヴァクス！　お前と渡り合って、どっちが強いのか腕試しをしたいからな！」

と皆が驚くことをからから笑ってバルバロネは大きく手を振った。
「おう、帰ってきたら腕試しをしよう！　それまで、あんたも腕磨いておけよ！」
コヴァクスも負けずに返す。苦笑するニコレット。だけど、辛気臭いのよりは、ずっといい。バルバロネが人々を守ってこれたのは、ひとえにその武勇よりも明るさだったのかもしれない。
やがてバルバロネの威勢のよい声も聞こえなくなって、コヴァクスとニコレットは、知らない土地のさらに知らない土地へと、飛び込んでいった。

第五章　激突　？

駆けども駆けども、荒涼とした戦場が続き。流民や盗賊と、戦争と略奪に明け暮れる兵士どもに何度遭遇したことだろう。

それでもコヴァクスとニコレットは、イヴァンシムを捜し求めた。どうにか説き伏せ、集落の人々を保護してもらうために。

行く先々で、人にイヴァンシムの行方を尋ねれば、南方に向かっているという答えを得た。どうも南方に興ったソケドキアのフィロウリョウに呼ばれて、そこに向かっているらしい。

「ソケドキアか……」

コヴァクスはうなった。

コヴァクスらはオンガルリとの国境を接し、ヴーゴスネアから独立したスウボラ派の貴族ポレアスの治めるリジェカ公国から入り、バルバロネや集落の人々と出会った。そこからソケドキアとなれば、旧ヴーゴスネアをまさに北から南へと縦断するかたちになる。

となれば日数もかさむ。が、止むを得ない。コヴァクスとニコレットは急ぎソケドキアに向かうイヴァンシムを追って南へ駆けた。

（でも……）

ニコレットは思案した。イヴァンシムは定まった主を持たず、自力で義勇軍を率いて戦っているのではなかったか。それが、王侯に呼ばれてそれに応じるとは。

やはり、後ろ盾なしで戦い続けるのも限界があるということか。

ヴーゴスネアは七つの国に分かれている。

一番北からポレアス治めるリジェカ公国。下って同じくスウボラ派の貴族コントレ治めるダメド。そこからエムアルーニ派の貴族エーダヴ治めるエスダ。

国土の中央に位置し王都ベラードを擁するヴーゴスネアは、自らを正当なる後継者と自認するトレイヴィンが国王として君臨し。そのすぐ東にトレイヴィン派の貴族アーエイが、タールコを防ぎとめ

ることを条件に自治権を認められて独立し、ユオという国を建てている。

それより南方にあっては、独立独歩でノナブガーオダという人物がアヅーツという国を建てているが、一番南に位置するソケドキアのフィロウリョウに攻められ不利をこうむり、滅亡も近いという。

旅をしながら各国の状況がすこしずつでも耳に入ってくる。この中で一番強そうなのは、ソケドキアのようだと、ふたりは思った。

他国は愚かにも鍔迫り合いに興じては、我が身を削る一方なのに対し。ソケドキアは完全独立独歩。国力は豊かにして兵は強く、国王フィロウリョウの野心は燃え盛って、野望の火は、北へ北へとのぼりとどまることを知らず。

いずれ、古臭い貴族や王侯は根こそぎ倒されるであろう、という評判であった。

旅立って七日目の夜、コヴァクスとニコレットは、着の身着のまま山林にまぎれて野宿をし、身体を休めた。

月は出ず、山も木々もすべて冷たい闇が覆い尽くす。

すぐに起き上がれるように、横にならず。木に背中をもたせかけてすわって、寝た。

翌朝、日の出とともに目覚めて出発。

どこをどう行ったか土地感覚もない。リジェカはとっくに出て、ダメドに入って、抜けるか抜けないか、だろうか。

一日旅をしたら、ヴーゴスネアに入るのか。

「思ったより遠くに来てしまったな」

「ええ。バルバロネさんたち、無事かしら」

旅の間、やはり集落の人々が気にかかる。ソシエタスやバルバロネがよく守ってくれていることは、疑いはしないが。

ともかくも、追いかけ続けるしかない。

しかし、この国はなんと荒れていることだろう。廃墟となった街を、不幸な流民の群れを、どれだけ見たことだろう。できることなら、皆を助けてやりたい。しかし、今の自分たちですぐに助けるこ

とはできなかった。

後ろめたい思いを抱きつつ、逃げるようにして離れてゆくことも一度や二度ではなかった。

で、王の都やそのとりまき貴族のいる街は、別世界のように豊かで平和だった。流民は助けを求めてそこに辿りついても、相手にされず兵馬をもって追い払われる始末。

そのため、怨嗟の声もところどころにささやかれている。

もう二十年も戦争をしているのだ。人々は悲しみを通り越して、麻痺して殺し合いに慣れ、流民がそのまま盗賊になることも多々あり。盗賊同士で獲物の奪い合いをすることもたびたび。

それが勢いをつければ、ちょっとした貴族や豪族となって土地を支配する。

建前上は国が七つといっても、実質はそれ以上に分裂していると見られた。

誰も真剣にこの地の平和を考えていないのか、とコヴァクスとニコレットは怒りすら覚えた。誰しもが己のために剣を振るい欲求の命ずるままに、奪い合っている、と。

「このままだと、タールコが攻め寄せてくる。タールコの兵馬に、軍靴に、踏みしだかれるぞ」

かつてヴーゴスネアもタールコと敵対し戦っていた。神美帝ドラグゼルクセスとて、黙って見ているままではあるまい。

コヴァクスは、旅をしながらこのヴーゴスネアの現状に対して、イヴァンシムを捜し求める以上の悩みをいつの間にかかかえているようだ。それはニコレットも同じだった。

「すこしでも早く、お父さまのご遺言を果たして。オンガルリのみならずヴーゴスネアの秩序を取り戻さなければいけませんわ」

薄い雲にさえぎられながら昇る太陽の、にぶい光を受けながら、ふたりは駒を進める。

丘を登る坂道にさしかかりこれをのぼっていると、屍骸と遭遇した。一体ではない、それから向こうも、幾体も地に横たわっている。

武装しているところを見ると、戦争があったようだ。
ふたりは剣を抜き身構えたが、喚声は聞こえない。戦争はすでに決着がついて終わったようだった。
「これは……。ヴーゴスネアとダメドの兵か」
進むにつれ屍骸の数は多くなってゆく。軍装を見て、コヴァクスはつぶやいた。
（よく巻き込まれずにいけたものね）
ニコレットは冷や冷やする思いだった。もしこの地に来るのが早ければ、戦争に巻き込まれていたろうし。そうでなくても、出陣あるいは引き上げの軍勢に遭って尋問でもされれば面倒だ。
いままで、そういうことが何度かあって、逃げたことか。
幸いにも戦争は終わり、両軍とも引き上げたあとのようで。生きている人間と遭遇することはなかった。
しかし進むに連れて横たわる屍骸は増えてゆき、ふたりは身震いする思いに駆られ、引き返そうか、と思った。
と思いつつも、身も心も意に従わず前へ前へ進んでゆく。この先に何があるのだろう、という得体の知れぬ恐怖を確かめたいという欲求が、早鐘のように鳴る心臓の鼓動を制しているようだ。
などと意識する間もない。やがてふたりは広い平原に出た。そこには、何百体もの屍骸が折り重なって地を埋め尽くし、ところどころで山をなしていた。
たおれる屍骸すべて異形の相をなし、憎悪とも恐怖ともつかぬ青白い顔で瞳孔の開いた瞳を、口を閉じてあるいは開けて、その身をどすぐろくなった血に染めて。それは今にも起き上がり殺し合いをするのかと思わせるほど。
空気もまた屍骸から滲むものに染められてか、よどみ、ふたりにまとわりつくようだ。
言葉もない。
陽の光を受けて鈍く光る武具や裂けた鎧兜に、血。この世のものとも思えぬ光景は、いま実際に、しかとこの目に見ている光景なの

だ。
コヴァクスは眉をしかめて、ニコレットに引き返そうと言おうとした。
その矢先であった。
向こうから、何か音がした。それはくぐもって何かの生き物にも聞こえた。
愛馬を止めてから徐々に後ろに下がらせ、ニコレットはおのずと後ろに振り向き警戒する。
「……」
なにかの生き物の声がよく聞こえるようになり、こちらに迫りつつあるのがわかった。その様子からして人間ではないようだが、ではなんの生き物だろう。
空(くう)を震わせるようにくぐもった声がやんだ、と思うと、またなにか別の音がする。それは、がつがつと、何かを食べているような音だった。
背筋に悪寒が走る。
屍骸だらけの戦場で、何が何を食べているのだろう。そう思うと、いかに勇敢なふたりとて戦慄を禁じえない。しかし、何かに導かれるようにして、目はそれを見た。
それは、屍骸にむさぼりつく大熊だった。
漆黒の闇のような分厚い体毛に覆われて、鋭い爪は、牙は屍骸を引き裂いて、噛み砕いて。口先を真っ赤にしながら、ひたすら本能のおもむくままに食欲を満たしていた。
ふたりは目を見合わせ互いに頷き、馬を返して駆け去ろうとした。
蹄の地を蹴る音が響くや、それに呼応してどたどたと、大木を地に打つような音がしたかと思えば。あの大熊が、追いかけてくるではないか。
漆黒の闇の塊と思わせる巨躯。地を、屍骸を蹴飛ばす太い四本の足で、ふたりを追いかけてくる。

季節が秋から冬にかわろうとする今ごろ、熊は冬眠の準備に入るのだが、それにしくじった熊は凶暴になり人を襲い食い殺すこともある。

おそらくこの大熊も冬眠の準備にしくじったのであろうか。そのため、人の屍骸まで喰らうようになってしまったのだろうか。

それでも、屍骸より生きている人間の方が食欲はそそるようで。血走った目をらんらんに輝かせてふたりを追った。

コヴァクスもニコレットも、愛馬を懸命に走らせようとするが。大熊の威嚇の雄叫びは二人の背中を引っ掻くように撫で、かつまた愛馬の尻と後ろ足までも引っ掻くようにして撫でたようで。二頭して恐怖に心臓縮みあがり足をすくめ、速度を鈍らせる始末。

「うわあッ！」

コヴァクスの声。

あろうことか、コヴァクスの愛馬は恐慌をきたし前脚を高々と上げ主を振り落とし、自分だけ逃げようとするではないか。

背中から地に打ち付けられるようにして、コヴァクス落下。その間に、愛馬は姿を消した。

「お兄さまあーッ！」

かろうじて愛馬をしずめ振り落とされずにいたニコレットは、コヴァクスを拾おうとするが。大熊は邪魔するなとばかりに叫んで駆けて、ニコレットの愛馬の白馬に迫って。後ろ足で立ち大きく立ちはだかって、鋭い爪を見せつけ、太い前足を振り回し威嚇する。

口は大きく開かれ、鋭い黄色い牙がのぞく。

それまでどのような強敵に遭おうとも臆することなかった白馬は、このときばかりは大熊に縮み上がり主の命令を聞かず手綱からはひたすら恐怖の振るえばかりが伝わり。てんで使い物にならない。

「白龍号、お願いだから言うことを聞いてちょうだい！」

ニコレットの愛馬、白龍号は主こそ振り落とさないものの、石のようにかたまっていた。

大熊はその隙にコヴァクスに迫った。やはり人間を乗せるほど大

きな馬よりも、ひとりの人間を捕らえる方が楽とふんだのだろうか。
どうにか背中の痛みを抑えて起き上がり、剣こそ構えていたものの、身長の二倍はあろうかという大熊相手にいかに戦えというのか。
その漆黒の剛毛は鍛えられた鋼のように黒光りし、その下にある筋肉もまた鋼の強靭さをもっているようで、剣がどこまで通用するかあやしいものだった。
白龍号を相手に悪戦苦闘するニコレットを横目に、コヴァクスは震える四肢を押さえ剣の柄を両手で握りしめて。
歯を食いしばったまま大きく息を吐き出すと。
「うおおー！」
と大熊目掛けて剣を突き出し駆け出した。
大熊もそれに応じるように、餌が向こうから飛び込んでくるという喜びをあらわに咆え叫んで四つの足を地にめり込ませるようにして駆ける。
「お兄さま駄目！」
ニコレットは狂気の沙汰とも思えるコヴァクスの突進に驚き、咄嗟に剣を投げつけた。
剣は大熊向かって勢いよく飛び、太い右前足に刺さった。
大熊は突然の痛みに驚き、大口を開けて血混じりの唾液を飛ばしながら咆哮した。その叫び声は憎しみに満ち、天空すらも叩き落しそうなほどに轟き。
向きを変えて、剣を飛ばしたニコレットに血走った目を向けて。
剣が右前足に刺さったままなのもお構いなく、突進してくる。
「あ、ああ、い、いや！」
四つの足が弾かれ地を蹴るたびに、剣の刺さった部分からは赤い血がとめどもなく流れ落ち。その血に流されるように、ニコレットの剣は乾いた音を立てて地に落ちた。
自分が叫んだことも意識できず、恐怖にかんじがらめになった白龍号の馬上で身も心も内から引き裂かれる恐怖に打たれ、縛られ、ニコレットは目を閉じた。

大熊の咆哮が轟き、心を強く打つ。と思ったら、その足音は反転して遠ざかってゆく。

どうして、と目を開ければ大熊はコヴァクスに迫っている。

大熊の尻には、コヴァクスの剣が突き刺さっている。どうやらさっきのニコレット同様剣を投げて注意を引いたようだ。

コヴァクスは大熊に背中を向けて、目一杯駆けている。しかしいかに俊足であろうとも、熊は人間よりもはるかに速く走れるのだ。

剣の刺さった尻から血をどくどく流しながら走る大熊の後姿は、滑稽ではあるが、今はそれに気付くゆとりなどない。

ニコレットはコヴァクスの背中を見つめ、懐から短剣を取り出し鎧の胸当てを外し。いつでも短剣で心臓を突ける体勢をとった。

熊に食い殺されるくらいなら、自害した方がましだと思ったからだ。

コヴァクスは駆ける。大熊はコヴァクスに迫る。ぐんぐん近づいている。

その血塗れた爪が、牙が、コヴァクスを引き裂くのも時間の問題と思われた。

「お父さま。もうすぐお兄さまとともにおそばにまいります」

異国の地で、雄敵と戦うのではなく、たまたま出会った野生動物に襲われて命を捨てることになろうとは。

誇りもへったくれもなく、屈辱以外の何者でもない、無念の死に方だった。

逃げようとしてつまづいたコヴァクスに大熊が迫る。

もはやこれまでか。

しかし、つまづいたコヴァクスの目は見開かれて大熊に負けず劣らず光り輝いていた。

伸ばした右手は、片刃式のハルバード（斧槍）の柄を掴んでいた。

反射的にコヴァクスは身体をひねって回転させ、ハルバードを思いっ切り大熊にぶつけた。

鈍い感触がした。

ハルバードの斧部分は、大熊の左半面の横っ面を直撃し。頬をかち割った。

大熊は突然のことに驚いて後ろ足で起き上がって、張り裂けんがばかりに叫んだ。叫べば叫ぶほど、それに呼応して血が溢れ出て大熊の顔面を染めてゆく。

「くらえ！」

必死の一撃。咄嗟に立ち上がったコヴァクスは力一杯ハルバードを振り上げ、立ち往生する大熊の脳天目掛けて振り下ろした。

しかし、戦場に打ち捨てられてもろくなったハルバードの斧は大熊の脳天を砕くどころか、逆に石頭に砕かれて、粉々に破片を散らした。

多少の衝撃は与えて、大熊はよろけたものの、まだ生きている。よろけながらも、大熊は本能を、食欲を満たそうと仁王立ちしてコヴァクスに迫る。

「くそおー！」

後ずさりし、ハルバードを構えなおし、穂先を大熊の胸目掛けて突き立てた。が、まだしとめられず。大熊はハルバードの穂先が刺さるのも構わず、コヴァクスに迫ろうとする。

太い前足を振るわれ爪がコヴァクスの鼻先をかすめる。柄が大熊を押しとどめて、距離をたもっている。

大熊が一歩踏み出すごとに、穂先は肉に食い込み血が溢れ出し。柄はきしんでたわむ。痛みや怪我よりも、食欲の本能が勝っているのか。これは下手をすれば折れてしまう。折れてしまえば、さえぎるものはなく一直線にコヴァクスを食い殺せる。

柄が折れてはたまらないと、コヴァクスも一歩一歩さがる。さがりながら、微妙に力を込めて穂先を大熊の分厚い胸板に食い込ませる。

だがコヴァクスも疲れと緊張で、ぷっつりと心の糸が切れそうだった。これでいつまで持つのか。柄を握る手とて、いつまで柄を握

り続けられるのか。
鼻先を爪がかすめる。かっとして、
「とっととくたばれ！」
と叫んで、渾身の力を込めて、穂先を胸板に押し込んだ。
「あああー！」
大熊の背後から、ニコレットが叫びながら突っ込んでくる。下馬し落ちた自分の剣を拾い、大熊の背中に剣を突き立てる。
分厚い剛毛と筋肉に弾き返されそうなかたさを感じつつ、ニコレットは渾身の力で剣を背中に押し込めようとする。
剣が突き立ったのは丁度背中の左側、心臓の背後。
大熊は前後から刺されてさすがに苦痛のうめきをもらした。
大きく開かれた口から黄色くも赤く血塗れた牙がのぞき、喉の奥から搾り出される叫び声は、冬眠をしそこねたために屍骸を喰らわねばならず、挙句に人間に傷つけられてゆく大熊自身の無念さが、幾重にもこもっているようで。
コヴァクスとニコレットの心胆を寒からしめた。
いかに大熊といえど、うまく冬眠ができれば、不要な殺生はせぬというのに。
「なぜこんな死に方をしなければいけないんだ」
とでも言っているのか、何度も何度も、大熊は天を仰いで叫んだ。
冬眠をしくじったのは、あるいは人間の愚かな争いに眠りを妨げられたのもあるかもしれず、屍骸を喰らうのも、眠りを妨げたことへの復讐であったのかもしれなかった。
傷口から血がほとばしって、コヴァクスとニコレットに降りそそがれた。血は、あたたかかった。
やがて大熊の叫びがやんだと思うと、それまでの強靭さがうそのように、芯が抜けたように、前のめりにたおれてゆく。
コヴァクスは慌ててよけて。
大熊はうつぶせにたおれて、ぴくりとも動かなかった。
大熊の血を浴びて、真っ赤な顔をさらに真っ赤にして、コヴァク

スとニコレットはしばらく呆然としていたが。大熊が息を引き取ったのがわかると、知らずに互いに寄り添い抱き合って。

互いの体温を確かめて、生きている、ということを分かち合った。

ニコレットは危機を脱した安堵で気が抜けて、コヴァクスの胸の中で泣きじゃくっていた。

戦うということは、結局はそういうことで、そこに、きれいもきたないもないし、体裁もへったくれもない。

敵は人間のみにあらず。

時として自然とも血みどろに戦わねばならないことを、ふたりはこびりつく血を感じながら、脳天を斧で叩き割られるような衝撃とともに、身にも心にも打ち込まざるをえなかった。

第六章　王太子　？

大熊を斃してしばしのときが流れた。
大熊のかばねを横目に、魂が抜けたようにうずくまっていたコヴァクスとニコレットだったが。にわかに耳に飛び込む蹄の音にはっとして、立ち上がり様子をうかがう。
「あ……、龍星号！」
蹄の音は大きくなってゆく。音のするほうを見れば、コヴァクスの愛馬・龍星号が駆け足でこちらにやってくる。平静を取り戻して、慌てて主を求めて駆けているのか、と思ったら、そのまた後ろから蹄の音や人の声がする。
声は男ばかりで、数十人はいそうな感じでがやがや言っている。まさかいずこかの軍隊が龍星号を見つけ捕らえようとしているのか。
大熊の恐怖から恐慌をきたし主を捨てた馬だとて、やはり長年連れ添い愛着がある、コヴァクスは疲労困憊で重い身体を引き摺るようにに龍星号のもとへ駆けた。
ニコレットは白龍号にまたがり、剣を構え兄に続いた。
「龍星号！」
主を見つけ無邪気に嬉しそうな愛馬にコヴァクスは咄嗟に駆け寄り、素早く手綱をつかみ、飛び乗った。しかし得物を持っていない。
迂闊さに眉をひそめ、「ええい、もう」とつぶやきながら、やむなくまた下馬し剣を拾い上げ、再び愛馬・龍星号に飛び乗った。とともに、白豹を思わせるまだら色の馬にまたがる若者を先頭にした武装集団が姿を現す。
若者らとコヴァクス、ニコレットは目が合った途端動きを止め、互いに警戒し。後ろの集団は、素早い動きでまわりを取り囲む。
（彼らは、訓練されている……）
動きのキレを見て、コヴァクスとニコレットは、若者をはじめとするこの武装集団が何らかの一個師団であることを見抜いた。

馬に乗った者は十名たらず。他は歩兵。皆槍を携えている。
武装集団は静かに殺気立ち、いつでもコヴァクスとニコレットに飛びかかれる体勢をとっている。
若者はその隊長らしく、右手を挙げて、
「静まれ！」
とよくとおる声で号令した。武装集団はその言葉に従い、じっと次の指示を待ちながら身構えている。
若者はこの世に怖いものはないというような不敵な笑みを浮かべている。薄茶色の髪に青みがかった瞳。肌も白く秀麗というに相応しい容貌だが、今身にまとっている鎧に帯剣は伊達や酔狂ではないのは、その身体から得体の知れない霧のように立ち上る気迫からいやというほど感じ取れた。
おそらくはいずこかの貴公子であろうが、同じ貴公子でもコヴァクスとはどこか違った。それは自分の上に人がなきかのような、不敵さだった。
若者は、好奇心いっぱいに瞳を光らせコヴァクスとニコレットを値踏みするように眺めていた。
「我はソケドキア王太子、シァンドロス。汝ら、いずこの者で、名は何と言う」
若者の名乗りを聞き、コヴァクスとニコレットは、一瞬呆気に取られた。今何と言った？　ソケドキア王太子シァンドロス、だと？
ソケドキアといえば南方の強国ではないか、若者はその王太子だと言った。
本気か？
「オレを偽者だと思っているのか。無理もあるまい。なら見せてやろう、偽者か否か。……それ！」
シァンドロスと名乗った若者は武装集団に右手で合図を送ると、武装集団は一斉にコヴァクスとニコレットに襲い掛かった。
「いきなりか！」
大熊の血にまみれ疲れ切ったコヴァクスとニコレットはうんざり

する思いをしながら、身を守るため剣を振るった。
武装集団は皆槍を持ち穂先をふたりに向けている。包囲の輪は一気に縮まり、コヴァクスとニコレットを串刺しにするつもりか。
（いよいよ命運尽きたか）
一難去ってまた一難というにはあまりにも過酷な試練と最期に無念の情念が湧く。ふたりは死なばもろとも、と一人でも多くの道連れを、と思い抗戦の構えをとった。
しかし、槍はすべてふたりをやり過ごしその横を勢いよく駆け抜けてゆく。シァンドロスと名乗った若者は、右手を挙げ前に、右に左に振り、武装集団を操っているようだ。
「なんだ?」
命運尽きたと思ったふたりは深い霧に包まれたような不可思議さで集団の動きを眺めるしかなかった。
武装集団は、まず騎馬の者は五騎ずつ左右にわかれ、その間に歩兵が十名ずつ横に整列し、先頭の者らは槍をまっすぐ前にかまえ、二列目の者らは槍を斜めにかまえ、また三列目の者らから五列目の者らまで徐々に穂先は上にむけられていた。
整列するまでの動き、ばらつきはなく息の合った動きだった。それを満足げにながめ、若者は右手を頭上で大きく振った。五列に並んだ武装集団は、槍をかまえた姿勢のまま、喚声をあげて一糸乱れぬ隊列のまま、コヴァクスとニコレットのまわりを駆けた。
まるで一個の生き物のように武装集団はコヴァクスとニコレットのまわりを駆けた。
以心伝心。若者は右手の動きひとつで武装集団を意のままに操り、また武装集団も忠実に若者に操られている。これは奴隷を鞭打つような強制で出来ることではない。
「なんという……」
今彼らと戦えば間違いなく討ち死にするであろう。それ以上に、上から頭を押さえつけるような威圧もありありと感じられた。この威圧は弱者しか相手にしない野盗のたぐいには絶対出せない。

彼らはまちがいなく、玄人の戦闘集団であり、若者はたしかにその隊長である。

相手に不足なし、というが、確かに相手に不足はない。しかしそれでも戦う理由による。理由もない戦いで命を落すことほど愚かなことはない。

そもそも若者ら戦闘集団と戦う理由はないのだ。戦わずにすめばそれにこしたことはない。なにより、やすやすと死ねない。

「とまれ！」

若者が叫んだ。集団はぴたりと動きを止め、槍をかまえじっとふたりを見据えている。

「信じる気になったか？」

若者、シァンドロスは得意気に笑っている。コヴァクスとニコレットは、口元を引き締め、頷いた。

「では名を聞こうか。またその、むごい様はどうしたのかもな」

やや間をおいて、ふたりはかるく息を吐く。

「オレは、オンガルリ王国ドラゴン騎士団小龍公コヴァクス」

「私も、同じくオンガルリ王国ドラゴン騎士団小龍公女ニコレット」

二人の名乗りを聞き、今度はシァンドロスが驚く番だった。

どうして旧ヴーゴスネアの隣国の騎士、それも名のあるドラゴン騎士団の騎士が、こんなところに。それも、血まみれのむごい様で。

「この様は、あれだ……」

コヴァクスは指差した。大熊のかばねのある方を。

第六章　王太子　？

少し向こうに、ちらちらと、大熊がたおれているのは見えた。まさか、と思っていたが、そのまさかであったか。

集団もおもわずうめく。

「お前たち、あの大熊を斃したのか」

「そうだ。戦場に打ち捨てられた兵士のかばねを喰らっているところにでくわしてしまった」

「……」

シァンドロスもさすがに言葉もない。大熊を相手に戦えば、この集団をもってしても犠牲は免れまい。それを、ふたりで斃したという。

シァンドロスは白豹のようなまだら馬を操り、大熊のかばねのそばまでゆく。武装集団が護衛のためにとりかこむ。その動き慣れたもので、改めて統率のよさに感心する。

大熊のかばねのそばまで来れば、割れたハルバードも打ち捨てられている。なるほど、戦場に捨てられていた大武器をもちいて、かろうじて斃したか。

「たいしたものだ」

ぽつりとつぶやく。これは本心のようだ。

ドラゴン騎士団の騎士というのも、おそらく嘘ではあるまい。これで互いに、半分は信じる気になったが……。

「ドラゴン騎士団、小龍公コヴァクス、小龍公女ニコレット。と言ったな……」

女は確かにヘテロクロミア（虹彩異色症）であるが、その背中には長箱。

「大熊を斃したのは見事だ。しかしそれだけでは、お前たちを信じきれぬ。その長箱には何が入っている？　それによって、信じるか信じぬか決めよう」

随分と勝手な言い分のようだが、ふたりの誇りを刺激するには十分だった。

コヴァクスも名誉のためと思ったのだろう。ニコレットの背負う長箱をとり蓋をあければ。紅の龍牙旗をもろ手にかかげてひるがえす。

その見事なつくりの旗に、喚声が上がる。真偽はともかく、見事なつくりの旗を、偽者がもてるわけがない。うばったにせよ、コヴァクスとニコレットの人品は卑しからずなのは、みててわかる。となれば、やはり本物。

紅の龍牙旗のもと、屍骸転がる戦場跡で、大熊の返り血もあび、まるでふたりがこの壮絶な光景をつくり上げたようにも思え。

堂々とした様は、戦いの神と女神が地上に降臨したかのような錯覚さえおぼえた。

シァンドロスは不覚にもふたり、ことにニコレットに見惚れ一瞬の間、我を忘れていた。

血塗れながらも流れるような長い金髪。ヘテロクロミアの、左右の色の違う瞳は珠のように輝きは、なにか神秘性を感じさせて。シァンドロスならずとも、ひとときその姿を見るだけでも恍惚とならずにはいられないであろう。

「これが、オレたちがドラゴン騎士団だというあかしだ。わかったか！」

コヴァクスは旗を掲げ声高に咆えた。

シァンドロスの高飛車な態度に、内心腹を据えかねていたのもあるが、なによりも、ドラゴン騎士団としての誇りを逆撫でされるのは我慢ならなかった。

なんのやましいこともない。なら、堂々と名乗るまで。

「シァンドロスと言ったな。ソケドキアの王太子たる者が、なぜこの異国の地にいる。今度はお前がそのわけを話せ！」

「王太子に対し、無礼であるぞ！」

コヴァクスの態度に集団から抗議の声があがる。お前らなどいつ

でも討てるのだ、という気迫とともに。しかしそれで圧されるコヴァクスとニコレットではなかった。

シァンドロスは満足そうだ。よくぞ聞いてくれた、という風に。

「知れたこと。王として覇を唱えるためだ」

こいつ正気か。

コヴァクスとニコレットは耳を疑ったが、目の前にいるシァンドロスなる若者、楽しそうだ。

「ふん、信じられぬという目をしているな。まあ、いい。話してやろう。我が父フィロウリョウは勇敢な王であり、ヴーゴスネア一帯を統一するのも、時間の問題であろう。だが、このままでは、オレの出番がなさそうなのでな。国を抜け、戦いの場を求めて北へと来たわけだ」

言葉が出ないコヴァクス、ニコレット。シァンドロスは楽しそうに話を続ける

「そうでなくても、親の七光りなど、我に力なしであることを示すようで、面白くない。国を抜け北へ行き、すべてを己自身の手でもぎ取る戦場を求めるのも、勇者として当然の志であると思わぬか」

語るほどに、その顔は輝いてゆく。

それにしても、なんという大胆不敵であろうか。身分ある家柄にも関わらず、わざわざ危険と冒険を求めて国を出るなど。

まさに狂気の沙汰だ。

「オレは、親から譲り受けた国ではなく、オレ自身がもぎとった国を手に入れて、王になる。いや、タールコに匹敵する帝国を築き皇帝となり、この地上に覇を唱えるのだ」

聞いているうちに、真面目に付き合うのが馬鹿馬鹿しくなってくる。しかし、シァンドロスは本気のようだ。

手勢は引き連れているようだが。国を抜けて、いつまでもつのか。それに、総勢で何名なのだろう。ここにいる他にも、手勢はあるのだろうか。

「そこでだ」
とコヴァクスとニコレットを見据えて言う。
「お前たち、オレとともに戦わぬか。どういう事情で異郷の地にあるのか知らぬが。オレはお前たちが気に入った。仲間になれ」
「仲間？」
ニコレットが怪訝な顔をする。こっちの事情も聞きもせず、そんなことを言うということは、聞いてもお構いなしなのであろう。
「そうだ。オレがつくりあげた精鋭たちだ。神雕軍（しんちょうぐん）という」
神の雕（くまたか）の軍。なんとも大仰な名称ではある。
もし従わねば。
それなら、神雕軍をもってこたえる。というところか。
シァンドロスの目がそう語っている。コヴァクスは内心舌打ちする思いだ。
「ひとつ問う。彼らが、神雕軍なのか」
「左様。今でこそ五十たらずだが、いずれも一騎当千のつわものたちだ」
皆精悍な顔立ちをし、相当な訓練を受け、勇敢そうで。彼らをもって国をもぎとるというのも、まんざらはったりではなさそうだった。
「さらに問う。国は北からつくりあげてゆくのか」
「そうだ」
父の向こうを張ろうとしているのだから、やはり北から攻めるというわけか。なるほど。
コヴァクスにひとつ、案が浮かんだ。
「いいだろう。お前に付き合う。ただし、下にはつかぬ。あくまでも対等の仲間としてだ。それでもいいのなら」
「お兄さま」
驚いたニコレットは不安そうにしている。が、意外にも、
「よかろう」
と簡単に答えが返ってきた。神雕軍の者どもは、騒然とする。ド

ラゴン騎士団と名乗る正体不明の人間の、そんな要求を簡単に呑むなど、と。

「わかった。お前たちの要求をのもう」

大熊との戦いで疲れ果てているはずのコヴァクスであったが、あらぬことで気力を回復しシァンドロスに一矢報いたかたちとなった。が、やはり身体は正直であった。

わかったの声を聞くと我知らずよろけてしまい、ニコレットがあわてて馬をそばによせ肩に手を置き支える。

それでも紅の龍牙旗を落すまいと、拳は力一杯握られていた。

第六章　王太子　？

敵に回せばやっかいだが、味方にすれば頼もしい人物である。が、同時に戦い甲斐のある好敵手ともなりうる。

シァンドロスはほんとうに満足そうだ。

「新たな戦場をもとめている最中、その馬に出会った。我が物にせんと捕らえようとして追っていたのだが……。お前の馬であったのだな」

「まあな」

紅の龍牙旗をニコレットにあずけながらコヴァクスはこたえる。その目はシァンドロスを鋭く見据えている。

「よい馬だな、それに、お前を愛しているようだな」

「まあな。騎士でもあるし、馬とともに生きたマジャクマジール族の末裔だからな」

さきほど主を見捨て逃げ去ったものの、龍星号は恐怖から開放されコヴァクスとともにいられることを喜んでいるようだ。あんな大熊が相手では無理もあるまいし、やはり長年連れ添った愛着が勝っていた。

「ふふ、そうだな」

シァンドロスはおかしかった。

オンガルリの国民（くにたみ）が、東方から来た騎馬民族の末裔であることは広く知れ渡っている。だがニコレットの瞳の色を見て、混血もかなり進んでいることもうかがい知れた。オンガルリおよびヴーゴスネアは大陸の交通要所で、東西からの民族移動も盛んな地域だ。その地に住んで、民族的な純血をたもつなど不可能な話であった。

では何をもって、その民族の末裔などと称するかといえば、戦争で勝った民族の血を基準にする。それが、人の世の民族観であった。

（だからこそ、我が民族を数多（あまた）の民族の頂点となし、後世に残すのだ）

という野心を、シァンドロスは抱いていた。その混血の中に、ドラゴン騎士団、マジャクマジール族の血が入ることも、好ましいように思えた。

「お前たち、いつまで馬に乗っている。王太子の御前である、下馬し跪かぬか！」

思い出したように騎士がひとり叫んだが、シァンドロスは右手を挙げて制す。

「よいのだ、ペーハスティルオーン。彼らと予は対等なのだからな」

ペーハスティルオーンと呼ばれた騎士はおとなしく引き下がったものの、コヴァクスとニコレットを見る目は冷たい。シァンドロスは平気そうにしているが、それもどこまで平気なのかわからない。王太子として、誇り高い彼が誰であろうと、対等の関係を持ち続けることを望むとは、とても思えなかった。むしろそれなら、バゾイィー王の方が信用が置けるくらいだった。

おそらく、関係は長続きしないだろう。

だが、それならそれでよい。

それまでの間、利用できるものは利用するまで。コヴァクスは、賭けに出ていた。

「ゆこう、細かいことは追々話す」

頷いてシァンドロスはコヴァクスらと駒を並べる。その白豹のような愛馬はグリフォンといった。その獣は天上の神々の車を曳く役目を負っており、その姿は鷲の上半身と獅子の下半身をもつという。

馬の名を知り、コヴァクスとニコレットはシァンドロスの豪胆さを掘り下げて知ることが出来た。

思わぬ成り行きから大熊との死闘を繰り広げ、挙句の果てに湧いて出てきたようなシァンドロスとその配下、神雕軍と行動をともにするようになってしまった。

それは悪魔の業か神のいたずらか、ともあれその変転まことにめまぐるしい。

まさに、一歩先は夢にも思わぬことの連続であった。

道中、コヴァクスとニコレットは、シァンドロスに、今までのいきさつを語った。

シァンドロスは興味深そうに、よくふたりの話を聞いた。ことに、視線はニコレットをよく追った。

美しい金の髪に、神秘的な色違いの左右の瞳。ニコレットも自分にそそがれる視線を感じ取ったが、つとめて気付かぬ風をよそおい、受け流していた。

シァンドロスは赤い兵団のことをコヴァクスに語った。イヴァンシムに会い、ソケドキアにゆくことを進言したのは他ならぬシァンドロスであった。

それを聞いたコヴァクスとニコレットはたいそう驚いたものだった。

まさか一国の王太子が国を抜け、さらに探し求める人物に接触して自国におもむくようにうながすなど、どうして想像できようか。それにしても、イヴァンシムはよくシァンドロスの進言に従ったものだ、と思った。

内に果てしない野心を抱く若者のどこに、魅力を感じたのだろうか。それともイヴァンシムなりの考えがあってのことだろうか。

が、それは今の自分たちも同じだった。

コヴァクスがシァンドロスと行動をともにする気になったのは、ひとえに戦力をもとめてのことだった。

あの難民たちを守れる戦力を、シァンドロスは提供してくれる。そのかわり、コヴァクスとニコレットも、いざというときに戦力を提供するのだ。

彼が直々に率いる精鋭、神雕軍。

いまこそわずか五十たらずだが、それだけでも一国を奪い取る自信があると、シァンドロスはいう。

騎乗の者はこの中で十足らず。他は皆徒歩だ。

しかし、五十人からの人数を従えて、よくぞ滅ぼされずに済んだ

ものだ。これだけの人数を武装させて旅をさせるとなると、何かと目立って、あやしいと攻められそうなものだが。

それをシァンドロスに問えば、

「目立たせているのよ」

と自信満々にこたえるものだから、コヴァクスとニコレットは驚くを通り越してあきれたものだった。

この五十人からの人数でもって、あちらこちらで戦いを巻き起こしては、旧ヴーゴスネアの王侯貴族どもを混乱させているのだという。

「暗殺者までよこして、オレを倒そうとやつらやっきになっておるわ」

と、高らかに笑うシァンドロス。暗殺者と聞いて、コヴァクスとニコレットは顔を見合わせた。

「それは、六人組の黒装束の者たちではなかったか」

「そうだ。知っているのか」

「グニスッレーとかいうのが頭目だが」

「ああ、そんな名前であったな。他にオナリハトクにアッリムラックとかいう女も……」

「オレたちも襲われたことがある。あやういところだった」

「なんだ、そういうことがあったのか。それで、どうやって生き延びた?」

まるで命からがら逃げ延びたかの言い草で、ちょっと、むっとしたがここは堪えて、ロンフェイという名の、謎の女が突如現れて六魔を追い払いかつルクトーヤンをたおしたことを語る。

興味深く聞いていたシァンドロスは、うんうんと頷く。

「ロンフェイ、か。その女も知っているぞ。不可思議な体術を遣う女だろう」

「そうだ、彼女のことまで知っているのか」

「いや実のところ、オレもあやういところを、ロンフェイに助けてもらった。是非とも味方に引き入れたいと思うのだが、風のように

去っていってしまって消息がつかめぬまま、今にいたっている」

なんと、シァンドロスはロンフェイのことも知っていた。さらに、六人のうちの一人、ルクトーヤンをいとも簡単にたおしたことを聞き、さすがに驚きは禁じえない。

ならば、六人全員をたおすこともたやすいのではないか。だが何かの事情でたおさずにいるのか。

「おそらく、なるべくなら、人を殺したくはないのだろう」

と、コヴァクスは言う。脳裏には、彼女の儚げな瞳が浮かんでいた。その様子はどこか、風に流されるように浮いた感じで寂しげだ。

（まあ、お兄さまったら）

コヴァクスの横顔を見て咄嗟に、ニコレットはあることが閃いた。兄は、あのロンフェイという女に心惹かれているのではないか、と。

これが平時であれば、ひとつからかってやりたいが、今はそんな気も起こらない。色恋沙汰など、父の遺言を遂行する上で、障害になるのではないか。

コヴァクスの様子を察したのは、シァンドロスも同じで。こちらは、おかしみを感じているようで、やや口元をほころばせた。

それから、さりげにニコレットに視線をうつす。

見つめられ、色違いの瞳は一瞬とらえられてから、そっぽを向いた。これにもシァンドロスはおかしみを感じて、口元をほころばせた。

面白い兄妹（きょうだい）だ、と。

しかし、あの六魔どもはシァンドロスも狙っていたのだ。あんな陰険な暗殺者を遣うとは、いったい主はどのような人物なのやら。

ひとつ言えることは、これから戦わねばならぬであろう王侯貴族どもの誰かなのは、間違いない。

となれば、難民たちのことがより心配になってくる。暗殺者たちは難民たちのことを主に告げて討伐を要請したのではあるまいか。

と思うと、焦りはつのる。

（オレたちは、道に迷ってしまったのか）

なんだか、やることなすこと、空転ばかりか裏目裏目のような気がする。

シァンドロスと組んだことも、裏目に出るのだろうか。

ともあれ、いまのところ、イヴァンシムを探し求める目的は、シァンドロスが代役になることでその目的は達成されるようとしているようだ。

シァンドロスも、国を獲る上で新たな戦力を得て。お互いの利害は一致している。

異国の地で新たな国を造る。

もっとも、シァンドロスがどのような国を造ろうとしているのか、今はわからない。

良い国なのか、悪しき国なのか。

いまは、なにもわからず。

焦っている。ということを、いまになってやっと自覚してきたことをさとった。

第七章　試練はつづく　？

それから、シァンドロスら神雕軍と一緒になったコヴァクスとニコレットは、帰路を急いだ。

五十人以上の武装した集団がうろうろしていれば、すぐに見つかってしまうものだが、そこはよく訓練された精鋭ぞろい。

さっと逃げ出し追っ手を振り切り。逃げ切れない、というときはぱっと散り、追っ手を戸惑わせ、あるいは不意を突いて返り討ちにするなど、立ちはだかる者らをことごとく煙に巻いた。

しかも正体を隠さない。

威風も堂々と、

「我らはソケドキアのシァンドロスと、その配下、神雕軍である！」

などと名乗るときたものだ。

しかし、まさか一国の王太子が異国の地にいるなどにわかに信じられないのか、ほとんど騙(かた)りであると思われてしまっていたが……。

ともあれ、コヴァクスとニコレットを道案内にシァンドロスら神雕軍はほとんど障害らしい障害に遭わずにいられ。

難民の集落から旅立ってから、ほぼ半月にして戻ってこれたものだった。

きっと皆帰りを待ちわびていることだろう。

コヴァクスとニコレットはそう思っていたのだが。

「……」

言葉もなかった。

難民の集落に帰り着いたというのに、出迎える者はなく、人っ子一人いなかった。

「みんな、オレだ、コヴァクスだ！」

「みんな、どうしたの、どこにいるの！」

シァンドロスら神雕軍のことを忘れて、慌ててふたりは集落を駆け巡り人々を捜し求めた。しかし、反応はない。

シァンドロスはおかしそうにふっと笑う。
陽は中天に上り、小鳥のさえずりさえ聞こえるほど、のどかな日であるにもかかわらず。集落は冬の夜のように寒々しかった。
人々はどこに行ってしまったのだろう。まるで蒸発でもしてしまったかのように、忽然といなくなってしまった。
戦争か盗賊に遭ってしまったのだろうか。しかしそれにしては、さほど荒れている様子もない。
ふと、家々の生活用品がことごとくなくなっていることに気付いた。
ということは、集落を離れたのか！
一体どこに行ったというのか。
「難民にさほど期待されておらぬようだな」
シァンドロスは冗談じみて言った。コヴァクスとニコレットは思わず、鋭い目でシァンドロスを見据える。
しかし言い争っている場合ではない。歯を食いしばって、集落中を駆け巡った。
「みんな、どこに行ってしまったんだ！」
死ぬ思いをしながら旅をして、帰ってきたというのに、この集落の有様は、一体どういうことであろう。
まだ試練は続くというのか。
シァンドロスの言うとおり、さほど期待されていなかったのだろうか。
それにしても、そうであったとしても、ソシエタスやクネクトヴァに、カトゥカ、バルバロネまでいないなんて。彼ら彼女らまでがコヴァクスとニコレットに見切りをつけるなど、どうして考えられよう。
いつしか馬を停め、呆然としていると、耳に触れる声がある。
「おーい、おーい」
と、それははっきりと聞こえるようになる。
バルバロネの声だ！

「小龍公、小龍公女！」
「コヴァクスさん！」
「ニコレット姉さま！」
バルバロネの声につづき、ソシエタスにクネクトヴァ、カトゥカの声がした。
声がして、神雕軍は一斉に身構えたが、シァンドロスは右手を挙げてこれを制す。
「ソシエタス、バルバロネ！」
「カトゥカ、クネクトヴァ！」
コヴァクスとニコレットは急ぎ声の方へ駆けた。はたして、駆け込んできたのはソシエタスにバルバロネ、クネクトヴァ、カトゥカであった。
他はいない。
「ソシエタス、みんなは？　お前の馬は？」
みんなが消えた、そればかりか、自分の馬を持っていたソシエタスが徒歩だ。一体何があったというのだ。
コヴァクスとニコレットは急いで下馬し、自分の足でソシエタスらのもとに駆け寄った。
「どうもこうも……」
バルバロネは褐色の頬を紅潮させて、歯を食いしばっていた。ソシエタスも無念そうな顔をし、クネクトヴァとカトゥカは哀しそうな目をしている。
「馬は、さて、話せば長くなりますが。それよりも小龍公女、あの者たちは……」
ソシエタスはシァンドロスと神雕軍を見て、怪訝そうな顔をする。てっきりイヴァンシムら赤い兵団とともに帰ってきたと思っていたのに。
「彼らは……」
ニコレットが説明しようとすると、シァンドロスと神雕軍は騎乗のままずかずかとやってきて。

「我はソケドキア王太子、シァンドロス。この者たちは神雕軍である。イヴァンシムの赤い兵団にかわり、我らが力添えすることになった」

と馬上から相手を見下ろしずけずけと言う。

ソシエタスらが呆気にとられたのは言うまでもない。イヴァンシムと出会えなかったのは仕方ないにしれも、その代わりにソケドキアの王太子とはこれいかに。

（はてさて、これは、狐に化かされようとしているのか）

と思わず心でぼやいてしまう。コヴァクスとニコレットが連れてきたのなら、本物だろうと思うことにし、

「おふたりにお仕えするソシエタスと申します。以後お見知りおきを」

と丁重に挨拶する。

「うむ、それよりも、我々はコヴァクスとニコレットより話を聞き力添えをすることになったのだが。守るべき難民がおらぬとは、いがかしたのだ、わけを聞こう」

さすが王太子だけあり、もう他を威圧し頭上に君臨している雰囲気をかもし出していた。

コヴァクスとニコレットはシァンドロスの高飛車な態度が鼻につくものの、それを堪えソシエタスから話を聞くことにした。

ソシエタスらが語る内容は、こうだった。

第七章　試練はつづく　？

コヴァクスとニコレットが旅立って三日目。
太陽隠れる灰色の空の日であった。
バルバロネらは食料を確保するために狩りに出かけ、幸いにも猪や鳥などの獲物を得ることが出来た。
六魔の騒ぎ以来盗賊も来ず、戦争もなく、徐々に人々の心に落ち着きが出てきた。
そう思った矢先のことだった。
「女房子どもの仇だ！」
「なにをするの！」
集落で争いが起こった。
難民らは前からの知り合いというわけではない。それぞれ出自がばらばらで、戦争から逃げ惑う中で知り合い、ともに逃避行をするようになったのがほとんどだ。
「オレはダメドの兵に、家族を殺された！　ダメドの人間は、皆、仇だ！」
「馬鹿なことを言わないで。私たちはダメドの生まれだけど、あなたに怨まれる覚えはないわ」
「そんなもの、関係ない！　オレは女房子どもに誓ったんだ。ダメドの人間を皆殺しにすると！」
悲鳴があがり、ソシエタスとバルバロネは急いで駆けつけた。
「……」
ソシエタスは息を呑んだ。
女性とその子どもである幼い女の子が、無残に剣で刺し殺されていた。
男は剣を手にして、哀れな親子のなきがらを凝視していた。
「お前、なんということをするのだ！」
ソシエタスは怒り男をとらえようとした。理由はどうあれ、これ

から力を合わせていかなければいけないときに、私怨で人殺しなど、あってはならないことだった。

しかし。

「うるさい！　オレはダメドのせいですべてを失った。もうなにもかも、どうなろうと知ったことではない。オレの望みはただひとつ、ダメドの人間を皆殺しにすることだ！」

男はエスダ出身である。エスダとダメドは激しい戦争を繰り広げていた。男はその戦争で家族を失った。

怨みを胸に抱きつつ戦争から逃げ惑って難民の中に入っていたが、怨みは募るばかりでいよいよ抑えきれないものになったようだった。

「馬鹿な！」

ソシエタスは男を哀れに思いつつも、私怨を抑えきれないような人間をこのままにしておけぬと、捕らえようとしたが。

「やめて！　やめて！」

というカトゥカの叫び。何事と思えば、また別のところで今度は白髪の年老いた女性が鍬で五つほどの男の子を滅多打ちにしていた。

「お婆さん！　なにをするんですか！」

クネクトヴァは急いで老婆をおさえた。

「こんなことをされては、神が悲しまれます」

「ふん、神なんか、糞喰らえだね！」

老婆の口からとんでもない言葉が飛び出し、クネクトヴァとカトゥカは仰天した。この老婆は普段おとなしいのに、なぜ突然こんなことを。

「あたしゃ日ごろ神様を信じて、寄付もしてきたさ。だけど、神様はあたしに何をしたってんだい。この歳になって、リジェカの兵に息子夫婦や孫を殺されて、いっさいがっさいがなくなっちまった。これが神につくしたあたしへの報いなのかい」

クネクトヴァは老婆を抑えながらも、背筋が凍りつきそうなのを禁じえなかった。

カトゥカは慌てて男の子に手を差し伸べたが、もうすでにこと切

れていた。
この子どもはリジェカの生まれで、戦争孤児で、難民に拾われともに逃避行の旅をしていた。覚えたての言葉は確かにリジェカなまりがあり、それが老婆の怨みを湧き上がらせてしまったようだが。
しかし、まさかこんなことになるとは……。
「そんな、かわいそうよ」
カトゥカは涙を流しながら男の子のなきがらを抱きしめた。子どもには何の罪もない、それどころか、同じ戦争の犠牲者であるのに。
クネクトヴァは言葉もない。目の前の悲劇に、思わず力が抜け、老婆はいましめから抜け出し、地面につっぷし泣きじゃくった。
と思ったら、あちらこちらから一斉に、わっと叫び声が響きだし、難民たちが互いに争い始めたではないか。
「あっ！」
クネクトヴァは絶句した。
さきほどの老婆は、地面に突っ伏したまま、難民たちに取り囲まれ殴る蹴るの暴行を受け、声にならぬ声の悲鳴を上げた。
それはリジェカの人々による、リジェカの子どもが無残に殺されたことの復讐だった。
そうかと思えば、エスダ生まれの男は、ダメドの親子を殺したことでダメドの難民たちに取り囲まれて、老婆と同様殴る蹴るの暴行を受け、これもまた声にならぬ声の悲鳴を上げていた。
それ以外でも、争いは広がりとどまることを知らなかった。
「やめろ、やめないか！」
バルバロネやソシエタスは懸命にとめたが、難民はそれぞれの出身にわかれて争うばかり。だれもが燃え上がる復讐の念をどうすることも出来ず、憎しみのまま争っていた。
それからは、あまり覚えていない。
ソシエタスもバルバロネも、クネクトヴァもカトゥカも、憎しみ渦巻く争いをどうしようもなく。また自身にも危険が迫り、身を守

るためにやむなく集落を離れざるを得なかった。
　難民の人々は、争いに争い、ついには散り散りばらばらになって、集落を離れていった。みんながどこへいったのか、わからない。
　悲惨な現実を前に、ソシエタスらも心が張り裂けそうだった。しかし、帰ってくるであろうコヴァクスとニコレットを待つため集落にとどまった。
「人の心は、なんとも恐ろしいものでございます。悲劇に翻弄された人々が、憎しみにとりつかれ、悲劇を繰り返してしまう。それがし、生まれて初めて、身も心も引き裂かれそうな気持ちでいっぱいです」
　訓練された騎士のソシエタスでさえそうなのだから、クネクトヴァとカトゥカの落胆推して知るべきであった。幸いにというのも変だが、バルバロネは傭兵として底辺の人々と交わり、人の醜さに対し免疫があるおかげか、さほど気落ちはなさそうだが、それでも胸には重いものがたくさん詰まっているのは間違いなさそうだった。
「そんな、そんなのって……」
　ニコレットは絶句し、コヴァクスは言葉なく口を真一文字につぐんでいる。
　重い沈黙があたりを包んだ。
　シァンドロスや神雕軍のことは忘れ去られたように。
「一箇所にとどまって、少しでも気持ちが落ち着いたのが、争いの原因のようですな。移動に移動を重ねそれに夢中になっていれば、人を怨むどころではなかったかもしれぬ。なまじ落ち着いたために、怨みが顔を覗かせた……」
　ずけずけと、空気を読んでいないのか読んだ上で言っているのか。言葉を発したのは、シァンドロスの腹心、ペーハスティルオーンであった。
「なんだと！」
　思わず振り向きペーハスティルオーンをにらむコヴァクス。交わす視線に火花散り、一触即発の危険性さえはらんでいた。

ペーハスティルオーンの言い草には、コヴァクスだけでなくニコレットにソシエタス、バルバロネにクネクトヴァ、カトゥカも怒りを覚え、じっと鋭い視線を飛ばす。

「いやこれは、失敬。そこもとらを怒らせるつもりはなかった、許したまえ」

首をすくめる仕草を見せペーハスティルオーンは詫びたが、どこか心がこもっていないように感じられる。

シァンドロスに神雕軍はとめようとするでもなく、成り行きを見守っている。

守ろうとした人々が争い合って、離散してしまうということにコヴァクスらはひどい衝撃を覚える一方、シァンドロスら神雕軍は別に気の毒に思う様子も見せぬ。

それどころか、

（オンガルリの人間はどこかお人好しなところがあると聞いたが、その通りだな）

とさえ思っていた。

国が比較的平和で、時々国防のために戦ってきたコヴァクスらに対して、旧ヴーゴスネアの戦乱にソケドキアの独立と、シァンドロスや神雕軍は戦争の中で育ってきた。

そのために、難民の人々に対する意識の差が出たのであろうか。同じ難民でも、コヴァクスらにとっては守るべき人々であるのに対し、戦乱の中では難民同士が争うのも当たり前のことであると、これをやむなしと、受け入れるシァンドロスたち。

しかしだからと言って、自分たちまでが意識の差のために争いを起こすのもまた愚かである。ことにドラヴリフトの遺志があれば、無駄な争いを起こすわけには行かなかった。

それを察したのはシァンドロスであった。

「起こってしまった事はやむをえぬ。いつまでも嘆いているわけにはいくまい。これからどうするかを、考えねばならぬのではないか」

正論ではあるが、コヴァクスは白黒つけがたかった。

やろうとしたことが裏目に出た衝撃は、簡単にはおさまらない。人の気も知らないで、と言いたそうにコヴァクスはシァンドロスを一瞥する。ニコレットは戸惑い返事を出しかねている。

だがソシエタスにバルバロネはかろうじて、その通りだ、と思い苦々しそうにしつつも頷く。

「オレに考えがある。リジェカ公国を、攻め獲るのだ」

突然のシァンドロスの提案に、一同言葉もない。いきなり何を言い出すのだ、と。そもそも、コヴァクスらが旧ヴーゴスネアに来たのは、国を獲るためではない。

「戦争に戦争を重ねろ、と言うのか」

馬鹿にするな、とコヴァクスは言い返した。シァンドロスはコヴァクスの睨みに肩をすくめる仕草をし、軽く笑うと下馬し一同の輪の中に入った。

クネクトヴァとカトゥカは押し黙ったまま成り行きに身を任せている。

「いかに不遜なオレとて、お前たちを盗賊と見なすほど不遜ではないぞ。見損なわないでほしいものだな」

そう前置きして、一同を見渡す。

オンガルリの貴族の子女に騎士、十を少ししか過ぎておらぬ少年と少女、蛮族らしき褐色の肌の女戦士。

(なんとも不ぞろいなあつまりだな)

どういういきさつで知り合ったかは追々聞くとして、まず自分の考えを率直に述べた。

「リジェカの王となり、民に安らぎを与えられるのは、お前たちしかおらぬ。そう思ったからこそ、リジェカを獲れ、と言った。そのために我らも力を貸そう」

第七章　試練はつづく　？

唖然とする一同。

確かにリジェカ、いやヴーゴスネアは荒れている。付け入る隙はありそうである、なによりそのために、国を出てヴーゴスネアに来たのではないか。

しかし早速理想と現実の狭間に落ち込み、いささか前後不覚になっているのも否めない。

国が荒れ国土が荒れ民心も荒れる、ということがどういうことか見せ付けられて、はじめて思い知らされる現実というか。

「そなたたちがこの地に来たのは、なんのためだ。国一つ獲れぬようで、どうして大義が成し遂げられる」

「……」

コヴァクスらは口をつぐんで黙り込んだ。シァンドロスの言うとおりだった。

拳を強く握りしめる。

「わかった。力を貸せ」

と、コヴァクスは言った。

「よろしい。力を貸そう」

ニコレットやソシエタスは、何を言うんだ、と言いたそうにコヴァクスを見ている。しかしコヴァクスの眼光は鋭く、反論を許さない。

（これしかない）

その判断が正しいとか、間違っているとか、もうそんなことは問題ではなかった。ゆくしかない、それのみであった。

ニコレットは色違いの瞳を揺らし、シァンドロスをせかす兄を見据えている。

それに気付かぬコヴァクスではない。しかし、敢えて無視した。

ソシエタスも、バルバロネも、現実を受け入れることにした。

ただカトゥカとクネクトヴァは、意志定まらず。
が、これは無視した。最初から戦力には入れていない。
「で、どうするんだ。このまま、リジェカ王のいる城へ攻め込むのか」
「まさか。それは無謀というものだ」
わずかばかりの人数で国を出ているのに似合わぬ言い草である。
だがその通りでもある。シァンドロスは話を持ち出した時点で、何か考えがあったようだ。
ふと、ニコレットを見た。
身体から力が抜けて、疲れているようだ。無理もないことだ。その金髪が、力なく垂れ下がり頬に張り付いている。
「まずは今日一日は休む。出発は明日だ。英気を養え」
王太子そのものの命令であった。コヴァクスは内心舌打ちする思いをおさえ、頷く。
それからシァンドロスはペーハスティルオーンに命じ、またペーハスティルオーンは五十人からなる神雕軍の兵士たちに休養を伝えた。
自然彼らの顔がほころぶ。兵士は国を出てから走り続け戦い続けてきたのだ、一日の休みはありがたかった。
兵士たちは思い思いに家屋を物色し、または狩りに行く者もあった。
それをソシエタスは複雑な心境で眺めていた。
望みがかなえば、戻ったコヴァクスとニコレットと、そして赤い兵団とともに安全なオンガルリの難民避難地へとゆけたのに。
自分たちのことは、冬が来ようがどうにでもなる。
しかし、思わぬ成り行きからリジェカを攻め獲る方向にいってしまった。
いったいどうやってリジェカを攻め獲るというのだろう。
シァンドロスは不敵な笑みをうかべ、ペーハスティルオーンをともないながら、

「来い。今夜はゆっくり話そう」
とコヴァクスらを招いた。
集落で一番大きな家へ、当然という風に入ろうとすると、ペーハスティルオーンをはじめ部下らがまず入り中を見回り安全を確認するとともに、一晩寝泊りが出来るよう家の中の整理整頓をはじめた。
といっても、中には使えそうなものはなく廃墟と化していたが。だが屋根はある。いかに王太子とはいえ、戦場を遊びの庭として育ったためか床に寝転がることさえ平気そうだった。
満足げに中に入り、荒れた家具がわずかに残る家の中を見回す。
二階建てのその家は、一階はそれなりに広い。シァンドロスは床にすわると、ペーハスティルオーンも続いて座り、コヴァクスらも続き、輪になって座る。
兵士が一人、杯と器をくばり、また別の兵士が杯に酒をそそぎ兵糧用の干し肉を器に置いてゆく。
よく訓練されたことだった。
玄関には兵士が二名、槍を持って立っている。それ以外にも、十名ほど兵士が警護についている。
廃墟の家は、シァンドロスが入った途端にまるで城塞のようになった。
またシァンドロスが発するのか、寒々としていた家の中の空気はやや熱をおび、明るささえ増したようだった。
威光とでもいおうか、シァンドロスにはそれがそなわっているようだ。
「リジェカを攻め獲れ、と言ったが、さてそのままリジェカ王を攻めると思ったか」
おかしそうに、シァンドロスは言う。
図星をつかれ、コヴァクスは苦笑し頷く。
「馬鹿正直に、直接王を攻めることはない。そうだな、赤い兵団のことを思い出せ。まずは、お前たちが赤い兵団のようになる必要がある」

「どういうことだ」
酒の入った杯を手にとり、
「まあ、まずは乾杯だ。我らの前途に祝福あらんことを」
話の続きを言うより先に、さっと杯を掲げた。ペーハスティルオーンも掲げる。コヴァクスも遅れじと杯を掲げた。
ニコレットとソシエタス、バルバロネにカトゥカ、クネクトヴァも戸惑い気味に杯を掲げた。
「我らの前途に祝福あらんことを。戦神の加護あらんことを。乾杯！」
言い終わるや掲げた杯を口元にはこび、一気に飲み干す。

第七章　試練はつづく　？

ペーハスティルオーンも当然一気に飲み干し、コヴァクスも負けじと飲み干す。バルバロネも、飲み干した。

他は、ちびちびと、舐めるように酒をすすった。

「さて話だが……」

シァンドロスが腹のうちを語る。それと同時に、それぞれの出自を語り合った。ソシエタスの馬は、あの争いの最中どさくさにまぎれて殺されてしまった、という。

バルバロネといえば、彼女自身が自分の出自をよく知らず。根無し草の傭兵団の中で物心つき、バルバロネと呼ばれていた、ということにシァンドロスは興味津々だった。

「その名、バルバロイ（蛮族）から来てるな。それにその褐色の肌、そなたはるか東方、タールコの東方に位置するタータナーノ国の出のようだな」

「らしいね」

「オレは、そのタータナーノに行ってみたい」

「は……？」

バルバロネは、ぽかんとする。タータナーノに行きたいなど、それにはまずタールコが立ちはだかるというのに。

バルバロネが育ったのは、金でどこにでも雇われる庸兵団で、時にタールコの側につき時に旧ヴーゴスネアの国々についた。タールコの側にいるとき、東方遠征に行かされそこで数名の捕虜を手にした。その一人がバルバロネだった。

バルバロネは語る。

「女の身なもんだから、男に付け狙われてねえ。それがやだったから、斧振り回して傭兵稼業さ。はっはっは」

酒が入り、悲壮感も吹き飛んで。あっけらかんと笑う。ニコレットは気の毒そうにしているが、バルバロネにはむしろ迷惑そうだっ

た。
「その傭兵団も、戦争でしっちゃかめっちゃかにやられてお終い。それから、難民相手に小銭稼ぎ」
と言いながら、金は銅貨一枚も受け取っていない。彼女もまた難民だったのだが、武器を手に取り戦うものだから、護衛の傭兵そのものだった。
「ま、その難民ももういないけどねえ」
しみじみと語る。それを、シァンドロスは、興味津々に見聞きしている。
（おやおや）
ペーハスティルオーンはさりげに、シァンドロスの様子に気付いた。王太子は、ニコレットに続き、バルバロネにもただならぬ興味を抱いたようだった。
（英雄色を好む、とはよく言うものだ）
「それで、王太子のお考えは、本気で言っているものでございますか」
話が横にそれそうなので、ソシエタスはさりげに戻す。
コヴァクスらは、聞き漏らすまいと聞き入っていたが。話を聞き、しかめっ面のまま、
「うーむ」
と酒を飲む以外のことはしなかった。
考えつかなかった。
一瞬、「馬鹿にするな！」と飛び上がりそうにもなった。が、どうにか堪えた。
「なまじ王侯貴族の力を当てにしても、ろくなことがないからな」
自分こそ王侯貴族ではないか。しかしシァンドロスは、妙にそこらへんの自覚がない。それは新興勢力の王の王太子であるからだろうか。
「赤い兵団のようになる、とはそのことだったのですな」
「そうだ。ソシエタス、といったな。お前は話のわかる男のようだ」

「いえ……」
シァンドロスの話を聞いて、コヴァクスは、ふうとため息をついた。
「やろう」
もう、その一点張りである。他に道が、あるかもしれない、しかし見つけられない以上は、シァンドロスの提案を受けるしかない。
コヴァクスは、これほどまでに今の自分の立場を、惨め、と思ったこともない。しかし、自由、とも少しながら思っていた。
いわば、
「ままよ」
と成り行きの勢いにまかせていた。
もしドラゴン騎士団健在であるならば出来ないことではある。死者の国で父や母がどう思うかわからぬが、どうにも止められないものを、コヴァクスは感じて仕方がなかった。
ニコレットは、無言。コヴァクスほどでないにしても、ほぼ同じ考えのようだ。
しかし、シァンドロスの視線が気になる。
それが気になって、静かにもの言わず視線を合わせないようにしていた。

第八章　革命　？

翌朝。

ほどよく飲み、食べて、ゆっくりと休養をとり朝日が昇るとともに目を覚ます。

久々の、爽快な朝だった。

シァンドロスはさっぱりした顔をして、整列する神雕軍の前に立つ。

その横にコヴァクス、ニコレット、ソシエタスにバルバロネ、クネクトヴァ、カトゥカ。これらは、コヴァクスとバルバロネをのぞき、神妙な顔をしている。

神雕軍の兵士がそれぞれの愛馬の手綱を引き、主に託せば、シァンドロスらは威勢よく愛馬に跨り。それに神雕軍の騎士も続く。

シァンドロスの愛馬、グリフォンも意気軒昂に鼻息は荒い。

「いざゆかん」

わずか五十余の人数であるのに、まるで大軍でも指揮するかのようにシァンドロスは大喝して、先頭で駒を進める。

ゆくさきは、グロヴァーニク地方。

そこはリジェカの南西方にあり、街もあるが山もあり、その山には、山賊がこもり周囲に威を撒き散らしているという。

リジェカの王ポレアスは軍隊を派遣したものの、敢え無く敗退。

グロヴァーニクの太守は王に付き従い手柄を立てることばかり考えて、権力争いのための戦争にやっきになって、グロヴァーニクの盗賊たちはほったらかし状態であるという。

そんなことだから、跳梁跋扈のしたい放題。

それでどうなったのか。

それは、いやというほど見せ付けられた。

シァンドロスが語ったことは、こうだ。

なまじ王侯貴族の力を借りれば、恩返しを強要され、無益な戦争

に駆り出されかねない。それを防ぐためには、独自の軍事力をもつしかないが、その軍事力をどうやって手に入れるのかと言えば。

「このご時勢。盗賊山賊など目隠して歩いても探り当てられるほど溢れている。それらを倒せば、武器や食料が手に入る。さらに、力あるものが新たに現れたとなればその下につきたいという者も出、軍隊をも手に入れられよう。それがオレの考えだ」

これは下手をすれば、盗賊山賊働きをしていた悪者を仲間にしかねない、いや盗賊山賊そのものの考えではないか。

騎士のすることではない。

危ない考えであると、ニコレットは危惧をしめしたが。

「改心すればよし。せねば、斬れ」

これでおしまいである。

万が一負けたら、など考えず、自分たちが勝つという前提でものを考えている。

大胆不敵というのか。

いや、これしきのことで大胆など言っては、シァンドロスは「そんな小さいことで」と笑うであろう。

しかし、でも、と反論を試みたものの、兄コヴァクスが、「やろう」の一点張りなものだから、反論反対のしようがなかった。

（お父さま、お母さま、お許し下さい）

心の中で父母に詫び、ニコレットは兄の後ろをついていった。

兄の背中から、なにか、炎でも噴き出すのではないかと思わせるものがただよっている。

五十余の軍勢は、疾風のように駆けた。

わずか五十余にすぎぬ小勢でありながら、自信に満ち溢れ。

それは人を生み文明を生んだとされる神話の地、エラシア地方に伝わる神話の英雄たちの物語の真っ只中にいるかのように。

いや物語の真っ只中どころか、自分たちを神話の英雄としているかのように。

見よ、シァンドロスの輝かしい顔を。

まだらの駿馬グリフォンは、シァンドロスを乗せ後ろを置いてゆきかねぬ勢いで疾駆する。それに対し兄はどうだ。焦りと悲壮感でいっぱいになり、必死になってシァンドロスの後ろを駆けている。

一人は夢の中に、一人は霧の中に。

色違いの瞳は、兄と王太子の背中を交互にみつめる。

不意にシァンドロスは後ろを振り返った。

「意気込め。勝利の女神ナイケニーは祝福の接吻をしたくてうずうずし、我々を待ちわびているぞ」

それは兵士たちに語りかけているとともに、コヴァクスにも語りかけていた。

（まあ）

勝利の女神ナイケニーを、まるで娼婦のように言うのか、とニコレットは内心呆れた。

気を張り詰めているコヴァクスの心をほぐそうと、シァンドロスなりに気配りしたのだろが、コヴァクスは無言。

「ふっ……」

ひたむきに前を見つめるコヴァクスに、シァンドロスはやれやれとおかしそうに前に向き直った。

その直前、ニコレットを見つめた。

ニコレットはそれを無視した。その次にバルバロネに視線が移り、バルバロネはいたずらっぽく笑い返した。

戦乱で荒れた荒野を駆けて、グロヴァーニクが近づく。

その間、見たくないものを何度も目にした。

戦乱で荒れた土地に、難民たち。

コヴァクスや神雕軍が駆けるのを目にした人々は、目を丸くし、何事かと驚き呆然と見送ってゆく。

となれば、リジェカの役人なり太守なりの耳に入るであろう。

「我々は義によって、グロヴァーニクにはびこる山賊どもを退治しにゆく。待っていろ！」

コヴァクスはあらん限りの声で叫んだ。

やましいことはない。なら堂々としておればよいのだ。
「そうだ、義によって、賊をたおす」
シァンドロスも続いて叫んだ。
そしてそのあとは……。
さすがに言わない。
まさか堂々と、
「現リジェカ政権をたおし、自分たちがリジェカの王になる」
とは言えなかった。それを言えば賊や政敵に向けられている矛先が自分たちに来るのはわかりきっていた。
まだ力を十分もっていない、まずは手ごろな賊を平らげ、それらを吸収して力とするのだ。

第八章　革命　？

シァンドロス率いる神雕軍と、その力を借りるドラゴン騎士団のコヴァクスたち。

勇ましく駒を進める一方で、歩兵もいるためそれほど飛ばすことはできず。進んでは休み、進んでは休みを繰り返していた。

コヴァクスはまるで時が止まっているかのように焦燥感をにじませている。その一方でシァンドロスは物見遊山のような気分で上機嫌だ。神雕軍の兵たちも、腕が鳴ると手に唾して得物を強く握り、賊との戦いを楽しみにしている。

後ろの方で、ソシエタスはカトゥカとクネクトバの面倒を見ている。馬を失い徒歩とならざるを得ない彼は幼いふたりの面倒を見させられていた。

おさないふたりは、心ここにあらずという顔をして、ソシエタスは気の毒に思いながら、よく面倒を見た。

バルバロネといえば、彼女も徒歩ながらよく健脚を見せて、面白そうにシァンドロスを見ている。

知り合って間もない男を興味津々と見つめるバルバロネを、ニコレットは不思議に思い、内心驚きもする。

出発から三日、グロヴァーニクに着いた。

北方に高い山々が長城のようにそびえている。その山を越えれば、オンガルリだ。コヴァクスらは、胸に沁みるものを覚えた。が、それを振り切った。

グロヴァーニクは北方に山がそびえている以外は比較的平らで、行軍はさほど難しくはなかった。

行軍する荒野の道はふたまたにわかれている。

右に行けば、グロヴァーニク地方の中心街フィウメにゆき、左にゆけばアウトモタードロム山という小山に続く。

地理に精通している者が周囲の地形や山の形を見定め、グロヴァ

ーニクに着いたことを告げる。
その男はガッリアスネスといい、騎馬兵であるとともに、つねに書をしたためるための羊皮紙にペン、インクを携えていた。
ガッリアスネス三十五歳はコヴァクスやシァンドロスより頭一つ抜きん出た長身に鍛え上げられた身体を持つ精悍な男で、その黒髪に黒い瞳はつねに艶よく、黒光りに光っていた。
が、その面持ちは優しく、体躯と裏腹に人を払いのけるような威圧はない。
シァンドロスに仕える前は、斥候として主に北方を探索し、その報告をよくしたためていた。ということは、修羅場をくぐり抜ける力と洞察力と、それを表現する文章力がある。
シァンドロスは彼のその素質を買い、自ら編成した神雕軍に入れ、己の業績を後世に伝える書物を書き残させるために同行させている。
「しかしまあ、私が来たときから、随分と荒れてしまっていますな」
とガッリアスネスは嘆息し、また、
「よもや、オンガルリがそのようなことになっているとは。私が来ていたとき、ドラゴン騎士団は、大龍公は本当に素晴らしかったのに」
とももらした。
オンガルリにも来たことがあるという。
斥候をつとめる者ですら見抜けぬ国や人の運命やゆくすえに、ガッリアスネスは素直に驚き、大龍公の子である小龍公と小龍公女と行動をともにする自らの運命にも驚きを隠せないようだった。
「こたびの戦いで勝利し、道を大きく拓くことが出来れば、私は、あなたたちを題材にして、後世に語り継がれる英雄の物語を書き記しましょう」
と、グロヴァーニクを目指す途中コヴァクスに言った。
彼の言葉にコヴァクスは頷き、頼む、と言った。
ガッリアスネスはシァンドロスに比べて付き合いやすい男だった。
ともあれ、ガッリアスネスが、グロヴァーニクに到着したことを

つげるとともに、一行は慌しくなる。
「このグロヴァーニクのアウトモタードロム山に、エリプマヴという輩がならず者を率いて立てこもり山賊働きをしていましたが。いまだ健在……。あやつの所業は、人の生き血をすするがごとく」
「それはヴーゴスネアの王侯貴族どもも同じであろう」
すかさず突っ込みを入れるシァンドロス。ガッリアスネスは冷静に「御意」と受け流す。
ざっ。
と音がした。と思えば、茂みの中男が一人、目を剥いてこちらを見据えており。
「誰だ！」
と兵士の一人が叫ぶと、脱兎のごとく逃げ出す。
「追え」
シァンドロスは余裕をもって男の後をつける。男は必死の思いで逃げまくり、その甲斐あってなかなかの俊足ぶりを見せた。
シァンドロスは不敵に笑って、しばらく追ったあと、
「とまれ！」
と号令をかけ、隊の足を止めた。
「なぜとめる」
コヴァクスは目をいからしシァンドロスに詰め寄る。しかし、王太子は不敵な笑みを浮かべコヴァクスの様子などおかまいない。
「心配するな。いずれ、あの男はもどってくる。大勢の友とともにな」
「なんだと？」
「わからぬか。よくそれで軍を率いたものだ」
「お待ちを。その言葉はあまりに無礼。対等の仲間として礼節を欠いてはおりませぬか。さあ、お兄さまに無礼のお詫びを」
高飛車なシァンドロスに、ニコレットは色違いの瞳を光らせて抗議の声を上げた。
形の良い眉も逆立ち、じっとシァンドロスを見据える。というこ

とは、色違いの瞳にうつるシァンドロスは、深い興味を持った女性に見つめられているとご満悦の呈で、ニコレットを見返していた。
「や、そうであったな。許せ、口が過ぎた」
「いや、かまわぬ……」
コヴァクスはばつが悪そうに頷く。
神雕軍の兵士のほとんどは、忠誠を誓う王太子に迫るニコレットを鋭い眼差しで見ていた。
が、ペーハスティルオーンとガッリアスネス、またシァンドロスお気に入りの騎士の一人イギィプトマイオス二十二歳は互いに視線を交し合って、おかしそうに笑う。
バルバロネといえば、これもまたいたずらっぽく笑っている。で、当のシァンドロスも、面白そうにしている。主が全然気にしていないどころか、友好的なので神雕軍の兵士たちも必要以上に怒るそぶりは見せるのをやめた。
ソシエタスにクネクトヴァ、カトゥカはその様子を、呆気にとられて見ていた。

ふと、コヴァクスはシァンドロスの真意をようやく汲み取った。
「そうか、ここで、男が仲間を引き連れてくるのを待つのだな」
「そうだ。山塞にこもられたら面倒なのでな」
「しかし、来るでしょうか」
ニコレットは心配そうだ。もし来なければ無駄待ちだ。しかしシァンドロスは絶対の自信があるようだった。
「さて、これから、奴らが来るまでをどう過ごす」
すいっと流すように、コヴァクスに意見をうかがった。用兵術を見せてくれ、と言っているのは察しがついた。
そばでニコレットはじっと兄を見つめている。
「そうだな……」
ぴん、と思いつき。騎馬隊に目を向ける。
「騎乗の者は、我らを残して、すべてさがれ。我らが見えなくなる

ところまで、さがれ」
「ほう、なぜそうする」
「知れたこと。敵を油断させるためです」
すかさずニコレットが兄の考えを代弁する。シァンドロスは笑顔で頷く。
「つまりは、騎兵がなく歩兵のみであるを敵に見せて、安堵させるのだな」
「そこで、賊どもは安心して突っ込んでくる。オレたちも刃を交えながらさがり……」
「後ろに控える騎馬を見せて仰天させるのだな」
「そうだ」
「しかし」
シァンドロスは引っ掛かると言いたげにコヴァクスに問う。
「騎馬隊は見られている。騎馬隊がなければあやしく思い用心するのではないかな」
「それは大丈夫だろう」
「なぜだ」
「あの男はひどく慌てていた。見たか、あの目の剥きようを。まるで目の前に悪魔がいるかのようで、走り出す前から手は空(くう)をつかもうと震えていた。それから、腰に巻いた布を大事そうに抑えて走っていたな」
「うむ」
男が目を剥き驚いて逃げ出したのは一瞬の出来事だ。その一瞬で、男の驚いた様をよく覚えているとは。
「おそらく一仕事しての帰りにでくわしただけで、見張りではあるまい」
腰に巻いた布には、ぶんどったお宝でもつめこんでいただろう。完全に恐慌を来たしていた男が仲間を引き連れてきたところで、騎馬隊がなくても、あれは見間違いであったか、と深く考えずに安堵する、というのを、コヴァクスは思い描いていた。

「それより、時間がありませぬ。騎馬隊を」
「そうだな」
シァンドロスは騎馬隊にさがるように命じ、騎馬隊もそれに従った。ソシエタスやバルバロネもクネクトヴァとカトゥカをともなって騎馬隊とともにさがった。
騎馬隊が見えなくなるのを見送り、槍を構えた歩兵たちを配置する。一列の人数は十人。以下十人の列を四つ並べて。
先頭の槍ぶすまが、さあ来いと賊の到来を待ち構えていた。二列目の槍から徐々に起き上がって四列目には、穂先を天に向けて堂々とそそり立つ。
シァンドロスにコヴァクス、ニコレットはすでに剣を抜きはなち歩兵たちの後ろで賊を待ち構えている。
先頭に立ちたかったコヴァクスにニコレットだが、ここは後ろで待てとシァンドロスに言われてそれに従った。
この歩兵たちがどういう働きを見せてくれるのが、大変興味があった。
「この陣形はファランクスという。彼らの働きを楽しみにしていろ」
シァンドロスは余裕の笑顔だ。コヴァクスにニコレットは、勝てる見込みはあるが、笑顔をつくる余裕はなかった。
やがて、ざわめく声に轟く馬蹄の音が響きだす。

第八章　革命　？

ファランクス陣形の槍ぶすまが硬直し、いまにも飛び出しそうな緊張を見せる。

シァンドロス、コヴァクス、ニコレットは剣を強く握りしめる。

シァンドロスは楽しそうに不敵な笑みを。コヴァクスとニコレットは背水の陣の思いで。

「あいつらだ！」

という叫び。

向こうから十数頭の騎馬を含めた武装集団があらわれ、こちらに突っ込んでくる。

「おい、馬がいねえぜ」

「知るか。いつものように、やっちまえ！」

いつもどおりに、男たちは得物を握りしめ突っ込む。数は百ほどだろうか。その中にはあの逃げた男もいた。

「笑止」

シァンドロスは号令をかけるより先に、こらえきれずに笑った。

集団は軍隊とは言いがたい統率のないばらばらの動きで突っ込んでくる。槍を構える神雕軍の兵士たちも余裕満々と集団を見据えていた。

「コヴァクス、指揮を」

シァンドロスにうながされ、

「かかれ！」

と剣を采配がわりに、勢いよく切っ先を集団にむけ、号令を下した。

さすれば神雕軍のファランクス陣形の槍ぶすまは陣形をくずさないととのった動きを見せ、怒号を放ち集団に突っ込んでゆき。

槍ぶすまは相手の得物をすりぬけ、胴体を貫く。

一気に十人、前列の兵士一人一突きで相手を一人しとめると、槍

に貫かれた相手の身体を振り払いながらすかさず二つにわかれ二列目に道をあける。
同じように、二列目の槍ぶすまはすかさず一人一突きで一人をしとめ。しめて、一気に二十人からの敵をしとめた。
武装集団に動揺が広がる。
「ちぇ」
コヴァクスは忌々しく舌打ちする。
「ニコレット、後方に控える騎馬隊を呼べ。策は無用だった」
「はい」
兄の指示を受け、ニコレットは愛馬・白龍号を駆けさせる。
シァンドロスが「笑止」と笑ったとおり、集団は最初の槍ぶすまに怖じてさっさと逃げ出す始末。
（そこまで弱いとは）
相手の力量がわからず、策を講じたのだが、その必要もなかった。
「止まれ！」
コヴァクスは神雕軍の兵士たちに命じ、追うのをやめさせた。神雕軍は号令どおり、ぴたりとうごきをとめ、逃げる武装集団を見送ってゆく。
どっと怒涛のような馬蹄の響きとともに、一陣の風と騎馬隊は駆け武装集団を追いかけてゆく。
馬蹄の響きにおそれをなし、武装集団は恥じも外聞もなく、命からがらにげるのみ。
「なんだあいつら、てんで弱いじゃないか」
後ろにさがっていたバルバロネは呆れたように言う。
しかしコヴァクスは面白くなさそうだ。
シァンドロスは面白そうだが、感想はコヴァクスと同じようだ。
「こやつらごときに、策など無用。むしろ策を講じた我らの用心を恥じるべきだな」
騎馬隊、といっても十騎たらずの騎士たちは後ろから容赦なく武装集団を討ち取ってゆく。

「ぎゃ」
という悲鳴をあげ、斃れたのはあの逃げた男だった。しとめたのはイギィプトマイオスだった。
ペーハスティルオーンは同僚を見つめ、ふうと一つため息。
「くだらぬ相手のために、剣を汚すとは」
忌々しそうに剣を振り血を払う。
その剣風に吹かれるように、武装集団は散り散りになり、神雕軍の兵たちは馬鹿馬鹿しくなって追うのをやめた。

「オレも幾度か戦場を駆け抜けたが、あやつらほど弱い者どもは初めてだ」
「そうだな。山賊盗賊の類は、弱い。あっけないほどにな」
「仕方ないさ。あいつら、もとは平民なんだもん」
コヴァクスとシァンドロスの話に割って入るのは、バルバロネだった。
「戦争でいっさいがっさいなくしちまって、それでやけのやんぱちになって、頭がおかしくなっちまったのさ」
「……」
コヴァクス無言。彼らは元は平民だったというのか。なら、本来は守るべき人々であったということではないか。
ニコレットも気まずそうにしている。
「あやつらに情けなどいらぬ」
シァンドロスは冷ややかだ。
コヴァクスは敢えて反論しなかった。どう反論してよいのかわからなかった。しかしバルバロネはシァンドロスと同意見だった。
斧でかるく肩をたたきながら、吐き捨てるように、
「どさくさにまぎれて、女を犯す、金を奪う、人を殺す。やりたい放題さ。もとが平民と言ったって、根があくどいヤツらなんだよ」
そうだろうか。とニコレットは言いたかった。が、彼女もまた色違いの瞳を揺らし無言で愛馬を歩かせる。

神雕軍は慌てずゆっくりと、アウトモタードロム山へと進んだ。
相手の力量もわかったことであるし、慌てることはなかった。
進むにつれ、こぶのように盛り上がった小山が見えてきた。
アウトモタードロム山だ。
アウトモタードロム山の頂きには、小さいながらも石造りのいかめしい要塞がそびえている。あの中に悪党どもがおり、また武器や食料もある。
食事の支度をしているのか、煙が上がっている。いやそれとも、戦いのの狼煙か。
アウトモタードロム山自体は、愛嬌さえ感じるこぶのような小山なのだが、要塞は石のレンガで頑丈に組み立てられ、その様相もちょっとした城のようで山賊が建てたとは思えなかった。
「このアウトモタードロム山の要塞は、もとは若い騎士の訓練のために造られたものでございますが、この乱世、山賊どもにのっとられ敢え無くも山賊の根城としてのはずかしめを受けております」
と言うのはガッリアスネスだった。
「騎士としての使命感と希望の城が、いまや山賊の根城か」
イギィプトマイオスは哀れそうにつぶやいたあと、不敵にシァンドロスを見据え、それからコヴァクスとニコレットを見据えた。
「だが、今日より革命の城となるのですな。小龍公、小龍公女、励まれよ！」
突然何を言い出すのだ、と思いつつ、冗談ではなく善意で言っているイギィプトマイオスに、コヴァクスとニコレットは頷いた。
（革命か……）
そうだ、自分たちがしようとしているのは、革命ではないのか。
リジェカは権力に取り憑かれた王侯貴族のための戦乱によって荒れて、民も苦しみ流民として彷徨うか、山賊として狼藉を働くか、いずれでなくとも、いつ全てが失われるのかわからぬ不安に苛まされて、ともすれば人間としての尊厳を捨てさせられる人生を歩まされている。

それに終止符を打つのだ。
そのためには、独自の戦力を持ちそれを新生ドラゴン騎士団とし、心改めぬ王侯貴族を追い、民に安寧をもたらさねばならぬ。
まさに革命ではないか。
国を追われた身でありながら、他国に革命を起こすことになろうとは。
「そら、希望がやって来たぞ」
シァンドロスは冗談めかして指差す先に、武装集団が迫ってくる。
仲間たちがやられて、その意趣返しのために総力を挙げて打って出たのだろう。
先頭には、ぼろをまとうそまつな身なりながらも、筋骨たくましい大馬に打ち跨り、もろ手に大剣を握りしめた、これまた筋骨たくましい大柄な男がこちらに向かって突っ込んできていた。
「あやつがエリプマヴです」
ガッリアスネスが指差して言う。他は知らず、さすが頭領だけあってエリプマヴは強そうだ。
その力量を察して、すこしばかりの緊張が走った。
「希望は己の手で掴み取るものだ。そうだろう、コヴァクス」
シァンドロスの言葉に、頷きもせず、
「手出し無用！」
とエリプマヴ目掛けて愛馬を突っ走らせた。

コヴァクスは剣をかかげ、エリプマヴめがけて突っ込む。
後ろで、お兄さま！　と叫ぶニコレットの声が聞こえた。その手綱はシァンドロスが掴み、ついてゆかせない。
「そなたは兄を信じぬのか」
「信じております。しかし、お兄さまおひとりにあの山賊ども。あまりにも不利。それなのに、あなたたちは動いてはくれぬのですか！」
その通り、神雕軍は動かぬ。コヴァクスの背中を見送るばかり。

シァンドロスが号令を下さぬので、動くに動けぬのだ。
希望は己の手で掴み取る、とは、ひとりでゆけ、ということだったのか。
色違いの瞳を光らせ、シァンドロスを見据えるニコレット。
ソシエタスは気をもみ成り行きを見守っている。
クネクトヴァとカトゥカはバルバロネがよく面倒を見ている。
幼いふたりは、心配そうにコヴァクスの背中を見送るしかすべがなかった。
そうしているうちに、コヴァクスは武装集団の真っ只中につっこみ、我武者羅に剣を振るった。
「神よ、小龍公を守りたまえ」
両手をかたく握り合わせ、クネクトヴァは神に祈った。カトゥカも同じように、神に祈った。
バルバロネは不思議そうにしている。
「神なんか信じてるのかい、あんたたち」
とは言わない。
さすがにそれを言うのははばかられたが、内心、あてにならないものをよくもまあ、と呆れていた。
バルバロネは無神論者だった。
それは別として、コヴァクスひとりに行かせるのは無理があるとは思っていた。
自分たちも助太刀にゆかねば、いかに奮闘しようとも、いずれ数に圧されてしまうのではないか。
エリプマヴは卑怯にも、先頭に立ちながらさっさと武装集団の中に隠れてしまった。
コヴァクスは勇戦し雑魚を吹き飛ばす。
「エリプマヴとやら、貴様も男ならオレと雌雄を決せぬかッ！」
雑魚をなぎ払いながら、エリプマヴを追うも、やつは子分の後ろに隠れるのみ。武装集団の数はさきほどと同じ百ほどか。
「馬鹿野郎めッ。真正直にやりあうものか。きれいごとの好きなお

花畑の騎士様よ」
　あからさまな嘲笑をコヴァクスにぶつけながら、子分どもにばかり戦わせてエリプマヴは見かけに似合わず兎のようにあちこちを駆け回っている。
「卑怯者めッ！」
「卑怯で結構。誇りなんぞで飯が食えるか」
「誇りなんぞで、女が抱けるかってんだ」
　集団の中からそんな声が聞こえた。子分どもも、戦うのはコヴァクスひとりと侮りきっていた。
「なんでえなんでえ、あいつらは張子の虎かい」
　動こうとしない神雕軍に向けても嘲笑が飛ぶ。それが聞こえぬわけではないが、
「聞いたか。天に向けて唾が吐かれた」
　とシァンドロスは言い返すのみ。
「その手を放して！」
「ならぬ」
「なぜ？　対等の仲間の言うことが聞けないの」
「対等の仲間であるからこそ、だ」
　シァンドロスの手はニコレットの愛馬・白龍号の手綱をかたく握りしめている。
　ソシエタスも、さすがにバルバロネも、気が気でない。いかにコヴァクスが勇敢だとて、ひとりで百人からを討ち果たせるとは思えない。
　とはいえ、勝手に動けば、神雕軍はどうするのか。
　コヴァクスは奮戦するも、数に翻弄されている。武装集団の子分どもも少しは頭を使い、本気でコヴァクスと当たらず、取り囲んでは剣先や槍の穂先を突き出し挑発しては逃げ出し、また取り囲んでは逃げ出しを繰り返している。
　最初こそ雑魚を吹き飛ばす勢いを見せたものの、狡猾にも、敵は剣風をかわすすべを見出したようだ。

「なんという卑劣！」
コヴァクス強く歯軋りする。
いかににっくきタールコでさえ、そのような卑怯は見せなかったというのに。このまま行けばコヴァクスは疲れ、討たれてしまう危険があった。
「ほう、やつら少しは頭を使うようだ」
感心したようにシァンドロスはつぶやく。
色違いの瞳は鋭く光り、ニコレットは奥歯を噛みしめ、愛馬から飛び降りコヴァクスの助太刀に走った。
「ええい、オレもゆくぞ！」
「あたしもだよ！」
小龍公女ニコレットが駆けるを見て、ソシエタスとバルバロネも駆ける。

第八章　革命　？

剣を握りしめて駆けるニコレットの背中を見、シァンドロスはふっと笑う。

「我らもゆくぞ！　雑魚どもを蹴散らせ！」

白龍号の手綱を放し、愛馬・グリフォンを駆けさせアウトモタードロム山の山賊どもにむかって突っ込めば、神雕軍も心得たりといっせいに喚声をあげるや槍ぶすまをなし、騎馬馬蹄を轟かせてシァンドロスに続く。

「あっ、白龍号！」

白馬が追いつくを見て、ニコレットは急ぎ飛び乗り、兄の助太刀に向かう。駆け足でソシエタス、バルバロネもつづき。

クネクトヴァとカトゥカは出番なしと成り行きを見守った。

「小癪な。数はオレたちが多いんだ、返り討ちにしてやれ！」

エリプマヴは大剣を振り回し子分どもを率いて神雕軍に突っ込む。コヴァクスをからかっていた者どもも、親分の命令に従い神雕軍に向かった。

武装の山賊どもの一団の中に、ニコレットは飛び込み、山賊どもを斬りふせてゆく。コヴァクスも妹や神雕軍が来るを見て、気を取り直し剣を振るう。

ドラゴン騎士団の兄と妹は縦横に駆け回り武装集団の山賊どもを蹴散らしてゆく。所詮、敵ではなかった。

それは剣風に吹かれる枯れ葉のようだった。

そこへ、神雕軍の騎馬、ファランクスの槍ぶすまが来たとなれば、壊滅もあっけないものだった。

「下衆の大将は残しておけ！」

シァンドロスは痛快を通り越し戦い拍子抜けしながら、そう号令を下した。

言うまでもない、エリプマヴは、コヴァクスに討たせるのだ。ひ

ょっとしたら、強いかもしれぬ。しかし、山賊の大将くらいは討ち取れぬようで、どうしてこれからの戦いを戦い抜けよう。

山賊どもといえば、今までにない強い相手にぶち当たり、さっきと同じように悲惨な思いをしながら蜘蛛の子を散らすように逃げ惑っていた。

それを見てエリプマヴが怖じるかと思われたが。

「お、親分、もうだめだ」

という子分がいた。エリプマヴはじっとそいつをにらんだと思うと、大剣ひと振り、子分の頭を叩き潰した。

「逃げるんじゃねえッ！」

逃げ惑う子分どもをもうひとり大剣で叩き潰す。大剣は相当なまくらのようで、剣というより鉄の棍棒のようだった。が、破壊力大なりは、見た目どおりで伊達ではないようだ。

これには子分どももたまったものではなく、神雕軍に追われながら恐怖で身動きできず、そのまま討たれてしまう者が続出した。

しかし、シァンドロスはじめ神雕軍にしてみれば、そんなことは関係なかった。生かしてもどうしようもない奴らだ、情けは無用とひらめく刃は容赦しなかった。

中には、

「ゆ、許してくれ、もう山賊はやめる」

と命乞いをする者もいた。ソシエタスはそれを聞き、

「許しを乞う者を討つは騎士の所業にあらず」

と剣をおさめたが、そのそばから、シァンドロスにペーハスティルオーン、イギィプトマイオスが己の刃で始末する有様。バルバロネもまた、容赦なかった。

ガッリアスネスはしとめそこなった振りをして逃がしてやっているようだが、それは少数で、ほとんどは容赦なく、山賊どもを討ち果たしてゆき。

その数は、あっというまに半数の五十を切った。

（これは……）

ニコレットとソシエタスは、胸に一抹の不安が湧くのを禁じえなかった。どうも、戦いというものにおいて、オンガルリとソケドキアでは、隔たりがあるようだ。それが今後どう影響するのであろうか。

エリプマヴは、討たれる子分に無慈悲で冷たい眼差しを送るのみ。

「お前、自分の部下を……」

「け、これだからお花畑の騎士様はよ」

驚くコヴァクスにあからさまな嘲笑をはなち、エリプマヴはコヴァクスのもとへ向かう。

「オレ様と一騎打ちがしてえんだろう。いいぜ、相手になってやる」

子分の返り血が口元に飛び、骨太ながらもその醜い容貌とあいまって、人の生き血をすする吸血鬼さながらの醜さだった。

「リジェカの若え騎士様どもも、同じだったなあ。やれ使命感だのなんだのって、目をきらきら輝かせてよ、そのくせてんで弱えでやんの。所詮騎士なんざそんなものだぜ、糞の役にもたたねえ腰の飾り物ぶらさげてるだけの、おぼっちゃまよ」

コヴァクスは、奥歯を噛みしめ、剣を構えなおす。

「オレは、リジェカの騎士ではないが、騎士としてその言葉聞き捨てならぬ」

「ほう、じゃどこの騎士様だって？」

「オンガルリ王国ドラゴン騎士団。小龍公、コヴァクス」

「何？」

口元の返り血を舌で舐めとりながら、耳を疑った。オンガルリ王国のドラゴン騎士団、だと。名前くらいは知っているが、なぜドラゴン騎士団がここに。

にわかには信じられなかった。

「てめえ、かたりか？」

「貴様のような下衆に、言うことはない」

気がつけば武装集団の山賊どもは遠くへ逃げて、神雕軍はそれを無視してコヴァクスとエリプマヴを中心に円陣を組んでいた。

ニコレットにソシエタス、バルバロネは中心のふたりを見据え、シァンドロスのそばで成り行きを見守ろうとしていた。
しかし、このエリプマヴという男、子分どもも皆逃げて一人きりで敵に囲まれているというのに、恐怖を感じていないのか、へらへらと笑っている。
「こやつ、頭がおかしいのか」
イギィプトマイオスが忌々しそうにつぶやき、ペーハスティルオーンがそれに頷く。
シァンドロスも、エリプマヴの様子のおかしさには、少しくらい嫌悪感を感じているようで、眉をしかめている。
となれば、ニコレットたちや神雕軍の兵士たちはそれ以上に嫌悪感を感じている。
「エリプマヴとやら、敢えて言おう、貴様らはカスであると。そのカスどもを、我らは討ちに来た。しかし、コヴァクスとの一騎打ちに勝てば、退いてやる」
それ以上は言わず、そう言いながら内心、
(コヴァクスが敗れれば、そのまま討ち果たしてやる)
と決心していた。
理由は知らず、なんとも珍妙な討伐隊だ、と思いつつ、エリプマヴは、
「がはは！」
と笑って応えた。
「そんなもん信じられるかよ。どうせ、オレ様を殺したくてうずうずしてるくせによ」
とあからさまにシァンドロスを嘲笑する。
ペーハスティルオーンにイギィプトマイオスは血気に駆られ、危うく飛び出しそうなのをこらえて、
「おお、殺してやる。貴様など、王太子の刃にかかるまでもなく、オレが斬り捨ててやる！」
と叫んだ。

（あの、六魔どもと同じだ）

ニコレットは、ふと六魔を思い出す。あの六魔どもも、同じように、正気とは思えぬ人間たちだった。

エリプマヴは、戦乱の中で生きるうちに、正気を失ってしまったのだろうか。

シァンドロスは心のうちを見透かされ、屈辱を覚え、

「神に祈れ、コヴァクスに討たれるようにな。もしそうでなくば、楽に死なせぬ。地獄の苦しみを味あわせながら、死なせてやる」

剣をエリプマヴに向けて突き出し、あらん限りの声で叫んだ。

第八章　革命　？

「どうした、貴様は舌を動かすしか出来ないのか！」
コヴァクスは剣を振るいエリプマヴに突進したが、にやりと笑われ、その見た目に合わぬ俊敏さでかるく剣風をかわされた。
「来いよ来いよ、おぼっちゃん」
へらへらと笑い、エリプマヴは挑発をしながら、コヴァクスの攻めをかわす。また馬もよい動きをし、龍星号をからかうようにいなき、見た目に合わぬ俊敏な動きを見せる。
コヴァクスは攻め、エリプマヴはかわす。という、一方的な展開になり、まるで風に舞う葉に向かい剣を振るような歯ごたえのなさだった。
とはいえ、気が抜けるということもない。
エリプマヴは腕力は言うに及ばず、反射神経もすぐれている。その馬もまたしかり。
ことに、馬に視線がそそがれた。
（これは、飼いならせばよい軍馬になる）
シァンドロスをはじめ、神雕軍の兵士たちはいつしかエリプマヴの大馬に強い興味を抱くようになっていた。
しかしこの男、もとは何者だったのだろう。さすがにガッリアスネスもそこまではわからない。
だがその汚い言葉遣いからして、平民であったか、それ以下の下僕、奴隷の身分であったか。
最下層の身分の者は虐げられるだけでなく、中にはその悪い境遇のためはみ出し者も出る、あるいは人の心を持ち合わせぬ野獣と化した者も出る。
人間扱いをされなかったため、人間として生きる、ということがどういうことがわからないのだ。
それを思えば、エリプマヴも哀れといえば哀れではある。

と、ガッリアスネスは考えていた。
それはニコレットも同じようだったが、彼女はもっと突っ込んだ考えをしていた。
「エリプマヴ！」
突如、兄の剣風をかわすばかりのエリプマヴの名を叫んだ。コヴァクスは、止めるな！　と言おうとしたが、ニコレットはかまわず続けた。
「そなた、不遇の身ゆえに悪道に堕したのか。それまでのおこないを悔い改め、改心するなら、許してもよい。また望むなら、仲間にしてもよい」
これには、皆驚いた。
突然何を言うのだ、と。
あんな悪人に改心を期待するなど、尋常ではない。しかし、ニコレットの言葉を聞いたクネクトヴァは賛同し、
「小龍公女のおっしゃるとおりです。神は罪を憎めども、人を憎まず。悔い改める者を、許したまう。心を入れ替えて、まっとうな人間として、生きてみませんか」
と言った。
おめでたいことを言う、とバルバロネは内心舌打ちする。
山賊として殺した人間の数は一人や二人ではないのだ。
「ふざけんじゃねえッ！　きれいごとなんざ信じられるか！」
怒号とともに、大剣うなりをあげコヴァクスに襲い掛かった。剣で受ければ折れる、その勢いの強さに咄嗟に身をかわしやりすごし。異様に熱を帯びた、冷たい風が頬を撫でてゆく。
それから、エリプマヴは滅茶苦茶に大剣を振り回した。大馬も主の呪うような気持ちが乗り移ったか、狂ったようにいななき、太い蹄で地を蹴りコヴァクスと龍星号に突っ込んでくる。
今度はコヴァクスは攻めをかわす番だった。
竜巻のように襲い掛かる大剣と大馬の勢いを受けることかなわず、剣を引き、ひとまずは避けることに専念せざるをえなかった。

おお、という喚声があがった。
「見事だ」
シァンドロスは思わずつぶやいた。
エリプマヴにではない、大馬にである。
「エリプマヴ、聞き分けよ！　小龍公女のお慈悲がわからぬか」
ソシエタスは言うが、相手は聞く耳も持たぬ。むしろ慈悲をかけられることに、屈辱を覚えたようだった。
コヴァクスはコヴァクスで言ってやりたいことがあるが、それどころではない。
大剣を避けながら、ひたすら隙をうかがっていた。反射神経にすぐれているとはいえ、その動きは、基本がなっていない。
またいかに体躯に恵まれているとはいえ無限の力があるわけではない。
討ち取る気でいっぱいのコヴァクスの心は、慈悲によって乱れたエリプマヴが、さらに乱れ疲れることを期待し、内心、もっと慈悲の言葉をかけろと、呪詛のように心でつぶやいていた。
「怪力無双ではあっても、そなたは技がなってない。このままでは、お兄さまに討たれるは必定。今ならまだ間に合う、心を改めよ！」
「うるせえ、むかつくんだよ、その上からものを言うのがな」
「これは命令ではない、そなたは対等の人間と思って言っている」
「信じられねえな」
ニコレットの必死の叫びも、エリプマヴは耳を貸さない。
（なぜ）
ニコレットはわからなかった。自分の思いやりが、全然通じないどころか、相手は怒りを増すばかり。
だが滅茶苦茶な大剣の振りっぷりは、ついに、エリプマヴの急所をさらした。上段から勢いよく振りおろされた大剣を、すんでのところでかわしざま、コヴァクスは後ろではなく左ななめ前へと避けて。
「隙あり！」

と叫ぶ避け様に、相手の右わき腹に剣を見舞った。剣には手ごたえがあった。

勢いよくエリプマヴの脇を駆け抜け、咄嗟に振り返れば。

「うーむ」

とエリプマヴはうめき、右のわき腹は血の赤にそまっている。

動きも止まっている。

（いけ、いけいけいけ！）

瞬時に自分にそうけしかけ、二撃目を見舞う。

「お兄さま、駄目！」

という妹の声が聞こえた。しかし聞かなかった。龍星号は駆け、コヴァクスの剣はうなりをあげて風を切り。

はっとして振り向いたエリプマヴの首を刎ねた。

その巨躯は大剣とともに、崩れ落ち。大馬は主を失い、きょとんと立ちすくむ。

「おお！」

神雕軍から大喚声があがった。

シァンドロスの意を察した兵士たちはすぐさま大馬へと駆け、手綱をつかみ逃がさない。

コヴァクスはエリプマヴのかばねを見据え、一瞬瞳を閉じると、目を開けてニコレットのもとへ向かった。

「……」

神雕軍が無邪気に喜んでいるのをよそに、ドラゴン騎士団の兄と妹には、喜びの色はなく無言だった。

色違いの瞳を揺らすニコレット。コヴァクスはそのそばまで来ると、その頬に平手打ちを見舞った。

ニコレットは兄からの不意打ちに衝撃を覚え、色違いの瞳をさらに揺らす。

「余計な真似をするな」

「でも……」

「奴を哀れに思ったところで、かえって、惨い思いをさせただけだ」
はっとして、ニコレットはエリプマヴのかばねと首を見つめた。
花も恥らう乙女である、かばねを見て喜ぶ趣味はないが、そこは小龍公女として戦場を駆け抜け、多少の慣れもある。
しかし、野蛮の山賊に合わぬみじめな顔つきで死んだエリプマヴに、言葉に出来ぬ複雑な心境になった。
それを見守るソシエタスにクネクトヴァ、カトゥカも、同じように複雑な心境だった。
しかし、このヴーゴスネアの地に来てからというもの、勝っても喜べないことということが、よく続く……。
もし、エリプマヴが心乱すことなくコヴァクスと戦い続けた果てに討たれていれば、余計な苦しみをしてあんな惨めな顔で討たれることはなく、笑って討たれたというのだろうか。
慈悲がエリプマヴを乱し、惨めな思いをさせたというのか。
「あいつ、山賊で無茶苦茶して、山賊で死にたかったんじゃない？」
妙に冷たい視線でニコレットを見据えて、バルバロネは言った。
周囲の空気がかたまったようだった。
そこまで責めるつもりはなかったのだろう、コヴァクスはさっきとうってかわって相好を崩して、ニコレットを見つめた。
「いや、すまなかった。気が立っていたんだ」
「いえ、私も出すぎた真似を」
「もういいよ、それより、シァンドロスの奴め」
シァンドロスといえば、仲間の勝利を喜ぶより、大馬に夢中になっており。気がつけば、神雕軍の兵士とともに大馬を取り囲んで、手綱を握りしめていた。
「あいつめ、仮にも山賊の馬だぞ」
と言いつつ、苦笑しながらそのもとまで向かう。
すると、
「わっ」
という悲鳴があがり、兵士がひとり大馬の後ろ足の蹄で蹴られ吹

っ飛ばされた。それからは、ぴくりとも動かない。こと切れたようだった。

「なんだと！」

それまできょとんとしていた大馬は、突如暴れだし、蹄を凶器に神雕軍に襲い掛かった。

歩兵たちは槍で威嚇し、騎兵は自分の馬を落ち着かせながら大馬から離れざるを得なかった。

「ぎゃっ」

また一人、兵士が蹴り殺されてしまった。

あろうことか、戦乱の旧ヴーゴスネアの地を駆け巡り幾多の危機も乗り越えてきた神雕軍は、この大馬のために、ふたりも兵士を失ってしまった。

無論彼ら神雕軍の兵士一人ひとりは、選りすぐりの精鋭である。だがここに来て、相手がたかが馬という油断が生じたのであろう。

山賊といえば、かばねのみをのこして、生きる者はもう陰も形もない。

「面白い、ますます欲しい」

咄嗟に逃げたシァンドロスは舌なめずりでもしそうな顔をし、愛馬・グリフォンから飛び降り、大馬に向かった。

「危のうございます！」

と兵士たちは言うが、おかまいない。

それどころか、

「今からそなたが我が愛馬だ。ゴッズよ！」

ゴッズとは、ソケドキアの言葉で牛の頭を意味する。その巨躯からシァンドロスはそう名づけたのだろう。

しかし、もとは山賊の馬であり、部下を殺した馬だが、シァンドロスはおかまいなく、ご執心のようだった。

第八章　革命　？

大馬は気が荒くなり、四つの蹄は幾度も地を踏みつけそう簡単には落ち着きそうになかった。

神雕軍の兵士たちは、仲間がやられたことで、この馬を殺そう、とまで言い出す。しかし、シァンドロスはそれを許さなかった。

「殺すな！　殺せば、殺した者は打ち首だぞ」

だからと言って大馬がその温情に感謝する、などということはなく、誰一人としてよせつけない。

そんな大馬へシァンドロスはずかずかと歩み寄る。

「何を考えている」

あんな暴れ馬がまともな軍馬になるわけがない。コヴァクスはニコレットらと離れたところで成り行きを見守っていた。

とにかく人と見れば、蹄の餌食にせんと迫り踏み潰そうとする。兵士たちはひたすら逃げる。その暴れっぷりに、さすがにシァンドロスも、足を止めた。

あきらめた、と思ったが、なかなかどうして、顔は満面の笑みを浮かべている。

大馬はシァンドロスを見ると、すかさず突進する。

「あ、王太子を守れ！」

歩兵が槍をかまえて大馬をさえぎろうとするが、あろうことか、大馬は素早い動きで槍をかわしたばかりか、大口を開けて兵士の腕に顔に噛みついたではないか。

「ぎえ」

という鈍い声の悲鳴があがる。なんと頬の肉を噛み千切られ、歩兵は槍を捨て顔をおさえてのたうちまわり、そこへ容赦ない蹄。

避けることかなわず、そのまま踏み潰されてしまった。

「おぬし、人食い馬であったか！」

シァンドロスはますます喜悦はかりなしと、笑みをたたえる。

部下を三人も殺したのもおかまいない。
「ええい、やむを得ぬ」
コヴァクスは大馬に立ち向かおうとした。
シァンドロスが殺すな、と言ったおかげで神雕軍の兵士たちは大馬をもてあました挙句三人目の犠牲者が出てしまった。しかし殺せば主命に逆らうことになる。
となれば、対等の仲間であるコヴァクスがやるしかない。
だがシァンドロスは己に向かって突っ込んでくる大馬に、自らもまた駆けて突っ込んでゆく。
「よせ、やめろ！」
大馬に執心するあまり正気をなくしたのか。とさえ思える行動に、コヴァクスは内心、もうだめだ、とさえ思った。
距離は接近し、蹄がシァンドロスに迫る。
それをかわし、無理矢理でも手綱をつかみ、素早い動きで飛び乗ったシァンドロス。その身のこなし、思わずコヴァクスは馬を止めて見入ってしまった。
「どう、どう！」
両の足に力を込め暴れる大馬にまたがり、手綱を引く。今はどうにかもちこたえているが、どこまで持つことやら。
神雕軍の兵士たち、ペーハスティルオーンにガッリアスネス、イギィプトマイオスはどうにか大馬に迫り、シァンドロスをすくおうとするが、なかなか近づけない。
（まったく、どうなっても知らんぞ）
コヴァクスは怒りを通り越し呆れ、成り行きを見守ることにした。
ニコレットらも同じだった。
バルバロネは、瞳を輝かせて、シァンドロスを見つめていた。
シァンドロスには勝算があった。
馬を太陽の傾く方向に向けさせようとしていた。大馬が特に暴れるのは、太陽から背を向けたとき、すなわち己の影が見えるとき。
「ゴッズよ、心を落ち着け、太陽をおがめ」

手綱を操り、太陽に背を向けず真っ向と向き合わせる。そうするうちに、大馬は徐々に落ち着きだしてくる。

「シァンドロスの奴、そういうことか」

おそらく、シァンドロスがゴッズと名づけた大馬はまだ若く、三歳くらいだろうか、影というものがわかっていないようだ。太陽に背を向けたときに見える影が、常に自分を追うように思え、それで暴れだすのか。

神雕軍の兵士たちは、大馬が落ち着いてきているのを見て、思わず喚声を上げる。

ついに、顔を太陽に向けて、ゴッズは落ち着き。シァンドロスを新しい主と、己の背に乗せている。

乗馬術は、言うまでもないことだが、シァンドロスがはるかに勝っているようだ。ゴッズも新しい主の扱いに親しみを覚えたようで、素直なものだった。

「さすが王太子！」

すかさずイギィプトマイオスがシァンドロスを讃えた。ガッリアスネスにペーハスティルオーンが続けば、兵士たちも、我が王太子よ、と讃えだす。

兵士が三人も犠牲になり、殺気立たぬわけもなかったが。大馬を手中におさめたシァンドロスの器量が、一気にそれを鎮めた。

その一方で、グリフォンは新しい馬に主を取られて寂しそうにしている。かと思えば、ぱかぱかとコヴァクスのもとに歩み寄り、龍星号と鼻をつっつきあわせた。

「お前……」

コヴァクスは、というか龍星号はグリフォンを哀れんでか、なぐさめるように鼻先を向け合っている。

「これからは、ゴッズが我が愛馬だ。コヴァクス、グリフォンはお前に譲ろう」

譲るというよりこれ幸いと、昔の馬をコヴァクスにていよく押し付けた、というのはわかった。

なんて奴だ、と思いつつ、丁度ソシエタスが馬を失っているため新しい馬が必要だと思い出すと。シァンドロスの意をくみ、龍星号から降りてグリフォンにまたがる。

「ソシエタス、龍星号をそなたにやろう。前々から目をつけていたのを、オレが知らないとでも思ったか」

いたずらっぽく笑い、手綱を差し出す。その通り、ソシエタスは自分の馬がありながら、龍星号にひそやかな思いを持っていたのだったが、コヴァクスはとっくにお見通しだったのを知り、苦笑いしつつ嬉しそうに、

「では、お言葉に甘えて」

と龍星号に乗った。

「さて、賊はたおした。アウトモタードロムの要塞で、宴としゃれこもうぞ」

シァンドロスはご機嫌で、神雕軍を率いて要塞に向かい。コヴァクスたちも、続いた。

ヴーゴスネアに来てどれくらいが経ったか、さほど経ってはいないのだが、長い苦難と戦いと、野生にもどっていたすえに、ようやくまっとうな棲家を得られたようで。

陰謀により国を追われたのが、はるか昔のようにさえ思えた。が、これで終わりではない、これからが、始まりなのだ。

要塞は中は思ったほど荒らされてはいなかった。

要塞は石のレンガ造りの三階建て。一階は大広間および大食堂で、騎士の会議や学問の授業、食事に使用され、二階三階は騎士や使用人の居住空間となっていた。

また要塞の四方を取り囲むように見張り櫓や控えの小屋が建てられていた。さらに石のレンガの壁がそれらをぐるりと取り囲んで、その外側には空堀が掘られていた。

堀を渡る橋はもちろんひとつ、鉄扉の門もひとつ。また、山を上り下りする道も一本、北東の方角のみに整備されていた。

若い騎士はここで、篭城や城攻めの訓練もおこなっていたようだ。
留守番の賊徒がいないわけではなかったが、神雕軍が来るや一目散に道なき道を駆けて逃げ出して、狼藉を働く者はなかった。
馬舎もととのい、要塞としての機能は十分果たせるだけの能力も残っている。
それは、どこからかさらってきた男女をこきつかってきてのことだった。
要塞にそんな人々がとらわれているだろうというのは、想定内のことで驚くことはなかったものの、みな生気はとぼしく、最初神雕軍やコヴァクスらを見たときはひどくおびえていたものだった。
しかし、山賊どもは討ったこと、人々を解放することを告げると生気を取り戻し、進んで要塞の掃除や食事の支度をしてくれるようになった。
宴は要塞の大食堂でひらかれた。
大食堂は百人はかるく収容できる広さで、長卓が十列ならび、一列につき椅子十脚がそなえられていた。
長卓には要塞そなえつけの兵糧や酒がふんだんに並べられ。皆心と腹とをうるおし満たしてゆく。エリプマヴどもはよく溜め込んでいたものである。
「これは山賊が人々から奪ったものでは」
「かまわん。あとで、刃でもって返せばよい」
コヴァクスが気にかけるのを、シァンドロス実に簡単に言い返した。そんなことをいちいち気にしていては飢え死にしてしまうというものだ。
さらにとらわれの人々を宴に招き、酒や食べ物を好きなだけ振舞ったものだから、
「命あってのもの種とはよく言ったもので。神は我らをあわれみ、あなた様方をつかわしたもうたのでしょう」
彼らは神雕軍やコヴァクスらを神の使いにして喜びを噛みしめていた。

「恩と思ってくれるなら、ソケドキア王太子シァンドロスと神雕軍、そしてドラゴン騎士団のことを忘れず、人々に功をつたえひろめてくれ」

しっかりと、シァンドロスは念を押す。とらわれの人々は、深く事情を聞こうともせず、素直に「はい！」と言った。

本物かかたりかどうか、ということより、自分たちを助けてくれたという事実が、とらわれの人々にとって大事だった。

「いや愉快愉快」

という上機嫌な声が聞こえた。

コヴァクスも、ニコレットも、ソシエタスも、クネクトヴァにカトゥカも、やることが一段落ついて、感慨深いものを感じていた。

バルバロネは、シァンドロスを見つめつづけていた。

「国を追われ、哀れ異国の土となるか、と思うこともあったが……」

コヴァクスは杯をもったまま、つぶやく。

クネクトヴァは食事をよく噛んで食べつつ、自分に巡ってきた運命について考えているようだった。

「広い世界に羽ばたけと、ルドカーン様はおっしゃった」

広い世界。世界は広い、というのは頭ではわかっているが、いざ国外へ出てみれば、自分はなんて小さな存在なのだろうと痛感するばかり。

「わっ！」

「わっ！」

突如、耳元で大声を上げられ、クネクトヴァは素っ頓狂な声をあげて驚き、椅子から転げ落ちてしまった。

それはカトゥカのいたずらだった。

しりもちをついたクネクトヴァを見て、けたけたと笑っている。

「もう、カトゥカったら……」

ニコレットは笑いを堪えながら、カトゥカを注意する。

「ごめんなさいニコレット姉さま、だって、こんなに楽しいのって、久しぶりなんだもの」

舌を出し、いたずらっぽい笑みで反省の色なくあやまるカトゥカに、皆心をほぐされ、場はなごんだ。

とはいえ、クネクトヴァは頬をぷっと膨らませている。が、それはさらに笑いを誘い、クネクトヴァは怒るに怒れず、神弟子であることを一時忘れ、子どもらしいやけ食いをして憂さを晴らすしかなかった。

翌日、朝日が昇るとともに人々は我が家へと帰ってゆく。

皆笑顔で厚く礼を述べながら、手を振り足早に我が家へとゆく。

神雕軍の兵士も途中まで一緒に山を下り、賊徒のかばねを片付ける。

要塞にとらわれていたのは、ほとんどが近くの街、グロヴァーニクの中心街・フィウメの人々だったが、中には流民としてさまよっていたときに人狩りに遭い、帰るに帰れぬ人々も、六人いた。

皆若い女だった。

彼女らがどういう扱いを受けたかは、推して知るべしであり、尋ねる野暮をする者はなかった。もちろん狼藉を働く馬鹿もいなかった。

彼女らにはメイドとして、アウトモタードロムの要塞にいてもらうことになった。

もう随分と服も甲冑も汚れていたが、メイドたちは好意でそれらを、嬉々として洗ってくれた。

コヴァクスやニコレットは、久しぶりに、私服に袖を通したものだった。私服といっても、山賊たちが奪ってきたものだったが、まさか裸でいるわけにもいかないので、やむなく使っている。

勇ましい甲冑姿ばかりだったニコレットは、メイドから渡された女性ものの服を着て、久しぶりに女性らしい格好をしていた。

神秘的な色違いの瞳に、長く美しい金髪。平民の服とはいえ、女性らしい服装をすることで、内に封じ込められていたものが解放されたような雰囲気だった。

「ニコレット様は、とてもお美しいのですね」
と、服を用意したメイドは、まるで人形を愛でるようにニコレットに言ったものだった。
バルバロネもはりきって女ものの服を着ていた。で、シァンドロスにべったりとまとわりついていた。
「ねえ、ねえ、あたしも一緒につれてってよ。妾になってもいいからさ」
などと、そんなことを言ったものだった。
「女、出すぎた真似をするな！」
イギィプトマイオスやペーハスティルオーンはかんかんに怒るのだが、バルバロネはおかまいない。
バルバロネがシァンドロスに、一緒に連れて行けと言うのは、わけがあった。
「我々は、あと三日もすれば用済みとなろう。十分楽しんだことでもあるし、戦利品も獲たことだし、そのとき、故国ソケドキアに帰る」
シァンドロスはそう言ったのだった。
その根拠は、とコヴァクスが尋ねたが、
「いずれわかるさ」
と言ったきりで、いたずらっぽく、不敵に笑うのみ。
「果報は寝て待てとも言います。そのときを、休養しながら待ちましょう」
ソシエタスと、好意をよせてくれるガッリアスネスがそう言うので、そのときを待ちながら、久しぶりの休養をコヴァクスやニコレットはとることにした。
で、バルバロネは、自分が女であることを今思い出したかのように、はりきってシァンドロスに取り入ろうとしていた。

第八章　革命　？

その夜、コヴァクスらは、紅の龍牙旗は月の輝く夜空の下を駆けた。

シァンドロス率いる神雕軍、そして新生ドラゴン騎士団は、掲げられる数十本の松明の明かりとともにフィウメに向かって駆けていた。

それは要塞を手に入れて三度目の夜のことだった。

三階は上級騎士のための居住空間で、個室が十室つくられていた。その個室一つ一つは狭くとも床には絨毯が敷かれ、陽光のよく入る広い窓に、執務用の机に本棚、ベッドもととのえられ、快適に過ごせるようになっていた。

長箱におさめられる紅の龍牙旗は当初、三階の一番奥、若い騎士を指導する司令官の部屋の執務用の机に置かれ。その部屋はコヴァクスも自室として使っていた。

ということは、コヴァクスはこの要塞の司令官であり、すなわちドラゴン騎士団の団長になったということでもあった。

無論正式な任命式が執り行われるわけではないが、この要塞を手に入れた記念に、ニコレットらやシァンドロスに神雕軍らやメイドたちは、厳かにコヴァクスのドラゴン騎士団任命の任命式を執り行ってくれた。

そのとき、紅の龍牙旗は箱から出された。

一階の大広間及び大食堂の奥にある演壇上において、ソシエタスが紅の龍牙旗を手にしてかかげ、コヴァクスは跪きドラゴン騎士団の団長になる旨を、紅の龍牙旗に厳かに伝えた。

「ドラゴン騎士団の精神、ドラゴンハートに賭けて、我が故国オンガルリのみならずヴーゴスネアもともに秩序と安寧をもたらすため

に戦わん。神よ、ドラゴンハートよ、守りたまえ」
跪き誓いの言葉を宣言し、紅の龍牙旗の端を、まるで淑女の手を取るように掌の上にのせキスをする。
「ここに、新生ドラゴン騎士団が生まれたるを、我は証人として見届けるものなり」
シァンドロスは観衆である神雕軍やニコレットらに、そうたからかに宣言した。
皆、今にも戦争にゆくかのように、帯剣武装し。それが任命式をいっそう厳かなものにしていた。
この任命式を執り行うことを進言したのは、他ならぬシァンドロスであった。
「拠点は手に入れた、次は魂を吹き込むのだ」
と言うシァンドロスにどういった気持ちがあるのか知らぬが、その通りでもある。いつまでも出し渋っているわけにもいかぬ、ということで、任命式が執り行われたのだった。
メイドたちと言えば、徐々に気持ちも落ち着き、隣国オンガルリのドラゴン騎士団が政変の陰謀によって国を追われ、この旧ヴーゴスネアのリジェカに来たということに、たいそう驚いていた。
しかし、苦難に負けず故国のみならずヴーゴスネアのためにも戦うという姿に強く心打たれ、我知らず感動の涙を流していた。
もしその政変がなければ、コヴァクスらが挫折していたら、自分たちはどうなっていただろうか。
自分たちが助けられたという事実が、コヴァクスにニコレット、ソシエタス、そしてクネクトヴァにカトゥカ。そしてそれらを助けたシァンドロス率いる神雕軍を、心から信頼させるのであった。
「新生ドラゴン騎士団、万歳！」
ガッリアスネスが万歳と叫ぶと、万雷の万歳の大合唱が響いた。
新生ドラゴン騎士団といっても、今はコヴァクスとニコレットにソシエタスのわずか三名のみ。クネクトヴァとカトゥカも入団するかと誘ったのだが、まだ幼く未熟ということで、ふたりは入団を辞

退した。
しかし、実質はドラゴン騎士団の一員と、コヴァクスら思っていた。
バルバロネも誘ったが、これも辞退した。理由は、シァンドロスと一緒にいたいから、だという。
シァンドロスもまんざらでもなさそうで、バルバロネの同行を許していた。
ともあれ、要塞を手に入れて三度目の夜、月が顔を出すとともに、新生ドラゴン騎士団は生まれた。
任命式が終わって、紅の龍牙旗は演壇中央にそなえられた旗立て台に立てられようとしていた。
そのときであった。

「フィウメにて革命起こる！」
という一報がもたらされ、要塞に緊張が走った。
フィウメの街に出向いていた神雕軍の斥候兵が息を切らし、事変あることを、息も絶え絶えに、搾り出すように語る。
「我らがエリプマヴども賊徒を成敗し要塞に入ったということが、街に知れ渡るや、民衆は、得物を手に取り太守邸宅に向かい、守備兵と衝突！」
コヴァクスは目を見開いて聞き入り、シァンドロスは不敵に笑いながら聞く。さらに、斥候兵は言う。
「また民衆が要塞に向うかもしれません。我らに援軍を要請する模様……」
「時は来たり！」
シァンドロスは叫び、出撃を命じる。
「新生ドラゴン騎士団よ、魂に肉体を与える時が来たぞ！」
「シァンドロス、あなたが言っていたことは、民衆蜂起のことだったの」
「その通りだ、ニコレット。よく気付いた」

ニコレットは事変に驚き、またそれを予見していたシァンドロスに驚き、問う。なるほど、フィウメの民衆は、己の手柄のための戦争ばかりで、賊徒ともを成敗するなどしなかった太守に強い不満を抱いていた。

フィウメに駐屯する兵士たちも太守の下で手柄を挙げることばかり考えて、誰一人賊徒と戦おうとする者はいなかった。

なにより、もとより腐敗の進んでいたことである、賊徒相手に苦戦し惨敗を喫するほど弱かった。それで戦争にのぞんだところでどれほどの手柄を挙げられるだろう。

役にも立たぬ飾りの軍隊に成り下がり。それをうながすような、太守の怠慢。襲い来る賊徒ども。

そのくせ税金も重く課し、金がなくば衣類に食料、生活用品など、なんでも徴収すること略奪にもひとしく。たび重なる戦争で産業も衰退。人々は貧困に追いやられて、人心荒むことは、捕らわれた人々の証言で明らかにされるまでもなく、想像にやすかった。

これで軍隊や街の雰囲気が悪くならぬわけがなかった。

いや、心ある者がいるにはいた。

「フィウメの牢獄にて、メゲッリなる心ある騎士が捕らわれているようです。かつてヴーゴスネア赤備えの騎士の一人であるとか」

と、斥候兵は伝える。

となれば、民衆は牢獄にも押しかけメゲッリを解放しようとするだろう。

「ゆこう！」

「それでこそ、我が盟友」

コヴァクスの即断をシァンドロスは笑顔で讃えた。幸い皆備えは出来ている。

馬引け、出撃、という怒号が飛び交い門が音を立てて開かれる。

そして紅の龍牙旗を、ソシエタスが持つ。

この民衆蜂起、革命に加わることが新生ドラゴン騎士団の初陣となった。本来ならば後方にて大事にする紅の龍牙旗だが、コヴァク

スは初陣にもってゆくことにした。
「ゆえあれど、ドラゴン騎士団ここにありと知らしめるのだ」
ただ一個人の野心のために戦うのではない、大義のために戦う。そのための、ドラゴン騎士団であることは、忘れてはいけないことだった。
そのための旗印だった。
軍馬のいななきがひびき、騎士はそれぞれの愛馬に打ちまたがり、ドラゴン騎士団と神雕軍はフィウメの街に向かって駆けた。
クネクトヴァとカトゥカと、六人のメイドは留守を守った。
道案内のガッリアスネスを先頭にして、次にコヴァクス、その次にニコレット、四番手には紅の龍牙旗を持つソシエタス。以下シァンドロス率いる神雕軍の騎馬隊。
歩兵たちと馬を持たぬバルバロネはどうしても騎馬には追いつけぬが、いまは一刻を争うとき、やむをえず置いてけぼりにし、騎馬隊が突き進む。
紅の龍牙旗は、月下で風を受けて、たなびく。
しばらく駆けたとき、報告どおり百ほどの民衆と出会った。
民衆は月光と松明に照らされる騎馬隊と、紅の龍牙旗を見て、
「ほんとうだ、ドラゴン騎士団だ!」
と喚声を上げた。あの、エリプマヴの大馬に乗るのが、ソケドキア王太子シァンドロスで、あとは神雕軍か。
突然、捕らわれていた家族が帰ってきて、わけを聞けば、ドラゴン騎士団とシァンドロス率いる神雕軍に助けられたという。
最初は半信半疑であったが、たいそう強い軍隊で賊徒どもを成敗し、アウトモタードロムの要塞を手にした、そうでなくばどうして帰れようか、と言う捕らわれていた人々の言葉は何よりも説得力があった。
一時期は、家族との再会に感激しドラゴン騎士団とシァンドロスら神雕軍に感謝する、というところで済むかと思われた。
だが、事態は大きくなった。

常日頃から、太守への不満がくすぶり、いつ爆発するかもしれぬところまで来ていた。

アウトモタードロムの要塞にいるのが、悪逆の賊徒でなく、民衆の味方をしてくれる正義の軍隊ならば、それらの力を借りて、太守をたおそう。

にわかにそんな声が上がったかと思うと、次から次へと、アウトモタードロムの要塞の軍隊をあてにして、民衆は蜂起した。

ドラゴン騎士団や神雕軍が本物かかたりかはわからない、もし結局は悪逆の賊徒だったら、と思わぬでもなかった、それでも、力を貸してほしいと思うほど、民衆の心は追い込まれて。

爆発した。

もう止めようがなかった。

それとともに、一部は援軍の要請のため、アウトモタードロムの要塞へ向かった。

革命は、起こったのだ。

「お願いがあります、お力をお貸し下さい！」

百の民衆は口々にそう叫んだ。皆徒歩で肩で息をしている、ここまでずっと走り続けたのだろう。

百もの人数は集めたものではなかった、打ち合わせたわけでもなく、皆一人ひとりが、援軍をもとめ、我知らずにアウトモタードロムに向かったのだ。

「もとよりそのつもりだ」

コヴァクスがそう言うと、民衆は「おお」と、喚声をあげた。

「ゆっくりしている暇はない、悪いが我らは先にゆくぞ」

一陣の風と、コヴァクスらは駆け出した。民衆は騎馬隊の後姿と、紅の龍牙旗を輝く目で見送った。

それからしばらくして、バルバロネと歩兵に出会い、これも喚声を上げて出迎えて、ともにアウトモタードロムへと駆けた。

足取りは、軽かった。

その足の向かうフィウメの街には、火の手があがっていた。
「燃えている」
思わずニコレットはつぶやく。
月の下、フィウメの街は赤く光り、その赤い光りは夜闇から街の姿をすくい出して、浮かび上がらせていた。
ことに、街の中心にあり一番背の高い建物である太守邸宅は、火の光に照らされ闇から不気味に姿を見せていた。
揺らぐ炎。邸宅の壁にて明滅する赤い光と夜の闇。それは怒りに震える民衆の心なのか。
そうかと思えば、郊外には戦火を逃れて避難した人々が溢れていた。その人々はコヴァクスらを、紅の龍牙旗を見ると、一同に喚声を上げ、
「助けて！」
「太守を、バクレストンをたおしてくれ！」
などなど、異口異音に叫び、その前に群がってくる。
「……革命」
コヴァクスは息を飲み込みながら、苦々しくつぶやいた。
いかに弱くなったとはいえ、玄人の軍隊に民衆がかなうとは思えなかった。また、メゲッリの安否も気遣われた。
騎馬隊の数は十と少し。歩兵と合わせても全体で五十弱。フィウメの守備兵は、聞けば五百はいるという。数の上では不利、これが正面切っての戦いならば避けるところだが、ドラゴン騎士団および神雕軍には、民衆がついている。
民衆の側に着くことで数の不利は跳ね返せる。あくまでも、数のみであるが。
苦戦しているであろう民衆の逆転の機会は、コヴァクスとニコレット、ソシエタスの三騎のドラゴン騎士団がつくるのだ。
とにもかくにも、人々の叫びにこたえず、道をあけさせ、炎を上げるフィウメの街に突入した。
「！！」

目に飛び込んでくるのは、民衆と守備兵の凄惨な戦いだった。

山賊や盗賊などの賊徒ではない、正規軍が民衆に刃を向けて血祭りに上げているのだ。それでも民衆はひるまず、たおれてもたおれても、守備兵に立ち向かった。それがいっそう戦いを凄惨なものにしていた。

守備兵は武装もととのっているのに対し、民衆はほとんどが私服で鍬や鍬、棒切れを得物として、装備の格差は歴然。さらに、訓練の差も歴然と出る。

（これが、革命というものか）

初めて目にする革命に、コヴァクスもニコレットも、一瞬たじろがないわけではなかった。民衆と軍隊が争うなど、話には聞いても実際に目にすることは、オンガルリではなかったから。

第八章　革命　？

守備兵に立ち向かう民衆、民衆を斬る守備兵。どちらも、人間の顔をしていなかった。

忘我の域にあって、遮二無二に殺し合いを繰り広げていた。それは今まで経験した戦争や、賊徒との戦いとはあきらかに違うものだった。

「なにをしている！」

たじろぎ身動き鈍くなったコヴァクスらドラゴン騎士団の三騎をシァンドロスが叱咤する。

「考えている暇はないぞ。民衆の側に立ち、守備兵を斬り、太守バクレストンを捕らえよ！」

守備兵は突如現れた騎馬隊に驚き、すかさず向かってくる。民衆は何事かと驚き一瞬動きを止めて、ドラゴン騎士団の紅の龍牙旗を目にするや。

「ドラゴン騎士団だ！」

次々に叫ばれるドラゴン騎士団という声。民衆はどっと紅の龍牙旗のもとにあつまり。

「我々に力を！」

と叫ぶ。

無論これが守備兵に見えぬ、聞こえぬはずがない。

ドラゴン騎士団といえば隣国オンガルリ王国の騎士団ではないか。それがなんで、ここに。しかも民衆革命に組しようとしている、というのか。

「ドラゴン騎士団、だと。なぜオンガルリ王国の騎士団が、しかもドラゴン騎士団がここに……」

「いやまて、オンガルリに政変ありドラゴン騎士団は壊滅したと聞いたぞ。いやしかし……」

もうすでにリジェカには政変は伝わっているようだ。

しかし守備兵は目を見開き、紅の龍牙旗にひたすら驚いていた。
オンガルリ王国はタールコと戦争を繰り広げてはいたが、もっぱら防衛が多く自ら攻め込むことはなかったから、リジェカの国民はオンガルリが攻めてくることはないと思い切っていた。
それだけに、オンガルリ王国に対しては心配ないと信頼していた、あるいはたかをくくっていた。
「ぐずぐずするな！　お前たちが動かねば、民も動かぬ！」
再びのシァンドロスの叱咤。
珍しくでしゃばって名乗ることはせず、ドラゴン騎士団を革命の中心にそえようとしている。
「ドラゴン騎士団よ、故国を追われようとも、リジェカが新しき故国となる」
「バクレストンと言わず、ポレアスをも討ち、リジェカの新王となり我らを導きたまえ」
民衆の中にもオンガルリの政変を知っている者はいた。ということは、ドラゴン騎士団壊滅を知っていることでもあるが、壊滅したと思われていたドラゴン騎士団はいまだ滅びず、異国に流れてもなお大志失わず、民衆の側に立ち悪王を討ち取る。
という期待をドラゴン騎士団に込めていた。
ドラゴン騎士団の勇名は、周辺諸国に知れ渡り、リジェカにあっても憧れと羨望のまとであったのかもしれぬ。
おそらく、
（リジェカにも、ドラゴン騎士団のような方々がいれば）
と思うこともあったかもしれなかった。
コヴァクスは民衆から数多（あまた）の眼差しを受け、気を奮わせ剣を握りしめ、グリフォンを駆けさせた。
ニコレット、旗を持つソシエタス、シァンドロス率いる神雕軍、そして喚声を上げて民衆が続く。
「や、や、ドラゴン騎士団など片腹痛い、かたりであろう。者ども、

討ち取れ！」
　守備兵は民衆とは違い、紅の龍牙旗を見ても信じようとはせず迎撃体制をとった。敵対する民衆に組する以上、本物であろうとなかろうと関係ない、やらねばこちらがやられる。
「どけどけ、雑魚に用はない！」
　立ちはだかる守備兵を木っ端のように吹き飛ばし、コヴァクスは太守バクレストンの邸宅向けて駆けた。
　後に続く民衆たちは、紅の龍牙旗を目印にして、進むに連れて坂を転がる雪だるまのように膨れ上がっていった。
　守備兵も懸命に防ごうとするものの、先頭に立つドラゴン騎士団に歯が立たず蹴散らされるばかり。
　しかもばらばらだった民衆は、
「ドラゴン騎士団のもとへ！」
「ドラゴン騎士団のもとへ！」
「紅の龍牙旗に続け！」
　と掛け声をかけつつ一箇所に、紅の龍牙旗のもとに馳せ参じ集まり、それは強固な塊となって勢いを増していった。
　守備兵から見れば、突如ドラゴンに襲われたような思いであったろう。
「これはかなわぬ」
　と我先に逃げ出す者まで出る始末であった。これでまともに戦えるわけがなく、ドラゴン騎士団と民衆進む先、守備兵次々と見えぬ力で弾かれるように道をあける。
　それを路地裏から見つめる目があった。
「ドラゴン騎士団、だと？」
「民の話はまことであったのか」
「時は来たのだ、来るべき時が」
　それは、民衆と戦うことを拒否し、雲隠れした守備兵の一部だった。このフィウメにて徴兵された地元の兵士もたくさんいるのだ。
いかに太守の身が危ういとはいえ、そもそも忠誠などなく意に反し

て剣を持たされて、それでどうして、太守のために戦えようか、家族や友人に刃を向けることが出来ようか、と。

「よし、我らもドラゴン騎士団とともに戦うぞ！」

「応！」

太守のために押し付けられた剣をもって、太守を討つために、彼らは打って出た。

押される守備兵は、仲間であるはずの同じ守備兵からも攻められ、さらに押された。

その途端、

「裏切り者だ！」

という叫びは掻き消され、

「やめだ、オレはけちな太守のために戦うのは、もうやめだ！」

と刃をひるがえして、咄嗟にドラゴン騎士団の側につく守備兵も次々に出た。

紅の龍牙旗は夜空の下、戦火の中、威風も堂々と風となるかのようにはためき、守備兵の心を萎えさせ、さらにくつがえしたのだ。

（革命はなった！）

シァンドロスは心中喝采した。己の言葉通り、ドラゴン騎士団の魂に肉体が与えられたのだ。

民衆蜂起が起き、太守バクレストン邸宅は固く閉ざされ守りも堅固なものだった。

が、初老を向かえ髪も白くなってきた太守バクレストン自身は、スズメバチに襲われるミツバチの巣の女王のように、はかないもので。白い髪が抜け落ちるかと思われた。

最初こそ、守備兵有利であり、大丈夫とたかをくくっていたが。ドラゴン騎士団が現れて状況が一変することを聞くや、その顔一気に蒼ざめ。

屈強な兵士たちが集まる大広間の中を、いらだたしく、ぐるぐる回り。豪奢な着物の宝石飾りも同調してちゃらちゃら鳴った。

ついに、こらえきれずに、
「民を鎮めさせよ。金が欲しいのか、食料がほしいのか、ならくれてやる。くれてやるから、鎮めさせよ」
守備兵に向かいそう叫んだものの。
「太守よ、残念ながらそのお慈悲の心を出すのが遅すぎたようです」
哀れにも、無慈悲な返答がかえってくるのみ。
「なぜだ、民は金や食料がほしいのであろう。それで満足できぬのか」
「もはやそれでは満足できぬのです」
「ならなにが望みなのだ」
「おそれながら、太守のお命かと……」
頬の張った逞しい顔立ちの、守備兵の隊長、ギィウェンはあまりにもあっけなくこたえるものだから、バクレストンは、へなへなと、ゆっくりと尻餅をつく。
「そ、そんな……」
もはや死ぬしかないのか。それまでポレアスの臣下としてフィウメを治め、ポレアスのために戦争にも出向いた、己自身もポレアスの寵愛を受けて栄耀栄華を味わえた、素晴らしきかな我が人生、であったのが、いまや、風前の灯火。
今までたくわえた財宝など、今この際に、なんの役に立つというのだろう。
ギィウェンは口を真一文字につむぎ、太守バクレストンを見やると、振り返って部下のもとにゆき小声でなにかを伝える。
部下は、駆け足でどこかへとゆく。
「これギィウェン、何を？」
「よいことを思いつきました」
「よいこと？」
「いずれわかります」
そのやりとりをよそに、邸宅周辺の争乱はいよいよ激しさを増したように聞こえてくる怒号は大きくなってくる。

バクレストンは、ひぃ、と一つ飛び上がり、尻餅をついた。
（哀れ、まったく哀れなものだ）
守備隊長ギィウェンはバクレストンを見据えた。その視線に、太守はまたおびえた。身近な守備兵すら、心から信用できぬのか。
ややあって、部下が帰ってきた。そばに誰かいた。それを見て、バクレストンは声にならぬ声を飲み込んだ。
「太守、メゲッリにございます」
部下がともなってきたのは、邸宅の地下牢獄に閉じ込めていたメゲッリであった。
メゲッリは優秀な騎士であったが、何かにつけて、
「贅沢を控え、民を大切になさり、王道を歩まれよ」
と説教をするものだから、うるさくなり、地下牢獄に閉じ込めてやったのだ。
いずれ心改めて詫びを入れるであろう、と期待して、その日を待っていたのだが……。
服はぼろとなり、頬はこけ身体も痩せ、髭も伸び放題、しかしその眼光は鋭い。
「太守」
メゲッリは跪いた。目には滂沱（ぼうだ）の涙が溢れていた。
「我が忠誠足らぬゆえに、この革命にいたること、メゲッリまこと太守に申し訳ないばかり」
メゲッリは詫びた。
しかし、それは期待したのと違う詫びだった。
「よせよせ、革命はお前さんのせいではない」
ギィウェンは跪き涙するメゲッリを見据えると、剣を抜きはなち、バクレストンに切っ先を向けた。
「なにをする！」
「もうこれしかないのだ」
声も出ず縮まるばかりのバクレストンの首は、ギィウェンによって刎ねられた。

「この首を民衆に、ドラゴン騎士団に見せよ！」
隊長の号令を受け、守備兵がひとりバクレストンの首を持って、外へと駆けた。
メゲッリは一瞬唖然としたあと、ギィウェンを睨み叫びだした。
「お前は、なんということをするのだ！」
「見たとおりだ、これが、現実だ。お前もいい加減目を覚ませ！」
「現実だと。大恩ある太守を討つことが現実だというのか」
「そうだ。民衆の怒りは、太守の命でもって償うしか鎮めるすべはない」
「ばかな。これまでの行いを改め、善政を布けば、民衆は許してくれるはずだ」
「もうおそい！」
メゲッリは歯を食いしばるばかり。ギィウェンにつかみかかろうとしたが、そうしたところで返り討ちにされるだけだった。
身を震わせるメゲッリに、ギィウェンは言った。
「同じ仕えるならば、ドラゴン騎士団に仕えた方がよい。そう思わぬか」

「何のとりえもない、貴族に生まれたというだけで、何の努力もなしに太守となったばかりか。私利私欲を追うばかり。そんな馬鹿の下で働くことに、何の面白みがある」
「面白みがあるなしではない。私は騎士として、主に仕える。それだけだ」
「ふん。君、君たらずといえど、臣、臣たるべし、か。そのために、どれほどの民が犠牲になった。賊徒に好き放題させた。もっと早くこうすればよかったのだ」
「言うなッ！」
メゲッリも考えぬわけではなかった。しかし、臣下としての情が強かった。現実を見返せば、たしかに、フィウメの民に多大な犠牲があったのは否めなかった。それは自分のせいでもあるのだろうか。

なら自分はどうすればいいのだろうか。
迷った。
ギィウェンは言った。
「メゲッリよ、ドラゴン騎士団に仕えよ。その方がお前のためだ」
「……。お前はどうする」
「オレか、そうだな、神美帝に仕えようと思っている」
「なんだ、と……」
絶句するメゲッリ。神美帝ドラグゼルクセスに仕えるというギィウェンの言葉がにわかには信じられなかった。
かつては旧ヴーゴスネアもタールコと敵対し、分裂してからいよいよタールコの軍勢が攻めてきて、その軍靴馬蹄に踏みしだかれる日が近いかというほど、事態は切迫しているというのに。
「聞けば神美帝は、出自を問わず広く人材を求め、すぐれた者は重く用いるというではないか。またその器大なること、まさに神美帝にふさわしいという。同じ仕えるなら、オレは、そういう人物に仕えたい」

第八章　革命　？

ギィウェンは遠くを見つめる眼差しをしていた。その目には、神美帝と明るい未来でも見えているのだろうか。

「ではオレはゆくぞ」

メゲッリは動かない。構わずギィウェンは歩き出せば、部下も続く。ここにいる守備兵は皆ギィウェンの息がかかっていたということだ。

哀れバクレストンは瀬戸際での裏切り者に囲まれていたことになる。

外では、わっという喚声がけたたましく轟いた。部下が民衆に首を見せているところだろう。

と思ったら、

「ああー」

という、それは一瞬にして悲痛な悲鳴に変わった。

「何事だ」

なぜ悲鳴があがるのか理解できぬと、にわかに駆け足で外に出てみれば、バクレストンの首が転がり、その横に部下の首がならび、その横には部下の胴体が転がっていた。

そばでは血塗れた剣をもった守備兵が五人。

民衆はそれを見て悲鳴を上げていたのだ。

「何奴！」

ギィウェンとその部下らは咄嗟に剣を抜き五人の守備兵を取り囲む。メゲッリの他にも忠誠厚い者がおり報復をするであろうことは想定内のことなので、この出来事には別に驚かなかった。

しかし取り囲んだ途端、五人の守備兵は俊敏な動きを見せ、ギィウェンらに襲い掛かった。

「やるか」

ギィウェンは剣を振るい受けて立ったものの、

「おお……」

思わずうめきを漏らし、相手の剣を避けるのが精一杯。相手は思った以上に手ごわく、百戦錬磨の武人ギィウェンも苦戦するありさま。

しかも部下はあっというまに、他の四人に討たれてしまい、さらにその四人は民衆にも無慈悲に斬りつけながら、向こうに見える赤い旗目指し駆けてゆく。

民衆は悲鳴を上げて、革命なった喜びは吹き飛び兇刃から逃げ惑うばかり。

ひと塊だった民衆はちりぢりばらばらとなり、フィウメの街のあちこちに散らばった。それを掻き分け、赤い旗が四人目掛けて突き進んでゆく。

これなん紅の龍牙旗、ドラゴン騎士団なのは言うまでもない。そこには無論シァンドロスら神雕軍の騎馬隊もいる。

「まだ立ち向かう残党があるのか」

神雕軍の騎士の一人が四人に向かい剣を振るった、と思ったら、血煙を上げて落馬しぴくりとも動かない。

「気をつけろ、かなりの手練れだぞ！」

騎馬隊は素早く四人を取り囲む。それから、はっと息を呑む。

「お前ら……」

「久しぶりだな」

応えるのは金髪のアンダルゾン。そう、それはかつて六魔であった暗殺集団だった。

ギィウェンとやりあうのは、黒髪の頭分グニスッレーだった。

なんと五人はフィウメの街にいたのだ。守備兵の姿をしているのも、この革命の最中どさくさにまぎれて装備を守備兵から奪い取り紛れ込んだのであろう。

「いつお前たちを始末しようかと機を見計らっていたが、面白い余興に付き合えて我らは楽しませてもらっておる。のうアッリムラッ

クよ」

「ええ、オナリハトク。どさくさに紛れてたくさん人を殺せたのはとても楽しいものだわ。こんな機会って、なかなかないわよ」

おそろしいかな、五人はずっと後を着けていたのだ！　しかも革命での民衆と守備兵の衝突に紛れ込み殺戮を楽しんでいたというではないか。

「くそッ！」

ギィウェンこれはかなわんと、グニスッレーの剣を避けドラゴン騎士団と神雕軍のもとまで逃げ込む。グニスッレーは無理に追わず、ゆくにまかせた。

というより、最初から相手にしていなかったのか、逃げるギィウェンを無視して追い越し、シァンドロスへとまっすぐに突っ込んでくる。

「忌々しい奴らめ」

五人がはっきりと自分を狙っているのはわかっている。コヴァクスらは巻き添えで出会ったに過ぎない。

五人の目当てはあくまでも、シァンドロスの首なのだ。

不敵な笑みは消えて、顔はけわしい。

「王太子をお守りしろ！」

ペーハスティルオーンにイギィプトマイオス、ガッリアスネスはシァンドロスを囲み守りを固める。

無論コヴァクスも無事でいられるわけがない。ドラゴン騎士団は五人にとって大きな副賞なのだから。

「今度こそ、お前の金髪を全部ひっこぬいて、顔の皮を剥いで、色違いの目を抉り出してやるんだから！」

白髪の魔女アッリムラックは赤い口を開け歪んだ笑みを浮かべ、ニコレットに襲い掛かる。

五人とも徒歩だが、騎乗の者を相手に怖じることもなく、軽快に飛び回り刃をぶつけ火花を散らす。

民衆はなにがなにやらわからず、おろおろしている。このままや

られれば、なったと思った革命も全てぶち壊しだ。
「おのれ！」
肝心のところで邪魔をされたコヴァクスはおおいに怒るも、相手は相当の手練れ、剣を防ぐのが精一杯だ。
それとともに、脳裏に閃く白い衣。謎の女、ロンフェイの黒い瞳が思い起こされた。

ニコレットもアッリムラックの執拗な攻めを防ぐのが精一杯だ。急ぎ旗を背中にくくりつけ、ソシエタスが助太刀に入るも事態は好転せず。
「これは一体どうしたことなのだ」
民衆は思わぬ事態に驚き、逃げ惑う。ドラゴン騎士団の側についた守備兵で、勇気ある者は勇を鼓して助太刀に入るものの、それことごとく討たれる有様。
「お前らは、ここで死ぬのだ。ロンフェイを期待しても、無駄だぞ」
嘲るブラモストケの冷たい声色。ロンフェイの名を聞き、コヴァクスの目の色が変わった。
「お前、まさかロンフェイに惚れたのではあるまいな」
さとったようにグニスッレーが言う。
うるさい、と剣を振るうが、顔はこころなしか赤いようだった。
しかしロンフェイはどうしたのだろう。まさか、と思う。
「図星のようだな。ロンフェイは近頃見てはおらぬ。もともと孤独を好む身、お前らのことなど、どうでもよいのだろう」
見ていないのは本当だった。五人もロンフェイに警戒し気を張りめぐらせていたのだが、最近本当に気配を感じない。そこらか、どこかよそへと旅立ったのかもしれぬと思っていた。
神雕軍は必死でシァンドロスを守っている。シァンドロスも剣を振るい刃を交える。弱くはない、大馬を乗りこなし一流の戦士でもあるのだが、六魔、もとい五魔相手には苦戦せざるをえない。
（しかし、奴らはなぜオレを）

戦いながら、そんな疑問も抱く。戦いを好む王太子であるから、暗殺集団を差し向けられる心当たりはある。

だがさすがに、誰が遣わしたのかまではわからない。

ギィウェンは呆然としている。いつのまにか、蚊帳の外に追いやられていた。が、はっとして駆け出し、そのまま姿を消した。

ギィウェンにはギィウェンのやりたいことがあるのだ。

やがてバルバロネと歩兵、百の民衆が街に着き、ことの事態を見るや一斉に五魔に突っ込んだ。

「馬鹿め、数が増えたとて同じこと」

グニスッレーがそう叫ぼうとした、そのとき、

「ろ、ロンフェイ！」

最初思っていたのと違う叫びが、口をついて出た。なんとロンフェイがいつの間にか百の民衆の中に混ざりこんでいるではないか。

ロンフェイは静かにその眼差しを五人とコヴァクスらに向け、白い衣の裾と袖、黒髪を揺らしながら駆けてくる。

「いつの間に」

バルバロネは驚きの声を上げた。今まで一緒にいたことに気付かなかった。誰しもが、ロンフェイが紛れ込んでいたことに気付かなかった。

「あれは誰だ？」

皆ロンフェイを指差す。

五人は苦々しく舌打ちする。

「お前はあとだよ！」

アッリムラックは捨て台詞を吐き、五人は一斉にロンフェイに襲い掛かる。

コヴァクスとニコレット、シァンドロスはロンフェイとともに戦おうとする。勝機が一気に開け、気が大きくなったが。

「手出し無用！」

ロンフェイがそう一喝すると、金縛りにあったようにコヴァクスらは動けなかった。それと同時に、一人で五人を相手に戦った。

民衆は、女一人では無理だと思わず目を閉じた。コヴァクスらは、目を見開いて、ロンフェイの姿を見つめていた。

五本の剣が前後左右から襲い来る。それに対し、ロンフェイは無手。

「あっ」

と誰かが悲鳴を上げた。ロンフェイが串刺しにされるのを見たのだろうが、それは幻想だったのか。

五本の剣が切っ先を触れ合わせているその上に、ロンフェイの姿があった。剣をかわすため跳躍したのだが、いつ跳躍したのか誰も見切れなかった。

五本の剣はロンフェイの足を切り落とそうと咄嗟に切っ先が上に向けられたが、なんとロンフェイ、上から踏みつけるように、剣の上に足をつけ、ひと振りひと振り、飛んで渡った。

靴底には鉄板でも入っているのだろうか、五本の剣の上に乗っていても切り筋ひとつつかない。

五本の剣はかわるがわる、休む間もなくロンフェイを襲うのだが、それはことごとくかわされ、それでいながら、おいでと手招きするように袖は裾ははためきながら、ロンフェイの跳躍やまず、常に誰かの剣を踏み台にして飛び回っていた。

「馬鹿な」

グニスッレーは苦々しくうめくその一方、コヴァクスらは言葉もない。ロンフェイのあの動き、あれは一体なんなのだろうか。

そもそも暗殺者の持つ剣を踏みつけ跳躍し、なおかつ五振りの剣を飛んで渡るなど、常人のなせる業ではない。

その上、ロンフェイは容姿も端麗。戦火燃え盛るフィウメの街を舞台に、まるで突然神か悪魔が降り立ったような錯覚を人々に与えた。

その白い衣から、白鳥が鰐(わに)をもてあそび牙をかわしながら翼はためかせているようにも、コヴァクスには見えた。

そう見惚れていることに気付かず、幻の世界に入り込もうかとい

うとき。
　ロンフェイの爪先がオナリハトクの剣を軽く蹴るや、切っ先はアンダルゾンの胸目掛けてまっしぐらに突き進み、それを貫き通した。
　金髪のアンダルゾンは剣貫く胸を真っ赤に染め、口から血を吐き、オナリハトクの剣を捕まえてたおれて、息絶えた。
　なにがどうなったのか、オナリハトクは剣が手から離れてアンダルゾンを殺したのを呆然と見つめていた。
　ロンフェイは静かに着地した。
「殺生はしたくなかったけど……。そのためにあなたたちの悪業を野放しにして、罪もない人々がたくさん死んでしまったわ。私も、堪忍袋の緒が、切れたわ」
　目が覚めたように目を開きなおすコヴァクスは息を飲みこみ、ロンフェイを見つめていた。我知らず足が動き、グリフォンから下馬し、ロンフェイの横に立ち、剣を構えた。
　ちらりとその目を見れば、黒い瞳は揺れているようだった。
「いかなる事情があるか知らぬが、そなた一人に血を押し付けるのは忍びない」
　ロンフェイの心に葛藤があるのを知り、コヴァクスの心にも葛藤が芽生え、ともに血で汚れる決意をさせた。
　すると、ニコレットとソシエタスがこれに続き、我もとシァンドロスもロンフェイ、コヴァクスとともに暗殺者と対峙した。
「我らが死ぬか、お前らが死ぬか。革命の夜にふさわしい決闘だな」
　グニスッレーも覚悟を決めたようだ。一時、間合いを取って対峙し、隙をうかがっていたのが、四人一斉に飛び掛ってきた。
　ペーハスティルオーンにイギィプトマイオスら神雕軍は王太子の助太刀をしたいが、シァンドロスはそれを嫌う。やきもきする思いで、成り行きを見守るしかなかった。
　だが対するロンフェイ、コヴァクスらだったが。ロンフェイ何を思ったか、素早い動きで、コヴァクスのくびすじを指で突き、さらにニコレット、ソシエタス、シァンドロスにも同じようにしてから、

一人で四人と戦った。
コヴァクスらは、なぜか動けなかった。

第八章　革命　？

「何事だ、魔術か」
様子のおかしさに、誰かがそんなことを叫んだ。名だたる騎士が、女が指一本触れるや動けなくなるなど、これが魔術でなくてなんであろうか。
神雕軍とバルバロネは慌ててシァンドロスのもとに来るが、手のほどこしようもなかった。
「この女、奇妙な術を使う」
さすがのシァンドロスも驚きを隠せなかった。コヴァクスもニコレットもソシエタスも、動けないまま、ロンフェイが四人と戦うのを見守るしかなかった。
（どうして全てを一人で背負うんだ）
コヴァクスはロンフェイに悪意がないことは察していた。むしろ一人で全てを背負うからこそ、助太刀に入ったコヴァクスらを何らかの術をもって動きを止めたのだろう。
術こそ面妖だが、その心のうちは……。
四本の剣をかわすその動きはしなやかで、ときに舞いのような美しさも感じさせた。民衆の中にも、畏れる者、見惚れる者がおり、ロンフェイをみる眼差しの色は様々だった。
喚声があがった。
華麗に剣を交わすロンフェイの体術に驚きをなし、見惚れもしたが、やはり怖れが上回った。
おぞましい暗殺者が、またひとり、やられた。
剣を拾いなおした灰色髪のオナリハトクだったが、四人での猛攻空しく一瞬の隙を突かれて、コヴァクスらと同じように指先で首筋を突かれると動けなくなり、さらにロンフェイは白髪魔女のアッリムラックの手を一瞬とると、その剣はオナリハトクの胸を貫いた。
「ひぃい」

いかに容赦なく残酷なアッリムラックといえど、わけもわからぬうちに仲間を刺したのは心臓が口から飛び出すほどの驚きだった。

悲鳴に包まれて、オナリハトクは白目をむいてたおれて、息絶えた。さらに民衆の悲鳴がそれを包み込む。

身動きできないまま、コヴァクスらはただ目を見張るばかりだった。

しかし、ロンフェイのなんという強さであろう。女の身で、しかも武器を持たぬ無手で、あそこまで暗殺者と戦えるものなのか。

魔女、とまで思わぬでもやはり人ならぬ者であると思われた。

「ええい、退け！」

グニスッレーは顔をゆがめ、三人は咄嗟に逃げ出した。が、民衆の中から勇気あるものが飛び出て逃走を阻んだ。守備兵の格好をしているうえに、殺戮を楽しんで恨みを随分と買ってしまっていた。

「しゃらくさい雑魚どもめ！」

数が三人に減ろうとも、グニスッレーたちにとって素人の民衆など簡単に散らして逃げられる。とは、そうは問屋が卸さなかった。

民衆の中にも死を覚悟した者があり、それらが得物を振り上げ暗殺者に立ち向かった。

焦りと嘲笑でゆがんだ笑顔をたたえ民衆の壁を崩そうとしたとき、すかさずロンフェイがその前に立ちはだかる。

「頼む、見逃してくれ！　機会をくれ！　これからは善人として生きる！」

咄嗟に三人は剣を捨て跪き、額を地面にこすりつけ哀願しはじめたではないか。それに動じて許してしまうのか、と思う者が何人かいたが、ロンフェイ一瞬の間も空けず指で三人の身体を突き動きを止めた。

「最終的に許す許さないは、この街の人たちが決めるでしょう」

静かにそう言うと、コヴァクスらのもとに戻り、さっきと同じように指先でコヴァクスらの首筋を突く。

今度は、動けるようになった。

コヴァクスとニコレット、ソシエタスにシァンドロスは不思議そうに手足を動かし、自分の身体に何の異常もないことを確認する。
それを見てロンフェイは微笑む。
「大丈夫よ、問題ないわ」
ロンフェイの微笑みに捕らわれるように、コヴァクスの動きが止まった。
(まあ)
グニスッレーがコヴァクスを罵りながら、その心を見透かしていたわけだが、図星だったようだ。ニコレットは色違いの瞳をコヴァクスとロンフェイ交互に向ける。
ロンフェイを見つめるコヴァクスの瞳。ニコレットの心は揺れた。
(私たちには大志がある。色恋沙汰など……)
いや、人の心はそんなことで微動だにしないことはない。もしそうなら、救いようがないというものだ。
(むしろロンフェイさんにいてもらった方が、お兄さまの士気も上がるかしら)
「命の恩人よ、お前は何者だ」
ニコレットが口を開こうとしたとき、動けるようになったシァンドロスは、不思議そうにロンフェイに問うた。彼女に悪意はないことはわかっているが、なにか、避けたいものを感じていた。
民衆のロンフェイを見る目にも、畏れがあった。コヴァクスだけが、このまま闇にとかされそうな様子だった。
革命を起こし太守バクレストンをたおしたその夜、魔女か女神が降り立ち、革命の戦火に照らされながら、舞踏会をして遊んだ。
そんな風に見えた。
神雕軍とバルバロネはロンフェイを警戒し、臨戦体制をとっていた。シァンドロスはさらに問うた。
「そなた、はるか東方より来たファ人ではないか」
「そうよ」

「ほう。やはり東方のファ人であったか。ファ人は不思議な術を使うというが、まことであったな」

ロンフェイがファ人と聞いてシァンドロスは感心してうなずき、コヴァクスははっとしてロンフェイを見つめなおしていた。

「殺せ！」

「殺せ！」

「殺せ！」

怒号が響く。

いつの間にか太守バクレストンの首が掲げられ、民衆はグニスッレーとブラモストケ、アッリムラックを取り囲んで、殺せとわめいている。

革命で気が立っている民衆たちは、守備兵の姿で殺戮を楽しんでいたグニスッレーたちをとうてい許す気になれなかった。

三人の無残な悲鳴があがった。

ニコレットは思わず目をそらした。

（あの時と同じだ）

ソシエタスは顔をしかめ、ニコレットに続き目をそらした。いや、ロンフェイもコヴァクスもバルバロネも、目をそらしている。

無慈悲な太守に虐げられた民衆が、その反動で無慈悲になりきってしまうその不条理というか、そういったものは、なかなか正面から見受けることは難しい。

ただシァンドロスら神雕軍は事の成り行きを見守っていた。

「し、シァンドロス、ソケドキア王太子よ！」

搾り出すような声でグニスッレーが叫んだ。身動きできず、民衆から私刑（リンチ）されながらも、顔はおぞましくゆがんで笑っていた。後の二人も同じだった。

それに民衆は怖じて、私刑の手を緩めた。やはり闇を背負う暗殺者の発する気は、民衆から私刑をする気分まで奪ってしまうのだろうか。

汚らわしい声で名前を呼ばれて、不快感もあらわに、民衆をどかして神雕軍とバルバロネを引き連れ三人のもとまで来て取り囲む。
「お前たちの穢れた声の遺言など、聞き届けぬ。黙って、死ね」
「いいや、我らの声をお前の耳に沁み込ませてやろう。我らを遣わしたのは、父王フィロウリョウ」
十数本の歩兵の槍が、三人を串刺しにした。三人は血まみれになり血の泡を吹き出しつつ、休まず声を発した。
「馬鹿げたことを申すな！」
「まことだ、まことだ、お前の父フィロウリョウはお前を愛しておらぬ。妾の生んだ子を跡継ぎに……」
さらに十数本、三人を串刺しにした。
血まみれで、馬鹿笑いの顔をして、三人はようやくこと切れた。
三人の言葉を聞き、コヴァクスが驚いたのは言うまでもないが、シァンドロスはそれどころでは済まない。
だが敢えて平静をよそおっている。
誰かが持っていた太守バクレストンの首を奪うようにして取ると、民衆の前に掲げ、
「革命はなった！　太守は裁きを受けて死んだ。革命はなったのだ！」
と叫ぶと、無理矢理にでも神雕軍たちが、
「革命万歳！」
と叫ぶ。突然のことに熱せられたり冷まされたりしていた民衆だが、その革命万歳の叫びを聞き、熱が戻り希望ある明日が見えたのだろう、
「革命万歳！」
「革命万歳！」
「革命万歳！」
次々と唱和し叫びだす。
フィウメの街は、あっという間に革命万歳の轟きに包まれた。

ニコレットは呆然と万歳の声を聞いていたが、はっとロンフェイ方を振り返る。

ロンフェイはコヴァクスに向かって微笑み、

「では、私は行くわ。縁があればまた会えるでしょう」

と言うや、風のように駆ける。

「待ってくれ！」

「待って」

コヴァクスとニコレットは同時に声を上げて、追おうとしたが、追いつけず、姿を見失ってしまった。

万歳の轟きも、耳に入らない。

心の中で、ロンフェイの微笑みと、揺れる黒い瞳が浮かび上がっては、消えることなく閃きつづけていた。

第九章　破壊　？

革命なって、戦火もようやく鎮まり、フィウメの街はドラゴン騎士団を迎えて新たな出発をしようとしていた。

一時、フィウメの人々はコヴァクスに新しい太守になってもらおうとしていたが、コヴァクスは固くこれを辞退し。

メゲッリが太守を務めている。

自分の立身出世のために戦ったのではない。その代わり、メゲッリを新たな太守に推して、コヴァクスたちドラゴン騎士団はその補佐役となることで話し合いは決着した。

メゲッリも当初は固辞していたが、やはり太守は地元出身者がなるほうがいい、ということで、任を負う決意をした。

少々頭が硬いところがあるが、不正なく真面目に政務にはげむので、人々の評判もよかった。

ともあれ、フィウメの街には、再建の息吹が溢れて。

街の人々はまず、再建の息吹の具現化として、ドラゴン騎士団の龍牙旗を織り進呈し。

皆で冬を越すために、皆で冬に備えた。

ドラゴン騎士団といえば、フィウメの街にとどまらずに、アウトモタードロムの要塞にいることにした。

若い騎士の訓練所として建てられた要塞だけに実用性に富み、騎士団の拠点にふさわしかった。

若い騎士たちの希望の要塞は、今はドラゴン騎士団の拠点として龍牙旗が立ち。革命後の新たな出発の象徴となっている。

再建の息吹はアウトモタードロムの要塞にも及び、ドラゴン騎士団を慕った若者たちが押しかけ、騎士団への入団が殺到した。

コヴァクスやニコレットは、ドラゴン騎士団の再生がいよいよ具現化し、感激に打ち震えるものの。その感情のままに入団を許して

も、まとめきれず、また烏合の衆と化すことも避けるため、まずは要塞に収容可能な百程度の少数精鋭で、地道に基礎固めをしてゆくのだ。

コヴァクスにニコレット、ソシエタスは厳しい試験官として若者たちと接し、敢えて挫折するよう仕向け、若者一人ひとりの内面を吟味する。

むごいようだが、騎士団になるということは、いざという時に死ぬということでもある。神話や英雄、冒険の物語をたしなむのと同じ気持ちで来られても、本人のためにはならぬのだ。

そんなこんなで、新生ドラゴン騎士団には挫折にもめげなかった逞しい若者たちが入団し、編成されて、日々訓練に励むこととなる。

シァンドロスと神雕軍は革命の夜が明けるとともに旅立った。

暗殺者は言った。暗殺者を遣わしたのは、父王フィロウリョウであると。

にわかに信じられぬことではあるが、いかに歪んだ暗殺者であろうとも、いまわの際に嘘は言うまい。というより、歪んでいるからこそ、いまわの際に真実を話し、シァンドロスの心を掻き乱すのだろう。

革命祝いの宴が開かれたのだが、シァンドロスら神雕軍はそれすら関わろうとせず、ソケドキアへと突っ走る。

シァンドロスの顔からは、あの不敵な笑みが消えていた。

バルバロネはそんなシァンドロスについていった。出立の直前、コヴァクスとニコレットに言った。

「あんたたちといるより、シァンドロスと一緒にいたほうが面白いし。なにより、いい男だしね」

バルバロネは屈託なく、シァンドロスへの愛情を吐露する。それだけではなかった、最初はいい奴らだと思っていたコヴァクスにニコレットだったが、

「一緒にいつづけてたら、絶対喧嘩するだろうね。あたしとあんた

らは合わない、離れた方がいいと思うんだよ」
などということも、打ち明けたのだった。
言葉もなかった。
生まれと育ちが違う、と言えばそれまでだったが、思い切った性格のシァンドロスに比べてどこか煮えきらぬところを持ち合わせているように見えるコヴァクスとニコレットの言動は、バルバロネの癇に障るのに十分だったのだろうか。

思い起こせば革命は、あまりにも慌しく、まるで夢のようだった。だが革命が終わりではない。革命は新たな出発点なのだ。
夢から覚めることは、まだまだ出来そうにないだろうか。
とくにシァンドロスは、そのまま夢の世界にいるようだった。
フィウメの人々があの革命の夜を、ドラゴンの夜と呼び、その夜のことを偲びながら冬に備える日々を送っているとき。
何者もよせつけず、シァンドロスら神雕軍は南へ南へと急速に南下し、ついに国境へといたった。
国境警備隊はシァンドロスの帰還に驚き、宿舎に招き寄せて、国に一大事起こるを告げた。
それは、
「国王暗殺される！」
という、それが真実なら世界を一変させるものだった。
さすがのシァンドロスも、頭が混乱する。無理もない、あの暗殺者を父が遣わしたかと思えば、その父は暗殺者の手にかかって死んだという。
咄嗟に剣を抜き放ち、警備兵に突きつける。
「オレを怒らせたいのか」
「めっそうもない、どうしてわざわざ王太子の機嫌を損ねるようなことを」
警備兵を斬ったところで埒が明かぬ。
シァンドロスは神雕軍をひきつれ、烈火のごとく爆発した火山に

噴き上げられた火山岩のごとき勢いで、ソケドキアの首都ヴァルギリアに向かった。

ガッリアスネスは、宿舎に立てられていた国旗、ソケドキアの紋章のあしらわれた赤と黄色の太陽の旗を見つめた。

（古い太陽は沈み、新たな太陽が昇るのだ）

ということばかりが、胸を駆け巡っていた。なるほど今ソケドキアは一触即発の分裂の危機にある。

国境警備兵のうろたえようはどうであろう。

おそらく他国にも知れ渡るだろうし、いずれリジェカに、ドラゴン騎士団にも知れ渡るだろう。

ことに国境を接する南方エラシア地方のポリス（都市国家）群も、今にも滅ぼそうというくらい痛めつけたアヅーツも、黙ってはいまい。

それを思えば、よく帰れたものだ。

危機なく帰れたわけではない。だがシァンドロスの疾風怒濤の勢いに誰も追いつけなかった。

神雕軍の兵士たち、バルバロネは、シァンドロスについていけた。それが強く誇りに感じた

国王暗殺の危機は、憂うよりむしろ新たな夜明けのように感じられていた。

国王フィロウリョウ暗殺のいきさつは、こうだった。

フィロウリョウはシァンドロスがどこかへと消え去ってから、心配するどころか、側室であるクレオの生んだ男子、アントラを溺愛するようになった。

さらに、アントラの花嫁を、南方エラシアのポリスの一つである、アノレファポリスから招き寄せ、政略結婚の準備も進められていた。

そして迎えた結婚式の日、王宮の宮殿内にある円形劇場で華々しく結婚式が催されているときに、悲劇が起こった。

あろうことか、アノレファポリスからの花嫁は、ふところから短

剣を取り出し、花婿アントラを刺し殺し、さらに舅のフィロウリョウも刺し殺したのだった。

まさかそんなことが起こるとは思わなかったから、完全に隙を突かれ、なすすべなく刺し殺されるままだった。

その花嫁も、父王と花婿の死を見届けると、みずから喉を突き自害した。

華々しい結婚式は、一瞬にして修羅場と化し、国は混乱したのだった。

南方エラシアのポリス群は戦争と同盟を繰り返しながらも、古来よりの高い文化と高いポリスの城壁の中で、悠々自適な生活を送っていた。

エラシアは気候にも恵まれ、過ごしやすく豊かな土地であった。だがそれゆえに、よく狙われる。

古来から東方のタールコとの戦争はもちろん、北方からの異民族の侵略と戦ってきた。

フィロウリョウも、南方エラシアを求めていた。その足がかりとして、アノレファポリスと同盟を結んだ。同盟といっても、力関係をもってしての、事実上の支配で。

花嫁は生贄だった。

ポリスも様々ある。軍事的に強いポリス、政治的に優れているポリスもあるが。

弱く貧しいポリスもある。アノレファは、そんなポリスだった。

フィロウリョウはアノレファポリスを踏み台にして、南方進出を企てたのだが、あらぬ形で阻止されたうえに、命までも落す結果となった。

アノレファポリスは確かに弱く貧しいポリスかもしれない。しかし、アノレファポリスからの花嫁は、誇り高かった。ただ身体が大きいだけの野蛮人に全てを捧げるくらいなら、それを道連れにして、己の誇りと純潔を守っての死を選んだ。

シァンドロスは矢の様な速さで首都ヴァルギリアに到着し、殴りこみの勢いで王宮へ突き進んだ。

国は辛うじて分裂を免れている。それはシァンドロスの母、アンエリーナの功績によるものだった。

フィロウリョウが暗殺されるや、息のかかった貴族たちをすぐさま招集し身辺警護をさせ、多数の兵士も動員し王宮も手中におさめ、不穏な動きがないか監視をおこたらなかった。

さらにシァンドロスを慕う若い貴族の子弟たちも進んでアンエリーナに着き、王太子の帰還まで王宮と王宮の大奥を守り抜いた。

それとは対照的に惨かったのは、フィロウリョウの側室クレオだった。

アンエリーナは私兵をもって容赦なく恋敵および政敵へ押しかけ、恐慌をきたしたクレオは毒蛇に乳房を噛ませて自害し果てた。

それでもアンエリーナはおさまらず、クレオのなきがらは八つ裂きにされて、燃やされて灰にされて、山に捨てられたのだった。

それからはずっと、息子の帰還を待ちわびていたのだが、ようやく帰還した我が子の顔を見て、愛しさいっぱいに抱擁し、快く王宮に迎え入れた。

「親不孝をしてしまいました。申し訳ありませぬ」

シァンドロスは王座に座る母に跪き、不孝を詫びた。

「なんの。若者が冒険を求めるのは、当然のこと。むしろ母は勇気あるそなたを誇りに思う」

「恐れ入ります」

コヴァクスが見れば、その母に対する恭しさには驚くことだろう。コヴァクスやニコレットも母エルゼヴァスを慕い孝行を心がけたが。シァンドロスの場合はどこか孝行と言うには過ぎたるものはあるようだった。

「あのにっくきクレオは王をたぶらかし、卑怯なアノレファポリスの女をまんまと招きいれて、国を大きく陥れました。愛おしい我が子よ、この母の無念さを、晴らしてくれるか」

「もちろんです」
ふと、シァンドロスは、恐る恐る母に問う。
「母上、ひとつお聞きしたきことが」
「なんじゃ、言うてみよ」
「おそれながら、旅の途中暗殺者に命を狙われたのですが、奴らはあろうことか父王が遣わしたものだと……」
「それはありえるでしょうね……」
母の言葉に、シァンドロスは一瞬、石になった。
「クレオは、我が子をソケドキアの王にするため、よく王をたぶらかしておりました。おそらく、王にあることないことを吹き込み、そなたに暗殺者を遣わすよう言ったのかもしれませぬ」
「証拠は」
「これに」
アンエリーナが差し出したのは一枚の羊皮紙だった。羊皮紙には父王のサインと、太陽の紋章の蝋印があった。それとともに、羊皮紙には、跡継ぎをアントラに定める旨が書かれていた。

第九章　破壊　？

シァンドロスの顔が強張る。
「そなたの勇気を理解せずに、クレオにたぶらかされるままに、愚かにも王はアントラごときを世継ぎにさだめたのです」
「……」
シァンドロスは羊皮紙をもったままかたまっている。
脳裏に六年前、十五のある夜のことが思い起こされていた。

シァンドロスは十五の年に初陣を果たし、勇戦し手柄を立てた。
初陣の敵は南方エラシア地方のポリス群の一つ、スパルタンポリス。
アノレファポリスはスパルタンポリスと戦争を繰り広げており、苦戦し、新興国ながら強い軍事力を誇るソケドキアに助けを求めた。
フィロウリョウはそれを受け、丁度年頃となったシァンドロスに軍を持たせて援軍に行かせたのだった。
初陣の十五の少年将軍が勇猛で知られるスパルタンポリスの軍隊とまともに戦えるのか、と疑問視する者もいたが、シァンドロスはペーハスティルオーンにイギィプトマイオスの協力を得て、みずから先頭に立って奮戦し。
さらに勇敢にもスパルタンポリスの、猛将で知られる将軍、スリハンドレトに一騎打ちを挑み、見事討ち取って首級を挙げた。
戦争の仕方も上手く、ただ正面から激突するだけでなく、作戦を練り自軍が有利になるよう戦いを進め。スパルタンポリスとの戦いはまさに百戦百勝の勢い。
スリハンドレトが若いシァンドロスに敗れたのも、作戦負けをして心に焦りがあって戦いに集中できなかったからだろうと言われている。
勝利するために遺憾なく発揮された才能は、鬼才と言ってもよい

だろう。
十五の少年ながら将軍としての勇気と才能とを見せ、南方エラシア地方においてその勇名を一気に広め、畏れられた。
同盟を結んだアノレフファポリスからも厚い信頼を得て、ソケドキアとアノレフファポリスはそのまま同盟を結び、それがソケドキアの南方進出の足がかりとなり。
ソケドキアの後継者はさだまったかに見えた。

思えば、その初陣で勝利したことが、今につながったのだろうか。故国に凱旋し、父は喜ぶかと思ったが。そうは問屋が卸さなかった。
戦勝の宴が王宮で華々しく催されたのだが、フィロウリョウはその宴の席で、
「そなたは己の未熟もわきまえず、スリハンドレトに一騎打ちを挑んだと聞いた。たまたま運よく討てたからよかったものの、もし敗れたらどうするつもりだった。そなたは自覚が足らぬ」
と、小言を言う始末。
そこですめばよかったのだが、それからアントラを出し、
「アントラは、そのような浅はかなことはせぬであろう」
とまで言うではないか。さすがにシァンドロスも勝利の酔いに水をかけられて無理矢理覚まされたような不快感をおぼえざるをえなかった。
「勝つことは、よくないことなのでしょうか」
「なに?」
宴の席で、父と子が、にらみ合った。臣下たちは固唾を飲んで見守り、緊張が走った。
フィロウリョウは、シァンドロスが勝ち、帰ってきたことがなぜか気に入らないようだ、と素朴に疑問を抱く臣下もいたが、アントラの名が出たところで、これは深い問題だとさとった。
そのアントラも宴の席にいる。その目は十三の少年にしては、妙

に冷たくシァンドロスを見据えていた。
フィロウリョウは、その冷たい目を愛おしく見つめると、シァンドロスを睨みすえる。
「その目、アンエリーナにそっくりじゃな、愛情のない、冷たい目」
シァンドロスの眉がつりあがる。
もとは旧ヴーゴスネアの一軍人だったフィロウリョウは、戦乱に乗じて独立し国を興した。妻アンエリーナは、一軍人だったころに知り合った酒場の踊り子だった。それに対し側室クレオは、戦乱の混乱に紛れて強奪した旧ヴーゴスネアの貴族の娘だった。
アンエリーナは美しいが強気で奔放な性格で、ときにもてあますこともあった。それに対しクレオも美しさは引けを取らず、教養もありおしとやか、さらに血筋がそうさせるのか、どこか、至上の雰囲気を持ち合わせていた。
となれば、自然と、クレオが可愛くなる。その子も可愛くなる。
最初心を開かなかったクレオだが、母と子ともに大事にされることで、フィロウリョウを慕うようになった。えこひいきもはじまるようになった。
そのえこひいきを、アンエリーナとシァンドロスは、血の滲むような思いでこらえてきた。
それを察しつつ、クレオの心に、我が子をフィロウリョウの世継ぎに、という気持ちが芽生えるのも、自然なことだったろう。
「私は戦いに勝ちました。父から仰せつかった役目を果たしました」
「いい気になるな！」
父は酒盃をシァンドロスに投げつけた。避けずに、これを敢えて受け、額に当たるに任せ、痛みを堪えた。
「ソケドキアの王太子ならば、その程度できて当たり前。アントラにもできる」
気がつけば、剣を握りしめていた。場はざわめきだす。
「本性を顕したな、女狐の子め」
「母を女狐とおっしゃられましたね」

「おお、言ったとも。アンエリーナの奴が、我が軍才に目を着け、玉の輿に乗ることしか考えてなかったのを、見抜かぬと思ったか」
「しかし、母は王后としての役割を立派に果たしているではないですか」
「ふん。権力に執着することを、役目を果たすと言うのか。これは面白い」
「いかに父とはいえ、許せるものではありませぬ。どうかお取り消しを」
シァンドロスは剣を握りフィロウリョウに迫った。しかし、父王は嘲笑するばかり。
「兄上、ここは祝いの席でございます。そのような乱暴をはたらくものではありません」
アントラの冷たい言葉。冷たい目。フィロウリョウはそれを聞いて、大いに笑い、喜ぶ。
「アントラはな、違うのだよ」
「なんですと」
「シァンドロスとは違うのだよ、シァンドロスとは！」
心の中で、何かがするりと抜け落ちるのを感じた。臣下たちの前での、あからさまなえこひいき。それが何を意味するのか。
「世継ぎはアントラと決めている」
ということだ。
手柄を立てても、その母への愛着の違いから父から蔑まれる十五の少年の心はどのようなものだったろう。
また逆に、母への愛着だけで、手柄を立てぬうちから父に過保護に育てられた十三の少年の心はどのようなものだったろう。
戦争に勝利して帰還しても父は喜んだようではない。ということは……。
（父は、オレに死んでほしかったのか！）
まさかと思った、思いたかった。

なりませぬ、とペーハスティルオーンやイギィプトマイオスらは慌ててシァンドロスをいさめて、その場は事なきを得た。

しかし父子の関係は冷め切ってしまった。

臣下もそれにともない、将来を見据えて、アンエリーナとシァンドロスに着く者、クレオとアントラに着く者とに分かれたが。

血筋だけでは持ち得ることのできない、内からの輝きとでもいおうか、それはアンエリーナとシァンドロスに分があったようで。徐々にでも数はアンエリーナ、シァンドロス派がまさるようになっていた。

それでもフィロウリョウはそれを察しつつも無視し、シァンドロスとアンエリーナに会わず、クレオやアントラとばかり会った。

アンエリーナは、夫からの屈辱に身悶えする思いで、唇を噛みつつ、

「シァンドロスよ、ここは堪えるのです。そなたが持つ王の大器を磨くことに専念しなさい」

と我が子に言い聞かせ、シァンドロスもそれをよく聞いた。

あの初陣から、父はシァンドロスを戦場に送り出すことはせず、王宮に閉じ込めようとした。王宮に閉じ込め、腑抜けにするつもりだったようだ。

その間にもフィロウリョウはソケドキア王として戦争を繰り広げ、南方を押さえつつ北方アヅーツに侵略しこれを滅ぼす寸前まで追いつめていた。

アントラも父に従い従軍し、父や臣下に助けられ、そこそこ手柄を立てた。

滑稽なのは、臣下の討った敵将の首級を奪い、アントラに持たせて。

「アントラの戦いは見事なものだ！」

と喧伝したことだった。

戦場を駆け巡るアントラを誰も目撃していないからすぐにばれたが、いかに呆れていようとも王がそうする以上は、文句も言えなか

った。

臣下の中で、シァンドロスの王位継承を望む心は大きくなっていった。あの十五の初陣の戦いぶりは、いかに王権をもって掻き消そうとも掻き消せるものではない。

しかしフィロウリョウはシァンドロスを王宮から出そうとしない。

「このままでは、父に全てを持っていかれて、オレの取り分がなくなってしまう」

業を煮やしたシァンドロスは、国を出る決意をした。

勇敢な若者たちをあつめ、独自に神雕軍を組織し、己の戦場を求めて旅立った。

コヴァクスらとはそんな時に出会い、ドラゴンの夜の革命に導いたのは夢にも思わぬことであったが、まさに大空を翔る大鳥になったような、開放感に満ち溢れた旅だった。

その旅で己の力で国を興すつもりだったが、あらぬところで帰ることになったのも、夢にも思わぬことだった。

第九章　破壊　？

「アノレファポリスの姫がたいそう美しいと聞いたアントラは、是非我が花嫁に欲しいと王に懇願し。王もそれを聞き入れたのじゃが、それで、あのざまじゃ」

いうなれば色ぼけで、アントラは人生を終わらせ、ソケドキアはそのとばっちりを受けた、と言える。

色で身を滅ぼす王や王子は多いが、アントラもその中の一人だったということだ。そんな王子を世継ぎにしようと本気で考えて、さらに暗殺団を遣わしてまでシァンドロスを亡き者にしようとしたフィロウリョウの考えは、どうであろう。

残念ながら、フィロウリョウは戦場にあっては優れた戦士であったろうが、王としての器は小さいといわざるを得ない。

シァンドロスの身体の震えは止まらない。

薄々感じ、見たくないと思っていたものを見て、震えるばかり。

「いいや、もうわらわも、なにがどうなっておるのか、ようわからぬ。あるのは、乱、そればかりじゃ。愛おしい我が子よ、母の思いを受け止めてくれるか」

アンエリーナは泣いた。

シァンドロスは一歩前に進み、母の手を握る。

「まずは報復を。アノレファポリスに、恐ろしき報復を」

アントラがどうなろうと知ったことではないが、父王までアノレファポリスの姫の手にかかり、ソケドキアは混乱した。

アンエリーナが手を打たねば、どうなっていたことだろう。

この暗殺事件はもう周辺諸国に広まり、ソケドキアの汚点として後々まで残るだろう。

これがリジェカにも広まり、コヴァクスらドラゴン騎士団も知ることになるのは容易に想像でき、それはシァンドロスには耐えられぬ屈辱だった。

政変で国を追われた者を助けてやっても、その者に故国の政変を知られ同情をされるなど、どうして許せよう。

「母よ、朗報をお待ちあれ」

シァンドロスは、母に優しく言い。羊皮紙を握りつぶした。

王太子と母の、積もる話を漏らすような面会をよそに、赤い兵団団長イヴァンシムと副団長ダラガナは、王宮の一角にある一室で、ガッリアスネスとその師ヤッシカッズと顔を合わせていた。

ガッリアスネスは王宮に着くや師ヤッシカッズにうながされ、イヴァンシムとダラガナと会い、シァンドロスとの旅のことを語った。

イヴァンシムは恰幅のよい体型、六十に近く髪も白く、やや角ばった面持ちで、目を閉じ気味に顔をしかめいる。しかし威圧感はないが、軽さもない。ぱっと見、雲のような人でありながら同時に重さも感じさせた。

それに仕えるダラガナは長身で顔も体型も整い、騎士然としている。

それらと相対するヤッシカッズは小柄で丸みのある体型に、ふっくらした頬が印象的な好々爺だった。長年ヴーゴスネアの文官として働き、今はソケドキアに仕えながら、後世に残すべき歴史を書きとどめることに熱心だった。

ガッリアスネスは幼少のころから知っており、勇気と文才を兼ね備えているのを見抜き、よく育てたものだった。

この四人の間に朗らかな雰囲気はない。

イヴァンシムはヤッシカッズとガッリアスネスを見据えて、

「では、我らは今すぐに、国を出てゆきます」

と言うではないか。

驚いて、なぜです、ガッリアスネスが問えば。

「残念ながら、我らは、ソケドキアに忠誠を抱けません」

と言い放った。ガッリアスネスは開いた口がふさがらない。しかしヤッシカッズは平然とし、もっともなことだ、と頷く。

「ガッリアスネス、あなたにどうしてもと説得されて、ソケドキアに赴いたが、どうにも……」

イヴァンシム率いる赤い兵団はシァンドロスと出会い、ソケドキアにゆくことをすすめられた。最初は断っていたのだが、ガッリアスネスが、せめて我が師と会い話をしてからでも、と言うのを聞き、そこまで言うならと、ソケドキアに赴いた。

そこで王后アンエリーナとも会った。

「これは、いかん」

という直感が閃いた。ヤッシカッズも、

「弟子が迷惑をおかけした」

という始末。

そんなことを聞かされて、ガッリアスネス立つ瀬がない。

それでもガッリアスネスが帰ってくるまで待ったのは、せめて一言非礼を詫びようと思ったからだという。もっとも、帰ってくるのが遅れれば、やむなく出てゆくつもりであった。

「ならばせめて理由をお聞かせ願えませんか」

イヴァンシム、多くを語らない人柄。むっつりと黙っている。ダラガナも多くを語らず。四人顔を合わせから、さほど言葉を交わせていない。静かにガッリアスネスの言葉を聞いて、リジェカにゆくと言ったのみ。

「それは言えません。だが、いずれわかります」

ぽつりと言った。

「それはどういうことです……」

「いずれわかります」

「道中ご無事で」

唖然とするガッリアスネスを横目に、ヤッシカッズは一歩前に進み、イヴァンシムの手を取り別れの挨拶を告げた。

これでおしまい。

あとは言葉もなく四人歩き、部屋を出て、別れた。

外に出れば太陽は下界を照らし、影が地にうつる。王宮の中庭を

通る通路は太陽の恵みの光を受けて暖かいが、心の中はなぜか寒かった。

ガッリアスネスはうつむき、ヤッシカッズは一歩歩くごとにふっくらした頬が揺れる。

「戦がはじまる」

「は……」

「アノレファポリスとの戦がな」

「はあ……」

「いやな仕事をせねばなるまい」

「……」

師匠が何を言いたいのか、ガッリアスネスにはわからないが、薄々と心に浮かぶものがあった。それは薄氷のような、触れづらいものだった。

イヴァンシムは赤い兵団の兵たちが待つ、王宮郊外の広場に来た。その数は二百ほど。そのうち騎兵は二十ほど。その広場は戦争での出陣のとき軍隊の集う広場で、四方に国旗はためき、太陽の広場と呼ばれていた。

が、普段は庶民のいこいの場で幼子たちの無邪気な笑い声も響く。そこに、ものものしい武装集団が、しかも武装は赤色一色なものだから、人々は驚き遠巻きに眺めている。

広場にいる名目は、野外訓練。王宮にも通達しているので、疑いの目を向けるソケドキア騎士は、まずいない。とはいえ、訓練は偽りである。が、そのことは赤い兵団の中でも通達済みであった。

数はわずかだが、一人ひとりが精悍な顔をし、歴戦の勇士として男臭さを存分に漂わせていた。

赤い兵団は、敵に勝つ戦いよりも、味方を、民衆を救う戦いに全てを賭けた兵団である。

イヴァンシムは彼らを見るとむっつり顔をほころばせた。

シァンドロスの誘いとガッリアスネスの説得でソケドキアに赴い

たのだが、思うところあって長くはとどまることなく、反転するように北を目指すことになった。
赤い兵団の騎士たちはくもった顔をしていたのが、ふたりの姿を見ると、ほっとしたような顔をする。
その中に紅一点ともいえる十七の少女、セヴナもいた。赤い鎧姿と腰帯に佩く剣も勇ましく、長い赤毛を頭の後ろでまとめ、ぱっちりとした目と溌剌とした明るさが印象的な少女だった。
父と慕うイヴァンシムの姿を見て、瞳が輝く。それは他の兵らも同じだった。
兵たちは同じ釜の飯を食う兄弟でダラガナが長兄、イヴァンシムは父親のような、というべきだろうか。
そんな一体感が、赤い兵団にはあった。
「さあ、ゆこう」
「はい！」
周囲の人々は、あれが赤い兵団か、と物珍しそうな顔をして赤い兵団を見つめていた。
人々の視線を受けて訓練に赴く赤い兵団は、訓練というにはどこか、明るい顔をしていたが誰もそのことに気づく様子もない。
「盟友の待つところへ」
イヴァンシム率いる赤い兵団は王都を出て訓練をせず、リジェカへと駒を進めた。

母との面会を済ませたシァンドロスは、ただちにソケドキア軍に招集をかけた。
王宮はあわただしくなった。
それとともに、熱も帯びてくる。
王太子帰還の報せはソケドキア中を駆け巡り、収集をかけられずとも自ら馳せ参じる騎士たちが続々と集い。太陽の広場は鼻息の荒い兵士たちでごったがえした。
入りきれぬ者たちは首都ヴァルギリア郊外で待機している。

その中に、赤い兵団がいない。訓練から帰ってこないまま、ということを聞いてシァンドロスは舌打ちし、

「奴らを買いかぶりすぎた」

と吐き捨てた。

どういう理由か知らぬが、無断で国を出るなど許せぬことである。あとで報いねばなるまい。

ともあれ、今はアノレファポリスである。

広場には万を越える兵がひしめき、シァンドロスを待ち焦がれている。

どっと、喚声が上がった。

新しき愛馬ゴッズに跨る王太子が姿を現すや、竜巻でも昇るかというくらいの熱気が渦巻き。

首都ヴァルギリア隅々にまで、熱気は駆け巡った。

「待たせた！」

シァンドロスが第一声をはなてば、喚声も熱気とともに渦巻いた。

「長い間故国を空けたこと、王太子として謹んで詫びよう」

第二声をはなてば、なにをいわれます、我らは王太子を信じておりました、などなど、シァンドロスを待ち焦がれていたという声がところどころ響いた。

「予が諸君を必要とするところ、承知であろう。卑怯にもアノレファポリスは色と刃をもちい、我がソケドキアを滅ぼそうとした。その罪、許しがたい」

シァンドロスの声がはなたれるたび、声にならぬ声がこだまし、渦巻き、天まで届きそうだった。

「この罪、我らの剣のもとに償わせる以外にない。アノレファポリス、滅ぶべし！」

「滅ぶべし！」

「滅ぶべし！」

「滅ぶべし！」

滅ぶべし、という大合唱がこだまし、軍のみならず民衆、女子供

までが、アノレファポリス滅ぶべしと唱え。
広場は、王都は異様な熱気に包まれた。
「我が精鋭たちよ！　この戦いは、新しき時代への幕開けである。それにともない、今広場にいる我が精鋭たちに、新しき称号、神雕軍という名を送ろう！」
どっ、と喚声があがる、無数の拳が天まで届けと突き上げられる。
神雕軍という名はいずれ己のための軍勢をもちたいと願っていたシァンドロス自らが考え出した名であるのは言うまでもない。
旅のときこそ私兵同然であったが、それをソケドキア正規軍の名称にすることで、騎士や兵らは、シァンドロスと同じ輪の中に入れたという喜びを感じるのであった。
それは、アノレファポリスへの復讐心をいやがうえでも燃え上がらせた。
「さあ、我が精鋭たちよ！　隊列をととのえ、前進し、アノレファポリスを地獄の業火につつんでやろう！」
愛馬ゴッズにまたがり猛々しく咆えるシァンドロス。
その目は魔法にでもかかったように、異様なまでに光り輝いて。
その瞳の中には、すでに地獄の業火が燃え盛っていた。
馬蹄、軍靴の響きが王都をゆらし、民衆は口々に「地獄の報いを！」と叫びながらソケドキア軍、神雕軍を見送った。
その先頭には、太陽をあしらったソケドキア国旗と、神雕をあらわす大鷲があしらわれた大旗が堂々と掲げられていた。

ソケドキア軍来る！
アノレファポリスは恐慌をきたしていた。
家財をまとめ逃げ出す都市の民が、路地にごったがえし、怒号や子供の泣き声が響きわたっていた。
軍は守りを固めつつ、アノレファポリスの王、デーヴァイはかつて敵対していたスパルタンポリスを初め諸ポリスに使者を出し援軍を要請したものの、これことごとく断られたり追い払われるか、殺

されるかした。
スパルタンポリスに遣わされた使者などむごいもので、王レオニゲルに、
「ここはスパルタンポリス。これが我が流儀だ」
と言われ、剣を突きつけられて脅された挙句に、処刑に使う大穴に蹴り落されてしまったために音沙汰なく、アノレフファポリスの人々を不安に駆らせた。
デーヴァイは国家安泰をはかりソケドキアに完全隷従することを覚悟し、娘のトーミーコヒノを未来の王であるアントラに嫁がせたが、まさかあんなことになろうとは。
民はことごとく逃げ出したようだ。兵も守りを固めさせているが、シァンドロスやソケドキア軍の強さを知っているために、腰が引けてどこまで戦えるのか。
「降伏を、使者を」
デーヴァイはうろたえながら、シァンドロスにも使者を出した。
だが、スパルタンポリスに遣わした使者同様、いっこうにかえってこない。
希望はなく、絶望が嵐のように迫っている。それに対し、なすすべもなかった。
逃げ場などない。
諸ポリスからも見捨てられ、逃げ込むことも拒否され、どうしようもなかった。
「もはやこれまで」
デーヴァイは思いあまり、剣をもって、自害した。どうせシァンドロスに無残に殺されるくらいなら、と。
残された一族や近習たちは、我を失い競って逃げ出そうとした。
だが、彼ら彼女らの目に飛び込むもの。
アノレフファポリスを取り囲む、ソケドキア軍、シァンドロス率いる神雕軍の大軍であった。
各所に旗が掲げられて風を受けてはためき、旗とともに掲げられ

る槍には、途中で捕らえたであろうアノレファポリスの市民とおぼしき者たちの首が穂先に刺さり、その中には、使者の首もあり、光らぬ半開きの目は空しく故国の都市国家を見つめていた。

地獄より降臨した獄卒たちが、生ける者たちを次々と地獄に送り込んでゆく。

刃が閃くたびにおびただしい血が流れ、真っ赤に燃え盛る炎はアノレファポリスの都市をつつみ、地の底より響いて漏れ出すように人々の悲哀と絶望のこもった悲鳴と、獄卒たちの悦楽の笑い声が交互にこだまする。

「我が精鋭たちよ、この地上から、アノレファポリスを消し去るのだ！」

シァンドロスは容赦がなかった。その言葉通り、建物はすべて破壊し、人間は女子供であろうとも許さず屠りつくそうとし、アノレファポリスの存在そのものをなきものにしようとしていた。

戦いらしい戦いはなかった。

ただ、一方的な虐殺だけがあった。

ガッリアスネスは師のヤッシカッズとともに後方で虐殺の様子を見、呆然としていた。

行軍途中、迂闊にも落馬し肘を痛めた。そのため、シァンドロスは後方で休ませることにしたのだ。

が、それはヤッシカッズがさせたことだった。

「落馬せよ。受け身をとらず。さもなくば破門にする」

と言うものだから、ガッリアスネスは困惑しつつ師の仰せのとおりにしたわけだが。なるほど、その意味が解った。

ヤッシカッズは愛弟子を虐殺に参加させぬようにしたのだ。ガッリアスネスとて歴戦の勇者であり、無用な慈悲などもちあわせておらぬのだが、さすがに今回はどうしようもない気持ちにさせられるものだった。

天に昇る黒煙は風に揺られながらもどす黒くうずまく。それはア

ノレファポリスの怨念が黒煙となって昇っているように見えた。

「……」

ヤッシカッズは何も言わず、幕舎に戻り、ペンを取り淡々と従軍記録をつづっていた。

卑怯にもソケドキアを陥れようとしたアノレファポリスは、哀れ王太子シァンドロスの怒りにふれて、自ら望んだ罰を受け、それことごとく灰燼に帰す。……

ヤッシカッズの握るペンは羊皮紙の上を滑らかに走り、ソケドキアがアノレファポリスを滅ぼす様を書き出している。

先日言ったいやな仕事とは、このことだった。

その怒り、天空の神々の都、天都を落とすかのごとし。

という風に、ヤッシカッズはシァンドロスの怒りようをつづった。

第九章　破壊　？

ペンが走るにつれ、戦況報告が入ってくる。
ガッリアスネスは心ここにあらずと、成り行きを見守るしかなかった。
（イヴァンシム殿ら赤い兵団は、これを見越して出てゆかれたのか）

言葉もない。
ふと、北方に目をやった。イヴァンシムら赤い兵団はどこまで行けたのだろう。
イヴァンシムら赤い兵団は、王都を脱するや国境を抜けるまで止まらず、駆けた、ひたすら駆けた。
身の軽さをたもつため、必要最低限の装備しかさせず、蹴球技（しゅうきゅうぎ）の球（きゅう）を追うごとく駆けよ、とイヴァンシムは命じ、兵らもそれによくこたえた。
「急げ、今は速度こそが命そのもの」
身を潜めて裏道をゆかず、速く駆けられることを優先し、整備された道をひた走る。幸いに、ソケドキアの貴族や豪族らはシァンドロスのアノレファポリス征伐に参戦し、各所の兵は手薄で、何奴、と詮索させられてもたやすく逃げることが出来た。
しかそれは何を意味するのか。今ごろは南方エラシア地方のアノレファポリスは、むごいことになっているであろう、と思うと、胸が痛んだ。
国境にさしかかり、国境警備隊が様子のおかしい赤い兵団をあやしみ、止まれ！　と命ずるも。
「どいてどいて、怪我するわよ！」
セヴナは警備隊を見止めるや蹄の音も高らかに先頭に出て、駆ける紅馬（こうば）の上にて弓矢を構え、すかさず矢を放った。
赤い鎧姿も勇ましく、紅い騎馬にまたがり身体をひねって弓矢を

構える凛とした赤毛の少女の姿は、味方には勇気を、敵には畏怖を感じさせるに十分だった。

「わっ！」

矢は警備隊のすぐ足元に突き刺さり、驚いた警備兵は咄嗟に後ろにとびのいた。それから立て続けに、矢は二本、三本、と警備兵の足元に突き刺さり、警備の仕事を妨げる。

その隙に、赤い兵団は一段と速度を上げて、国境を突破した。

「赤い兵団に、赤い流星セヴナありってね！」

セヴナは弓を掲げて意気込み叫ぶ。

しかし副官ダラガナに「調子に乗るな」とたしなめられ、少し照れくさそうに、

「ごめんなさい」

と舌を出しつつ詫びて、今度はしんがりについて追っ手にそなえた。

しかし追っ手は来ず、赤い兵団は勢いに乗ってアヅーツを駆け抜け、北へ、北へと、ひたすら突っ走った。

その勢いはヴーゴスネアの赤備えと畏敬の念をもって讃えられた赤い騎士たちの勇姿そのもので。イヴァンシムは彼らをよく引っ張り、また兵やセヴナもイヴァンシムによく仕えた。

しかし、彼ら赤い兵団を生かす主は、いなかった。今赤い兵団が一番求めているものは、その主だった。

この走破は、自分たちを生かしてくれる主を求めての逃避行だった。

南方エラシア地方のアノレファポリスは、徹底的に破壊され。

一万の市民が殺され、三万にも及ぶ市民は奴隷として売りとばされた。

狂気と憎悪と怨念とが紅蓮の炎と燃え盛り入り交じり、渦を巻く黒煙は天に昇る。

炎と黒煙渦巻くのを見て、シァンドロスは叫んだ。

「今この時において、アノレファポリスは、滅んだ。喜ぶべきことである！」

破壊や略奪を楽しんでいた兵たちは、シァンドロスの叫びを聞き、喚声を上げた。

もはや形を成す建物などなく、生ける者もない。

このアノレファポリスの地は、ソケドキアの領土となった。それとともに、

「今日よりこの地には、なにもない。無、だ。無、しかない」

人も住まわせず、地名すらつけず、後は風雨に任せる。それがシァンドロスのやり方だった。

女一人のために国が傾くという、死にもひとしい屈辱を受け、その報いとしての滅びがあった。

しかし、フィロウリョウとアントラが欲を出さねばなかったことでもある。

今さらそのようなことを言っても、詮無いことではあるが……。

ヤッシカッズは淡々と記録をつづる。その目は、覚めていた。

ガッリアスネスは、この破壊を見て、言葉のないままだった。ペーハスティルオーンもイギィプトマイオスもシァンドロスの命によく応じ、破壊に加わった。

が、ガッリアスネスはそこまで忠誠を尽くそうという気持ちがなかった。

このアノレファポリスの破壊を見、なにかが変わりつつあった。

ソケドキア軍、神雕軍が王都ヴァルギリアに帰還。王后アンエリーナのはからいにより、盛大な出迎えを受け、シァンドロスは得意の絶頂にあった。

民衆は万歳を叫び、兵や騎士一人ひとりが英雄として讃えられた。

この戦いで、苦心の末敵将の首級を挙げた者は、いないのだが。

その夜王都は、夜を昼にでもするかのように派手にかがり火を焚いて、アノレファポリスから奪った食料や金銀財宝をばらまき、都

あげての飲めやうたえやの宴をもよおした。
季節は冬に移り変わり、寒さが肌を刺す。しかし酒と、戦争に勝ったという高揚感が寒さを吹き飛ばし路地には声にならぬ声をあげて半狂乱に叫ぶ者や、人目もはばからずまぐわう男女の姿が多数見受けられ、道徳も恥もあったものではなかった。
それほどまでに人々は酔い痴れていた。
そして、シァンドロスが次の獲物を狙い狩ることを強く望んでいた。
王宮においても同じで、アンエリーナはいたくご満悦で、自身を上座にすえて、王侯貴族による宴を盛大にもよおしていた。シァンドロスはその隣。
皆上機嫌で飲み、食い、うたい、あるものは女官の尻をぺちぺちとたたきながら抱き上げて甘い言葉を交わす。
王后アンエリーナはご満悦で、終始笑みを絶やさない。
(我が時代が来た)
心は、春が来たようだった。
「のう、シァンドロス」
「はい、母上」
アンエリーナはアノレファポリスより奪い去ったアノレファポリス王妃の黄金の首飾りをならしながら、我が子に振り返った。
「そなたも王太子としてなすべきことなし、いよいよ、王になるのじゃな」
王。
そう、シァンドロスの王位継承を望む声は多かった。また、フィロウリョウもアントラもおらず、シァンドロスが王になるしかなかった。
国は傾きかけたが、気がつけば事は順調にはこばれ、全てが望むままである。
「わらわは、王の母」
と言う、アンエリーナの目。

シァンドロスは我が母の目を、笑顔で見つめていた。麗しき親子の愛、とでもいおうか。

その母の目は、光り輝いていた。その瞳の奥底には、情念の炎がたぎっていた。

ぞく、とシァンドロスの背筋に悪寒が走った。

「……」

一瞬、時が止まったようだった。

「いかがいたしたのじゃ」

「……、いえ、少し、用を足してまいります」

そう言うと椅子から立ち上がり、そそくさと大広間をでてゆく。

護衛がつき従おうとしたが、かまわぬ、と言い廊下を一人で歩く。

厠へゆかず、一人王宮内をうろうろする。

いくつもの燭台が並べられて、暗さはなかった。しかし、シァンドロスは暗いものを感じていた。

「ねえ、シャンドロス」

と後ろから声をかけるのはバルバロネだった。

会った時のような、勇ましい傭兵の姿ではなく、女性として、ドレスを身にまとっていた。

コヴァクスらと別れてシァンドロスに着いて行ったバルバロネは、シァンドロスの侍女となっていた。

もう傭兵ではなく、女になっていた。

大広間の宴ではシァンドロスと少し距離をとって、他の侍女らとともに飲み食いしていたのだが、出てゆくのを見て後をつけたのだ。

「なんだ、いたのか」

というシァンドロスの顔は浮かない。

侍女の身でシァンドロスをそのまま名前で呼び捨てすればただではすまないので、人前では王太子と呼んでいるが、二人きりのときは、そのまま名前で呼んでいる。もともと王宮作法などなく生きてきた女だ、その方が気楽で呼びやすかった。

「すまないが、一人にしてくれ」

「ひとり？　どうしたんだい、なにがあったってのよ」
バルバロネは浮かぬシァンドロスの顔を見て、手を握る。
「気が晴れないならさ、あたしを……」
抱いて、と言おうとしたが、手は離れた。
「今はそんな気分じゃない。すまないが一人にしてくれ」
バルバロネは置き去りにされて、黙って背中を見送るしかなかった。
大広間では、アンエリーナがシァンドロスの後をつけるように出て行ったバルバロネの背中を見据え。
「シァンドロスは愛しい子じゃが、少々つまみ食いが過ぎるようじゃ」
と吐き捨てたのを知るはずもない。
女が欲しいならいくらでもものにすればよい、とはいえ、東方の蛮族の女など、「食あたり」を起こしたらどうするつもりだろう。
「あれを、どうにかせねばの」
といい、肉を指でつまみ、口に放り込み歯でよく噛んだ。

廊下を歩き、そのまま外に出てようか、と思ったとき。今度はヤッシカッズと出会った。
「これは王太子、どうなされました」
「……」
シァンドロスはヤッシカッズに何か言いたそうな顔をしていた。
物思いに耽り、ふう、とため息一つつき、
「ラヌバルとハモーネのことは、そなたに教わったのであったな」
と言う。
「左様。三百年前、ラヌバルは一軍人から身を起こしラヌバル朝ヴーゴスネアを建て、その妻ハモーネは酒場の踊り子の出ながら夫をよく支え、その内助の功は、今でも賢婦の鑑と言われております」
「そうであったな。父と母は、ラヌバルとハモーネをよき手本として、戦ってきた……」

それだけ言うと、無言でヤッシカッズに背中を見せて大広間に戻ろうとした。

政務の途中だったヤッシカッズは、僚友の政務官の待つ政務室へと向かった。

（わしも、そのラヌバルとハモーネに仕えたと思っていたが……）

どうにも、大きな嵐が来そうである。いや、もうすでに来ていて、まだまだおさまりそうにないのだろうか。

それからシァンドロスは長い間戻ることはなかった。

バルバロネはすでに大広間にもどって、他の侍女と何事もなかったかのように歓談していた。

「遅いのう」

いつまで経っても戻ってこないシァンドロスが気になり、アンエリーナは人を遣って探させようとした。

そのときであった。

大広間に数十人からの暴徒が雪崩れ込み、大広間はあっという間に修羅場へと変貌し悲鳴が響く。

武人も多数いるとはいえ、酒に酔いしれている最中、暴徒は刃を閃かせほしいままに殺戮を繰り広げていた。

「な、何奴じゃ！」

と叫ぶや、兇刃はアンエリーナに襲い掛かり、鈍い悲鳴があがる、その身体は血に染まった。

バルバロネは相手から剣を奪い取り無我夢中で抵抗し、大広間から駆け出しシァンドロスを捜し求めた。

「復讐を、復讐を！　アノレファポリスの無念を晴らせ！」

暴徒は、あろうことか、アノレファポリスの残党だった。王都に紛れ込み、今の乱痴気騒ぎに紛れて乱を引き起こしたのだ。

いや暴徒はアノレファポリスの残党だけではなかった。

クレオ派の残党も中に含まれており、アノレファポリスの残党とともに、王宮を血に染めた。

王都ヴァルギリアは宴の浮かれた気分を一挙に破壊されて、たち

まちのうちに阿鼻叫喚の地獄が舞い降りたようだった。

「警備兵はなにをしている！」

修羅場と化した王宮で、シァンドロスは自ら剣をにぎり母のいる大広間に向かった。

よく組織された神雕軍はこの場で力を見せた。

ペーハスティルオーンにイギィプトマイオス、ガッリアスネスは私服のまま剣を手に部下を率い、アノレファポリスやクレオ派の残党を蹴散らす。

不意を突けたとはいえ、絶対数に劣る残党どもは次々に討ち果たされてゆく。

「シァンドロス！」

ドレスを返り血に染めたバルバロネと出会い、シァンドロスは大広間がただならぬことになっていることを察して、急いだ。その後をバルバロネがついてゆく。

警備兵や神雕軍も合流し、大広間に来てみれば。

鼻を突くような酒と血の臭いが充満し、食器や椅子、長卓に、しかばねが散乱する悲惨な有様だった。

ことに、すでにこと切れているアンエリーナに、暴徒がかわるがわる刃を見舞っているのは、歴戦の戦士でも眼を背けたくなる悲惨なものだった。

「母上！」

叫び声を聞き、暴徒はシァンドロスを見止めると、悪魔のような形相で一斉に襲いかかってきた。

「おのれ！」

シァドロス怖れることなく、剣を振るい暴徒に立ち向かった。それは勇気というよりも、狂気であった。その顔は、暴徒に劣らず禍々しいものだった。

「危ない！」

バルバロネやペーハスティルオーンたちも咄嗟に暴徒に飛び掛っ

た。

暴徒は必死の思いでシァンドロスをしとめようとしたが、死をもいとわぬシァンドロスの狂気に気圧されてか、歯が立たず、そのまま首を刎ねられる有様だった。

続いて残りの残党も、しとめられてゆき。

「無念」

という断末魔の叫びを残し、すべて討ち果たされると。

阿鼻叫喚から一気に冷たい手に背筋を触れられるような静寂があたりをつつんだ。

残党どもが討ち果たされていくらか落ち着きを取り戻してきたとき、王都ヴァルギリアに雪が舞い降りた。

しかし夜空には星星がまたたいていた。

残党どもの遺骸はひとまず太陽の広場に打ち捨てられ、殺された王宮の武官文官に、女官侍女らのなきがらは、大広間を片付けてそこにあつめ、手を合わせて丁寧に横たえた。

王后アンエリーナのなきがらはまことに無残なことになっており、目も見開かれて、今にも飛び起きそうだった。シァンドロス自ら血で汚れながら自ら母を横たえて手を合わせた。

よもやこのような最期を迎えるとは。

あちこちで嗚咽が漏れる。王宮の外では、残党どものなきがらに石をぶつけて、ののしる民衆の声もする。

その一方で、シァンドロスの心の奥底で、これでよかったのだ、とささやくものがあった。

アンエリーナの瞳の奥底に宿るものを見つけてしまい、どこかで、こうなることを望んでいた。

それは、破壊だった。

今までのものが全て破壊されることだった。それから、自分が新しいものを創造しゆくことだった。

第十章　樹立　？

ソケドキアの騒動、およびアノレファポリスの破壊。
その報せは四方を駆け巡り、リジェカはフィウメのコヴァクスたちも知るところとなった。
「なんだと！」
報せを聞いたコヴァクスは思わず大声で叫んでしまった。
コヴァクスらドラゴン騎士団とてのんびりしているわけではない、リジェカ公国はフィウメの革命を知り奪還をはかり軍を組織して征伐を企てているという。
それに備え、軍の組織編制や訓練を怠らず、いずれ来るであろうリジェカ軍との戦いに備えているところだった。
無論、信頼のおける者を斥候として四方に派遣し情勢をさぐっていた。その斥候が慌てて持ち込んだのが、シァンドロスの暴挙だった。
王太子シァンドロスは烈火のごとく怒り軍をアノレファポリスに差し向け、破壊をほしいままにす。
アウトモタードロムの要塞で報告を聞いたコヴァクスとニコレット、ソシエタスは口をつぐんで、言葉もなかった。
「あいつ、なんということを」
いかに復讐とはいえ、無用の殺戮などできるものだろうか。
恩ある男とはいえ、こればかりは許せることではなかった。
「彼は、戦争の中で生きた男ということですわね」
そのニコレットの言葉が全てのような気がする。
となれば、いずれは、タールコ同様に強敵となるということか。
これは案じておかねばならぬことだ。
それともう一つ、気になること。故国オンガルリの情勢だ。
情報をもたらすのは斥候だけではない、旅商人や信心深い巡礼の

神弟子がフィウメに立ち寄ったときに積極的に要塞やメゲッリのいる庁舎に招き、話を聞くことにしている。

そこで、しばらくオンガルリにいたという旅商人の話を聞くことが出来たのだが、それはコヴァクスやニコレットに強い衝撃を与えるに十分なものだった。

あろうことか、オンガルリはタールコに降伏の使者を送りその領内に組み込まれ、代官も送り込まれているという。

これは、ある意味想定の範囲内ではあったので衝撃は大きくとも、受け止めきることは出来た。

しかし、

「王はわずかな手勢を率いタールコにゆかれ、それから行方知れずでございます。それから、イカンシは討たれて、カンニバルカというお方がかつてのドラヴリフト様の領地を得て、王族の方々を支えておいでです」

と言う旅商人の言葉には、戸惑いを覚えた。

話が見えないというか、王が行方知れずでイカンシが討たれて、カンニバルカという男がかつての自分の故郷を治めて王族を支えているとは、どういうことであろう。

話からすると、王は行方知れずでも、その家族は無事なようだ。

しかし、カンニバルカとは何者だ。

旅商人も、それ以上は詳しくはわからないというのでは、聞きだしようもなかった。

「逃げなくても、よかったということ……」

ニコレットは、ぽつりとつぶやいた。

苦難の逃避行の末に、いまフィウメの街とアウトモタードロムの要塞を手にし、これから力を蓄えようとしているのだが。

イカンシがすぐに死んだとなると、逃げなくてもよかったということなのか。

話を聞いたコヴァクスにニコレットは無論、冷静なソシエタスでさえ、全身の震えをおさえられなかった。

それからオンガルリには積極的に斥候を送り込み、その情勢を探り、また旅人の話を乞うた。

それらから聞かされる話も似たり寄ったりで、どうもカンニバルカという男が、オンガルリの中心人物になっているようだった。タールコからの代官もいるにはいるが、ほとんど飾りのようなものだという。

「カンニバルカとは何者か……」

得体の知れぬ男だ。

イカンシがすぐに死んだなら脅威はない、逃げなくてもよいと言ってもよさそうなものだが、それをせずコヴァクスらはほったらかしだ。

一体何を考えてのことであろう。

どうにも、雲を掴むようなことで、考えても埒が明かなかった。

「ここはやむを得ません。今いるところで力を蓄えましょう」

と言うソシエタスの意見に従うしかなかった。

もう季節も冬になっている。雪もちらつくようになった。となれば、国境の山には雪が積もっていることだろう。それではオンガルリに行くことはままならぬ。となれば、情報を聞きだす旅人も少なくなるし、斥候も送れぬし、帰って来れぬかもしれぬ。

オンガルリに向かう斥候には、無理をせず必要とあらば春の雪解けまでオンガルリにとどまれ、と言ってある。

おそらく、本格的にオンガルリの情勢を探りなんらかの手を打てるようになるのは、来年の雪解け以降になるであろう。

フィウメ軍来る！

という報告が飛び込む。

民衆による革命によって、フィウメを失ったリジェカ王ポレアスは、街のみならず面目まで失った気分だった。

それも、オンガルリから流れてきたドラゴン騎士団の小龍公と小龍公女、そしてソケドキア王太子シァンドロスが民衆を焚きつけた

というではないか。

ヴーゴスネアの王位継承の戦いもあるのだが、今はそれどころではない。うかうかしていれば足元をすくわれてしまうのではないか。

王位継承の戦いは同じスウボラ派の盟友であるコントレに任せて、一時は奪われた領土回復に専念せざるを得なかった。

「おのれ余所者どもが、何の恨みあって我がこころざしを阻むのか」

呪詛のようポレアスはつぶやく。

確かにコヴァクスもニコレットも、シァンドロスもポレアスには恨みはない。しかし、民衆がポレアスに恨みを抱き、その力を必要としたのだ。

残念ながらそのことに気付く者はおらず、ポレアス率いる一万五千の軍勢はフィウメへと駒を進めていた。

迎え撃つフィウメの街と言えば、基本的にコヴァクスはメゲッリとの話し合いで兵は志願制を採っていた。それまでの徴兵で幾多の若者が苦しみ、またあらぬ道に走ったりして、よいことがなかったためだ。

そのため数の不利は免れ得なかったのだが、呼びかけに応じて馳せ参じた者は、二千にのぼった。

「二千も！」

とコヴァクスは思わず言ってしまうほど、これは予想以上の兵数確保であった。それほどまでに、ポレアスに恨みを抱いているということでもあり、ドラゴン騎士団を信頼している、ということでもあった。

軍の中心となるドラゴン騎士団は百。他はフィウメ独立軍と呼ばれるようになった。総勢で、二千百。

報告を受けてからの動きは素早いものだった。

真正面から立ち向かっても勝ち目はない、そのため、フィウメの街の少し東側にあるテハーナ山に陣を敷き、木を切り倒しまたたく間ににわか造りながら砦をこしらえてしまった。

砦には、龍牙旗がはためく。

さらに砦周辺は木の壁や土をほって作った堀もこしらえられ、他にも狩りで猪を捕らえるための罠も用いられて、張りめぐらされた。
数の不利を補うためには、様々な工夫をせねばならない。
数も少ない、援軍も呼べない。
今こそが、ドラゴン騎士団、小龍公コヴァクス、小龍公女ニコレットの真価が問われるときだった。
不安もあった、しかし、ついに来るか、とコヴァクスら率いる新生ドラゴン騎士団やフィウメ独立軍は怖れることなく、意気軒昂に、手に唾してリジェカ軍を待ち構えていた。

アウトモタードロムの要塞にはクネクトヴァとカトゥカと、メイドたちだけが残った。
「要塞って、広いんだね……」
カトゥカは、ぽつりとつぶやいた。
いつもは騎士たちでごったがえしている要塞だが、その騎士たちがいなくなると、広いものだった。
皆一階の大広間にいるのだが、メイドたちは落ち着かずそわそわして、きょろきょろしている。
まるでその広い大広間が縮まって自分たちを握りつぶしてしまいそうだ、と言わんがばかりに。
「きっと、勝ちます、よね……」
メイドの一人が不安そうに言った。ポレアスはフィウメ奪還のために一万五千もの軍勢で攻めて来ているというではないか、それに対し、こちらは二千とちょっと。普通に考えれば勝つなど、ちょっと、考えられない。
だがクネクトヴァとカトゥカは、
「勝つよ！」
と声をそろえていった。
「大龍公ドラヴリフト様の子供だもん、小龍公コヴァクス様と小龍公女ニコレット様は、すごく強いんだよ」

力説するカトゥカ。だがメイドの不安は消えない。
「オンガルリの大龍公のことは知ってますが……。数が」
「戦いは数ではありません。兵の士気に作戦、様々な要素が組み合わさって勝敗を決します」
ルドカーンからの受け売りを思い出し、不安ないことを説くクネクトヴァだったが、難しいことを言うのですこししどろもどろで、メイドたちの不安を消すことは出来なかった。
かといって、自分たちまで不安に駆られてはいけない。不安は伝播し広がるものだ。
正直自分たちも不安だが、前線の兵士たちのことを思えば……。
「神に祈りましょう」
結局そこに行き着くのが、神弟子らしい言い草だったが、たしかにそれしかなさそうだった。色々考えて不安をあおるより、静かに神に祈ろう。
メイドたちも頷き、皆手を合わせて、神への祈りを捧げた。

砦を築いたテハーナ山は冬の寒さを跳ね除けるほどの熱気につつまれていた。
来い、早く来い、と。
それほどまでに将兵の意気は盛んだった。
砦は山の頂きにあり、四方を木の壁、空堀に囲まれ篭城戦の備えも十分。
しかし、篭城戦は基本的に援軍を当てにしてするものだ。援軍なき篭城戦で勝てるのだろうか。
という少し意地悪な質問を、ソシエタスはコヴァクスとニコレットにした。
ニコレットは色違いの瞳を輝かせて微笑み、
「あなた、何年お父さまのもとで働いたの？」
と言い返す。
「や、これは一本とられましたな」

「わかっているくせに」
横からコヴァクスが突っ込みを入れる。
すでに段取りは整えている。
砦、といっても建物自体は本当に簡素な木造家屋といってもよかった。その中には、紅の龍牙旗が立てられていた。
山にはドラゴン騎士団やフィウメ独立軍の兵士たちが各所に配置されていた。
もうそろそろ来てもいい頃合だ。
と思ったとき、
「来たぞ！」
と物見櫓からの声。
コヴァクスとニコレット急いで櫓に登れば、確かにリジェカ公国軍が迫りまたたく間に山を取り囲んでしまった。
テハーナ山にフィウメの軍勢がこもっていると聞いたポレアスは全軍を山に向かわせ、一斉攻撃による殲滅戦を厳命した。
一万五千の軍勢は喚声を上げて山を上ってくる。
「ようし、いいぞ」
コヴァクスは握りしめた拳を突き上げ、
「各員、戦闘開始！」
と叫べば、応、という掛け声がこだまとなって帰ってくる。

第十章　樹立　？

これを聞いたリジェカ軍、敵の意気盛んなことに驚く。
「なんの、やせ我慢よ。わずか二千たらずで何が出来る。それ、攻め滅ぼしてしまえ！」
肥満した体型に宝石飾りも豪奢な鎧を身にまとう、いかにも庶民の思い描く王様のいでたちをするポレアスの厳命を受け、将兵らは檄を飛ばす。
テハーナ山は谷を挟んで背後に山脈をひかえ、その山脈が壁となりオンガルリとリジェカの国境となっている。コヴァクスやニコレット、ソシエタスはふと、山の向こうの故国に思いをはせる。
（もし鳥のように飛べれば、帰れるのに）
しかし、いつまでも感傷にひたるわけにはいかない、今目の前に現実の戦いが迫り、自分たちを信頼する同志がいる。
「慌てるな、まず敵の動きをよっく見ろ！」
一万五千の軍勢は五千ずつにわかれ、北の谷、南と南東の三つの道から攻め寄せてくる。
山の頂は木が生い茂っていたのを切り開き更地にして砦を築き、それから下るに連れて木の密度を増しつつ、空堀や木の壁、罠を仕掛けている。
傾斜は厳しくなく、頂に至る道もこしらえて馬でも駆け上がれる。南と南東の道のリジェカ軍は騎馬隊が勇ましく突進し、北のリジェカ軍は皆歩兵で谷を這い上がろうとしていた。
「北の谷、寄せ手を迎撃！」
北の谷の様子を見ていたニコレットが号令を下す。
応、という掛け声が響くとともに、矢の雨や、大石や大木が地響きをたてて寄せて向かって落下してくる。
「わあっ！」
という悲鳴がする、矢や大石、大木は容赦なく谷を這い上がろう

としていたリジェカ兵を襲い、追い落とす。
北の谷のリジェカ軍は、これはたまらんと急いで谷から逃げる。
大石大木は一旦やんだが、矢の雨は容赦なく降りそそぐ。
「よし、いい感じだ」
コヴァクス力強く頷く。
それに応えるように、南と南東の道から、うわ、という悲鳴が次から次へと響く。山の各所には猪を捕らえるための罠や落とし穴を仕掛けており、道を駆け上がっていた騎馬や山林部の歩兵が多数かかってしまったようだ。
猪の罠につよく足を噛まれてたおれこむ馬や落とし穴に胸まですっぽり落とされ這い上がるのに一苦労する歩兵たち多数。
ふもとからも、援護射撃と矢が放たれようとするが、人のいる箇所までまだ遠いため放つに放てない。かといって前方は罠にかかり前進の勢いをそがれてしまった。
「まて、まて、止まれ！」
「やめてくれ、まだ生きている！」
「踏まないでくれ！」
という哀願の悲鳴がひびき、同じように断末魔の悲鳴もする。
悪いことに前でたおれた馬や騎士や落とし穴にかかった歩兵が障害物となって、幾多の足や馬脚の動きを妨げ、かつ罠にかかったものにつまづいて転倒し、それらを踏みつけにし、刃を交えぬうちから死傷者が出る始末。
「なんという不甲斐無い者どもよ！」
後方で、ポレアスは豪奢な飾りつきの椅子に腰掛け、足をじたばたさせながら自軍の報告を聞きおかんむりだ。
「よいか、何があろうとも決して逃げるな。敵に後ろを見せる者は、斬れ！」
「は、しかし」
「命令が聞けぬのか。勝てば褒美は思いのままじゃぞ」
あまりに短絡的な命令に配下の騎士たちは戸惑いつつも、伝令を

使い王命を自軍に伝え広め。
北の谷では、
「ここから攻め寄せるのは難しい」
と言ったものが、隊長によって斬られるということがおこった。

「進め、進め！」
罠にかかった味方を踏みつけにしながらリジェカ軍は山を上ろうとする。
後方ではポレアスお気に入りの騎士が剣を振り回しながら自軍を叱咤していた。その騎馬の足元には、逃げようとした歩兵の斬殺体が横たわっていた。
山へ登れば罠は少なくなるが、味方も勢いも減っていった。
「ええ、騎士の戦をなんとこころえる。野蛮人どもめ！」
リジェカの騎士が怒髪天を突く勢いで激怒する。騎士なら騎士らしく堂々と真正面から勝負せよ、というわけであるが、それならば数を相手に合わせた上でするものだ。
いかにオンガルリ人がお人よしと言われていても、わずかの手勢しかない状況で大軍に攻められて真正面から勝負するほど、お人よしではない。
「この戦が終わったあかつきには、ドラゴン騎士団どもの卑怯を満天下に広めてやる」
数はこちらが多い、力で押せば勝てる。と思っている騎士たちは不甲斐無い転倒者や脱落者を踏み台にして山へ登り、ついに空堀や木の壁の向こうに控えるフィウメ独立軍を目にした。
「はなてッ！」
怒号響き、矢の雨がリジェカ軍に降りそそぐ、さらに北の谷同様大石や、今度は短めに切られた丸太がごろごろ音を立てて転がってくる。
さらにあるものは足元の石つぶてを掴んではリジェカ兵に向かって投げつけていた。

「なんと！」
さあ剣を交えようと意気込んでいたのが、矢や大石に丸太に迫られ、ぶつけられて、
「ぎゃあ」
と悲鳴を上げて一緒に転がってゆく。
櫓からコヴァクスはその様子をじっくりと眺めていた。
「射手！　敵の射手を見ればそれを先に討て！」
「承知！」
リジェカ軍にも多数弓矢の射手あるのを見たコヴァクスの号令を受け、フィウメ独立軍の射手はうまく敵の射手を狙い撃ちにする。
中には矢を射る者もいたが、下に向けて射るのと上に向けて射るのとでは射程距離が違った。上からの矢が届かぬところから射ても相手にはもちろん届かず、登れば登るでその間に狙い撃ちにされてしまう。
北の谷もさっきと同じように、這い上がろうとするところへ、矢の雨に大石や大木が降りそそぎ寄せ手を寄せ付けない。
「いかん、退け、ここは一旦退け！」
北の谷の隊長は王命があるとは言え、これ以上無理に攻めてもいたずらに犠牲を増やすばかりであると、やむなく退却の指示を出した。
「お兄さま、北の谷の寄せ手が退いてゆきます！」
寄せ手が北の谷から逃げようとする。それを櫓から見下ろし、思わず、
「よしッ！」
と叫んで櫓を降りた。ニコレットにそれに続いた。
「ドラゴン騎士団、出番だぞ」
自ら新しい愛馬グリフォンの手綱を引き、コヴァクスは勢いよく跨る。山の頂には、全部ではないが主だった騎馬十頭を連れてきている。コヴァクスのグリフォンにニコレットの白龍号、ソシエタスの龍星号はもちろん、あとの七頭は訓練でも抜きん出た乗馬技術を

もった騎士の馬だった。
砦の門の前には、ドラゴン騎士団百名が勢ぞろいだ。
「敵の様子はどうだ」
「敵は我が方の迎撃を受けて浮き足立ち、進むも退くもならぬ様子です」
櫓の見張り番はコヴァクスにそう応えた。いい感じだ。うまくいっている。
「南と南東、どちらがひどい」
「南東からの寄せ手が特に、あ、ま、まってください！」
櫓の見張り番はたいそう驚いた様子を見せて、額に手をかざしてふもとを眺めていた。
「これは！」
あろうことか、北の谷から逃げてきた寄せ手が、味方に逃げ道をさえぎられて、槍や剣を突きつけられている。仲間割れだろうか。
いそぎそのことを伝えると、
「小龍公、小龍公女、今です、ゆきましょう！」
ソシエタス興奮して叫ぶ。
体内をなにか一筋の光が駆け抜けるような直感がコヴァクスとニコレットに閃き、
「開門！」
と叫べば門は開かれ、コヴァクスを先頭にドラゴン騎士団は一斉に山を駆け下る。
「フィウメ独立軍も続け！」
それまで敵を寄せつけまいとひたすら矢を放ち大石を、丸太を転がしていたフィウメ独立軍の兵士たちも、剣や槍を手に山を駆け下った。
ただでさえ浮き足立っていたリジェカ軍は砦からドラゴン騎士団が迫るのを見て、急いで道をあけてしまう者が続出していた。
後方では前方の苦戦を耳にして戦意を落すものが多かった。それが、ドラゴン騎士団が出た、と聞くや、逃げろや逃げろと生存本能

の命ずるままに逃げ出した。
「逃げるな！　斬るぞ、逃げるな！」
と騎士たち数名が叫ぶ、しかし効き目はなかった。
後ろから崩れてゆけば、あとは簡単なものだった、それこそ雪崩をうって、山を駆け上がっていたリジェカ軍は反転し我先に山を駆け下ろうとする。
それとは別に、北の谷から攻め寄せていたリジェカ軍は味方に逃げ道をさえぎられて、逃げるなゆけ、と刃で脅されていたところ、
「兵を消耗品としか考えておらぬ無慈悲な騎士や王に、従うのはもううんざりだ」
と完全に切れて、同士討ちをはじめてしまった。

その混乱はまたたく間に広がり、ポレアスのいる後方の本営にも動揺が見えた。
「裏切り者だと、そんな不埒者は成敗してしまえ」
と大声を張り上げたが、騒ぎは収まらない。
彼らは、自分たちが声を出し言葉を発すれば、すべてがそのとおりになると、自然に思っているようだった。
「王よ、これはまずうございます、戦どころではありませぬ」
といった勇気ある進言をする者は、いなかった。
一万五千を三手に分けて、そのひとつが反乱を起こしたのだ。それがぶつかればただではすまない。ただでさえ、数の優位を生かせずに苦戦しているというのに。
配下らはおろおろするばかり。王はますます怒り、
「討て、討て」
と繰り返すばかり。
その間にも、北の谷を攻めていた元リジェカ軍と逃げ道を塞いでいたリジェカ軍の激突は激しさを増していった。
耳を突く悲痛な叫びがこだまする。
ドラゴン騎士団とフィウメ独立軍に押されたリジェカ軍は、競う

ように山を駆け下り、山から吐かれるように逃げ蜘蛛の子を散らすように散ってゆく。その混乱した兵士たちは本営にまで達し、もはや軍隊の呈をなさぬ有様にまでなっていた。

「リジェカ王はいずこ、我はドラゴン騎士団小龍公コヴァクス！」

「小龍公女ニコレットここにあり、リジェカ王ポレアス、勇気あらば我と雌雄を決せん」

文字通りリジェカ軍を追い落とし勢いに乗ったコヴァクスとニコレット率いるドラゴン騎士団およびフィウメ独立軍は、リジェカ軍が仲間割れを起こしているのを知り一瞬驚いたが、他にとらわれるをよしとせず、まっしぐらにポレアスをもとめた。

混乱が高じ鎮めようがないことは、ようやくポレアスでも気付き逃げようとする。

「これ、わしを逃がせ！」

下僕に命じ輿を担がせ、その上に乗ろうとする。贅沢な生活を送り肥満が高じたポレアスは、馬に乗ることができなくなっていた。

配下らも、我も我も、と一足先に逃げようとする。ポレアスはその様を見て激怒し、

「お前たち、王を守れ、守らぬか」

とわめいたが、聞く耳もないと背中と馬の尻ばかり見せられる。

「おおお、おのれ恩知らずどもめ」

うらめしくつぶやくもどうしようもない。

わなわなと歯軋りするその目の前を、矢が駆け抜けた。ひいい、と悲鳴を上げて腰を抜かせば、ふと赤い色をしたものが目に飛び込んでいた。

「赤い兵団だ！」

という声がした。

見れば確かに、装備は赤一色、見覚えのある顔、イヴァンシムにダラガナ率いる武将集団。

まさしく赤い兵団であった。

「おお、あれはイヴァンシムにダラガナではないか、そうか、予を

助けに来てくれたのか」
　ポレアスはそう思い、輿を赤い兵団へと行かせようとしたが。先頭の赤毛の少女は、愛馬の紅馬を駆り、こちらに向けて弓矢を構えていた。

第十章　樹立　？

セヴナは紅馬上、弓の弦を引き絞り狙いを定め、矢を放った。
「ひっ」
下僕の悲鳴があがり、足元に連続して矢が突き刺さり、驚きのあまり転倒。輿もポレアスも崩れ落ちる。
「ぐえ」
という、蛙の潰れるような声をあげポレアスは地面に転がり尻餅をつく。
その間に赤い兵団は迫り、ポレアスを取り囲んでしまった。
リジェカ軍は突如現れた赤い兵団が敵か味方なのかはかりかね戸惑い、その間にドラゴン騎士団とフィウメ独立軍に蹴散らされてゆく。
イヴァンシムとダラガナは下馬しこけたポレアスを助け起こす。
「おお、おお、よく来てくれた、さすがヴーゴスネア赤備えの騎士じゃ」
とは言わない。セヴナが輿を担ぐ下僕の足元めがけ矢を放ち、そのために自分は尻餅をついてしまった。これはどういうことであろう。
さらに、怖れていたことに赤い兵団はドラゴン騎士団とフィウメ独立軍に協力し、リジェカ軍を蹴散らしてゆくではないか。
ポレアスは目を見開き、悲鳴を上げようとするが、あまりのことに声も出ない。
逆に、コヴァクスとニコレット、ソシエタスは赤備えの騎士たちの乱入を見、
「赤い兵団だ！」
と喚声を上げ、喜んだのは言うまでもない。
しかし、赤い兵団はその数わずか二百たらずである。千、万を越える軍隊がぶつかり合っているところへ勇んで乱入した上に、両軍

ともに赤い兵団現るという衝撃を与えること、いかにヴーゴスネアにおいてその勇名が轟き影響力の大きいことか。

「もう、退け、退け！」

ばらばらになったリジェカ軍は戦いを放棄して、皆、我先に逃げ出してしまった。

ポレアスはそれを呆然と見送るしかなかった。一万五千もの軍隊、というか人間たちは、誰一人として、自分のために戦おうとはしなかった。

ぼろぼろと涙がこぼれ、いたたまれなかった。

ふと、ニコレットの色違いの瞳に赤毛の少女が写りこんだ。

セヴナだ。

「あなたが、小龍公女ニコレット様ね。あたしはセヴナ、よろしくね！」

白龍号の横に紅馬がならべられ、差し伸べられる手。屈託のない満面の笑みを見て、ニコレットもにこりと微笑み、手を差し伸べる。

「こちらこそよろしくね。セヴナ」

音に聞く小龍公女ニコレットを見つめて瞳を輝かすセヴナにおかしみと愛嬌を感じつつも、今は戦場の真っ只中だ、一瞬だけ手を強く握りしめると、すかさず迫りくる敵兵を追い払った。

戦況はおおいにドラゴン騎士団有利に進んでゆき、もう決着はついたといってもよかった。

「もういい、深追いをするな！」

逃げる者は追わず。コヴァクスとニコレットは自軍をまとめることに専念した。深追いからせっかくのまとまりがなくなることもある、それは父から叩き込まれた教訓だった。

またたく間にドラゴン騎士団とフィウメ独立軍はひとつにまとまり、それにあわせるように赤い兵団もひとつにまとまる。

ポレアスは力なく座り込み、もう害はないとわかると、

「失礼」

と言い、イヴァンシムとダラガナは愛馬にまたがりコヴァクス、ニコレットのもとまでゆく。これがなにを意味するのか。ポレアスは身動き一つせず、呆然とするしかない。

「貴公がイヴァンシム殿でございますな。我はドラゴン騎士団小龍公コヴァクス」

「同じく、小龍公女ニコレット」

ドラゴン騎士団・フィウメ独立軍と、赤い兵団は互いに向かい合う。

輪が地上から浮かび上がり、一瞬にしてそれらを取り囲み結界がはられたような一体感がまたたく間に生まれたようだった。

「ようやく会えましたな。私はイヴァンシム。ただ、髪の白くなった年寄り、私自身にはあまり期待せぬよう」

諧謔をこめてイヴァンシムは自ら手を差し伸べ、コヴァクスは力強く握手を返した。その横でダラガナとニコレットも握手を交わし、それからコヴァクスとダラガナ、イヴァンシムとニコレットで握手を交わした。

熱風が身体をつつむような高揚感だった。

「我らに勝利と栄光あれ！」

気持ちを抑えきれない者らが数名、剣を掲げて喚声をあげれば、それをきっかけに次から次へと、栄光あれ、の合唱がはじまった。

ドラゴン騎士団もフィウメ独立軍も、もとは旧ヴーゴスネアの者たちである。赤い兵団、イヴァンシムとダラガナのことはよく知っていた。

彼らにとってはまさに英雄だった。オンガルリ出身のドラゴン騎士団のコヴァクスとニコレット以上に。

今、その英雄とともに戦えるということが、新たな道を見出したような喜びを感じさせていた。

やはり自分たちは隣国の人間なのだ、という寂しさを少し感じながら、唱和の中に身を預けるコヴァクスとニコレット、ソシエタス。

ふと見れば、リジェカ軍の兵士や騎士たちが逃げずに様子をうか

がっていた。逆襲の機会をうかがっているのだろうか。と思えば、そうではなかった。

栄光あれの唱和を耳に、突然跪き、

「どうか我らも仲間に加えてほしい」

と願い出てくる。

その数は千を越えているだろうか。イヴァンシムはそれを見て咄嗟に、

「コヴァクス殿、今こそ好機、彼らを加えリジェカを平定いたしましょうぞ」

その進言に驚き、一瞬躊躇するコヴァクスだったが、イヴァンシムとダラガナはやはりそうなるか、と予測していたので、気にしない。

「残念ながらリジェカを治めるのは、ポレアス王には負担が重すぎたようでござる。が、今この戦いに勝利したことで、雪が平原を白く染め上げる前に新たなときをむかえることが可能になったのです」

一瞬ためらったコヴァクスだったが、

（いまこの機会を逃すのは、たしかによくない）

イヴァンシムの心強い進言に決断し、

「ゆこう、リジェカの都メガリシにゆこう。今こそリジェカ平定の好機！」

号令を下すや、ついにこの時が来たかと、声尽きることなく喚声は轟き。

龍牙旗はためき、ドラゴン騎士団を先頭にフィウメ独立軍、赤い兵団はメガリシを目指し、リジェカ軍の残党が言われてもいないのに自らそれらに組してともにメガリシを目指した。

ポレアスは屈強な兵士に取り囲まれて、とぼとぼとフィウメの街へと歩いていた。

都メガリシは騒然となった。

リジェカの南西、ダメドとの国境にほど近いところにあるメガリ

シは都とされるだけあって、王宮に教会など、背の高い建物も軒をつらねて、それなりの栄えを見せていた。

そのメガリシの都では、フィウメ征伐にいったはずの王の軍隊がなぜかドラゴン騎士団らとともに都入りしたものだから、都の者たちはまるで悪魔にでも幻を見せられているかのように事態を飲み込めず。

また防ぐにも龍牙旗やイヴァンシム率いる赤い兵団を見て武器を投げ出し、降伏を願い出る者が続出する始末。

中には忠義厚く戦いぬこうとした騎士もいた、だがそれらはことごとく捕らわるか、たおされるかした。

だれもドラゴン騎士団やフィウメ独立軍、赤い兵団との戦いを望んでいなかった。が、にわかにリジェカの国そのものへの復讐心が強く湧き上がっていた。

あのとき、フィウメのドラゴンの夜のように、たくさんの人々が都の中央にある王宮につめかけ、王宮内の衛兵と小競り合いをしていた。

「王宮にはスウボラ王太子の遺児、モルテンセン様とマイア様がおられる。このお二方はなんとしても救わねばならぬ」

イヴァンシムは言う。

リジェカの都メガリシには、スウボラの二人の遺児、兄のモルテンセン十一歳と妹のマイア九歳がいるという。

ふたりはスウボラ派の象徴として、ポレアスが身柄を保護していたが、保護でもあるとともに、幽閉監禁でもあった。

哀れふたりの幼子は、大人たちの権力欲のために人格を無視され自由を奪われ、籠の中の鳥同然の生活を強いられている。

そこへ民衆蜂起により身の安全も危ない。

コヴァクスとニコレットは愛馬を飛ばし王宮に向かった。

第十章　樹立　？

高らかに鳴る蹄の音に、人々はいそいで道を開け、ドラゴン騎士団らは人々の間を掻き分けて王宮を目指した。

王宮の門前では、民衆と衛兵が得物を手に争っている。そこへドラゴン騎士団らが来たことで、民衆は弾みをつけついに衛兵にとどめを刺し王宮に雪崩れ込もうとしていた。

「どけどけッ！」

「誰も中に入れてはならぬ！」

人々をどかし門を突破するや、イヴァンシムとダラガナは赤い兵団の兵らに命じて民衆をたたき出し、門をかたく閉ざし。ソシエタスはフィウメ独立軍をもって都をおさえにかかった。

「血気にはやるな！　まだ幼き王子と姫に罪はなし！」

門の見張り台にのぼりイヴァンシムは声を張り上げ民衆に落ち着くようううながす。同じように、ソシエタスも落ち着けを連呼しながら都中を駆け巡った。

圧政や戦争に苦しんだ人々は、復讐心に取り付かれ暴徒と化し、罪なき者まで殺める危険がある。民衆がすべてにおいて正しいわけではないのは、今までのことで思い知ったことだった。

「静まれ、静まれ！　無用の殺生をする者は、死罪にするぞ！」

降伏をしともにメガリシに入ったリジェカ兵や騎士も、民衆とともに暴徒と化す危険がある。とにかく、ソシエタスやイヴァンシム率いる赤い兵団は、自身が落ち着く落ち着かないのぎりぎりのところで自分を抑えながら、人々を落ち着かせることに血眼になっていた。

王宮は、上を下への大騒ぎとなっていた。

フィウメをのっとったとされるドラゴン騎士団が攻め込んできた、として。

コヴァクスとニコレットは他には目もくれず王子と姫のいる部屋

を目指して駆けた。
　王宮に仕える人々は悲鳴を上げて逃げ惑い、忠義に厚い者は剣を振るいドラゴン騎士団に襲い掛かる。
「血気に逸るな！　我々の目的は王権ではない、無用の戦いでもない、リジェカに安寧をもたらすことだ！」
　コヴァクスは迫り来る刃をかわし、または己の剣で受け流しつつ、声を張り上げる。しかし聞く者などいるはずもなかった。
（もしこれが逆だったら、私たちは引き下がったかしら）
　ふとニコレットはそう思った。おそらく、自分たちも相手がなんと言おうと、剣を振るい襲撃者と渡り合うだろう。
「ああ、お、お許しを」
「待って、逃げないで、私たちはあなたにひどいことしないわ」
「ほ、ほんとうに？」
　セヴナだ、いつの間にかコヴァクスやニコレットの後を着け王宮に入り込んだらしい。若い侍女をひとり捕まえ、王子と姫のいる場所を聞きだそうとしていた。
「でも、王子と姫は……」
「私たちは王子と姫をいじめにきたんじゃなくて、守りに来たの。お願い、私たちを信じて」
　侍女はおびえながら、王子は、姫は、と震える口で言おうとするが、おびえるあまり上手く言えない。
「大丈夫よ、落ち着いて」
　侍女の様子がかわいそうで、にこりと微笑む。しかし次から次へと衛兵や騎士は襲い掛かる。セヴナも剣を抜き相手の剣を受け、自分と侍女の身を守るが、のんきに場所を教えてもらえる余裕はなさそうだ。
　じれったさをおぼえ、やむなく、
「一緒に来て！」
　と手を引いた。強引なようだが、やむをえない。それでも、笑顔は耐やさなかった。

侍女もセヴナの笑顔をで心がほぐされて、彼女を信じ、王と姫のいる部屋を教えようとする。

王宮はドラゴン騎士団と衛兵の激突で騒然として、おさまる気配はなかった。

この騒動で王子と姫は大変な不安に駆られているだろう、と思うとそれがかわいそうでもあった。と、ともに、故国オンガルリの王女アーリアとオランの姉妹に末っ子の王子カレルに思いをはせた。

王は行方知れずで、国もタールコに組み込まれてその歴史の幕を閉じた。そんな事情をどこまで飲み込めているのかわからないが、幼い子供には、とても不安なものだったろう。

昔触れた戯曲において、政敵の刃にかかる母と子が、

「何も悪いことをしていないのに」

と悲痛な叫びを上げていたのが思い起こされた。

激突の中を駆け抜け、侍女の導きにより王宮内の奥にある一室にたどりついた。そこに王子と姫がいるという。

堅く閉ざされた扉を背に、衛兵が守りを固めていたのは言うまでもない。

最後の一押し、と剣を握る手に一段と力がこもる。

そのときだった、

「もうよい！」

幼いながらも、よく透る声がひびいた。

「扉を開けて、来客を出迎えよ」

その声には力があった。衛兵はとまどいつつも、早くどけ、という声に押されるように退いた。

コヴァクスとニコレット、セヴナらは立ち止まり、様子を見れば、扉が開け放たれ、そこに王子とおぼしき少年が凛々しくたたずんでいた。

その後ろには、少女が少年の背中に隠れながら、不安そうにこちらを眺めていた。

ともに美しい白金色の髪をもち、澄んだ青い瞳をしていた。その

青い瞳の奥には、言葉にならぬ湿り気も感じられた。
まだともにまだ幼く、背も伸びていない。人形のような可憐さもあった。
しかし、その顔には人形のような愛嬌はない。
そばの衛兵や侍女はいそぎ跪く。
「予こそモルテンセンである。そなたの求めるものは、予の命であろう」
剣を握りしめるコヴァクスとニコレットの目を見つめて、モルテンセンは透る声で言った。その声も、幼さに合わず重々しかった。
いつかこんな日が来るかもしれない、と覚悟を決めていたのだろうか。いまだ十一の年で。
「予はどうなってもよい、ただ妹のマイアや、予に仕える者たちは助けてほしい」
激突から一変し、束の間の静寂が駆けぬけ、ところどころで嗚咽の声がする。
その澄んだ瞳を見つめ、コヴァクスとニコレットも跪いた。後ろに続いていたセヴナやドラゴン騎士団の騎士たちも、跪いた。
これは、とモルテンセンとマイアはやや戸惑った。自分たちをたおしに来たのではないのか、と。
「我らはドラゴン騎士団。かつてオンガルリに仕える身ながら、ゆえあってリジェカに我が身を置いております」
ドラゴン騎士団、その言葉を聞き、周囲の空気がかたまる。フィウメの革命でその名は聞き、まさかという思いもあったが。オンガルリ王国の誇るドラゴン騎士団がリジェカにいたのは、本当だったのだ。
ニコレットは色違いの瞳で兄と妹を優しく見つめる。
「どうかご無礼をお許しください。我らが求めるのは、王子の命ではありません」
ニコレットの少し後ろに控えるセヴナと、マイアの目が合った。
セヴナはにこりと微笑むと、兄の背中に隠れるマイアも、心ほぐさ

れてすこし微笑みを返した。
「では、何が望みか」
「リジェカの安寧を」
モルテンセンはやや身を堅くした。そんなことを言う大人たちは、信じられない、という風に。

第十章　樹立　？

「哀しくも、人々は憎しみに駆られて、戦乱の広がりとどまることを知らず。いや、人のみならず自然も人の戦争に巻き込まれ、野の熊は怒りのあまり戦場の屍を食らう有様」

「なに……」

コヴァクスの話を聞き、モルテンセンは耳を疑った。戦争が広がっているのは知っているが、自然までもが、とは咄嗟に想像がつかない。しかし、戦争により野は荒れ、人も野の動物たちも、食うに困ることが起こるのであろう。

「それで、そなたは、予はどうすればよい。どうすれば、リジェカに安寧をもたらすことが出来る？」

今まで会った大人たちも、世のため人のため、ということを随分と語ってきた。が、それを実感したことはなかった。

自分たちはかごの中の鳥のようになり、外で何が起こっているのかさっぱりわからない。時折、ポレアスとダメド王を名乗るコントレがやってきて、最善をつくしている、いつか王子には王位についていただく、と語るものの、彼らの笑顔のうちに何かが見えて、なかなか信じられなかった。

なにより、閉じ込められて外に出してもらえない、というのが、一番大きかった。

マイアが羽ばたく小鳥を見るたびに、羨ましそうな顔をするのが、哀しく、悔しかった。

それで、この騒ぎ。

メガリシの人々は王宮に迫り、衛兵と激しく渡り合っている。これが何を意味するのか。

（僕たちは、騙された。そして、憎まれている。殺されるんだ……）

何も悪いことをしていないのに。

王子や姫として生まれたために。

まだ十一である、顔をくしゃくしゃにして大泣きに泣きたかった。
でも、マイアがいる、自分たちによく仕えてくれた召使いやメイドたちがいる。
（僕は守らないといけない。妹を、この人たちを）
それがせめてもの、王子としてのつとめだと思い。だから、勇を鼓して扉を開け、ドラゴン騎士団を出迎えた。

だが、どうにも様子がおかしい。
目の前の騎士は、てっきり自分たちにひどいことをするだろうと思ったのに、跪き礼儀正しく接してくれる。
自分たちを見る目も、今までの大人と違い、優しさを素直に感じられるものだった。
肩を握りしめていたマイアの手から、すこし力が抜けた。
「お姉さまは、お名前はなんというの？」
女騎士の色違い瞳が珍しいようで、興味をそそられたようだった。
モルテンセンは、こんな時になにを言うんだ、と驚き慌てて妹を見返した。その妹の顔は、微笑んでいた。
「ニコレットと申します。どうか、以後お見知りおきを」
「ニコレットお姉さまは、お目目の色が、違うのね」
「はい、父と母の瞳をひとつずつ、受け継いでおります」
「そうなんだ、すごいなあ。そうだ、ニコレットお姉さまは、お年はいくつなの。私はここのつよ」
「わたくしは十八になります。それと、わたしくのことは、ニコレットと呼びください」
安心しきったマイアは、時も状況もかまわず、ニコレットと話をしたいようだった。
驚いたモルテンセンであったが、妹の無邪気な様子に胸が張り裂けそうであった。
が、いつまでも脱線するわけにもいかず。コヴァクスは内心苦笑しつつ、本題に切り込んだ。

「かくなるうえは、モルテンセン王子に王位についていただきます」
「それは、いま？」
「はい、いま、すぐに、です」
しかし、とモルテンセンは迷う。まだ十一歳だ。早すぎる、もっと大きくなってから、と思うのであったが。
「民衆はポレアスの圧政に苦しめられ、その憎しみを抑えるすべを知りませぬ」
「それで、どうすればよいのだ」
民衆の憎しみが自分たちに向けられているのはわかるが、抑えるにはどうすればよいのか、わからない。
「王子、いや、王の思いのたけをありのまま、民衆に伝えるしかありません。なまじ誤魔化そうとしても、火に油を注ぐだけです」
「ありのままに伝えても、同じことになったら」
「……。そのときは、我らドラゴン騎士団が命に代えてもお守りいたします」
今ソシエタスがフィウメ独立軍を率いて治安の安定につとめているが、さてどれほどの効果があるだろうか。これは賭けにもひとしい。
モルテンセンとコヴァクスは、ニコレットとマイアとは違い、互いの目を厳しく見据えて一触即発状態だ。いまだ幼くともモルテンセンも男だった。
「わかった、そなたの言うとおりにしよう」
言うが早いか、モルテンセンは歩き出す。マイアは戸惑い兄の背中にしがみつこうとするが、
「僕に触るな！」
気が立って、つい厳しいことを言ってしまった。マイアは顔をくしゃくしゃにして、大粒の涙をこぼす。
「ごめん」
気の毒に思いつつ、歩き続ける。幼い兄妹に仕えていた召使いやメイドたちに衛兵らは王子、王子と繰り返しながら引きとめようと

するが、またたく間にモルテンセンをドラゴン騎士団が取り囲んだ。
「王子は我らが守る。ご安心くだされ！」
モルテンセンの隣で歩くコヴァクスは叫んだ。彼も必死だった。己の、一国の、数多の人々の命運がかかっているのだ。その重荷が肩にずっしりとのしかかっている。その顔は、二十の若者にしては、年寄りのように厳しかった。
マイアはドラゴン騎士団に取り囲まれて兄の姿が見えないことに不安を覚え、へなへなと座り込んで声を出して泣き出す。
「大丈夫よ、泣かないで」
セヴナが片膝をつき、優しく肩に手を触れる。同じようにニコレットも片膝をつき、マイアを慰める。
「怖い、怖い。どうしてみんな、私たちをいじめるの？　私たち、何か大人たちを怒らせることをしたの？　みんな、私たちのことが嫌いなの？」
泣きじゃくり、途切れ途切れにマイアは必死に訴えた。部屋に閉じ込められて、いつも監視され、すこしわがままを言おうものなら「なりませぬ！」と叱責を受けたことさえあった。友達が欲しい、外で遊びたい、ということのなにが、大人を怒らせてしまうのか、幼いふたりにはわからなかった。
召使いにメイドたちはよくしてくれるが、特に仲のよかった者ほど、いつの間にか消えていなくなっていた。
言葉もなかった。
セヴナももらい泣きし、涙を一粒落とした。それから、何も言わずマイアを抱きしめた。
マイアはセヴナの胸の中で泣きじゃくっていた。
「さあ、ゆきましょう」
ニコレットは微笑みながらマイアの手を取り、優しく導きながらともに歩き出す。
しばらく歩けば門にたどり着き、そこでは赤い兵団が門を固く閉

ざし、王宮に迫る民衆を押しとどめていた。
見張り台に上ったイヴァンシムとダラガナが必死に冷静を呼びかけている。その甲斐あって民衆は暴動こそ起こさないが、いつ爆発するかわからぬ一触即発の状況の、緊張感ほとばしる空気だった。
「王子、姫！」
幼いふたりが門まで姿を現し、イヴァンシムとダラガナは「時は来た！」と、歴戦の勇士のふたりもさすがに固唾を飲んだ。
いままさに、一国が完全に滅ぶか、危機を乗り越えて存続するかの瀬戸際に立っているのだ。
モルテンセンはコヴァクスとともにグリフォンに乗り、マイアも同じようにニコレットともに龍星号に乗った。
これで、民衆の中に飛び込むのだ。それで、もしどうにもならぬときは、そのまま逃げるのだ。
マイアはぶるぶると震えている。ニコレットは気の毒に思い、左手を手綱からはなしマイアの手を優しく握りしめた。
「何があっても守ってあげる。私たちを信じて」
紅馬に乗ったセヴナがそばに来て、絶えず笑みをマイアに投げかけていた。
赤い兵団もいつでも飛び出せるかまえをしていた。皆、いまから別世界にでも行くかのような緊張した面持ちだった。
中天から傾く太陽は燦々と輝きつつ夕陽へと赤く染まろうとしながら、下界を見下ろしていた。
この太陽が沈んだとき、自分たちはどうしているだろう。
「門を開けよ！」
モルテンセンが命じれば、門は開け放たれた。

第十章　樹立　？

眼前に民衆の群れが見えた。皆、目をいからし、手を挙げて王政打破を叫んでいた。

ソシエタスらフィウメ独立軍が駆け回って冷静を呼びかけているが、なかなか効果が挙がらない。

しかし、門が開き、王子が姿を現すと、一瞬時が止まったように空気がかたまった。

「ひかえよ！　モルテンセン王である！」

コヴァクスは周囲にそう叫びながら門を出て、王宮に押し寄せる群集の中に割って入った。それにマイアを乗せたニコレットにドラゴン騎士団、赤い兵団が続き、王子と姫を守るために周囲を固めた。

群集は目をいからせていたが、さすがに武装したドラゴン騎士団や赤い兵団を見ると後ずさりするものだった。

ことに、救国の英雄とされるイヴァンシムとダラガナの赤い兵団を見て、群集は何かしらの期待を抱いたようだった。徐々に目から殺気がそがれていった。

「かつてのヴーゴスネア人同士で墓堀人となり墓穴をほり合う時代を終わらせたいであろう！　ならば、王の話を聞け！　静粛に、静粛に！」

イヴァンシムは叫び群衆に訴えた。

コヴァクスは、モルテンセン王と言った。ということは、王子を説得して王位に就かせたというのか。どさくさ紛れではあるが、この火急のときである。形式などにかまってはいられない。

モルテンセンは群集を見下ろし息を呑んだ。こんなにたくさんの人々に囲まれたのは言うまでもなく生まれて初めてである。いまにも押し寄せられて潰されそうで、そう考えると胸や腹が痛かった。

が、深呼吸して、意を決して、叫んだ。

「予の不甲斐無さのために、多くの民に苦労をかけた。このモルテ

ンセン、民に詫びるに詫びようもない」
どよめきが起こった。王子が王となり、しかも、民に詫びる、と言った。群集にとっては完全な想定外の出来事だった。
「ポレアスが己の欲のままに国も法もほしいままにし、民を苦しませたと聞く。だが、そのような馬鹿げた時代は、終わりだ！」
殺気立った空気が、なにか、はじけたようだった。踏みつけにされていた何かが、戒めを解かれて、起き上がったようだった。
「予は王として約束しよう。もうそなたたちを苦しめぬと。法も、三つに減らそう。ひとつ、人を殺したる者死罪。ふたつ、人を傷つけたる者、百叩きの刑。みっつ、ものを盗みたる者、十叩きの刑。これだけだ！」
騎士に抱かれてのこととはいえ、馬上のモルテンセンの目は鋭い。彼もまた必死だった。踏みつけにされた民衆の心を鎮めるには、彼らを戒めていた法を緩めるしかない、と思ったのだった。
ポレアスにコントレはそれぞれ王を名乗り、モルテンセンには、大人になったら王位を退き譲る、などと言っていたが。その王になってしてきたことが何であるか、民衆一人ひとりの顔を、目を見ればよくわかった。
（まだ十一であるというのに、なんと聡明な）
コヴァクスもニコレットも、大人たちは皆驚きを禁じえなかった。しかし、まだ子供だからこそ、その法が本当に必要かどうか素直に疑問を持ちえたのであろうか。大人は納得しきれなくても、法は法である、とつい言い聞かせ従ってしまうものだ。
モルテンセンを見つめる民衆は、さあどうしてやろうか、と殺気立っていたのだが。さきほどのモルテンセンの、法を三章にまとめる話を聞いてかざわめきが波のようにゆれて、殺気もしぼみだしたか声に荒さがなくなりつつあった。
「これよりは、王のための国や民ではない、民のための国であり王であることを、誓おう」
モルテンセンはモルテンセンで気になることがあった。民衆の中

には自分と同世代の子供たちもいて、父や母に手を引かれあるいは抱かれている。

それを見ていて、うらやましさとかなしさを感じた。それはマイアが強いようだ。ニコレットに抱かれながら、母親に抱かれる同世代の女の子をじっと見つめていた。それから、ニコレットの顔を見上げた。

ニコレットは色違いの瞳を光らせ緊張した面持ちをしていた。さすがにセヴナも今は緊張し顔が引き締まっていた。

思わずニコレットの手を強く握りしめれば、優しく握り返される小さな手。

父も母も、もうない。気がつけばいなくなって、メガリシの王宮の一室に閉じ込められていた。

親の記憶も薄い。手を握られたことも、ほとんどない。ニコレットに手を握られて、そのぬくもりを感じるうちに、我知らず涙が溢れ出す。

それから、マイアの様子を見ていた他の子供たちも、つられるようにして泣き出す。大人たちは殺気立っている。それは、子供たちには怖い。ただ怖い。

いかに大義名分をかかげようと、怖いものは怖い。理由もわからない。

胸に詰まっていた感情が、マイアの涙をきっかけにして溢れ出し、声をあげて泣き出し子供たちは次々と泣き出した。

大人たちの叫びにかわり、子供たちの泣き声が耳にぶつけられる。

(大人も、子供も、怒るか泣くかばかり。どうしてこんなことになってしまったのだろう)

ニコレットはマイアの手を握りながら、周囲を見渡し、言葉もない。

モルテンセンは黙って、成り行きを見守っていた。やがて、涙が溢れ、抑えきれずにぼろぼろとこぼれだす。それはまだモルテンセンが十一歳の少年であるという証でもあった。

「万歳、モルテンセン王万歳！」
群集の中から、突如万歳の声が響いた。モルテンセンとマイアの流した涙に心を打たれ、その言葉が真実であると信じられるようになった人々は、
「万歳、万歳！」
「リジェカ公国万歳！」
と、もろ手を挙げて声をあげた。
またたく間にメガリシの都には万歳が轟き、それは空を揺らし、天まで届くかと思われるほどだった。
もう、ポレアス王の時代は終わり、新しきモルテンセン王の時代が始まるのだ。それは開放を心地よく予感させるものだった。
「リジェカ公国万歳！」
「万歳、万歳、万々歳！」
「自由だ、オレたちは自由なんだ！」
喜び勇み、我が子を抱き上げる父親や、変化を喜び抱擁しあう母と子の姿も、ところどころで見受けられた。
モルテンセンは押し黙って万歳の大合唱轟くに身を任せ。マイアはニコレットと手を握りしめ合いながら、兄と同じように万歳の轟きに身を任せていた。
ドラゴン騎士団のコヴァクスとニコレット、治安の維持につとめていたソシエタスとフィウメ独立軍に、赤い兵団のイヴァンシム、ダラガナ、セヴナたちは万歳の轟きに身を任せながら、夢の中にいるようだった。
それから徐々に、それまでの戦いや流浪が夢のようになり、万歳の轟くメガリシの都が現実のものと、入れ替わってゆく。
（ようやく階段を一段上がれたのだ）
皆、長い戦いと流浪の末に、ようやく礎を築けたのだと、感慨深かった。
礎、それは新生リジェカ公国の樹立だった。
だがこれが終点ではない。

今この時こそが、新生リジェカ公国の樹立が、新しき戦いのはじまりでもあった。

万歳の轟きをまことのものとするための、戦いのはじまりだった。

第十一章　神美帝ドラグセルクセス　？

リジェカ公国に革命起こり、新生リジェカ公国が樹立された。
という報せは白雪を踏み越えて旧ヴーゴスネアはもちろん、タールコやポリス（都市国家）割拠する南方エラシアにまで伝え広められた。
その新生リジェカ公国の樹立に多大な貢献をしたのが、かつてオンガルリ王国随一の強さを誇ったドラゴン騎士団の小龍公と小龍公女であるということも伝え広められた。
オンガルリもまた政変巻き起こり、王は行方知れずでドラゴン騎士団は壊滅し、タールコに膝を屈しその領土に組み入れられたとされるが。
そのオンガルリのドラゴン騎士団は完全に滅びず、国を出てリジェカにて再起していたこと人々を驚かさずにはいられなかった。
「ついにやったか」
とうそぶくのはソケドキア王、シァンドロス。彼は臣下らに、
「やつらは、オレのよき宿敵（とも）となるであろう」
と言ったという。
ともあれ、ソケドキアもまた波乱あって、シァンドロスが王位についた。同時に無念のうちに死した父と母と弟の葬儀もすませた。
それから彼の目は、北方を注視しつつ、南方エラシアに向けられた。
豊饒な土地、高度な文明・文化。それらを我が手に治めんとするのは、王たる者であれば当然考えるであろう。
アノレファポリスひとつで満足するほど、シァンドロスの心は狭くなかった。
だがエラシアを狙うのはシァンドロスだけではなかった。
東方の大帝国タールコもまた、エラシアをはじめとする豊饒の西方世界を虎視眈々と見つめていた。

旧ヴーゴスネアのアヅーツより北方は冬来たりて雪舞い落ちて、目に見える景色はすべて白く雪化粧した。それは交通の遮断を意味した。

コヴァクスとニコレットらは苦心して革命を成し遂げたとともに、春の訪れを待ち、冬ごもりをせねばならなかった。

しかし逆に言えば、外敵から攻められる心配はなかった。

シァンドロスは波乱のあとの建て直しに専念していた。それは次の戦争に備えての軍備の再編でもあった。

南方にあるソケドキア以南は寒さ身に沁みるとも、雪で閉ざされるということはなく、それは冬も外敵に攻められるということでもあり、エラシアとタールコに備えねばならなかった。

同時に国内の不穏分子を徹底的に叩き潰した。たとえ確たる証拠がなくとも疑わしいというだけで、不穏分子とささやかれる者を捕らえ、反逆の罪で首を刎ねたのだ。

その数は百を越え、刑場には無罪であるという訴えや「死にたくない」という悲痛な悲鳴が響き、血は池をなして溢れ、柵まで流れて見物人の足にまとわりつき。

刎ねられた首たちは並べられて、顔に生気なくとも目は万感の恨みを抱いていた。

それを止める者もいた。確たる証拠もない者まで処刑するのはやりすぎだと、ヤッシカッズも思いとどまるよう説得を試みたのだが。

「家族の仇討ちの、なにかいけないのか」

と、一向に耳を貸さなかった。

（これでは、イヴァンシム殿がゆかれるのも無理はない）

ヤッシカッズは苦い思いで、ソケドキアの将来を見据えねばならなかった。

この弾圧は一定の効果をなし、若き王シァンドロスは畏怖と尊厳をよりしめし国を強く治めることができた、とはいえ。

ソケドキアはシァンドロスという若い王のもとで、将来に向かい数多の血を流すことになるだろう。

それはアノレファポリスを攻め滅ぼしたことでより色彩を帯びてきたが、それはソケドキアを最終的にどのような色に染め上げるのであろうか。

北が雪に閉ざされている間は、タールコが南へ征くのは当然のことだった。

アノレファポリスを攻め滅ぼしたこと四方に広がり、シァンドロスの名もまたたく間に広まった。

それは悪魔の所業とも軍神とも言われて。

エラシアはそれぞれのポリス間の確執を越えて結束し、ソケドキアに備え。タールコも突如現れたソケドキア王シァンドロスに備えるとともに、強い関心を抱いた。

タールコの都はトンディスタンブールといい、帝国の西、エラシアと旧ヴーゴスネアとの境から東にわずか一日のところにあった。

トンディスタンブールのある地は北を広大な湖に、南を海に挟まれて、大陸の橋のように東西に細くのび。北方の湖は水がやや黒ずんで見えることから黒湖（こっこ）と呼ばていた。

古来よりトンディスタンブールは大陸の交通の要所にあり、また東西文明の交わる境でもあり、このトンディスタンブールをから西は西方世界と呼ばれ東は東方世界と呼ばれていた。

また狭い土地ゆえに人口も集中し、おのずと巨大都市となり高い文明・文化もはぐくまれていた。

高さを競うように天まで届きそうな建物が軒をつらねて、それは今も建造され続け、道路交通網も網目のように張りめぐらされ馬車も活発に行き交い食料金銭や生活物資の流通も盛んに行われ。

人口は十万に迫ろうかというほどの賑わいを見せ。無論、その栄えと富も、そして王宮も、巨大なものであった。

その巨大な都は、巨大な関所のような役割も果たし、異世界へ旅立つ拠点ともあり。

過去東西の世界はこのトンディスタンブールを奪いあい、歴史が

変わるたびに太守や王、治める国も変わった。
それは人の出入りの多さをもしめし、混血も多く。肌の色に目の色、髪の色に統一性なく。また出身地や民族性も多様ならば信じる神も多様性を見せ、人はトンディスタンブールを虹の都と呼び。
都より西および東にゆくごとに、人の顔立ちや髪の色がまとまっていった。
そのトンディスタンブールは冬が来ようとも常夏であるかのような熱気につつまれていた。
それは都としての賑わいのせいだけではなく。西方世界の異変、ことにリジェカの革命に、シァンドロスの出現によるものが大きいようだった。
狭く人のごった返す都のあちらこちらで、ソケドキアのシァンドロスが、ソケドキアのシァンドロスという若い王が、という話が盛り上がりをみせて。ときには、天から天宮を落す魔術でアノレファポリスを滅ぼしただの、悪魔の使いだの、いやあれは軍神の化身なのだ、だの、殺された人々は塩漬けにされて食われただの。
ドラゴン騎士団は地獄から蘇った。死んだはずだよドラヴリフトは、いや実は死んでなかっただの、様々な尾ひれがついてもいた。
しかし話題の中心はもっぱらシァンドロスで、ドラゴン騎士団はおまけのように話の端っこに置かれていた。
それから、
「しかし、シァンドロスがいかに悪魔のようなやつだろうと、神美帝にはかなうまいて」
と締めくくられていた。

トンディスタンブールの王宮は神美帝ドラグセルクセスの代になってから郊外にて建造され、天宮と呼ばれていた。
もともとの都はもっと東方にあるエグハダァナであったが、西方遠征のためトンディスタンブールに遷都したのであった。
タールコは東西に伸びる大帝国であり、トンディスタンブールは

西方に位置するため、西方世界の影響を強く受け、その建造物も西方世界、ことに高い文明・文化を誇るエラシアの形式に近く。

円柱を外側に張りめぐらせた平屋根の石造りの、しかも大理石を惜しげもなく使われた白亜の大きな宮殿が整然と並び。それこそ天の宮殿、天宮を思わせる厳かさもあった。

天宮という名はドラグセルクセスが名づけたのではなく、完成してから民らがその大きさ、厳かさに畏怖し、いつからか呼ばれるようになっていたのだった。

その天宮には老若男女さまざまな、たくさんの人々が、武官、文官、侍女、召使いらが行き交い。

それらの人々の髪の色や目の色、肌の色や顔立ちの彫りの深さ浅さは、様々であり。そして信じる神も様々。天宮もまた虹の都の様相を呈していた。

タールコはたとえ争い合っている国や地域の文化であろうと、よいと思うものは素直に受け入れて、また改良を加えて自国の文化として成熟させていった。

第十一章　神美帝ドラグセルクセス　？

神美帝ドラグセルクセスのおわす宮殿は天宮の中心にある一番巨大なもので。他の宮殿より屋根一つ飛びぬけて高かった。

古今東西の軍神の腕を思わせる巨大な円柱建ち並ぶ白亜の広い宮殿の奥に、巨大な玉座があり、人々は投げキッスをし恭しく跪く。

その先にある人こそ、神美帝ドラグセルクセスであった。

神美帝と言われるだけあり、背も高く美丈夫と言える容姿。

銀糸で縫われた髪飾りを頭に巻き。

なめらかな絹の王衣を身にまとう。

王衣の原材料となる絹ははるか東方、華（ファ）と呼ばれる大地を治める国、昴（マオ）との交易で得てつくられた。絹は生産も少なく希少価値もあり高価。しかもまだタールコといえど、その量産に成功していない。ことに交易で昴からもたらされる絹は質がよく、王侯貴族でなければ縁がないものだった。

ゆえに昴は絹国（セリカ）とも呼ばれていた。ちなみに絹をはじめとする昴の特産物を運んでくる商隊（キャラバン）の長は藍査（ランチャ）といい、ドラグセルクセスおよび昴の皇帝、雪鉄龍（シェティエロン）こと雷託帝（レィトゥオティ）のおぼえもよかった。

肩まで伸ばした髪はゆるやかに波をえがいて空（くう）にそよぎ。黒真珠のように黒い瞳は吸い込まれそうな奥深さをたたえ。

彫り深く鼻高く。たたずめば神の彫刻のように凛々しく、美しく。動けば風なびき、銀糸の髪飾りのきらめき絹の王衣なびき、それは神の意志によってなされているようにも見え、天すら動かしそうな威厳があった。

ことに、その鍛えられた肉体美は性別を越えた美しさがあった。

御年四十になったばかりながら、その肉体美によりいまだ二十代のような若々しさをもちあわせ。

百人を越える妻は皆、ドラグセルクセスに目をかけられたことを誇りに思い。競って身を捧げた。

第一夫人は同い年のシャムスという。神美帝の第一夫人だけあり、彼女もまた輝く黒髪と黒い瞳が印象的で神秘的なおもむきがあり、絶世の美女というにふさわしかった。

人々は彼女と神美帝の愛を古来より伝えられる神話や伝承と同等に語り、その愛の深さは一夜ではたりず千夜をもってしてもまだたらぬと、語り伝え、慕っていた。

ドラグセルクセスの遠縁にあたるタールコ王族の娘で、十五の年にドラグセルクセスに嫁いだ。

今彼女は、宮廷の奥の間にてしとやかに皇后としての公務にはげんでいた。

そのふたりの間に一子あり。名はムスタファーといい、年は十八。臣下たちの列の中に身を置いて、父であり皇帝の命令を待っている。

彼もまた凛々しく容姿は両親譲りの美丈夫。まだ妻帯しておらず。宮廷の女性たちはもちろん放っておかずなにかにつけてこの王子を話題にして騒がしい。また男たちも同じようにムスタファーに多大な期待を寄せて、獅子王子を意味するアスラーンと呼び慕っていた。

その他側室らに生ませた子は二十人いる。

妻の数に対し子が少ないのは、ドラグセルクセスが歴代皇帝の中でも控えめな性格をしているものによるものであろう。

清く正しく美しくして、質実剛健。そして欲は浅く、慈悲は深く。百人の妻たちはたとえ神美帝に会えずとも、心の中に神美帝がおわしますと愛情を込めてタールコと神美帝の栄光と愛を祈っていた。

それほどまでに、人々は己の信仰する神々にひとしい存在として、ドラグセルクセスをうやまい、忠誠を誓っていた。

「遠路、エグハダァナ、サルマガント、バヴァロンよりの使い、ご苦労であった」

「なんの、臣として責務を果たしたのみでございます」

定期的に各都市の報告のために都を訪れた臣下を、玉座から見下ろし、ねぎらうドラグセルクセス。

臣下たちの目は、まさに神々しいものを見つめ光り輝いていた。

たとえ己の心に闇が巣食おうとも、神美帝ドラグセルクセスの前ではすべてが後光によって掻き消されてゆくように。

かつてオンガルリに攻め込みドラゴン騎士団との戦いにおいて大敗したヨハムドも、かつてリジェカに仕えながら新たな道を求めてやってきたギィウェンも、少年のようなときめきをおぼえつつ、命令が下されるのを待っていた。

無論、アスラーン・ムスタファーも。

「エグハダァナ、サルマガント、バヴァロンおよび、タールコの平和は、神美帝のご恩徳による思し召しでございます」

「予は神にあらず。あくまでも人である以上、そなたらの力を借りねばならぬ。我が帝国に乱なきは、そなたらの手柄によるもの。謙遜せず、堂々と誇ればよい」

「もったいなきお言葉」

各都市の使者らは報告を終え宮廷より退出し。控えていた文官・武官の臣下らの目が一斉にドラグセルクセスに集中した。

臣下の中には、旧オンガルリから来た者もいた。その目は憎しみはなく、畏敬の念があった。

「オンガルリはついに我がタールコの領土となった。しかしながら、同時にドラヴリフトも失ったことが惜しまれる」

「出来るならば、ドラヴリフト率いるドラゴン騎士団も、神美帝にお仕えを」

「それがかなわずとも、出来るならば、堂々と渡り合ったうえで雌雄を決したかった。いや、すぎたことを申してもはじまらぬか」

オンガルリからの使いは頭(こうべ)を垂れて、神美帝の言葉を噛みしめていた。

下心を持ち合わせた者を利用し政変を起こし強敵を葬るという策略によって勝ちを得たことを、ドラグセルクセスは恥じているようであった。

そうでもせねば勝てぬほど、ドラゴン騎士団は強かったというこ

とだ。もっとも、予想外のことも起こった。しかしそれは、今のところ問題ない。

ドラグセルクセスは起こるか起こらぬかの問題で悩むような凡人ではない。それを注視しつつ、次への進路を冷静に見定めていた。

ムハマドといえば、自分がおとりに使われたことに驚きはしたが、それによってオンガルリに勝てたわけで、

（むしろ我が無才を知りつつ、神美帝は使命をお与えくださったのだ。これからはでしゃばらず、素直にご命令にしたがおう）

と思い。恨みを抱かず、謙虚な気持ちで自分の仕事をこなそうと決意したくらいだった。

「まずは、そなたらの話を聞こう。次に征くは、いずこか」

「ならば」

と手を挙げたのはギィウェンであった。新参者である。リジェカからタールコへ己の活躍の場を求め、ドラグセルクセスに仕えるようになり、早く手柄を挙げたい。

宿敵オンガルリを制し、次に狙うのは旧ヴーゴスネアにエラシア。

ギィウェンとてタールコでただ飯が食えると思うほど甘い考えはもっていない。来た以上は、なにかしらの成果を挙げねばと考えている。

「一軍をお預けくだされば、それがしが先鋒をつとめヴーゴスネアを献上いたします」

「出来るか。北にドラゴン騎士団擁するリジェカ。南にシァンドロス治めるソケドキア。すべては無理であろう」

「確かに、リジェカとソケドキアは攻略するに難しいでしょう。しかし、分裂した七つの国のうちダメド、エスダ、ヴーゴスネア、ユオ、アヅーツの五ヶ国はいまだ定まらず、攻略はたやすいと思われます」

「ふむ、強国はちょうど北端と南端。その間の国々ならば、できるやもしれぬな」

「しかもそれらの国の王は私利私欲に走り、民は苦しんでおります。神美帝のご恩徳がそれらの地にそそがれれば、リジェカのように民を味方につけ、攻略もさらにたやすくなるでしょう」

「そなたの考えはよくわかった。他にはなにか」

ドラグセルクセスはギィウェンの言葉を受けとめつつ、他に意見を求めた。そうすれば、アスラーン・ムスタファーは一歩前に進み出て、

「我が父よ。どうか我に一軍をお与えくだされ。雪山を踏み越えリジェカへとゆき、ドラゴン騎士団と雌雄を決とうございます」

と勇ましく言った。

「その意気やよし。だが、言うは易し行うは難しぞ」

「無論、承知でございます。ただ、わたくしも父と同じように、ドラゴン騎士団を宿敵（とも）とするタールコの勇士を自負しておりますれば」

おお、というどよめきが宮中に響いた。獅子王子、アスラーンと呼び慕うムスタファーの意気に皆心を打たれたようだ。

だがドラグセルクセスは冷静だった。

「自然をあなどってはいかん。自然、気候という、人の力およばぬものがあればこそ、我は恥をしのびオンガルリ征服を急いだのだ」

父にそう言われ、アスラーン・ムスタファーは唇を閉ざし言葉に詰まった。それに助け舟を出す者がいた。

「神美帝のおっしゃられるとおり、北方へゆくのは春を待つしかないと存じます。ならば、南方ソケドキアへゆかれ、自らを神の雛（くまたか）と名乗るシァンドロスの鼻柱をへし折りにゆかれてはいかがでござろう」

そう言うは若き将軍、イムプルーツァであった。

西方世界の血が混じり鼻高く彫り深い顔立ちをし瞳は緑色をなし、その髪は黒と金が織り交ぜられている。

当初彼は一兵卒ながら十五の年の初陣以来華々しい手柄を挙げて、まだ二十二の若さで将軍に抜擢され、神美帝の御前に立つことを許されていた。

またイムプルーツァはアスラーン・ムスタファーのよき臣下であり、よき友であった。

第十一章　神美帝ドラグセルクセス　？

ドラグセルクセス、イムプルーツァの言葉を聞き、ふむとうなずくも。

「それも一理ある。だが、シァンドロスごとき若造、我ら自ら当たらずともよかろう」

神美帝からの返答を聞き、イムプルーツァとアスラーン・ムスタファーはお互いに、すこし失望の色を浮かべた。

シァンドロス若くとも侮るべからずと神美帝も認識しているではないか、と。それを当たらずともよかろうとは、どういうことであろう。

「シァンドロスは、エラシアの諸ポリスに当たらせるのでございますか」

と言うはギィウェンであった。彼は知識、経験ともに豊富な武人である。ふっ、と脳裏になにか閃いたようだ。

「そうだ。エラシアの諸ポリスは、先のアノレファポリス壊滅を目の当たりに確執を越えて団結し、シァンドロスに備えていると聞く。ならば、ソケドキアはエラシアにまかせておればよい」

「さて、いずれが勝ちましょうや」

「それは神のみぞ知るというもの。しかし、七分方、シァンドロスであろう」

「やはり彼は侮るべからずでございますな」

「そうだ、即位式において自らを神雕王（しんちょうおう）と名乗りエラシアと、なんと我がタールコの征服を宣言したというではないか。それだけ自信にみなぎり、事実波に乗っている。その勢いを保てば、エラシアは征服できよう」

「ならばこそ、先手を打ち……」

アスラーン・ムスタファーが口を挟む。戦いを求めてやまぬ、血気盛んな若者のままであった。

イムプルーツァも、慕う王子に手柄を立てさせてやりたい。
ドラグセルクセスは、若きアスラーンをじっと見つめた。

アスラーン・ムスタファーの初陣は四年前、十四のとき。あのときは東方の国タータナーノとの小競り合いが大きな戦争に発展し、ドラグセルクセス自ら動き、年頃となったムスタファーも連れて行った。

タータナーノ側も必勝を期して大軍と象部隊を編成し、王（ラジャ）自ら象に乗り軍を率いて、大軍同士の壮絶な戦いであった。

そこでムスタファーは王子の身ながら乱戦の中に飛び込み槍を振るい、イムプルーツァとともに死地を駆け抜けた。

イムプルーツァは年も近いこともあって、ムスタファーの武芸の指導役もまかされ、初陣においてもそばにつき従い王子を補佐した。

またこの初陣の目覚しい活躍により、獅子王子、アスラーンとも呼ばれるようになった。

その戦いで、ふたりの間には身分を越えた友情が芽生えたようだ。

戦いはタールコが勝ち。有利な条件で停戦条約を結んだ。

以後しばらく、ムスタファーは東方に睨みをきかせるためタータナーノとの国境に近い東の都プールシャプラーにとどまり、いざというときには、東方における不穏勢力を征伐の任に当たっていた。

その甲斐あって、東方は平穏となり、オンガルリが征服されるとともにトンディスタンブールに呼び戻された。

東方監視の任に当たっているとき、しきりに、

「オレも父とともにドラゴン騎士団と戦いたい」

とイムプルーツァにもらしていたものだった。この場合、父親への忠誠と孝行というより、ドラゴン騎士団が目当てなのは言うまでもなかった。

それだけに、オンガルリの征服とドラヴリフトの死、ドラゴン騎士団の壊滅を知ったときは、古来より伝えられる死を知らせる天使と遭遇してしまったように、非常に落ち込んでいた。

が、ドラゴン騎士団は滅びず。ドラヴリフトの子、小龍公コヴァクスと小龍公女ニコレットがリジェカの革命を手助けし幼いモルテンセン王を立て、新生リジェカ公国を樹立させたと聞いたときは、天からの授かりものが降ってきたかのごとく喜んだものだった。

「ムスタファーよ、そなたは血気に逸りすぎる。戦は遊びではない」

父に釘を刺され、アスラーン・ムスタファーは唇をつぐんだ。臣下たちの前で恥を掻かされた気分だった。

「されば、エラシアにソケドキアを任せ、我らは旧ヴーゴスネアの中五ヵ国に参りましょうか。それでよろしいのでは」

とイムプルーツァは言う。ムスタファーは血気にはやり、無理にとめようとしても、無理にでもリジェカかソケドキアにゆきそうな勢いだ。

それならば他の道をあたえそこにゆかせるのがよいかもしれぬ。ギィウェンはしめたと内心喜んだ。戦いで手柄を立てる機会がほしいが、アスラーン・ムスタファーとともに戦い、目をかけてもらえる機会も与えられるかもしれない。

「それは名案。シァンドロスに比べれば少々物足りぬでありましょうが、タールコが西方世界へと征く足がかりとなるこのたびの歴史的出征において、アスラーンが御大将をつとめれば兵の士気もあがり、なおのこと征服もたやすくなるでしょう」

「我は敵を選ぶ。簡単に勝てる戦いなどつまらぬ」

アスラーン・ムスタファーははっきりと聞こえる声で、そう言った。イムプルーツァをはじめとして、周囲の者たちに緊張が走る。

神美帝の御前でぶっきらぼうに自分の意見を通そうとするなど、臣下には恐ろしくてできぬことだった。が、そこは獅子王子と呼ばれるアスラーン・ムスタファーであった。父の前であろうと、言いたいことははっきり言った。

「図に乗るな！」

ドラグセルクセスの雷喝一声。宮殿に怒号が轟いた。

「己の立場に甘えて戦を選ぶ者は、タールコの勇士のすることではない。たとえ兎が相手であろうと全力をもって戦うのが、タールコの勇士であり、勇士の伝統、誇りである」
「勇士なればこそ、我が敵を、宿敵(とも)を求めるものではありませぬか。我が勇気を兎狩りのために使うなど、馬鹿らしくて出来ませぬ」
「無知の傲慢とはまさにそのこと。己に敵なしと自惚れる者に、真の勝利は、神の加護はない」
「しかし」
「戦は己一人でするものではない。我らが下にどれほどの勇士があるとおもう。大将とはそれらの命を預かる者でもある。己の傲慢のために、大切な勇士たちを無駄死にさせる気か」
アスラーン・ムスタファーは父の雷喝を受けても一歩も引き下がらないどころか、踏みとどまってあくまでも敵を選んだ。そばで話を聞く者たちは冷や汗ものだった。
「そのようなことでは、そなたには一兵たりとも預けることは出来ぬ」
「お待ちを」
と進み出るイムプルーツァ。このままいけば、アスラーン・ムスタファーは謹慎を命じられそうだった。
それだけはなんとしても避けたい。
「引き絞られた弓の矢面に進み出る覚悟は出来ておるのだろうな、イムプルーツァ」
「直言こそ臣下の誇り。なんで覚悟なくして出られましょう」
「まこと覚悟は出来ておるようだな」
「権力の前に膝を屈して、タールコの勇士はつとまりませぬ」
「よく言った。ならば、黙れと言うても」
「黙りませぬ」
「さがれと言うても」
「さがりませぬ」
臣下でもあり友人でもあるイムプルーツァを、アスラーン・ムス

タファーは何も言えず見つめる。
彼こそ、イムプルーツァが父の怒りにふれて処罰を受けることを憂いていた。
イムプルーツァは笑顔だった。自信満々だった。神美帝ドラグセルクセスを相手に目をそらさず、ここまで相対することのできる臣下は、イムプルーツァくらいなものであろう。
アスラーン・ムスタファーは、はっとして、気を取り直して拳を握りしめて、我が父を見据えた。
沈黙が重くのしかかった。

第十一章　神美帝ドラグセルクセス　？

一触即発の雰囲気だった。
これが対等の者同士ならば剣を抜いて渡り合おうかという。
ドラグセルクセスはしばし黙し、
「そこまで言うのであれば、覚悟せよ。シァンドロスとの戦いを」
と言えば。おお、とどよめきが起こった。イムプルーツァは不敵な笑みを浮かべたままだったが、すこし、口元が動いた。山を動かした、と言いたそうに。
「我が父よ」
「ムスタファーにはソケドキア征伐を命ずる。ただし」
ただし、なんであろう、と皆聞き耳を立てる。父と子の争いは避けられたようだが、ただでは済みそうもないようだ。
「敗れることあらば、そなたの王位継承権を剥奪する。そのつもりでゆけ」
「ありがたきお言葉。ムスタファー、全身全霊をもってシァンドロスを討ち取ってまいります」
アスラーン・ムスタファーはあらためて跪き、父に礼の言葉を述べた。その横にはイムプルーツァ。
「まて、もうひとつ」
「はっ」
「イムプルーツァにおいては、死罪とする。矢面に立つ覚悟を、シァンドロスとの戦いで見せよ」
「もとより承知！」
イムプルーツァとて馬鹿ではない。神美帝に楯突いた以上は、覚悟をしていた。むしろ生きながらえる機会をあたえられて、望外の喜びを胸いっぱいに広がらせていた。
それからの軍議は順調にすすみ、ギィウェンとムハマドの両将に旧ヴーゴスネア五ヵ国の征伐が命じられた。

「命くだらば、ゆけ。疾風のごとく！」
「ははあっ！」
宮殿に熱風が吹くように、男たちの声が轟いた。
まさに疾風のごとく宮殿をあとにし、男たちは出征の準備にとりかかった。

軍議のあと、ドラグセルクセスは奥の間にゆき、妻のシャムスと会った。
シャムスは侍女に命じてすぐに冷たい水を用意させて、夫の喉を潤わせた。
そしてその微笑みは夫の心を潤わせた。
「ゆかれるのでございますね」
「そうだ」
ふたりのいる奥の間は大理石造りながら質素な部屋だった。シャムスたっての希望で、生活や公務に必要なもののみそろえて、必要以上の贅沢を取り払っていた。
それゆえに、そこにたたずむシャムスは誰の目から見ても美しく気品に溢れ、人々は彼女を清く正しく美しい人と讃え慕っていた。
事実、都のトンディスタンブールのみならず、タールコの国において飢饉などなにかしらの難事が起これば、
「なんというかわいそうなことでしょう」
と我が事のように悲しみ、他の側室と協力してその救済の指揮を執った。
また教育に力をいれ、各地に学校を建てどのように貧しい子供でも奨学金を給付して入学させ、国を支える人材を育てるなど、国の礎造りに情熱をそそいでいた。
いかなる大帝国であろうと、その礎が磐石ならばこそ立てるというもの。その礎こそが、人であるという信念をもっていた。
そのおかげで、タールコは後顧の憂いなく出征ができた。
心配があるとすれば、愛する我が息子。

少々血気にはやるところがある。
話を夫から聞き、心穏やかでない。
「もし、万が一のことがあれば」
戦争にゆくのだ。万が一のことがあれば、王位どころではない。いや、神美帝の第一夫人となり、その子を生む以上、覚悟はしてきたつもりだ。
この世の中、命はつねに危うきと隣り合わせ。今あるものも、王位もまた、夢のごとし。
「ムスタファーが自ら選んだことなら、やむをえぬ」
「あの子は、王宮の中で満足する性格ではないのですね」
どうにも冒険を求める性格のようだ。
「惜しいと思う者ほど、我が手から離れようとする」
「……」
ドラグセルクセスは、ぽつりとつぶやき。シャムスは何もこたえられなかった。
夫がドラゴン騎士団のドラヴリフトを臣下にほしがっていたことは知っている。しかし、ついに望みは叶えられなかった。
そのドラヴリフトのふたりの子どもは、なんとリジェカにて再起し、こつこつと力を蓄えているという。
だがそれまでにどれほどの苦難があったろうか。
ドラヴリフトも、その妻エルゼヴァスも、死んだ。国も滅んだ。おそらく、ふたりの子の憎しみと執念は言葉に出来ぬほどのものであろう。
その子らに対し、無邪気に戦いを求めるムスタファーは、かわいくもあり、やはり心もとなくもあり。
それから、ふたりはたわいもない話で、ふたりの時間を過ごした。
トンディスタンブールでは、出征の準備が着々と進み。帝国西方各地の諸侯にも出征を知らせる使者が走って、神美帝の檄が飛ばされた。

タールコの勇士たちはオンガルリを征服したことで自信を増し、意気盛んに出征の仕度を整え、トンディスタンブール郊外に馳せ参じ集結した。

都周辺はタールコの軍勢があつまり、戦いの旗立ち並んで風になびき。

周辺の空気は一気に冬の寒気を吹き飛ばして、熱を帯びた。

この出征において集まった軍勢は、トンディスタンブールの人口に迫る十万。それが二手に分かれて、旧ヴーゴスネア五ヵ国およびソケドキアにゆくのだ。

郊外は人や馬、幕舎や旗がひしめき合い。突如として都が広がったようだった。また都自体にも出征の兵士たちが繰り出し、それを出迎え商売の糧として頑張る人々で賑わっていた。

甲冑姿のムスタファー、意気揚々とイムプルーツァとともに馬を飛ばし、郊外にある我が軍勢へと向かった。

その日はよく晴れて、気温も高く。身体を動かせば汗ばむほどだった。

ふたりのそばには侍女が騎乗で、片手に傘をさしてつきしたがっていた。

タールコでは、貴人は侍女や宮廷女官に傘を差させる習慣があった。無論、その侍女らも選りすぐりの美女であるのはいうまでもなく。主とともに戦にゆくので、彼女らも鎧をまとい、傘片手に騎乗し主の後ろを駆け、長い黒髪が風になびく様は凛とした美しさがあった。

人によっては貴人よりも傘を差す美女に目が行くのはやむをえないことだった。

その傘を差す侍女とわずかな供をともなって、自分が率いることになる五万の軍勢におもむけば、

「アスラーン・ムスタファー！」

「我らの獅子王子よ！」

などなど、割れんばかりの喚声が轟く。
タールコの勇士を自負し、強敵に挑みにゆくアスラーン・ムスタファーの人気は絶大なもので。旧ヴーゴスネアの分裂した五ヵ国への出征軍や留守居役の兵士や貴族の中には、所属をかわりたいと地団駄を踏む者もいるほどだった。
のみならず、もし敗れた場合のことも伝え広められて。
「勝とう、断じてこの戦いに勝とう。勝ってアスラーンの王位継承権をお守りしようではないか」
と、軍勢は団結して士気も一段と高い。
その軍勢の勇士らを引率した貴族らもアスラーン・ムスタファーとイムプルーツァを出迎え、この戦いにおける意気込みを語った。いわく。
「この戦いに敗れてどうしておめおめと生き恥をさらせましょう。小癪なシァンドロスなるひよっこをひねりつぶさぬかぎり、我らタールコの土は踏まぬ覚悟です」
という、非常に熱いものだった。これにはかえってアスラーン・ムスタファーとイムプルーツァが驚くほどだった。
彼らはこれほどまでに、と。
（やられた）
心のどこかで蛮勇といたずら心のあったことを、イムプルーツァは内心恥じた。
アスラーン・ムスタファーは、素直に感激して喜び、
「そなたらの心意気を、我は確かに受け止めた。我らの栄光のために、ともに戦おうぞ。ともに勝とうぞ」
と叫べば、天が割れるかというほどの喚声があがった。その迫力に、侍女の傘を差す手が震えたほどだった。その震えが武者震いなのはいうまでもない。
イムプルーツァもこの熱狂の坩堝の中で血が沸き立つのを感じていた。
（死など恐れぬとはいえ、ひどいことを約束させるものだ、と思っ

たが。そのおかげで、意気揚々と戦に臨めようとは。これはまさに、神美帝のお導きというべきか）

まさにいっぱい食わされた、と観念し、ともに喚声をあげた。

「あなた」

「うむ」

ソケドキア出征軍の喚声は都を包み、天宮にまで聞こえるほどだった。

少ないゆとりのひと時を過ごすドラグセルクセスは、シャムスとともに喚声を静かに聞き入っていた。

なんという士気の高さであろうか。かつてドラグセルクセス自らがオンガルリに親征したときに勝るとも劣らぬほど。

「これが、将来のタールコなのですね」

喚声を聞き入り。鎧姿の我が子を思い浮かべ。シャムスはしみじみと、ぽつりとつぶやいた。

第十二章　獅子王子と神雕王　？

アスラーン・ムスタファー来たる！
という報せがソケドキアを駆け巡った。
タールコは十万の軍勢を二手に分けて、一方は旧ヴーゴスネアの五ヵ国。一方をこのソケドキアに向かわせているという。
しかも、ソケドキア出征軍を率いるのは、アスラーン・ムスタファーというではないか。
「好機到来！」
シァンドロスは天から恵みの雨が降ってきたとばかりに喜び勇んで、迎撃の備えに当たった。
敵の軍勢は五万。しかも総大将は獅子王子である。ほとんどの者が喉のひきつる緊張を覚えたのに、シァンドロスはひどく喜び、明るくふるまっていた。
このことをヤッシカッズは、
「神雕王、獅子王子の到来を神の降臨のごとくよろこべり」
と書き記している。

シァンドロスの動きは、電光石火というにふさわしいほど早いものだった。
かき集められるだけの手勢をあつめ、軍備を整えるやすぐさま迎撃に向かった。
その数は五千そこそこ。
待てばもっと、一万は来たのだが、シァンドロスは待たず。自分と近しい者らの仕度が整い次第、飛ぶように駆け出した。
とはいえ、数の不利は変わらない。
タールコは大帝国なのに対し、ソケドキアはやはり小さな新興国。アノレファポリスを滅ぼしたといっても、それは相手が弱小都市国家だから出来たこと。

だがシァンドロスは負ける気がしなかった。今までの戦い、命の危険にたびたびさらされてきたのを乗り越えてきたではないか、という自負と自信があった。

このたびの戦いも乗り越えられる。胸中にそんな自負と自信がみなぎっていた。

迅速はアスラーン・ムスタファーも負けてはいない。まず一万を先駆けとし先陣を切らせて、なんと自らこれを率いている。

ソケドキアとタールコの国境は山ではあるがさほど高いものではなく、街や城もあった。そこはコーウッチノートサといった。無論国境なので警備は常に緊張感をもって厳重。

太守ロンマーはタールコ来たるを知るやすぐさまシァンドロスに使いを出し、自らも少ない手勢を率いてタールコの軍勢を迎え撃とうとした。

その部下、シンタリオナカとシァタロイワサは無謀だととめ。無理をせず郊外にある城にこもり、シァンドロスを待とうと進言したのだが。

「怖いのか、臆病者め！」

と言って聞かなかった。この男勇敢で太守をつとめるコーウッチノートサを守る使命感はあるのだが、それが強すぎて退くを恥としているきらいがあった。

この男を太守に任命したのは先代のフィロウリョウだ。その勇敢さを買ってコーウッチノートサの太守と国境警備とを任せたのだ。事実今まで来たタールコの軍勢を退け、よく戦った。

今回も今まで通り勝てると思い切っていた。

「こうなれば是非もない」

苦い気持ちで歯軋りし、シンタリオナカとシァタロイワサはロンマーについていった。

その国境警備軍の数は千たらず。

さすがに無理に正面からぶつかることはせず、どこかに隠れて横っ腹を突く作戦でいくこととなった。

丁度隠れるによい森がある。しかもアスラーン・ムスタファー自ら先陣を率いているというではないか。

ここは、狙いをアスラーン・ムスタファー一人にしぼり、不意打ちで勝ちを奪うのが最良のように思われた。

だが部下は、シンタリオナカとシァタロイワサはいい顔をしない。

「なんだ貴様ら。怖いのならもうよい、さっさと帰れ」

とロンマーは傲慢に怒り、怒鳴り散らし。さっさと駒を進め、進軍路沿いにある森の中に入っていった。

シンタリオナカとシァタロイワサは、舌打ちしつつ、恐れる者は無理をさせず逃がした。おかげで数が減った。

「このことは神雕王に訴え、裁きにかけてくれるぞ」

それはそれは、ロンマーは怒り狂ったのはいうまでもなかった。

それからどうにか怒りを押さえ、息を潜めれば。

アスラーン・ムスタファー率いるタールコ軍がついに姿を現した。

獅子王子のその鎧姿は、派手さはなく他の兵士らと同じ標準的なもので動きやすさを優先させた軽いものだった。

だがその目は鋭く、顔立ちも凛々しく。そばで傘を立てる侍女の美しさもまた引き立つ。地味な軍装をしていようと、それで品位が下がることなく。むしろ一級の勇士としての品位が際立つ。

こちらに気づかず通りすぎようとするタールコ軍を見、ロンマーは喜び勇んで、

「かかれ！」

と叫んで剣を握りタールコ軍の横っ腹に突っ込んだ。シンタリオナカにシァタロイワサも続く。

「敵襲！」

不意に脇を突かれたタールコ軍はすこし慌てて隊列を乱し。ロンマー率いる国境警備軍はその乱れた隊列のほつれからどんどんと奥へ奥へと突入していった。

アスラーン・ムスタファーにその腹心イムプルーツァは落ち着いたものだった。そばで傘を差す侍女もまた落ち着いたものだった。

無言で兵らの動きをじっと見つめていれば、タールコの兵たちはアスラーン・ムスタファーの信頼に応えるように隊列を整え直し、突然現れたソケドキア軍を囲んでゆく。

「や、や」

ほつれて破れてゆくと思った隊列は瞬時につむぎなおされて、ロンマーたちは取り囲まれて逃げ場がない。と気づくと同時に、率いる国境警備軍の半数があっという間に討たれた。

「げ、これはいかん」

ロンマーは剣を振り回して退路を切り開こうとし、アスラーン・ムスタファーに背中と馬の尻を見せてしまう。これを見てシンタリオナカとシァタロイワサは唖然とする。

「あれだけ突撃を主張しながら、この期に及んでなんという見苦しい真似を」

どうにも覚悟が軽かったようだった。そうでなくても、勝てる見込みはなかったのだから、どうしても突撃をする場合はそれこそ決死の覚悟でいくいべきであり。ここでロンマーが最後の奮戦を見せればよかったのだが、追いつめられて最後を迎えようかという時に、背中と馬の尻を見せられたら、連れて行かれた者らの馬鹿馬鹿しさといったらなかった。

「センコグ！」

ソケドキア語で臆病者を意味する言葉を吐き、ロンマーはもう捨てた。

「こうなれば是非もない。最後の意地を見せてやれ！」

勇敢にもシンタリオナカとシァタロイワサは得物を握りしめ、大軍に取り囲まれながらもアスラーン・ムスタファーに立ち向かった。

数の少ないソケドキア国境警備軍は無謀な突撃により全滅も近い。大将のロンマーはといえば、必死で逃げていたが、馬脚を雑兵に切られて馬が転倒、その際に落馬し打ちどころ悪く首の骨を折ってあっさり死んだ。

今まで国境警備の任務を果たせたのも、タールコがオンガルリに専念して旧ヴーゴスネアおよびソケドキアには軽い牽制程度にしかしかけなかったからだった。それを、自分の実力によるものと勘違いしたことに、ロンマーの悲劇はあった。

その無様さから誰もロンマーを大将と思わず、放って置かれてしまい、タールコ軍の軍馬の馬脚や軍靴に踏みしだかれてゆくがままだった。

タールコ軍は最後の奮戦を見せるシンタリオナカとシァタロイワサが大将と思い、その大将首を獲ろうとしたが、ふたりはなかなかにしぶとく戦った。

それを見つめるアスラーン・ムスタファーの目の輝きが一段と増してゆき。剣を抜きはなつや、

「ゆくぞ、ザッハーク！」

と愛馬・ザッハークを駆けさせた。

ザッハークとは肩から蛇を生やし、過去千年にわたり人類を支配したとされる暗黒の魔王の名である。それゆえタールコにおいては最凶最悪の名でもあるのだが、己の勇気で暗黒魔王・ザッハークすら御する、という気持ちから敢えて愛馬にその名をつけていた。

「どけどけ！　そいつらはオレの獲物だ！」

ザッハークの馬蹄響くや、兵らはさっと道をあけた。イムプルーツァは侍女に目配せしながら「お好きだな」とほほえみあった。それは元気な子どもを愛でる大人の目とでもいおうか。

「お前たちの勇気を讃え、このアスラーン・ムスタファーの剣で葬ってやろう」

「ありがたし！」

ザッハークを駆けさせたアスラーン・ムスタファーは一気にシンタリオナカとシァタロイワサに迫り、剣光を閃かせ。

閃きとともに、血煙もあがった。

アスラーン・ムスタファーの剣は勇敢なるソケドキアのふたりの勇者を葬った。それは一瞬のことで、一合渡り合ってすぐだった。

わっと轟く喚声があがった。

他の兵も討たれ、逃げる者は無理に追わず逃げるにまかせた。

「手厚く葬ってやれ」

周囲の兵にそう命じると、一旦乱れを見せた隊列をすぐに整えなおし。

駒を進めれば、その意気に感じてか、草木もなびいた。

第十二章　獅子王子と神雕王　？

シァンドロス率いるソケドキアの軍勢は進むにつれて数を増し、ようやく七千に達した。

道中で早馬が来たが、とまるようなゆとりは見せずゴッズの横につけさせ報告させれば。ロンマーが討たれ、コーウッチノートサ陥落というではないか。

「馬鹿め！」

ロンマーを激しくののしる。城に篭りなぜ自分を待たなかったのかと激しく憤った。

と思えば、向かいから一騎タールコの騎士がやってくる。アスラーン・ムスタファーの使者であるという。

何事かとおもい、これはさすがに馬をとめて話を聞けば。

「アスラーン・ムスタファー、数を頼みにするのをよしとせず、ソケドキア軍と同等の数をもっての真っ向の戦いを望まれる。貴公のはいかほどの軍勢でこられるのか教えたまえ」

などと言うではないか。

「ほう、アスラーン・ムスタファーは二つ名にたがわぬ勇者であるな」

素直に数を頼めばよいものを、そうせず相手に合わせるとは。シァンドロスは白い歯を見せて微笑み、

「一万」

と応えれば、承知しました、と言って引き返してゆく。

ペーハスティルオーンにイギィプトマイオスはこれは罠ではないか、と疑るのだが。逆にヤッシカッズにガッリアスネスは大丈夫だろうという。

「どちらでもよい」

それがシァンドロスの考えで構わず駒を進める。

さてタールコの使者はアスラーン・ムスタファーのもとに帰り、

感心した様子でソケドキア軍のことを語っていた。
アスラーン・ムスタファーも道を急ぎ、侍女の差す傘の影に使者を入れ駒を並べて報告させる。
「いや驚きました。思ったより早くソケドキア軍のもとにゆけましたからな。その進軍速度は我らが思う以上のものです」
「あとどのくらいで会えそうだ、神雕王と？」
「一日と半。おそくとも二日ではないかと」
「もう目と鼻の先だな」
斥候を遣わしてソケドキア軍の動きを注視し、速いな、と思ってはいたが。使者からの報告でその速さに確信を増したようだ。これは強敵であるのは間違いない。
「だがしかし、その速さ、伝え聞くイスカンダテンそのものといってもよいな」
イスカンダテンはタールコに伝わる伝説の勇者で、こと最速をもって知られた勇者だった。イスカンダテン動けば風のごとく山野を駆けて、一日でタールコの半分を渡る。と吟遊詩人はうたう。
「神雕王と名乗るだけはありますな」
そばでイムプルーツァが感心してつぶやく。アスラーン・ムスタファーがうきうきしているのを見て、自然と己もうきうきしてくる。
望むは強敵。己より強い者に会いにゆく。人生は旅といわれるが、何をもって目的地とするのか、と問われれば、強敵とこたえるであろう。
タールコ軍もソケドキアにかなり入った。
コーウッチノートサを陥落させてからは、道ゆく町や村は無抵抗で道をあけた。それらに対し、降伏や服従を強要したりせず。また軍規厳しく、略奪暴行にはしるものは処刑されるという以上に、勇士の誇りから平民には手出しをしなかった。
それどころか、その集落が餓えているとなれば惜しげもなく兵糧を分け与えてやった。そのため敵国ながら歓迎をされたことさえあった。

そもそも、ソケドキアは旧ヴーゴスネアの混乱と分裂によって生じた新興国である。端々の集落の人々は心から自分はソケドキア人であるという自覚が薄かった。慈悲をかけてくれれば、誰でも迎え入れる。

民は王のために生きるのではない。また王が選べるものでもない。むしろ民が王を選ぶのだ。

それは北方のリジェカの革命がよくあらわしていた。

（ドラゴン騎士団の小龍公と小龍公女はいまどう過ごしているのだろう）

一番の望みであるドラゴン騎士団はリジェカ公国の革命にくわわり若い王を立てた。春が来て雪が融ければ、まさに飛んででも渡り合いたい強敵であった。

ドラゴン騎士団のことを思わぬ日は一日ともない。

それは片思いに胸をこがず乙女のように。

だが今はソケドキアのシァンドロスだ。

彼もまた一筋縄ではゆかぬ強敵ではありそうだ。

聞けばわずかな部下とともに戦乱のヴーゴスネアを旅し、ドラゴン騎士団の革命・ドラゴンの夜のときにもドラゴン騎士団を助けたという。

「彼の様子はどうであった」

「はっ。なかなかの美男子といってもよいでしょうな。それがゆとりを見せて白い歯を見せて笑を見せておりました。そこな……」

と言いながら侍女を指差し、

「エスマーイールも喜んで傘を差したくなるでしょう」

諧謔をこめて使者は言う。イムプルーツァも、その傘を差すパルヴィーンも、思わず「ぷっ」吹き出す。

アスラーン・ムスタファーもそれを聞き、

「あっははは」

と痛快に笑った。

「どうだエスマーイール。シァンドロスのもとにゆかせてやろうか」

「まあ、アスラーンはなんて意地悪を言われるのでしょう。私がお仕えしたいのは、アスラーンただお一人でございます」
エスマーイールはぷっと頬を膨らませてこたえるものだから、アスラーン・ムスタファーはそれがおかしくて仕方がなく。
彼女の膨らんだ頬を見ていると、もっと、なにかしたくなって。
膨らんだ頬を指で突っついた。
「おやめくださいまし。頬がくすぐっとうございます」
「ははは。破裂するかと思ったが、柔らかくへこむものだな」
エスマーイールは傘を差したまま、ぷいっと、そっぽを向いた。
その頬は、赤くなっていた。

第十二章　獅子王子と神雕王　？

使者、イルゥヴァンはくっくと笑い、では、と言い自分の部隊にもどってゆく。彼もまたシァンドロスとの戦いを楽しみにうきうきおさえられない、タールコの勇士であった。

「はっは。そう膨れるな。膨れれば膨れるほど、何かしたくなる」

そう言われてエスラーイールは膨れるのを抑え、困ったように目を伏せ気味に無表情で駒を並べて傘を差す。

意地悪をした、とアスラーン・ムスタファー自らに苦笑して。気を取り直す。

「よし、我らソケドキアともに一万、真っ向勝負だ！　心していよ！」

号令を下せば、それはまたたく間にタールコ先陣一万に伝えられ、喚声どよめく。彼らひとりひとりも、同等の数による戦いでの真っ向勝負で腕を振るいたいと強く望み、武者震いを抑えられないでいる。

かわいそうなのは後方で、我らも獅子王子（アスラーン）とともに先陣にいたかった、と地団駄を踏む者が数多もいるという。

ともあれそれからはひたすら進軍、進軍、である。

「うーむ。国境以来、まったく抗う者がおらぬとは。これはかえって不気味でございますな」

イムプルーツァは言う。それはアスラーン・ムスタファーも気にしていたところだ。

途中人を遣わし地元の人間に抗わぬわけを聞いた。そうすれば、

「神雕王からのお達しで、無駄に抗わずタールコ軍はそのまま通すことにしております」

という答えがかえってきた。シァンドロスもタールコとの真っ向勝負を望んでいるのか。

「だがしかし、シァンドロスは曲者と聞き及びます。罠があるやも

しれませぬ」
「かもしれない。心していよう」
ムスタファーは勇気ある王子ではあるが、神雕王シァンドロスに対しドラゴン騎士団へ向けるのと同じ気持ちにはなれなかった。強敵であることはわかっているが、どうにもつかみどころのないところもある。
それは直に会ったことがないからだろう、と思った。思いたかった。
当のシァンドロスはといえば、まさに腹にいちもつという不敵な笑みを浮かべ淡々と自軍を進める。
気になるペーハスティルオーンにイギィプトマイオスは、何を考えているのか聞かせて欲しいと頼んでも、
「あとで言う」
の応えしか帰ってこない。皆名高いアスラーン・ムスタファーを相手に戦うことに警戒心強く、気が立っていた。
その一方で従軍史家ヤッシカッズに、その弟子ガッリアスネスは、そして愛人のバルバロネはこまかいところまではわからぬものの、黙ってシァンドロスについていった。
バルバロネもこの軍勢の中にいて、シァンドロスと駒を並べている。
女の身ながら傭兵あがりで歴戦の勇士でもあり、シァンドロスとおおいに気の会うところがあり、愛人となってつねにそばにいた。
それは戦場でもかわらず、小姓のように付き従っている。
進むにつれて数を増してゆき、ギヤオゴズィラという平原に着いたときにようやく後方が追いついて数は一万となり。
神雕王の象徴である雕(くまたか)の旗がはためき。
向こうに見えるのは、獅子王子(アスラーン)を象徴する獅子の旗。
両軍はこのギヤオゴズィラの平原ににらみ合った。
それを天では太陽が雲に邪魔されることなく見下ろしている。
絶好の戦日和である。

「ペーハスティルオーン、イギィプトマイオス、ガッリアスネス、来い！」

呼ばれたおのおのの者はシァンドロスを囲み、それから伝えられることを聞き、そこではじめてシァンドロスの考えを聞き、顔をほころばせた。

ヤッシカッズら文官は文筆の士であり戦士ではないので、後方に下げられている。

「ああ、ほんとうにタールコ軍だね。女に傘を差させるのが」

かつて東方タータナーノの出で、わけあって傭兵としてタールコにいたことのあるバルバロネはアスラーン・ムスタファーやイムプルーツァら勇士たちのことよりも、その隣で駒を並べて傘を差すエスマーイールやパルヴィーンに目がいった。

それがいかにもタールコらしい。と彼女の心に強く刻み込まれていた。

アスラーン・ムスタファーの目は輝いていた。

イムプルーツァらタールコの勇士ともども槍を強く握りしめ、いまかいまかと戦いのはじまりを待ちわびている。

おのずと両軍の騎士が一騎前に進み出て、

「我ら同等の数をもっての真っ向勝負をいたさん。我らの信奉する神々よ、照覧あれ！」

と天に向かい叫び、自軍に引き返してゆく。

シァンドロスも剣を抜き、不敵に笑い始まりを待ち。そばのバルバロネも剣を握りしめいつでも飛び出せるよう身構えている。

シァンドロスの愛馬ゴッズの鼻息も荒い。同じようにアスラーン・ムスタファーの愛馬ザッハークの鼻息も荒い。

人も馬も興奮し、その熱気はたちこめ、熱気で空（くう）が揺らめいているようであった。

シァンドロスもアスラーン・ムスタファーも、それぞれの軍勢の先頭に立ち、互いに視線を交わしていた。

（あれが）

獅子王子ムスタファーか。神雕王シァンドロスか。と頭に閃くとともに、それぞれの得物を采配と掲げて、

「かかれ！」

という号令が下されるや、両軍の馬蹄に軍靴、一斉に地を蹴り駆け出し。その咆哮、天を揺るがすかと思われた。

途端に風強く吹いて、雕の旗、獅子の旗強く広がってはためき。絵柄を見せ付け。

激突した。

第十二章　獅子王子と神雕王　？

鉄甲の兵士に軍馬揉み合い、刃ひらめき草原は踏みしだかれて血を撒き散らされて。

タールコ、ソケドキア軍は激突し互いに一歩もゆずらかなかった。

傘を差すエスマーイールとパルヴィーンたち侍女は突進するタールコの軍勢とすれ違うように後方へ下がった。彼女らの役目はあくまでも楚々と傘を差すことにあり、戦場で刃を振るうことではない。

両軍ともに大将を中軍の中央にいただき、それを先頭にぶつかりあった。

アスラーン・ムスタファーは槍を振るい、襲い来るソケドキア軍の兵士騎士を次々と薙ぎ倒し、獅子王子（アスラーン）の二つ名に恥じぬ奮闘を見せた。

シァドロスも存分に剣を振るいタールコの勇士たちを討ち取ってゆく。

両軍接近するにつれて、シァンドロスとアスラーン・ムスタファーの目の色とその輝きがはっきりと両者に見え。

最初の一刃を互いにぶつけ合った。しかしすぐに揉み合う兵士たちによって離れ離れにされた。

離れてゆきながらも、両者視線を交わし続けた。

アスラーン・ムスタファーはシァンドロスを求め道を切り開こうと必死に槍を振るった。

これにタールコの将兵が奮わぬわけがない。

「我らも獅子王子（アスラーン）に続き、勝利を！」

の掛け声があちらこちらで轟く。

イムプルーツァは左翼を率い、ソケドキア軍右翼とぶつかった。

ソケドキア軍右翼は重整歩兵ファランクス隊の繰り出す長槍の槍衾を広げ、タールコの勇士たちを次々串刺しにしてゆく。

自らは騎乗するイムプルーツァ率いる左翼は、タールコが得意とする戦車部隊を主に組織され、その戦車の厚い装甲をもってファランクスの槍衾を弾き返そうとした。

戦車の装甲は兵士や軍馬のそれよりも固く、槍の穂先を受け付けなかった。しかしファランクス隊を率いるガッリアスネスとて馬鹿ではない。馬を直に刺しても分厚い胸筋のためたわみ効果が薄い。そのため馬を避け槍の穂先を上へと掲げさせ、御者に狙いを定めて長槍を突っ込ませた。

狙いは的中し、長槍の餌食となって御者は戦車から落ち。制御不能となった戦車は勇士を乗せてあらぬ方向へと暴走して勇士たちも振り落とされる有様。

だが戦車隊も負けていない。車輪の横から鉤爪が飛び出し、うまく御者が長槍をかわし突進する戦車はソケドキアの重装歩兵の足を切り刻んでゆく。

一方のソケドキア軍左翼もまた長槍を繰り出すファランクス隊重装歩兵隊でこれはイギィプトマイオスが率い、タールコ軍の右翼とぶつかりあった。

今回のソケドキア軍は中軍は騎兵、左右翼は重装歩兵ファランクス隊で組織されていた。

タールコ軍右翼は歩兵を主に組織され、これは使者としてソケドキア軍に赴いたイルゥヴァンが率い、これも一歩も退かぬ戦いを見せていた。

タールコ軍の中軍はソケドキアと同じように騎兵で主に編成されて。それら合わせて一万同士、真正面からぶつかり合っている。

イルゥヴァンは長槍を見て、その穂先の餌食とならぬようその間にもぐりこむか、また地面に寝そべって転がり頭の上でやりすごして、歩兵の足を攻めるという戦法をとった。

これは効果があり、前方は乱れた。イギィプトマイオスは、

「これはいかん」

と槍を捨てさせ咄嗟に剣で対応するよう号令を下した。

機転の利く者は言われるまでもなく槍を捨て、あるいは槍投げと敵向けて投げて剣を手にし転がるタールコ軍に剣先を振り落とし、己の率いる左翼の乱れを抑えた。

さてソケドキア中軍、シァンドロスはバルバロネを従えよく戦い。バルバロネもシァンドロスから離れずよく戦った。

「えおう」

「とおう」

これでもか、というくらいの雄叫びがこだまし、天まで届く。

シァンドロスの兜は頭上てっぺんから後頭部にかけて鳥の翼がはえているように、赤く染められた羽毛の房が縦になびき。額の覆いはそれこそ雕くちばしのように鋭く尖り。こめかみの部分には鋭い眼差しを放つ目が彫られている。

タールコの勇士たちはそれを目印に刃を繰り出すが。シァンドロスこれをことごとく跳ね返す。

これに対し。

「道を開けよ。神雕王は我が獲物ぞ」

雄叫び上げて槍を振るう勇士といえば、アスラーン・ムスタファー。その兜は額の部分がまさに獅子の顔をしまるで獅子の顔を兜にしているような趣がある。

ソケドキア軍の兵士、騎士たちはそれを目印にアスラーン・ムスタファーに突っ込むが、

「雑魚に用はない！」

とこれことごとく跳ね返され。また愛馬ザッハークの馬脚に蹴られ、蹄に踏みつけられる者続出した。

「獅子王（アスラーン）子よ、我が首を所望されるか。ならば自らの勇気でもぎ取ることだ！」

シァンドロスはゴッズの馬脚をもって邪魔なタールコ兵を蹴飛ばし、アスラーン・ムスタファーに向かって駆けた。

バルバロネもタールコ兵を蹴飛ばし、シァンドロスについてゆく。

そのシァンドロスの目前で閃く槍の穂先。咄嗟にこれを避けゴッ

ズを反転させ、また反転させざまに、槍の主に剣を振るう。
これなん槍の主こそアスラーン・ムスタファーの腹心にして友のイムプルーツァ。
タールコ軍右翼を率いていたが乱戦さらに乱れを増して、右も左もなくなりつつあり。そのどさくさに、神のおぼしめしか悪魔の業か、シァンドロスとの距離が一気に縮まり槍を繰り出した次第。
「獅子王子（アスラーン）と戦う資格があるかどうか、まずこのイムプルーツァが試してやろう！」
この戦いに敗れれば、神美帝の命により処刑され後がない。もとよりそれを怖れるイムプルーツァではないが、後がないのをいいことにひたすら前進と突っ込む気迫がみなぎっていた。
「イムプルーツァ、余計な手出しは無用！」
アスラーン・ムスタファーは叫ぶが、イムプルーツァの耳には入らず。そのまま刃をぶつけ合わせ、陽光に反射し互いの刃の閃きを競い合っている。
「仕方のない男だ」
友の性質を知るアスラーン・ムスタファーは憮然と苦笑し、めぼしい獲物をかわりにもとめれば、
「やあぁぁッ！」
とアスラーン・ムスタファー目掛けて掛け声あげて剣を閃かせるのは、バルバロネであった。
うむ、と剣を槍で弾き穂先を繰り出す。
だがバルバロネも女だてらに傭兵として戦場を渡り歩いた歴戦の勇士。ひらりと穂先をかわしざまさらに距離を縮めて、刺突を繰り出す。
一気に距離が縮む。肌の色の黒さと、その顔立ちかがはっきりと見える。
「お前は女か！」
それが女であると知ったアスラーン・ムスタファーはたいそう驚き、相手の攻めをかわしながら、

「退け！　女は斬らぬ！」
と怒号した。
だがそれで退くバルバロネではない。
「馬鹿におしでないよ」
言い返しながら鋭い剣光を閃かせ、何度となく獅子の兜にぶつけようとした。だが運が悪い。揉み合いで他の騎士の馬がバルバロネの馬にぶつかり体勢を崩して、あやうく落馬しそうになった。
その隙にアスラーン・ムスタファーは距離を引き離し、バルバロネの剣はもう届かぬ。
「おぬしやるな！」
「神雕王こそ！」
激しく火花散らし、何合とも数え切れぬほど刃をぶつけあうイムプルーツァとシァンドロスは、輝く笑顔で強敵との戦いを楽しんでいた。
これに、アスラーン・ムスタファーは嫉妬した。

第十二章　獅子王子と神雕王　？

折りたたんだ傘を背に背負い、後方でエスマーイールとパルヴィーンら侍女や従軍文官らは固唾を飲んで戦況を見守っていた。
アスラーン・ムスタファーを信じている。しかしシァンドロスの戦い方はまずくない。勇猛をもって知られるタールコの勇士たちを相手にソケドキア軍は一歩も引かぬ互角の戦いを見せている。
これができるのは、ドラゴン騎士団のみであると思っていたが。いやはやなんと、あらぬところから強敵が突如あらわれたものだった。
あのイムプルーツァと堂々と一騎打ちするシァンドロスが名乗る神雕王は伊達ではない、ということか。
見よ。
火花散る両者の視線、その顔の笑顔を。
シァンドロスのは不敵なものであるとも、イムプルーツァを相手に笑っていられる者を、いままで見たことがない。そのどういう笑顔であれ笑顔が笑顔をよんで、イムプルーツァも笑っている。
戦いを心底楽しんでいるようだ。
（これぞ勇士としての本懐！）
かりにも一国の王と一騎打ちができようなど、勇士としてこれに勝る誉れがあろうか。
アスラーン・ムスタファーといえば、イムプルーツァに獲物を横取りされたように苦い顔をしながら、ソケドキアの騎士らを薙ぎ倒してゆく。
まさか友とするイムプルーツァから戦いの相手を横取りするのは、勇士としての矜持が許さなかった。かといって、イムプルーツァが負けることを望むわけにもいかず。
イムプルーツァつきの侍女パルヴィーンは握りしめる手を汗でしめらせ、火花散る刃を見守っている。

「獅子王子（アスラーン）！　女を相手に逃げるのか、臆病者め！」
バルバロネだ。
しつこくアスラーン・ムスタファーを付け狙ってくる。
ええい、と己の傘をパルヴィーンに押し付け。エスマーイールは腰の剣を抜き放ち、乱戦の中に飛び込みバルバロネに突っ込んでゆく。
「女郎！　お前の相手は私がしてやる！」
戦場にまでついてゆくだけあり、エスマーイールにもそれなりに武術の心得はある。剣を振るい、バルバロネの剣を打ちつけにゆく。
途中立ちはだかるソケドキア兵あれどそれことごとく、剣風となったエスマーイールの前に薙ぎ倒されるばかり。
自分に女が向かってきていることに気づいたバルバロネは舌打ちし、止むを得んとエスマーイールの相手をする。
黙って見てはいられないと、パルヴィーンも自分のと押し付けられた傘ともどもそばの文官に押し付け、乱戦の中飛び込みエスマーイールの援護をする。
「二人がかりで来るのか」
バルバロネは苦い顔をしたが、パルヴィーンは周辺のソケドキア兵のみを討ち取ってゆく。これもなかなかの剣技で、剣光閃くやソケドキア兵ことごとく血煙をあげた。
危険もともなう傘差しの侍女となれるその条件は、美しく教養のあることのみならず、武芸に秀でたことが絶対条件だった。
彼女らは清く正しく美しく、そして強い女だった。
「エスマーイール、邪魔者は引き受けたから、存分にその女郎と戦いなさい！」
「ありがとうパルヴィーン！」
「誰が女郎よ！」
傭兵はしても男を相手に身を売ったことなどない。女郎と蔑称されて、バルバロネが切れたのは言うまでもない。
だが切れたら切れたで、焦りが生まれ技は乱れてゆく。エスマー

イールもパルヴィーンもそこまで考えてなく、単純に戦場におけるごく普通の蔑称を言ったにすぎない。

バルバロネとて傭兵時代に同じ事を相手に言ったものだったが、いまはそのことを忘れ滅茶苦茶に剣を振り回している。

こうなれば動きを見切るのはたやすい、隙を簡単に見つけまずは肩に刺突を繰り出す。

「あっ！」

やや手ごたえあり、鎧の左肩の甲に剣先が触れ。続けざまに顔に斬り付ける。

咄嗟に避けたが、体勢の崩れは免れない。そこへ容赦なくエスマーイールの剣が迫る。

「あ、くっ」

どうにか剣で受け流すもそれが精一杯。劣勢に立たされて徐々に後ろへ後ろへ退かざるを得なかった。

「すまぬエスマーイール」

女の追撃を免れたアスラーン・ムスタファーは、イムプルーツァとシァンドロスの一騎打ちを一瞥し、舌打ちする。

「邪魔をするなよ！」

シァンドロスは将兵たちに厳命し、イムプルーツァとの一騎打ちに夢中になっている。やはり王とて一人の勇士である。

本来なら後方で部下に戦わせればよい立場なのだが、それが出来る人間ではないようだ。アスラーン・ムスタファーとてそれは同じ。だからこそ、いまこうして、ソケドキア軍とタールコ軍は同等の数で刃を交えているのだ。

やむをえず、他のそれなりに身分のある将兵をもとめアスラーン・ムスタファーは槍を振るいながら次なる獲物を捜し求めた。

その時である。

（おかしい）

ソケドキア軍の数が少ないように思える。それに、それなりの身分のある将軍の数も減っているように思える。

ペーハスティルオーンにイギィプトマイオスの姿が、ない。
ガッリアスネスといえば、乱れた自分の部隊を乱戦の中戦いながら整えようとしている。
背筋に戦慄が走った。
それは勇士としての第六感とでもいおうか。
（おかしい）
一万の軍勢同士で真っ向勝負をしているのではなかったか。
彼らはかなわぬと思って逃げた。
なら背中を見せる将兵の姿を見るはずだが、見ていない。皆こちらを向いて赤い口をあけて、雄叫びを上げて突っ込んでくる。
その数が最初に比べて少ないように思えるのは、どういうことであろう。
（いいや、考えすぎだ。獅子王子（アスラーン）ともあろう者が、なにを気弱な。これは我が方が優位にあるということではないか）
自分にそう言い聞かせ、いい加減決着をつけようと乱戦の中でも相手を討ち手の空いた者を集めて隊列を整えなおし、ひと塊となってソケドキア軍を散り散りにしてやろうとした。

第十二章　獅子王子と神雕王　？

イムプルーツァと激しく刃をまじえていたシァンドロスだが。突然馬首を反したかと思うと、乱戦の中をタールコ兵らを馬脚にかけながら逃げてゆく。

「うむ、かなわぬと逃げるか。神雕王の名が泣くぞ」

逃がさぬとイムプルーツァは愛馬ウォルダーンを駆りシァンドロスを追う。これにタールコ軍が勢いづかぬわけがなかった。

シァンドロスが逃げ出したのをきっかけにソケドキア軍は次々と背中を見せて逃げ出す。

男たちに混じりエスマーイールと刃を交えていたバルバロネも、シァンドロスに合わせ、背中を見せて逃げ出す。

「待て。逃げるのか女郎！」

エスマーイールも、パルヴィーンも男たちとともにソケドキア軍を追う。

「おう、勝利の女神は我らに微笑んだか」

考えたことは杞憂であったか、と追撃態勢をとってソケドキア軍を追い。壊滅させるのだ。

ガッリアスネスも自分の率いる部隊をうまく統率し、

「退け」

の号令を下す。

これにてソケドキア軍は皆が逃げ出した。

はっ、とエスマーイールはその様子をながめていた。

「なんという整った退却」

急ぎ愛馬ハルバサクヒィルを鞭打ち、アスラーン・ムスタファーのもとまで駆けた。

「獅子王子（アスラーン）！　ここはご慎重に。ソケドキア軍の様子がおかしゅうございます」

「なんだと」

自分が感じていたことをエスマーイールも感じている。
これは油断ならぬことであるということか。
イムプルーツァは気づかないようだ。
うーむ、と考えぬわけでもない、しかし。
「敵方に罠があるようだ。かといって、退くなど獅子王子（アスラーン）の名にかけてできぬ」
そんな、とエスマーイールの柳眉がさがる。とはいえ、アスラーン・ムスタファーの言い分もわかる。
ここは、いかねばならぬか。
「追え、逃がすな。ソケドキアに我らタールコの鉄槌を下せ！」
槍を采配がわりにかかげ、アスラーン・ムスタファーは勇士たちを追い越し追い抜き、先頭に立って追撃した。そばにはイムプルーツァとエスマーイールに、愛馬イーシガレを駆るパルヴィーン。
タールコ軍は、決着をつけてやると皆、血眼になってソケドキア軍を追った。

後ろを振りかえり、シァンドロスは不敵に笑う。
不敵な笑みはかれの名物のようなものだったが、逃げる最中でもその不敵な笑みはやむことを知らなかった。
「来い。さあ来いタールコの勇士たちよ。お前たちの崇拝する神々に会わせてくれよう」
ぽそっとおかしそうにつぶやく。
（うまくやれよペーハスティルオーン、イギィプトマイオス！）
これからのことを考えると、不敵な笑みは不動のものとなる。
ガオゴズィラの平原は戦った場所こそ平らであったが、進むにつれて丘陵地帯となって小高い草原の丘が四方八方にこぶのようにはえている。
いわば、視界が狭くなる。
そこにさしかかったときであった。
わっ、と喚声がとどろく。

「あッ！」
エスマーイールはハルバサクヒィルをザッハークによせて、咄嗟に手綱を掴んでとめようとした。
「何をする！」
追撃の邪魔をされ、アスラーン・ムスタファーの怒り大きく、平手打ちがエスマーイールの頬に飛んだ。
エスマーイールには吹き飛ばされそうな衝撃であったが、必死に手綱を掴みつづけた。
かと思えば、草原の丘のこぶの上に突如ソケドキア軍が現れ、ファランクス隊の長槍の槍衾が一斉に丘から駆け下ってくる。
「何ッ！」
イムプルーツァは急ぎ愛馬ウォルダーンを停め。
「とまれ！」
の号令を下した。異変を察したタールコの勇士たちは丘から駆け下るファランクスの長槍の槍衾に意表を突かれてきょろきょろと周囲を見渡し、一瞬とまどった。
この一瞬が致命的であった。
その一瞬の間に、ファランクス隊の長槍は距離を一気に縮め、端から串刺しにしてゆく。
同時にシァンドロスも馬首をかえし、
「とどめを刺せ！」
の号令を下した。

第十二章　獅子王子と神雕王　？

「戦車隊！」
イムプルーツァは咄嗟の判断で自らが率いていた戦車隊をアスラーン・ムスタファーのもとに集めさせて、取り囲ませ重装歩兵ファランクスの長槍を防ごうとした。
幸いなことに、アスラーン・ムスタファーはエスラーイールに手綱を引かれて前進が鈍り、後ろの方にいてファランクス隊の長槍までは距離がある。
ファランクス隊の長槍がアスラーン・ムスタファーに迫ろうとしたというときには、イムプルーツァの咄嗟の号令を受けて戦車隊は急いだ甲斐あって間に合い、持ち前の厚い装甲をもってアスラーン・ムスタファーを取り囲み長槍を防いでいた。
「これは」
ザッハークの手綱をエスマーイールに掴ませたまま、アスラーン・ムスタファーは唖然としていた。
シァンドロスは同等の数をもっての真っ向勝負をする約束をしたのではなかったか。その約束をたがえて、こんな罠を仕掛けようとは。
「卑怯！」
戦車隊に囲まれながら叫んだ。
シァンドロスは不敵な笑みをうかべている。
「戦いは勝てばよいのだ！」
それがシァンドロスの考えだった。
タールコ軍は意表を突かれて隊列を乱し、槍衾の前に薙ぎ倒されるばかり。数もぐんと減った。
「ここは止むを得ん。退け、退け！」
イルゥヴァンは乱れる軍勢を叱咤しどうにか踏みとどまらせて、退却をうながす。このままここにいてもやられるばかりだ。

イムプルーツァもはらわたが煮え繰りかえる思いは一緒だった。タールコの勇士たちもまた、断腸の思いで退却を余儀なくされた。

一度意表を突かれて隊列が乱れると、もとに戻すのは容易ではない。

このファランクス隊を率いるのは、ペーハスティルオーンにイギィプトマイオスだった。最初の戦いの中乱戦のどさくさに紛れて密かに戦場を離れ丘のある場所までファランクス隊とともに身を潜め、わざと負けた振りをして逃げるシァンドロスを追うタールコ軍を待ち受けていた、というわけだ。

その策は見事的中した。

これがシァンドロスの編み出した策であるのは言うまでもない。タールコの勇士たちとて一騎当千のつわものだが、意表を突かれて列を乱してしまえば、われを取り戻すのは容易ではない。

やみくもに敵兵に触れぬ剣や槍を振り回しながらファランクスの長槍の餌食となるばかり。

そこへ引き返してきたシァンドロスの本隊。

ゴッズはタールコ兵を蹴飛ばしながら疾走し、アスラーン・ムスタファーに迫り。それにバルバロネ、ガッリアスネスも続く。

イムプルーツァにパルヴィーンはどうにか冷静をたもち、イルゥヴァンもアスラーン・ムスタファーのそばまで駆け寄った。

「悔しいが、シァンドロスはドラゴン騎士団にひとしく、イスカンダテンと言うにふさわしい」

その進軍速度もさることながら、策によるとはいえここまでタールコ軍を混乱させた者はドラヴリフトのほかにこのシァンドロスだけである。

「タールコの傘差しあばずれ女！　悔しかったらやりかえしてみろ！」

バルバロネは女郎と呼ばれたことがやはり悔しくて、仕返しにと遠くに見えるエスマーイールに叫んだ。

それは乱戦の混乱でかきけされそうながらも聞こえ、エスマーイ

ールは憎しみをこめてバルバロネを睨み手綱を掴む手にさらに力は入る。

「戦車どけ！」

アスラーン・ムスタファーの怒号に驚いた戦車隊は思わず道をあけてしまい、エスマーイールを振りきり、戦車の間を駆け抜けシァンドロスに迫る。

「何をお考えか！」

イムプルーツァとエスマーイール、パルヴィーンにイルゥヴァンは慌てて後を追った。戦車隊もタールコの勇士たちも止むを得んとあとを追った。

せっかっく退却の態勢をとっているというのに肝心の獅子王子（アスラーン）が逃げぬのでは元も子もないではないか。

ザッハークは駆けた。ゴッズも駆ける。互いに一騎に距離を縮める。

「面白い！」

逃げるどころか逆にこっちに向かって突っ込んでくるアスラーン・ムスタファーを見て、

（もしコヴァクスやニコレットと戦うことになれば、彼らも同じ事をするであろう）

と、ふと思った。

迫るアスラーン・ムスタファーにファランクス隊の長槍が迫る。

「戦車隊、ファランクスに当たれ！」

イムプルーツァは号令しファランクス隊の長槍に戦車隊を突っ込ませた。近づきがたい長槍を相手にするには装甲の厚い戦車に任せるしかない。ことにこの混乱ともなればなおさらだった。

戦車隊もイムプルーツァの意図を汲み取り、なによりアスラーン・ムスタファーを守るために、真正面からファランクス隊に体当たりを食らわした。

これにより馬が犠牲になり、戦車も破壊されるがもとは遊牧民族で馬に愛着を強くもつタールコ人にとってはまさに断腸の思いであ

るが、アスラーン・ムスタファーを守るためなら止むを得なかった。
御者や戦車に乗った勇士たちは心得たもので、咄嗟に飛び降り戦車や馬を捨てて駆けて逃げた。
ファランクス隊の長槍は穂先を馬の分厚い肉にとらわれ、また戦車の厚い装甲によりへし折られて、これによりソケドキア軍の勢いもやや削ぐことができた。
エスマーイールはさっきと同じようにザッハークに追いつこうとするが、今度はなかなか追いつけない。それはイムプルーツァらも同じだった。
「おおお！」
槍を繰り出し、黒馬にまたがるシァンドロスに迫るアスラーン・ムスタファー。その勢いはまさに獲物を駆る獅子であった。
シァンドロスも速度を緩めず剣をかかげて、今度こそ神雕王の称号にふさわしい勢いと威厳を見せ。
一気に距離が縮まりアスラーン・ムスタファーの槍が眼前にまで迫ると、これをすんででかわし、左手で柄を掴んだ。
「うむッ！」
力を込めて退こうとすれば、なんのとアスラーン・ムスタファーは引き返そうとする。だがそれを逆手にとって、シァンドロスは一転、槍を押した。
「なんの！」
意表を突かれて体勢を崩しそうになったが咄嗟に立て直し、混乱の中でも聞こえるほどに風を切る音を響かせて槍を振るって、シァンドロスと戦った。
シァンドロスもさるもの、剣で柄をすぱっと斬り落とし。穂先は地に落ちた。
「まだまだッ！」
アスラーン・ムスタファーすかさず剣を抜き放ち、互いに激しく火花を散らす。
それぞれの愛馬、牛の頭の意味を持つ大柄な黒馬ゴッズに、最凶

最悪の魔王の名を冠した葦毛の駿馬ザッハークも、ともに鼻息荒い。
これが互角の戦いの中での一騎打ちならば見応えもあるというものだが、惜しいかないまタールコ軍は押しに押されている。
「獅子王子（アスラーン）！　ここは恥を忍んでどうか引き返しを！」
エスマーイールは叫んだ。そこへバルバロネが突っ込む。
「傘差しのあばずれ女！　王子の心配よりも自分の心配をしな！」
やっ、とさっきと同じように一騎打ちとなったが、
「お前とはあとだよ！　あっち行け！」
と、それどころではないと、パルヴィーンが加勢に入る。
二対一ではバルバロネも不利と見て、
「覚えてやがれ！」
といかにも元傭兵らしい捨て台詞を吐き、やむなく遠ざかってゆく。だがほっといてもタールコは負ける。そのどさくさに紛れて討たれてしまえ、と念じながら。
乱戦でタールコ軍は押されっぱなしで盛り返すことができないでいるのだ。
その状況はアスラーン・ムスタファーも心得ている。
数合剣を撃ち合わせてから、さっとシァンドロスから離れる。
「この借りは必ず返すからな」
「おう、いつでも来い」
シァンドロスはあえて追わず、離れるに任せ。
遠ざかりながらも別れを惜しむように、両者の視線違うことなくしばらく交わされた。

第十二章　獅子王子と神雕王　？

無念ながらもタールコ軍は態勢を立て直すために退却し、後方四万の軍勢と合流した。

すでに日が暮れて、夜空には月が光り空気は肌を刺すように冷たい。

しかしアスラーン・ムスタファーは身体中から湯気が出るほどの怒りと屈辱に身を震わせていた。

幕舎の中で、ひとりにしてくれ、と言ってひきこもったかと思うと。ややあって、侍女のエスマーイールを呼びつけた。

「エスマーイール、このたびはそなたにはよく助けられた。なんと礼を言えばよいのか」

と頭を下げた。

もしエスマーイールがあのとき手綱を引かなければ罠の奥深くに入り込み、ファランクス隊の長槍の餌食となっていたかもしれぬ。

「そなたをはたいて、悪かった。許してくれ」

とも詫びた。

「そんな。出すぎた真似をし、わたくしこそ……」

「いや、そなたの心を知らぬオレにこそ非があった」

気がつけば、エスマーイールの手を握りしめていた。

その頬は赤い。お互いに、頬を赤くし、お互いにみつめあっていた。

気がつけば、アスラーン・ムスタファーはエスマーイールを抱きしめていた。

「なにをなされます」

「こうさせてくれ」

王子としての権力をもって女を抱きしめるのは、獅子王子（アスラーン）としての矜持が許さぬことであった。

しかし、今は、ただの十八の少年であった。

いかに神美帝ドラグセルクセスの子息といえど、そこは人の子。どうにもなぜか、胸より湧き上がる感情が昂ぶり。なぜか、エスマーイールを求めている自分がいる。

突然抱きしめられて、エスマーイールは心臓が爆発しそうで思わず身もだえした。それから、獅子王子（アスラーン）の心臓の鼓動も激しく波打っていることを知る。

「わ、わたくしごときに、もったいのうございます」

「いいや、オレにこそ、そなたはもったいない」

「そのようなことは……。宮中にもっとふさわしきお方がおられましょうに」

「オレには、そなたこそがふさわしい」

お互いの唇が触れた。

エスマーイールは目を見開き、たいそう驚き、思わずアスラーン・ムスタファーの腕を振りほどこうとした。

だが強く締め付けられて逃れることはかなわぬ。

「オレは、そなたが、好きだ！」

「ええッ！」

「初めての、いいや、オレの、ただ一人の女（ひと）になってくれ」

そう告白されてから、頭の中は真っ白になり、記憶はなかった。

ただ、ひどく悩乱し。

エスマーイールはアスラーン・ムスタファーに初めての、乙女の全てを捧げた。

生まれて初めてのひどい敗北と屈辱ののちに、初めての女をもとめるアスラーン・ムスタファーの心境はどうであろう。

イムプルーツァやイルゥヴァンをはじめとするタールコの勇士たちは、アスラーン・ムスタファーの様子がいつもと違うことが気がかりであった。

ろくな軍議や総括もならぬまま、幕舎に引きこもりエスマーイールを呼びつけてふたりきり。無礼と思いつつ、いかなる事態になっ

ているのか、容易に想像がついてしまうのが怖かった。
とはいえ、実際のところ、アスラーン・ムスタファーはエスマーイールの腕の中で、まるで赤子のように安らかに眠っていた。
闇の中でわれを取り戻したエスマーイールは、初めての、乙女の全てを捧げた男に対し、胸が痛くなるほどの愛おしさを感じてやまなかった。
（まるでもう母親になったみたい）
と思ってから、はっと自分がひどく無礼なことを考えているような気分になった。
だがそれは、ごまかしようのない感情で。
我知らず、瞳を閉じて安らかな寝息を立てるアスラーン・ムスタファーの頬を撫でていた。

翌朝、アスラーン・ムスタファーは幕舎を出て、澄み切った朝の青空の下で軍議をひらき。
前日の無様さを正直に告げて、また態勢を立て直し、下手な矜持をたもつより実質的な勝利を求めてソケドキアを攻略することを告げた。
イムプルーツァらタールコの将軍勇士たちは、おお、と喚声をあげた。昨日の敗北の落ち込みようからどうなることかとひどく心配したのだが、それは杞憂に終わったようだ。
「獅子王子（アスラーン）としての傲慢が、多くの勇士を無駄に死なせてしまったこと、我は慙愧（ざんき）に堪（た）えぬ。ソケドキアを制するまでは、オレはタールコには帰らぬ。もしそれが叶わずとも、お前たちとともに死ぬ覚悟だ」
「よくぞ言われました！」
一晩で気を持ち直したアスラーン・ムスタファーに、皆は喝采を送った。アスラーン・ムスタファーは、男たちの心も知らぬうちに強くつかんでいた。
もし性別が違えば、自分こそエスマーイールの役割を果たしたい

くらいである。
ひどい敗北をしても一晩女を抱いただけでこうまで立ち直るとは、単純といえば単純だが、それくらいの肝がなければ将来タールコの皇帝はつとまらないだろう。
タールコの勇士たちは、将来の皇帝の勇敢さと図太さに、夢と希望をたくさん胸いっぱいに抱いていた。
その夢と希望こそが、忠誠と闘争心の原動力であった。

さてシァンドロス。
ガオゴズィラの戦いで勝利したものの、数の不利が変わるわけではなく。
まだ四万の軍勢があることを知り、さすがに慎重策をとらざるを得なかった。
ガオゴズィラの手前にアギラスという地があり。その中にまたラウドネという砦があり、ひとまずはそこに軍勢を篭らせた。
ラウドネの砦はさほど高くはない、小高い岩山の上に旧ヴーゴスネア時代に建てられた砦だが守るに頑強に造られており、そこでタールコ軍四万余を迎え撃つ気であった。
「さて神はオレをどうするだろう」
よくよく考えれば、こういった戦いは援軍を当てにしてするものだ。
しかし援軍を頼みたくとも唯一味方になってくれそうなドラゴン騎士団擁するリジェカ公国が雪に閉じ込められて当てにならぬ。他に当てはない。となれば、砦の軍勢のみでタールコ軍四万余と戦うのは、ひどく不利どころか決定的な敗北が待ち受けているとしか思えぬのであった。
あのとき、アスラーン・ムスタファーを討ちそびれたのは、痛かった。幸い中の大不幸としか言いようがない。
おそらくタールコ軍四万余はいらぬ矜持をかなぐり捨てて全力で攻めてくるだろう。

だがシァンドロスは己の身に降りかかる命運を楽しんでいるようだった。

気を揉む者は多く、イギィプトマイオスなどは、

「なぜこのような時に笑っていられるのです」

と不敵な笑みの神雕王にいぶかしげに問うた。

「ここで助かればよし。さもなくば、オレはそれだけの男だったということだ」

それがシァンドロスの答えだった。

大いなる野心を胸に抱く神雕王シァンドロスは、命運すら己の実力のうちであると考えている。

もし己の大いなる野心を、タールコのような大帝国を打ち建てる野心を遂げるだけの実力があるのなら、神は味方し命運もそれに従うはずである、と。

そんなことを平然と、当たり前に考えていた。

だから、夜もバルバロネを激しく求めることが、平気でできた。

一見絶望的に思える状況が、シァンドロスを激しく燃え立たせるようで。護衛も兼ねた愛人であるバルバロネはそれに完全に焦がされてしまって、悩乱させられるがままだった。

このことを従軍史家ヤッシカッズは、

神雕王、危機に当たってよき遊び場を見つけたる童子のごとく心ときめかせて。

と書き記し。

そしてその考えの正当性をしめすようなことが起こったのだった。

斥候が息を切らして砦に来て、シァンドロスに息も絶え絶えに報告する。

「アスラーン・ムスタファー率いるタールコ軍は、反転しソケドキアより北のアヅーツ以北の征伐軍の援軍に向かった模様」

にやりと、シァンドロスは白い歯を見せて、わかったと言い。斥

候に褒美を与えた。
さらに詳しく調べてみれば、アスラーン・ムスタファーのと別の五万の軍勢は旧ヴーゴスネアの五ヵ国を平定するために出征したはいいが思いのほか苦戦し。やむなく神美帝にこのことを詫びつつ報告し、援軍を乞うたところ。
神美帝は援軍に息子のアスラーン・ムスタファーを当たらせることにしたのだった。
ガオゴズィラでのことはすでに神美帝の耳に入っている。
「言わぬことではない」
と眉をひそめたものの、やはり情のある可愛い息子でもあり、また勇士イムプルーツァも処刑するには惜しい。
そこで、ギィウェンとムハマド率いる五ヵ国遠征軍と合流させてアスラーン・ムスタファーの指揮下に置き換え、雪辱の機会を与えようという魂胆だった。
それと同時に、合わせて十万の軍勢がなんら戦果を上げられぬことに強く遺憾の意を抱いたのは言うまでもない。
もしこれでも負けて帰ってくるようであれば、断固とした処置をほどこさねばならぬであろう。
ともあれ、ひとまずソケドキアは捨て置き援軍にゆくべしという報せを受け取ったアスラーン・ムスタファーは不服ではあったが、父であり君主の命となればゆかねばならない。
イムプルーツァは内心ほっとしていたのは秘密だ。
これにより、ソケドキアはタールコの侵攻の危機は免れ得たのだった。
「なんという強運か」
臣下ながらガッリアスネスも師匠に習いこのことを記録として書きとどめるとともに、書きながらシァンドロスの強運に舌を巻く思いだった。
とりあえず、新興国であるソケドキアは、アノレファポリスのような弱小都市国家を滅ぼしても、それ以上のことは現実的にはでき

ない。まだまだ力を蓄えねばならぬ、ほんとうに若い国である。
南のエラシアは都市国家同士で牽制しあっているのでソケドキアに攻め込む心配はない。タールコにしても、冬の間は五ヵ国征服に専念するだろうから、とりあえず攻められることはないであろう。
その間隙を突いて、ソケドキアはじっくりと国固めに専念することができた。
そしてシァンドロスは高らかに宣言するのである。
「守られた。オレは神に選ばれ、守られているのだ」

第十三章　暗殺者たち　？

廃墟となった、かつての小さな都市国家アノレファポリス。
いまは地名すらなく。朽ち果てようとしている小さな宮殿や市民の家々が、寒風に乗った砂埃に吹きつけられて、削り取られてゆくように、砂埃を上げて風に乗せる。
風に揺れる家屋の扉が、きぃ、きぃ、と木片をすり合わせる音を立てている。
もはや廃墟となったアノレファポリスには、人が近づくことすら許されず。そこに住もうとする者は、シァンドロスによって処刑されることが定められていた。
家族への感情はともかくとして、そこまでに恥辱を感じさせられたシァンドロスのアノレファポリスを憎む気持ちは、それほどまでに強いということだ。
だがそこに、処刑を怖れずしずかにたたずむ者が一人。
それは白い衣を身にまとい、長い黒髪を風に揺らして周囲を見回している。
これなん者こそ、かのロンフェイであった。
ドラゴンの夜のときに突如として現れたかと思えば、風のように消え。風まかせに旅をし、いまはアノレファポリスの廃墟にいる。
廃墟を歩いてさまよい、小さな王宮の円柱の陰に隠れるようにしてたたずみ。そっと、円柱に手を触れ。
瞳を閉じて、この都市国家の滅び行く様を脳裏に描く。
「いずこも同じ……」
滅びゆく様を思い描いたあと、地図が頭の中に浮かぶ。
地面には、錆びた武具が放置されたままだ。それらに一瞥をくれて、王宮の中にはいってゆく。
陽は暮れようとし、廃屋の影が長く延び、やがては闇に溶かされていった。

王宮で王の寝室にゆくと、ロンフェイは寝具によこたわり、天上を見上げながら静かに目を閉じ、寝息を立てて眠りに着いた。

シァンドロスはラウドネの砦を引き払って、首都ヴァルギリアに戻り。本格的に内政に取り組むための政治体制を整えて、国固めに専念する。

まずは国民のソケドキアへの忠誠と、ソケドキア国民であるという自覚をおぼえさせることからはじめた。

納税はむろんのこと、いざというときの徴兵に国民に素直に応じさせるためには、ソケドキア国民であるという自覚が必要であり。そのためには、国は民のためにあるのだということを見せねばならない。

まず国を整備し民に仕事を与え、税を納めやすいようにさせ、国に金銭がよく循環するような仕組みをつくりあげ。また税の納められぬという者には兵役につかせ戦争で手柄をたてるという機会を与えてやった。また、たとえ身体が弱く戦場で使えぬとも、後方支援に当たらせるなど臨機応変に対応した。

かといってシァンドロスが慈悲深い善王なのかといえば、そうというよりも合理的な理由からそうした趣が強い。

たしかに国民をまず食わせることを第一とするも、それはいざというときにソケドキア、シァンドロスが使いたいときに使いやすいようにするためであり。それを国民に気づかせないようにするのはずるいといえばずるいが、まさに合理的ではある。

その一方で自分に刃向かうものには容赦ない制裁をくわえた。

やはりいまだシァンドロスに復讐の念を燃やす者は多く。それらを捜し求めてはしょっぴいて、裁判など生ぬるいことはせずそのまま首を刎ねた。冤罪もあるかもしれぬ。だが、藁の下でくすぶる火種を心配するよりはいい、という。

神雕王に従えばよし。さもなくば、死罪。という、いわば飴と鞭をもって、シァンドロスは祖国ソケドキアの神雕王として君臨して

いた。
そんなシァンドロスを見据える目があった。

寝付けぬ夜があった。
寝室で燭台の蝋燭を明からせ、何をするでもない。ひとり物思いにふけって椅子に座ったまま動かず。
目はじっと、蝋燭の揺れる火を見つめていた。
彼の瞳の奥の脳裏に浮かぶは、なんであろう。
あれから報告がひっきりなしに飛んでくる。
アスラーン・ムスタファーは兵をよく率い滅亡寸前のアヅーツをついに滅ぼし、ノナブガーオダ以下王族ことごとく討ち取られたという。
しかしそれらを必要以上に辱めず、丁重に葬り。新たに領土となった旧アヅーツの領民は慰撫されているという。
それから北上し、今は二手に分かれてユオとヴーゴスネアを攻めている最中であるという。
「愚かなことだな」
醜い身内同士の権力闘争の果てにあったものは、外敵から攻められての滅亡であった。
ヴーゴスネアの王たらんとして争い合った貴族どもは今どのような思いであるだろう。シァンドロスとしては、惨めな思いをしながら滅んでしまえ、ときついことを考えている。
ふっ、と不敵に笑う。これがシァンドロスという男を一番よくあらわす表情であった。
「いつまで隠れている。出て来い」
と言えば、寝室の扉が開き。老人がひとり、おずおずと入室した。
老人はどこにでもいそうな好々爺然とした容貌だが、目は異様に光り。それが堅気（かたぎ）の老人でないことを物語っている。

第十三章　暗殺者たち　？

シァンドロスは老人に目を向けず。笑みを浮かべ、腕と足を組んで、じっと火を見つめている。
「お気づきでございましたか」
「気づかいでか。お前、わざと気配を出していただろう」
「これは、おそれいりました。さすがは神雕王ともうしましょうか」
「世辞はよい。用はなんだ。オレの命ではなさそうだな」
「ははは。これは」
老人は笑い、ひとつ咳払いをした。
護衛の目に触れることなく、シァンドロスの寝室まで来たこの老人は何者であろう。
ちなみにバルバロネは今夜は自分の部屋だ。
「我らを御用立ていただきたく、この白髪頭を下げにまいりました」
そう言って、老人は跪いた。
「お前、暗殺者だろう。金で雇われて、闇に紛れて人を殺す」
「はは。おおせのとおりでございます」
「あいにくオレは暗殺などせせこましいことはせぬ。残念だが、よそを当たれ。今ならダメドにヴーゴスネアやユオが喜んで迎えてくれよう」
「それが出来るならば、とっくに行っております」
「ふん。オレのもとに来た理由はなんだ。まあ話だけ聞いてやろう」
老人は理由を語った。案の定、タールコに滅ぼされる国に雇われる気などさらさらない。いやそうでなくとも、どうせ雇われるなら、ソケドキア神雕王シァンドロスがよいという。
さらに、
「お父上は我らを重く用いてくださいました」
と言えば、シァンドロスの眉がぴくりと動いた。
そう、あの六魔の暗殺者どもは、父に雇われてシァンドロスを暗

殺しようとした。老人は六魔と同じ暗殺集団に身を置いているのか。
　というより、まさかと思えば。
「わたくしめは幼いころより暗殺のための修練を命を賭けてやりとげ、ちょっとした暗殺のための結社もつくったのですが……」
　そのまさかだった。老人、暗殺の結社の頭領であるという。ふと、老人はあることに気づいた。
「名を聞かぬのですか」
「ああ、興味がないからな」
　嘲笑する横顔を見せつけながらの、そっけない応え。ほんとうに暗殺者というものを嫌っているようだ。
「興味がなくとも知っていただきましょう。わたくしめの名はダヂヴァイバーと申します」
「で、続きはあるのか。ないならさっさと帰れ」
　こやつ。殺そうと思えば殺せるのだぞ。と胸のうちで湧き上がる激しい怒りをどうにか抑え、ダヂヴァイバーは言った。
「はからずも結社の同志を六人も失うことになろうとは夢にも思わず。さらに我ら神雕王の偉大さに気づかず、大きな過ちを犯してしまいました」
「ならば、以後気をつけることだ」
　ぐっと拳を握りしめる。それに気づき、シァンドロスの口角は笑みでくぼんだ。
「仰せの通り。そして、心を改め、あなた様の下で働かせてほしいと願うのです」
「いやだ」
　あっけないものだった。だがダヂヴァイバーは引き下がらない。
「ロンフェイをご存知でございますな」
　さっと懐から取り出した紙をシァンドロスに向けて飛ばした。それは空（くう）の流れに乗るように飛び、シァンドロスはそれを掴んだ。
　紙には、「龍菲」と書かれていた。
「これははるか東方の昴（マオ）の字だな」

「さよう。龍菲（ロンフェイ）と読みます」
「なんと。やはりあの女は昴の華人（ファじん）であったか」
「左様」
脳裏に、ドラゴンの夜のことが思い起こされる。
白い衣に長い黒髪、なめらかな線を描く整った目鼻顔立ち。彼女はまさに東方美人であり、同時に恐るべき武術の使い手でもあった。
「なぜ昴の華人である龍菲が遠く離れたこの地にいるのだ」
「それは、同じ華人の暗殺結社との貿易で仕入れた暗殺者なのでございます」
「ほう」
これには少し驚く。暗殺者同士で暗殺者を商品として東西の交易があろうとは。しかしありえる話ではある。
この世界には表と裏があり、ダヂヴァイバーに六魔に、龍菲は裏の世界の住人なのだ。裏の世界は表の世界の人間には理解しきれぬことが多々あるもので、暗殺者が商品として取引されるのもそのひとつというわけか。
龍菲には、指一本触れただけで動きを封じられ。さすがのシァンドロスも驚かざるを得なかったものだった。
「で、なぜ、龍菲はお前たちに刃向かった」
「ふん。それがまた甘いもので。もう人殺しはしたくないと抜かしましてな。おめおめと逃げ出す始末」
「……なるほど」
暗殺者といえど、人の心は持ち合わせているようだ。なるほど、あの清楚な印象。あれは暗殺者としての誤魔化しでなく、芯からのものと思ってよいだろう。
「龍菲の強さは、神雕王もお知りのはず。その龍菲の首を手土産にして出直せば、我らをお使いいただけますか」
「……」
不敵な笑みから一転、無表情に黙り込んだ。
龍菲は敵ではない。いかにシァンドロスでも敵でない者の首を求

めるほど強欲ではない。
なにより。
（コヴァクスは、龍菲のことが好きなようだ……）
どうも、龍菲に対するコヴァクスの態度から察するに、当たらずとも遠からずであろう。大なり小なり、コヴァクスは龍菲に対し恋心を抱いているようだ。
（龍菲は敵にはならぬであろう。しかし、ドラゴン騎士団とは……）
いずれ刃を交えることになるだろう。シァンドロスはそんなことを考えていた。
自分のやり方を、ドラゴン騎士団が受け入れるとは思えなかった。となれば、いずれは敵対関係になってゆくのは自然なことかもしれない。
もっとも、今から速急に敵対する必要はなく、必要とあらば同盟も結ぶが。
（もし龍菲がいなくなれば……）
コヴァクスはどう思うだろう。失意のあまり、腐ってしまいはしないか。そうなった方が好都合だと思う自分がいるし。
それに、
（龍菲がやられるのか？）
という考えも大きい。好奇心というものであった。
さて龍菲にこの老人、ダヂヴァイバーを差し向けたらどうなるだろう。
「わかった。そこまで言うなら、好きにしろ。それから考えてやる」
「わかりました」
老人は去った。
音も立てずに。

第十三章　暗殺者たち　？

儲けのためにシァンドロスに取り入ろうとしたが、当てが外れた思いだった。

さっさと首都ヴァルギリアから抜け出し。

「わしを愚弄しおって。龍菲（ロンフェイ）の次はお前だ」

シァンドロス暗殺の決意を胸に、ダヂヴァイバーは夜闇の寒風の中をひた走り、結社本拠のある人里離れた郊外の屋敷へと帰った。

屋敷に帰れば、配下の暗殺者でありエラシアのグレースポリス出身者であるレセプタクルが鋭い眼光で、

「龍菲の居場所をつきとめました」

と言う。

「よし、今からゆくぞ。案内せい」

速急に身支度をし、他に四人、キャメロウとコーヴェッテーと、テヴィアルとグリフィスいう者がついていった。

この四人は己の出自を知らない。それもそうだ。もの心つく前にダヂヴァイバーにさらわれて残酷非情の暗殺者として育て上げられ、つくり上げられたのだ。

六魔の六人も同じようにして育てらて、暗殺者としてつくり上げられた。

その性、人を人と思わぬのはいうまでもない。

レセプタクルは出自もはっきりしているが、もともと素行の悪い男で悪行の限りをつくし追放となってしまったところを、ダヂヴァイバーに拾われて、暗殺者となったのだ。

結社の暗殺者はこの四人。

さあこれからもっと大きくなって、一国の権力者とも互角に渡り合える一大勢力となろうという夢と希望を抱いていたが、それが龍菲によって潰されようとしていた。

ダヂヴァイバーの怒り推して知るべしで、常人から見れば十分狂

気と思える性がまさに狂わんばかりに怒り狂った。
その六人が、龍菲をしとめるために、アノレファポリスの廃墟に向かった。

龍菲はどこへいくともなく、アノレファポリスの廃墟で過ごしていた。
いかにロンフェイといえど、冬の野をさまようほどには酔狂にはできていない。
アノレファポリスの廃墟は朽ちようはしているものの、風に雨露をしのぐには丁度よい棲家もある。
時折ソケドキア兵が見廻りに来て、人がいないか捜索をしているがそれにみつかる龍菲ではなかった。
またそれはダヂヴァイバーらも同じこと。
それは月が冷たくも大きく見開くように光り輝く夜だった。
空気も肌を刺すほどに寒い。
だがロンフェイは気をめぐらして体温をたもち、冬の寒気をしのいでいる。
眠らず、ゆらりと、舞うように身体を動かしている。
空(くう)のなにかをとらえようとするように、柔らかく指を伸ばし、手をゆらりと上から下へ、下から上へと動かし。時には交錯させ。
足は、すぅ、と地をすべりその足跡をたどればなだらかな線が描かれているのだろうが。地に足跡はつかなかった。
いかなる技をもってそのような動きをなすのであろう。
冷たい月が静かに龍菲の舞いを見下ろして、龍菲は舞いを月に奉納するように、身体を動かしている。
どうしてロンフェイは夜も眠らず身体をゆらりと動かしているのか。そうしないと気をめぐらせられず体温をたもてないからか。
身体を動かしつつ、脳裏に地図が思い浮かぶ。
いま自分がいるのは大陸のほぼ中央、西側世界の入り口であるエラシアのアノレファポリス跡の廃墟。ソケドキアに攻め滅ぼされて

しまった。そのソケドキアは他の六国とともに旧ヴーゴスネアからわかれたのだ。

その東にはタールコ、大帝国で故国である昴（マオ）とも貿易をしている。タールコの東にはタータナーノ。

他はさまざまな民族、小国がひしめきあい、争乱多きこの大陸で凌ぎ合いの興亡を繰り広げている。

さらに、昴より東方に暁星（ヒョスン）の半島が東の海に向かって突き出て。海を挟んで扶桑（ふそう）と呼ばれる島国がある。

それらの国々は昴の華人（ファじん）の文化をとりいれるとともに、華人と同じ字を用いて、それらの国を一地域にまとめる場合は東洋と称している。

東洋の扶桑は極東の最果ての地、それからはなにもなく、ただ広い海が広がるのみ。

（世界は、広い）

ざっと脳裏に思い浮かべたものの、世界の広さはいかに龍菲をもってもつかみどころがないほどに、広い。

ここから扶桑までゆくのに、どのくらいの月日がかかるのであろう。

そういえば、タールコに降伏したオンガルリは、もとは東方の騎馬民族の出であるという。昴は、いや華人はその騎馬民族を防ぐために古来から気の遠くなるほど長い長城を建造したものだったが。それでも、草原の騎馬民族は防ぎきれず、今も領土を奪い合っている。

その騎馬民族の一派が、西へゆきオンガルリを建国したのだろう。

世界は広いが、人もよく動くものだ。

（ドラゴン騎士団、コヴァクスとやらも、その子孫になるのだろうか）

ふと、コヴァクスが思い浮かんだ。

コヴァクスは自分に対してただならぬ思いを抱いているようだ。

自分を見つめるその瞳は純粋に澄んでいた。

そしてなぜか、彼のことが気になる。だが同時に、自分の思いもあった。

自分は貿易をするキャラバンによってこの地まで連れてこられた。（もし翼を得るように本当の自由が得られれば、広い世界を駆け巡ってみたい）

キャラバンに連れられ道中さまざまなものを見て、いつの間にかそう思うようになっていた。

金で殺しを請け負うことなんかよりも、もっと、そっちの方が楽しそうで、夢や希望がありそうだった。

鳥のようにもろ手を広げて上げて、ひらりと袖と裾をはためかせくるりと、ひらりとまわった。その袖と裾のはためきが、白鳥の羽を思わせるほど動きは流麗なものだった。

それから、そっと動きを止めた。

その動きは体重などないかのように、空（くう）に乗っているようにゆるやかでやわらか、舞のようにそして華麗だった。

「もう出てきたら」

ぽつりとつぶやけば。

「待たせたのう」

という声がした。。

声に振り向けば、そこにいるのはダヂヴァイバーとレセプタクル、キャメロウとコーヴェッテー、テヴィアルにグリフィスだった

「見せてもらった。あいかわらず、お前の武功（ウーコン）はたいしたものだ」

武功とは東方、昴の国、いや昴建国以前の華の大地にいにしえより伝わる武術のことだ。

ダヂヴァイバーにすれば龍菲よりも武功を買ったところだろう。

その無駄のない流麗でなめらかな動きも、武功によるものなのは言うまでもない。

だがしかし、その武功にまんまと裏切られてしまった。

ぎりりと、ダヂヴァイバーは耳障りな歯軋りの音を夜闇に響かせる。

残忍だが冷笑主義で、怒りを込めるなど滅多にないのだが、今夜ばかりは冷笑よりも怒りの方が遥かに大きいようだ。

それは他の暗殺者たちも同じで、冷たい目に怒りをひどく込めて龍菲を睨んでいる。

彼らの心の中で、どんな残酷非情な光景が繰り広げられているのだろう。

お互いに視線を交わしたのは一瞬であった。すぐにグリフィスが剣を振りかざして飛び掛った。

第十三章　暗殺者たち　？

グリフィスの表情は怒りに燃え、心どころか烈しく魂までもが怒り狂っているようだ。

「この裏切り者め！　死ね！」

闇の中月光で剣は閃き、龍菲に襲い掛かる。しかし、振られる剣はことごとくかわされる。

さきほどはゆらりと空（くう）に乗って遊ぶような動きであったが、今は風に乗ったような素早い動きであった。

咄嗟にダヂヴァイバーらも加勢し、それぞれの剣を振るう。

合わせて六本の剣が四方八方から龍菲に襲い掛かる。

これが常人であればすぐに肉片にされてしまうところであろうが、ダヂヴァイバーが仕入れただけあり、そう簡単にはしとめられない。

戦いがはじまってすぐだった。

一番最初にしかけたグリフィスであったが、己の剣をかわされるとともに、目の前に掌が見えた。と思った次の瞬間、

「ガッ！」

と声にならぬ声をあげて、顔面強く打ちつけられてそのまま後ろへ吹っ飛び、地面に転がってからぴくりとも動かない。

あっけないものだった。

「グリフィス！」

一同声を上げた。まさかこんなあっさりと一人がしとめられようとは思いもしなかった。

だが、

「まだ五人おるぞ！」

ダヂヴァイバーはかまわず五人で襲いかかる。

こっちは数も多く武器もあり、相手はひとりで無手だ。困難であろうと、勝てる見込みはある、はずだ。

「悪いことは言わないわ。暗殺者なんかやめて、普通に暮らしたら

？」

「我らを愚弄するな！」

「そう……」

怒り狂う暗殺者相手に無益なことを言ったと、龍菲は剣をかわしながらため息をつく。

テヴィアルが咄嗟に一団から遠のいたと思うと、地面に転がっていた錆びた短剣をあざとく見つけて拾い、さっと龍菲に投げつける。

短剣は夜闇の空(くう)を切り、龍菲の鼻先まで迫った。五人は顔面に短剣が刺さる場面を想像したが、なぜか短剣は鼻先でとまった。素早く指で挟んで、短剣をとめたのだ。

と思うや指で挟んだまま、ひょいと小石でも放るかのように一番近くのキャメロウに向けて放てば、矢のように飛び、避けることかなわず額に短剣突き刺さり、どおっとたおれて動かない。

「むッ！」

さすがにダヂヴァイバーもうなった。

大金をはたいて龍菲を仕入れたのは、自分たちに害を与えさせるためではないのは言うまでもない。彼女をもって暗殺の請け負いに弾みをつけて、飛躍するはずであった。

それがいまはどうか。

「悪い買い物をしたわね」

月に負けぬ冷た目で龍菲は言った。

金で人の身は買えても、心までは買えない。などダヂヴァイバーは考えぬ。ただ裏切り者への制裁だけがあった。

「哀れね」

その言葉がダヂヴァイバーの心の怒りの炎に油を注いだ。

だが攻めても攻めてもかわされるばかり。彼らの剣技とてまずいものではない。四本の剣は四方から攻め、上、あるいは下から強烈な剣撃を放つのだが、いっこうにかすりもしない。

その四方からの剣撃をかわして、龍菲はひらりと高く跳躍した。

見上げれば、龍菲は袖と裾を揺らし、月を背にして四人を見下ろ

している。
それは小耳に挟んだことのある、昴（マオ）に伝わる飛天という女神を思わせるような威厳までも感じさせた。
昴の幇（結社）の者は言った。この女はいい商品だ。あんたらは江湖（渡世）の飛天を買ったんだ、と。
なるほど、確かに彼女は飛天であった。だがそこに感動などあるはずもない。
「馬鹿め、どうやって降りる気だ」
飛んだはいいが、翼があるわけでもなし。四人は着地地点を見定め、落ちゆく龍菲向けて剣を突き上げた。
だが龍菲は前に半回転し手を差し伸べ、コーヴェッテーの剣を指でつまんで、逆立ちする格好となった。
「なんだと」
ありえない、とコーヴェッテーは驚き、振り払おうとする。だがそれより素早く龍菲は脚を前後に、平らになるほど開きその勢いで後ろ向けに回転し今度はダヂヴァイバーの剣の上に乗った。
剣先は刺さるどころか、靴底に踏まれてしまっていた。それから跳躍し、今度は四人は呆然となって、着地を見届けてしまった。
「こ、これは」
勝てぬ、とレセプタクルは逃げ出す。いかに冷酷な暗殺者といえど恐怖も感じるときは感じるようで、背中を見せて駆け出すが。
その首筋に剣光が走るかと思えば、レセプタクルの首は落ちて地面に転がり胴体はたおれた。
殺したのは仲間のはずのダヂヴァイバーだった。
裏切り者に死を、と燃えるダヂヴァイバーにとって敵前逃亡が許せるはずもない。
「レセプタクル、お前もか」
苦々しく転がる首に呪いを込めて言葉を吐き出す。
龍菲は冷たくそれを見つめている。
「宿業を重ねるのね」

「なにをごちゃごちゃ言っとる！」
数は六人から一気に三人に減った。しかしダヂヴァイバーは懲りない。
「所詮は逃れられぬ運命」
龍菲は目を見開き、だっとダヂヴァイバーとコーヴェッテー、テヴィアルに向かって駆ける。いや駆けるというより裾は地をすべり、まるで飛天のように宙を舞うかと思ってしまうようにふわりと地に脚を浮かせるとも思えるような、体重を感じさせぬ駆け足であった。
「でやあ！」
という激しい掛け声とともに三本の剣が迫る。
きらりと、冷たい月のように光る龍菲の黒く丸い瞳。
「破ッ！」
掛け声一声。もろ手の手刀で三本の剣を弾き、そっぽを向かせる。
なっ、と思った瞬間。
「昇龍六掌（シァンロンリゥチァン）！」
声が聞こえたと思えば、龍菲の手が増えたように見え、掌が三人の胸板に一気に二度続けて打ちつけられ、三人とも血反吐を吐き後ろへ吹き飛んだ。
おそるべし武功と言おうか。龍菲の掛け声は昴の言葉で技の名を叫んだのであろう。吹き飛ばされながら、ダヂヴァイバーはタータナーノ発祥で阿修羅（アスラ）という、手が六本ある魔神を思い出した。
まさに龍菲の手は阿修羅のように増えたようだった。
龍菲が掛け声を発し終えるときには、三人は恐怖と呪いを込めた表情で血を吐き地面に臥していた。
コーヴェッテーにテヴィアルはすでにこと切れている。
ダヂヴァイバーは、地面に臥しながら血を息とともに吐き、ぶるぶると震えている。
「これが昴につたわる武功（ウーコン）のひとつ、天龍八部派（ティエンロンバーブー）なのか。龍菲、恐るべし……」
彼女の技にこれからの栄誉を夢想するばかりで。もし裏切ったら

という脅威も考えず、安易な買い物によって己の命運を閉じることになったことをダヂヴァイバーは呪ったが、時すでに遅し。

「む、む……」

無念、と言い切ることも出来ず、声は途切れて。ダヂヴァイバーはこと切れた。

ぴくりとも動かない、しとめられたようだ。

あっけないものだった。

龍菲は勝利したが、喜びに浸るでもない。自分のしとめた暗殺者のなきがらから目をそむけ、冷たく光る大きな月をしずかに見上げて、己の習得した武功の流派である「天龍八部派」の凄まじさに、自分で恐れているようでもある。

それから、とことこ歩いて王宮に向かう。

暗殺者たちのなきがらは翌朝にソケドキアの見廻り兵が見つけて処分してくれるだろう。

歩きながら月を見上げて、龍菲はつぶやいた。

「請以翼（ツィニィイー）」（翼をください）

第十四章　旧オンガルリにて　？

さてオンガルリ。

いや、旧オンガルリと言おうか。

旧オンガルリは策謀から政変が起こり国防の要ドラゴン騎士団は壊滅、王は行方知れずという事態に陥り、なし崩し的にタールコに膝を屈してその傘下にはいることとなった。

都であったルカベストにはタールコから代官が派遣され、旧オンガルリ地域を治めている。

神美帝はよく考えたもので、代官には真面目で潔癖な人間を遣わし、旧オンガルリの民を慰撫することにつとめさせた。

ことの急変により国がなくなる民の動揺は大きい。もしタールコに占領されればどのような屈辱を受けるのだろうと皆不安だった。

それを鎮め代官イクズスは善政をしき、よく働いたので、民は徐々にタールコに心を許すようになっていた。

これにはマーヴァーリゥ教会の筆頭神父ルドカーンの果たした役割も大きい。

一時、タールコに占領されたことで教会はどうなってしまうのだろうと、破壊の憂き目に遭うのか、と思われたのだが、タールコは信教の自由を認めまたルドカーンに民に心の安らぎを与えるよう要望し、ルドカーンもこれによく応えた。

そしてドラゴン騎士団団長であり大龍公を称されたドラヴリフトの治めていた領土であるヴァラトノには、あのカンニバルカがいる。

突然現れて悪臣イカンシの首をはねた、このことで悪臣仲間たちは萎縮し代官の邪魔をすることなくおとなしい。

旧オンガルリが落ち着き代官イクズスやマーヴァーリュ教会筆頭神父ルドカーンが自分の仕事に専念できるのも、カンニバルカの果たした役割は大きい。

今は山野に雪が降り積もりそれが自然の結界をつくり上げ、外か

ら旧オンガルリに行く、あるいは外に出るのは容易ではない。
都ルカベストも雪化粧し、城や教会や家屋の屋根は雪が乗り白く彩られている。
その雪が降り出す少し前、南のリジェカ公国の革命が旧オンガルリに伝わった。なんとドラゴン騎士団はいまだ健在。大龍公は亡くともそのふたりの子、コヴァクスとニコレットは見事ドラゴン騎士団を再編しリジェカの革命、ドラゴンの夜にて街を一つ得ると勢いに乗って都メガリシに進み、若き王モルテンセンを立てたという。
「さすが小龍公に小龍公女」
「いずれタールコの代官どもを追い払いに南から来てくれるだろう」と、これに旧オンガルリの民が驚かないわけがなく、また喜ばないわけがない。おかげで代官は南からオンガルリの復興の波が起こることを懸念せねばならなかった。
圧政こそないものの、馬鹿馬鹿しいようなことがきっかけで起こった政変のために、かつて敵対していた国の占領下に置かれることに旧オンガルリの民が、旧臣が、兵たちがなんとも思わぬわけもなかった。
機会があれば代官どもを追い払い、いまヴァラトノにいるカレル王子を立ててオンガルリを復活させたかった。

少女がひとり、教会で祈りを捧げている。
背の翼を広げ、右手に剣を掲げ、左手には神書（しんしょ）を携えた白亜の女神像がマーヴァーリュ教会の大聖堂にそびえ立ち、人々は自由に聖堂に来てこの女神像、二ケーレの像に礼拝をすることができた。
世に様々な神があるが、かつてのオンガルリ王国は翼の女神二ケーレを主に信仰していた。それは今も変わらない。
弟子クネクトヴァがカトゥカとともにリジェカにドラゴン騎士団とともにいて、若き王モルテンセンと幼き姫のマイアの近習となってよく仕えている、という話を小耳にはさみ、安堵していたルドカーンは自分の役目に専念し、執務室で執務のためのペンをとってい

る。
「よろしいでしょうか」
と尼僧がひとり、執務室の扉をノックしたので、「はいれ」と言えば尼僧は少女をともなって入ってきた。
「何事かな?」
「はい、このソレアなる少女が、筆頭神父にお会いしたいと申しまして」
「ふむ」
ソレア、その名は知っていた。エルゼヴァスに魔女の疑いがかかったとき、生き血を抜かれたと証言した少女だ。
だがそれはうそで、すべてはイカンシが金と刃をもってソレアにそういううそをつかせたのだ。
後の調査で全容が明らかにされたが、イカンシに脅されてやむなく、ということと、調査が済んだころにはオンガルリはなくタールコとなったこともあって、幸いにもソレアにはお咎めなしで不問とされた。
彼女は今、尼僧の後ろで小さくなって控えている。
(かわいそうに)
おそらく、大きい罪悪感に苛まされていることだろう。
「ソレアよ、そなたのことはよく存じている。……辛かったであろう」
ルドカーンのその言葉を聞き、ソレアの目から大粒の涙がとめどなくこぼれ落ちた。
言葉はなかった。ただ、涙だけが、それまでの辛さを物語っていた。

ヴァラトノにおいても、かつてドラヴリフトの領土であったことからタールコの代官が派遣されていた。
ドラヴリフト率いるドラゴン騎士団の騎士だった老臣、マジャックマジルはこれを丁重に迎え入れ、善政をほどこすよう厚く要望し、

代官もこれにこたえた。
カンニバルカは、日々気の向くままの生活を送っている。
湖に釣りに出かけたり、森へ狩りに出かけたり。
それはまことのん気なものだった。
そして十日に一度、代官の要望でヴァラトノの兵たちや、留守を守っていたドラゴン騎士団の騎士たちの訓練に当たった。
正体不明ではあるが何分かつて王から全てを託された男であり、実際にその軍人としての器は大きく、訓練を受けた兵や騎士たちはその兵法におおいに感心したものだった。
だが不安もある。
ヴァラトノにもリジェカでのドラゴン騎士団のことは伝わっている。
それに対し希望をもつと同時に、まさか春が来て雪が解けたらリジェカにゆけ、と言われるのではないかと。マジャックマジルもそれをいたく心配していた。
それに対しカンニバルカといえば、
「そのときはそのときだ」
と深く考えていないようだった。

第十四章　旧オンガルリにて　？

女王と王子、王女はヴァラトノで静かな生活を送っていた。
女王ヴァハルラは何をするでもなく読書や召使いのメイドたちとともに花づくりにいそしみ、政（まつりごと）や浮き世を忘れようとしていた。
第一王女アーリアと第二王女オラン、末っ子の王子カレルも子どものままに遊ぶ日々を送り、王の子であるという自覚が薄まりつつあった。
それは女王ヴァハルラも同じであった。
タールコからの代官はぞんざいに扱わず王の家族を大事にしているものの、ほぼ放任し。カンニバルカも気に留める様子もない。
が、マジャックマジルらヴァラトノの者たちがそれで満足できるわけもない。
憂いを心にとどめて、やきもきするものを抑えきれないでいる。

女王と王女、王子はドラヴリフトの邸宅でありヴァラトノの庁舎で一時暮らしていたが。
隣に新たな邸（やしき）を建て、そこに住まわせている。
木造二階建て、それなりに広い庭もある。王族が暮らすには質素ではあるが、不自由ない暮らしができるので、不満はなかった。
それこそが、ヴァラトノの人々をやきもきさせているのだが、カレルは居間で姉たちとともに駒盤遊戯（ボードゲーム）を楽しみ、夢中になっている。
「王手！」
「お姉さま、ずるい」
「ずるいもなにも、これは勝負よ」
カレルは長女アーリアとの勝負にやぶれ、眉も口もへの字に曲げて、今にも泣きそうだ。
「男でしょ！　これくらいで泣かないの。次はわたしと勝負よ」
アーリアにかわりオランが駒を並べなおし、

「さあ、先手はどっちにする」
と弟に迫り、オランは「裏」、カレルは「表」と言ってコインを放り投げれば、表が出た。当てた方が先手だ。そのコインは父バゾイィーが刻印されたコインで、バゾイィーの刻印のある方が表とされた。
コインに刻まれた父の顔をすこし哀しげに見つめて、
「じゃあ、いくよ」
とカレルは駒を動かす。
元女王ヴァハルラといえば、作業服をまとって、といっても貴婦人らしいドレス姿だが、多少汚れてもよいドレスを着て、メイドたちとともに花畑を耕し、冬でも花を咲かせるホービラグ（スノードロップ）の種をまいている。
「さあお前たち、美しい白い花を見せておくれ」
楚々と、またしとやかに、頭（こうべ）をたれるホービラグの白い花の咲くのを想像して、ヴァハルラは顔をほころばせる。
こうしてみていると、女王の面影はなく、ただの花が好きな女性であった。
それを遠くから眺めるカンニバルカは、あくびをしてさっさと庁舎兼邸宅にもどり昼寝をし、マジャックマジルはもの哀しげにヴァハルラを見つめている。

「雪解けのころ、じゃな」
マジャックマジルは言う。
「確かに、今決行したところで雪に埋もれてしまうのがおちですな……」
深夜、ある騎士の邸宅で騎士数人が集まり密やかに話し合いがなされていた。
このことは、カンニバルカも代官も知らない。
一人の騎士が哀しそうに言う。
「よもやこのようなときが来るとは、夢にも思いませなんだ」

「言うでない。言ってもはじまらん」
マジャックマジルはその若い騎士の肩をぽんと叩いた。
「その通り。春が来れば……」
「国境を越えて、小龍公と小龍公女にあいまみえるのだ。やはり我らはドラゴン騎士団なのだ」
彼らが話し合っているのは、雪解けとともにリジェカにゆき、ドラゴン騎士団の騎士としてコヴァクスとニコレットに会うことだった。
会って、リジェカ兵を率いオンガルリ復興のための戦いを願い出るのだ。
春の早い到来を願う彼らの目は、まさに夢見て輝いている、とともに悲壮感もあった。
悪臣のためドラゴン騎士団は反逆者とされて壊滅。王は行方知れず。同時にカンニバルカという得体の知れぬ男が来て居座っている。
小龍公コヴァクスと小龍公女ニコレットは国を出て、異国で再起を果たした。それが彼らの希望の光りであるが、その光りはまだまだ小さい。
それを大きくし太陽として天に昇らせるには、春を待つしかない。
オンガルリが冬雪に閉ざされる北方の国であることを、このときはじめて心から恨めしく思ったものだった。
なにせ情報が少ない。
まったくない、というわけではない。
冬には冬の道をどうにか確保し、決死隊とも言える雪山専門の斥候や伝令将校らが雪山を踏み越え報せをもたらすのだが、雪のない時期に比べれば伝達速度も量も少なくなるのはいかんともしがたい。
だが雪以上に彼らを悩ませるのは、タールコ人の存在だった。
この地に来ているのは無論代官だけではない。兵も少なからず来ている。それらに今話していることを知られればただではすまない。
「しかし」
若い騎士は言う。言うなと言われても、漏れるように言葉が突い

て出る。
「女王に王女、王子はもう志を失われたのでしょうか」
マジャックマジルは何も言わなかった。
正直に言えば、志をもってほしい。リジェカで再起を果たしたドラゴン騎士団のことを知っても、がんばってるのですね、の一言で女王はすませてしまった。
もっとも、女王も辛いのであろう。それを忘れるために、花づくりにいそしんでいるようでもある。それに、信用していたイカンシが、その信用を利用していたこともヴァハルラに強い衝撃を与えた。そのせいか、もうまつりごとはこりごりといったところも見受けられる。
それに、か弱い女性と子どもに国を背負わせるのは忍びない、というのも、いつわらざる心境であった。
だから、このたくらみはあくまでも自分たちだけの秘密だった。代官はもちろん、ヴァハルラにもカンニバルカにも相談していない。あくまでも、自分たちで自分たちの責任で遂行するのだ。
オンガルリ復興のために。
ドラゴン騎士団の誇りを賭けて……。

第十五章　征服　？

「うぬ、おのれが獅子王子（アスラーン）か」

ヴーゴスネアの将軍、エーイトシクッスがアスラーン・ムスタファーに槍を繰り出し迫る。

アスラーン・ムスタファー率いるタールコ軍四万余は旧ヴーゴスネアと同じ国名を冠しその旧王都ベラードを都として擁するヴーゴスネアに攻め入り、ベラード郊外にて激しく刃をまじえていた。

「おう、首を差し出しに来るとは殊勝」

アスラーン・ムスタファーも槍を繰り出し、エーイトシクッスと激しく穂先をぶつけ合い、数合をかさねてエーイトシクッスの胸板にアスラーン・ムスタファーの槍がふかぶかと突き刺さった。

「むっ」

うなりを上げるエーイトシクッスは衝撃で後ろへのけぞるように落馬し、ぴくりとも動かなかった。

「さあ次は誰だ、誰かこの獅子王子（アスラーン）の首を獲って手柄にするつわものはおらぬか」

戦場のまっただなかを、槍の穂先を真っ赤に染めたアスラーン・ムスタファーはザッハークを駆り、戦場を駆け巡った。

強敵を求めた。しかし、求めて得られずの悔しさを噛みしめるばかり。

ヴーゴスネアの王トレイヴィンも甲冑を身にまとい戦場に出るには出たか、獅子王子（アスラーン）の奮闘を目の当たりにし、背中と馬の尻を見せて都へととんぼ返りを打ち逃げ出す始末。

そこからヴーゴスネア軍は雪崩を打って算を乱して逃げ出し、戦争にならなず。ひたすら背中を切りつけられてはたおれて、踏み越えられるばかり。

やがてタールコ軍四万余はベラードを包囲した。

その間、ユオを攻めるギィウェンとムハマド率いるタールコ軍も

同じように都を包囲したという報せが飛んでくる。
「新参者のギィウェンに二線級将軍のムハマドに先を越されてはなりませんな」
イムプルーツァは総攻撃による突撃を進言し、アスラーン・ムスタファーも決断した。
かといって先走ることは抑え、まずは降伏の使者を送った。
そうすれば、あっけないもので、白旗を掲げた降伏の使者がやってくるではないか。
降伏の条件は、王トレイヴィンの命を助け、少なくても良いから領土を残して臣下にしてほしい、というものであった。
「今まで散々贅沢三昧をし、まだ足らぬとみえる」
使者に対しトレイヴィンへの痛烈な皮肉を吐き、書状に目を通し、あからさまに舌打ちをし、恥知らずな王だ、と言った。
使者は跪きながら震えっぱなしだ。
「このトレイヴィンとやら、ヴーゴスネアの王になりたかったのだな」
「はい、当初はそのようなことを望んでおりましたが、これからは心を改め、欲を捨て質素な生活を送ると申しております」
嘘だった。トレイヴィンはそんなことを言っていない。使者が皮肉を受けて、悪い印象をぬぐうために思いたったでまかせである。
「……」
しばしアスラーン・ムスタファーは黙して、
「少し考えさせてくれ」
とイムプルーツァら近しい者をつれてその場から離れていった。
イムプルーツァは使者の言うことを信じているのだろうか、とアスラーン・ムスタファーを見つめた。
「嘘だな」
さらりと言った。イムプルーツァは答えを知っているが、あえて問う。
「なぜ嘘だとわかるのです」

「欲を捨てられるなら、とっくに捨てて、国が七つに分かれるようなまねはしないだろう。それを、した。で、いま、恥ずかしくも命乞いをしている。そんな男の言うことなど、信じるに値せぬ」

「左様でございます」

ふっと嬉しそうにイムプルーツァはほほえんだ。それから、どうするのですか、と聞けば。

「オレの考えはこうだ」

イムプルーツァをはじめ近しい者たちはアスラーン・ムスタファーの考えを聞き、一瞬言葉を失った。そんなことを考えていたのか、獅子王子（アスラーン）らしからぬ、と。

だが、シァンドロスとの戦いを経て、アスラーン・ムスタファーの何かが変わったことを感じてやまぬのである。

それに、戦いは勝たねばならぬ。

「異存はありませぬ」

アスラーン・ムスタファーの策に、イムプルーツァら近しい者たちは全面的に賛同した。

降伏を許す、すぐにトレイヴィンに来いと言え、と使者に言えば喜色を浮かべて何度もありがとうございますと言って、使者はベラードへ帰っていった。

やがて豪奢な飾り付けをされた馬車が姿を現した。

それを見てアスラーン・ムスタファーは眉をひそめた。

（やはり贅沢を捨てられぬ男と見える）

陣地の手前で停まり、トレイヴィンがすがたをあらわす。これもまた、王冠こそかぶっていないものの、その身なりは宝石をちりばめた豪奢なものだった。

その豪奢さが心の中にあったわずかばかりの迷いを失せさせた。

さっ、と右手を挙げるや、タールコ兵が一斉に襲い掛かる。

「こ、これは」

降伏を許すのではなかったか、と安心しきっていたトレイヴィン

は恐怖の表情を浮かべてすぐに逃げ出そうとしたが、宝石の重さで思うように動けず。

歩兵に背中を斬りつけられて、ばたりとたおれる。

「降伏を許したのではなかったのか、卑怯、卑怯ではないか」

血とともに呪いの言葉を吐くが、誰も耳を貸さない。

「民が同じ事を言えば、お前はどうした！」

アスラーン・ムスタファーはとどめの一言を放った。トレイヴィンはそれでも、死にたくない、とわめくが。たおれた背中に槍が突き立てられ、ついに心臓までも槍に貫かれてこと切れた。

前のアヅーツは王族以下、是非もないと勇敢に最後まで戦った。だから丁重に葬ったのだが、トレイヴィンにはそれをする気にはなれず、遺体を教会に押し付けあとはまかせたままだった。

これでヴーゴスネアはタールコの領土に組み込まれることとなった。

タールコ軍はベラードに入り、王都に築かれたベラードの王城にアスラーン・ムスタファーは入り、ひれ伏すヴーゴスネア人を前にして征服を宣言したのであった。

それからすぐにトンディスタンブールへの使者を飛ばした。

このヴーゴスネアを治める代官と治安のための軍勢の派遣の要請を父・神美帝ドラグセルクセスに要請するために。

次はエスダとダメドである。

それより北のリジェカからは雪に閉ざされ北上かなわない。

北へ行くにつれて寒さは増し、吐く息も白く、屈強なタールコの勇士も寒さで歯をかちかち鳴らしてしまうのをこらえられなかった。

そのため移動は日の出から日の入りまで、夜間は休息。雪もちらつき、見る風景ところどころ雪化粧していた。

第十五章　征服？

そのころ、ソケドキアのシァンドロスの目は南方エラシアに向けられていた。

西側世界の文明発祥の地であるとされ、また西側世界の入り口とされ豊かな文化をはぐくみ、また国土も実り多い豊かさがあった。

とくにエラシア発祥の神話物語は多くの国と人々、特に西側世界にしたしまれ、時に愛をうたい、時に憎しみを血のように吐き、時に悲劇を涙乾くほど嘆じ、人々の心になにかしらの爪あとや足跡をのこすほどに深いものを感じさせてやまぬのである。

そのエラシアの地を、我が物にするのだ。

エラシアは他と国情がことなり、誰かが統一王となってエラシアを統べるのではなく、それぞれ都市国家（ポリス）が独立し同盟と戦争を繰り返し、そうかと思えば人民の力と技を比べるオリムパスという合同の競技会を開く間は戦争は休むなど、一種の異世界の様相を呈していた。

また人々の意識も独立意識が強い。我らはエラシア人である、というよりもそのポリスの民である、と。

だからエラシアの統一はなされることはなく、時に憎みあい、時に手を結びの集合離散を人類の歴史がはじまってから繰り返していた。

いわばエラシアは、世界の縮図であった。その縮図っぷりが、一種の異世界感を感じさせるのであろう。

タールコもたびたび遠征軍を送り込んで征服をしようとするが、グレースポリスやスパルタンポリスなど諸ポリスはよく戦い、これを退けている。

と、一見そう見えるが、実は諸ポリスはタールコに事実上の降伏のような同盟で滅びをしのぎ、時が来れば降伏を突っぱね反乱を起こす、ということをたびたびしていた。

またタールコ側につくポリスもあり、独立を守ろうとするポリスと戦争をすることも珍しくない。

このエラシアの国情を説くのは、一言で済まずまことにややこしい。

そういったこともあり、神美帝ドラグセルクセスはそんなポリスたちを完全に征服するより、力と慈悲の双方を見せつけ意のままに操り、同盟と戦争を繰り返させていた。

シァンドロスはまずアノレファポリスを滅亡させたわけだが、そのアノレファポリス跡でダヂヴァイバーらの遺骸が発見されたとの報せを受けたとき、

「そうか、死んだか」

の一言で済ませた。

暗殺者がどうなろうと、知ったことではない。担当の将校に処分を任せ、同時に龍菲の強さに内心舌を巻いた。

彼女がいたずらにソケドキアに敵対する心をもつことがなく、安堵する思いだった。

女が見つかったという報せはないから、彼女はうまく隠れているのだろう。無理に見つけようとも思わなかった。

さてエラシアの情勢は、様々あるがまず代表的なグレースポリスとスパルタンポリスのふたつを抑えれば、あとの諸ポリスはおのずと従うであろう、と踏んでいる。

嬉しいのは、グレースポリスとスパルタンポリスは百年前から一切の同盟関係を結ばず、敵対もしないが、お互い不干渉をつらぬいているところである。

百年前、タールコとの戦いの折りに裏工作によって同盟関係にあったグレースポリスとスパルタンポリスは分裂し、エラシア側はひどい敗北をこうむったことがある。

その責任をいまだに互いに押し付け合い、一歩も譲ることがない。

それは神美帝ドラグセルクセスもこころえ、裏で工作しひたすら

引き摺らせて関係の悪化をたもたせている。
　となれば、諸ポリスも様子見のため下手な動きはできず、それぞれが牽制し合っているこう着状態となる。
　それに、ソケドキアとスパルタンポリスは敵対関係にあり、シァンドロスは初陣でも戦っている。
　やるならまず、スパルタンポリスであった。
　が、ソケドキアとて新興国とてしの弱みがある。アノレファポリスを滅ぼしたが、いまだ力強からず、外に向かって必要以上の攻撃が下手にできない、ということだ。
　だからこそ、タールコは後顧の憂いなく旧ヴーゴスネアの五ヵ国を攻めることが出来ると言える。
　さてどうスパルタンポリスを攻略するか……。

　海に向かって楓の葉のように尖った曲線を描く半島であるエラシアには、大小さまざまな都市国家（ポリス）がある。
　都市国家ひとつひとつは、人口も少なく、兵力もない。だからそれぞれに独自に同盟関係を結び、互いの不足を補い合っている。
　エラシアは大きく分けて、スパルタンポリス派とグレース派に分かれているといってもいい。
　だがどこにも属さず、属せないで独立独歩の都市国家もある。アノレファポリスはどこにも属せなかった都市国家だった。
　なにせすぐ北にソケドキアが興り、その庇護を受けようと、もとい傘下に入らざるを得なかった。
　だから姫を要求されこれを拒めずに嫁に出すことになったのだが、その姫が王と第二王子を殺害し自分も自害し果てるという事件が起こってしまったために、攻め滅ぼされるという悲惨な滅亡を遂げてしまった。
　そう、弱い都市国家がどこか強いところと同盟を結ぼうと思えば、なにかしらの貢物が必要とされる。その貢物を納められないために、納めても納得してもらえないために、どこからも庇護を受けられず、

いつ攻め滅ぼされるかわからない哀れな弱小都市国家もいくらかある。

シァンドロスが目をつけたのは、そんな弱小都市国家だった。それらをまるごと、ソケドキアの傘下に編入させてやるのだ。

各弱小都市国家に使者を送り、庇護とひきかえにソケドキアの傘下に入ることを要求する。一緒にスパルタンポリスにも、使者を送った。

スパルタンポリスに向かったのは、シァンドロスを暗殺しようとしている、という疑惑のあったダジダロスという男だった。この男はかつてフィロウリョウの側室、クレオに仕えていたため、暗殺計画を立てているという噂を立てられていた。

「まさか、そんな。クレオ様、ああ、いや、クレオに仕えてたといってもそれだけで、暗殺などそんな大それたこと……」

と本人は否定しているが、疑惑は晴れず。どうしたものかと悩んでいた。そんなときに、スパルタンポリスへの使者であるという。

「疑いを晴らしたければ、スパルタンポリスにゆけ」

その一言で、ゆかざるを得なかった。途中逃亡しようにも、屈強な兵士がついているので逃げることもかなわない。

心の中にも寒風を吹かせながら、己に降りかかる命運を歎きながらスパルタンポリスのレオニゲル王に謁見し、ソケドキアの傘下におさまることを訴えた。

そうすればやはり、レオニゲルは激怒し腰に佩く剣を抜き、剣先をダジダロスに向けた。

「ソケドキアからといえど、最低限の礼儀として使者であるうぬに会ってやったが、そのような無礼を言うのか！」

シァンドロスに苦渋を舐めさせられているレオニゲルは髪も逆立ち髭も槍の穂先のように堅くなったかと思えるほどに烈火のごとく怒ったのは言うまでもない。

「どうかお許しを」

案の定というか、勇猛ながら短気であるとされるレオニゲルの怒

りにふれてダジダロスの身体中は震えていた。
ダジダロスは知らぬが、レオニゲルは以前にも、アノレファポリスからの使者を殺害している。
その二の舞か、と思われたが。
「これがスパルタンポリスの流儀だッ！」
剣光閃くや、ダジダロスの首が地面に落ちるとともに血の池ができ、胴体はその血の池に臥した。
哀れ、やはりアノレファポリスの使者の二の舞となった。

第十五章　征服？

「シァンドロスの若造めが、どこまでもわしをなめおる。その忌々しい首をソケドキア兵に突き返し、追い返せ！」

首を突き返されたソケドキア兵は刃を振りかざされ、ほうほうの体でソケドキアに帰り、そのことをシァンドロスに報告した。

報せを受けて、シァンドロスは不敵な笑みを浮かべた。

「そうか」

そう一言うと、表情を崩し、

「怒れ、怒れ、もっと怒れ！　あっはははは！」

不敵な笑みから破顔一笑。

殺されたのは反逆の疑いのある者なので、痛くもかゆくもない。なにより、スパルタンポリス王レオニゲルを怒らせるのが本来の目的だった。

目的を果たし、シァンドロスは痛快な思いだった。

それから、様々な弱小都市国家に遣わした使者が帰ってくる。全ての都市国家が了としたわけではなく、使者を蹴り出して追い返した都市国家もあった。

それでも、いくらかの都市国家が少ないながらも金銀財宝に食料、あるいは鎧兜に剣などの貢物を使者に託して、傘下に入ることを誓った。

貢物に贅沢は言わない。傘下におさまればそれでよし。もし裏切れば、アノレファポリス二の舞である。

さきのタールコのアスラーン・ムスタファーとの戦いはエラシアにも伝えられている。獅子王子（アスラーン）と互角に戦うソケドキア神雕王シァンドロスなら頼りにしてもいいかもしれない、ようやく身を寄せられる大樹を見つけた思いであろう望みを、都市国家の王たちは抱いていた。

もちろん、いざと言うときの兵力の提供も約束させている。

「アスラーン・ムスタファーがソケドキアに来てくれたのは、まこと幸運なことであった」

広い展望が、シァンドロスの脳裏にひろがっていた。

その中に、怒り狂ったレオニゲルがスパルタンポリスやその同盟都市国家の兵を率いて攻めてくる、というのもあった。

南方に位置し、冬寒くとも雪は浅い。

というのは生活をするのにいいことかもしれない、しかしそれがために冬でも戦争が起こるという皮肉なこともあった。

まさに、スパルタンポリスは冬の寒風を吹き飛ばす勢いで同盟都市国家の兵力も得て、ソケドキアに迫っているという。

その数は一万二千という。

都市国家のみでは養える兵は少ないのだが、傭兵も相当雇い入れることで兵力の補充をしていた。

それらがビーニクという、国境に近い地に集結し、陣地をしき、ソケドキアに向かい威嚇の陣形を組んでいるという報せが飛び込んできたのは十二月に入ってのことだった。

ビーニクから東に進めばアノレファポリス跡である。

思えばソケドキアに一番近いがために、結果として滅亡を招いたのはむごいといえばむごい。

だがそんなこと気にしないレオニゲルにすれば、その気になればそれなりの兵力でソケドキアと真っ向から戦えるのだ、ということを知らしめるのと、シァンドロスにやられた雪辱を果たすための戦争をすることに夢中だった。

ソケドキアとの戦いに敗れ将軍スリハンドレトを討たれた屈辱も、月日とともに薄まっていたのを、わざわざシァンドロスはぶり返させたのである。

レオニゲルは叫んだ。

「この戦いにおいてソケドキアの神雕王などと抜かすシァンドロスの若造の首根っこをもぎとり、軍神スレーアの生贄としてやるのだ

！」

その怒号にスパルタンポリスや同盟都市国家、傭兵たちは、

「応」

と同じく怒号をもって応えた。

心情的にスパルタンポリス側にある彼らもまた、ソケドキアのシァンドロスによい印象をもっているわけがなく、いつかは雌雄を決するものだという思いを胸に抱いていた。

スパルタンポリスは小さながらも戦争の強さをとことんまでに追求した戦闘都市国家といってもよかった。

子どもは七つになると兵役に出されて、訓練を受ける。その訓練も過酷なもので、死ぬ者も多かった。

そのため古来から子作りを奨励し、子の多い家庭には優遇策がとられ。また家庭の方でも、優遇策と賞賛を得るために妻は夫のみならず、夫より明らかに優れていると見えた男の子どもも生んだ。

家庭などかたちだけのもので、自分の父親が実は誰なのかわからぬ子どもも多い。が、それも戦争における兵力の拡充のためであった。

興亡を繰り広げる都市国家群の中にあって、スパルタンポリスが生き残るために選んだ手段がそれだった。

それは功を奏し、興亡の歴史の中での生き残りを果たせたのだが。はたして、このたびばかりはどうなるのであろうか。

ビーニクにてスパルタンポリスの兵力が結集している、という報せはすぐにシァンドロスにもたらされて、迎撃のためすぐさま一万の兵力が結集した。

それはわずか一日でなされ、迅速を尊ぶシァンドロスの兵法はアスラーン・ムスタファーがイスカンダテンと評した通りのものだった。

シァンドロスは叫んだ。

「無謀にもスパルタンポリスは昔日の敗北を忘れ我らに刃向かった。

タールコ同様、我らの力を思い知らせてやれ！」

「応！」

力強い返事がかえってくる。

シァンドロスは昔からソケドキアの騎士や兵の間では人気が高かったのだが、その人気はさきのタールコとの戦いで不動のものとなりつつあった。

さて戦い方であるが、シァンドロスに策があり、その策の戦法で戦うこととなった。

ビーニクは一万二千の兵力を結集させられるだけあり平原地帯で、戦争に適した地形ではある。ガオゴズィラのような凸凹の丘陵もない。

スパルタンポリスは真っ向からの勝負を仕掛けるつもりだった。グレースなど他の都市国家は知らず、スパルタンポリスは作戦らしい作戦など立てぬ。

常に真正面から敵を叩き潰す戦法をとってきた。それはなにがあっても変えない。スパルタンポリスの戦争へのこだわりであった。

それに数もこちらが二千多い。自分たちの力量を信じて疑わぬ自信と数の有利と戦士としての自負が、戦法をとることを許さなかった。

それはさきのアスラーン・ムスタファーと同じかもしれない。違うとすれば、アスラーン・ムスタファーが十八の少年であったのに対し、レオニゲルは四十を超えた経験豊富な壮年であり、戦争王であることだ。

第十五章　征服　？

ビーニクの地にソケドキア軍が向かっているという報せを受け、レオニゲルはこの地でソケドキア軍とぶつかることにした。

剣を握りしめ、馬上に堂々とたたずむレオニゲルは赤いマントをはためかせ王らしき威厳を放っていた。

向こうから馬蹄に軍靴響かせ、雕（くまたか）の旗をはためかせるソケドキア軍一万があらわれる。

レオニゲルは昔日の屈辱を思い起こし、唇を血が滲むほど噛むと、

「かかれ！」

と号令をくだした。

ソケドキア軍一万は騎馬隊を先頭にひと塊となって、スパルタンポリス軍に突っ込んでゆく。

それは怒涛のごとき勢いで、止まりそうになかった。それを、レオニゲルは止めようとする。

双方互いに赤い口を大開けにして雄叫び上げて、激突する。

かと思われたが。

突然ソケドキア軍は二手に分かれて左右に広く展開した。

「や、や」

シァンドロスのいるのは、右か左か。

敵方の予想もせぬ動きに呆気にとられたスパルタンポリスの兵たちは、一瞬だけ動きを止めた。

「なにをしている！　ならば我らも二手に分かれてぶつかればよいではないか！」

兵たちを叱咤し、レオニゲルはまず相手の右翼を攻めた。

が、そこからスパルタンポリス軍のまとまりにほつれが生じる。

一方は八千ほどがソケドキアの右翼を追いかけ、のこり四千が左翼を追った。

丁度五千ずつに分かれたソケドキア軍、左翼側は相手がこっちよ

り少ないと見ると方向転換し、四千のスパルタンポリス軍に向かって真っ向からぶつかった。

その左翼にこそ、シァンドロスがいた。

「軍神スレーアは我らに味方したぞ！」

左翼のシァンドロス、すなわち左翼こそが本隊であり、相手は咄嗟の分裂でこっちよりも数が千ほど少ない真っ向からぶつかれば押せる。

シァンドロスに側近のペーハスティルオーン、イギィプトマイオスは剣を振るい自軍を叱咤激励し、スパルタンポリス軍を押しに押した。

真っ向勝負だと思い切っていたスパルタンポリス軍はまず咄嗟に分かれたことで兵力に格差が生じ、また予想外の移動をするため隊列もととのっていない。

最初から二手に分かれる段取りであったソケドキア軍は、シァンドロスのいる左翼がスパルタンポリスの右翼四千を攻め立て。

レオニゲル率いる八千のスパルタンポリス軍から、ガッリアスネス率いるソケドキア軍五千は逃げた。数の上では不利。真っ向からぶつかれば押される。まだ距離のあるうちに、くるりと回れ右して全速力で逃げて、距離を広げにかかる。

「敵は逃げるぞ、追え、追え！」

目の前の敵を放っておけないレオニゲルは、追いかける先にシァンドロスがいるかどかなどもう頭の中から消えて、本能で敵を追った。

その一方で、スパルタンポリス軍右翼四千はソケドキア軍左翼五千に押されていた。

「これはいけるぞ、一気に攻め立てろ！」

シァンドロスは叫んだ。ソケドキア軍は言われるまでもなく、押して押して、押しまくった。

まとまらぬスパルタンポリス軍は勢いに乗るソケドキア軍をいかんともしがたく、左翼を指揮している将軍フラクンミラとザッスク

ナダイは、
「もうだめだ、退け、退け」
と退却の号令をくだしたため総崩れとなり、軍の体をなさずソケドキア軍によって散り散りにされるがままだった。
逃げながらも後方をよく見ていたガッリアスネスはシァンドロスの本隊がスパルタンポリス軍の右翼を打ち負かすのを見ると、
「反転！　本隊と我らで敵を挟撃するぞ！」
と逃走から一転、反転しレオニゲル率いるスパルタンポリス軍向かって突っ込んだ。
後ろで何が起こったかは、レオニゲルもようやく知った。あろうことか、右翼は散り散りの有様にされて、それを打ち負かしたもう一方のソケドキア軍左翼が後ろから迫ってくる。
挟み撃ちだ。
スパルタンポリス軍は八千に対し、前後から迫るソケドキア軍は合わせて一万。ということに、いまになって気付くレオニゲル。
迂闊も迂闊であった。下手に兵力を裂かず、ひと塊になってどっちかを攻め立てれば勝機をつかめたものを、相手の動きについ合わせてしまったために、相手に勝機をゆずるという失態をおかしてしまった。
それに動揺し、まず忠誠心の薄い傭兵たちが逃げ出す。
神雕王シァンドロスの戦いぶりを目の当たりにし、勝ち目なしと早めの逃げを決め込んだ。
雪崩れるように兵力を削られたスパルタンポリス軍はなすすべなく、ソケドキア軍の挟み撃ちに遭い、されるままだった。
刃ひらめくたびにスパルタンポリスの兵はばたばたおれ平原を屍でうめようとし、血の川が、池がにわかにところどころにつくられてそれに足を滑らせ転倒したところを、敵の騎馬の馬蹄に踏まれるなど。
散々な負けっぷりをスパルタンポリスは見せていた。
レオニゲルはぎりぎり歯ぎしりしながらこの戦況を睨みつけてい

た。

またもシァンドロスにやられた。

だがこうなってしまったものは仕方がない。

「ええ、退け、退け！」

やむなく退却の号令をくだし、レオニゲルも逃げる。

だが行く手を阻むソケドキア軍。決して逃がさぬと、先回りしては、刃を繰り出す。

さきの戦いではアスラーン・ムスタファーを逃しているが、二度も続けて大将を逃がすなどできるわけもない。今度はきちっと、大将首を獲る。

「レオニゲル、うぬも音に聞こえしスパルタンポリスの王ならば潔く雄敵と雌雄を決さんものか」

迫るのはガッリアスネスだった。

剣を振るい愛馬を鞭うち、馬蹄と怒号轟かせて戦場を駆け巡る。

「ほざけ、貴様のような若造など相手にできるか」

「言うわ。地に落ちたり、老獪（ろうかい）の王」

レオニゲルは愛馬を鞭打ち、スパルタンポリスの兵もソケドキアの兵もお構いなく馬脚に駆けて乱戦から抜け出そうとする。

どのような恥を忍んでも生き残る、これがレオニゲルの信条であった。

そんな逃亡者をソケドキア軍はうまく包囲した。この戦いで、絶対に大将首を獲る必要がある。傘下におさまった都市国家の忠誠をかたいものにするためにも、やはり実績がいる。その実績がスパルタンポリスの王、レオニゲルの首ならば、ソケドキアの強さに信服せざるをえず、そうそう裏切ることもなく、貢物も納得しておさめ、いざというときの兵力も提供しやすくなろう。

「逃げられぬぞ、観念せい！」

シァンドロスはレオニゲルをみとめるとゴッズを飛ばし、臣下の将軍たちを率い怒涛のごとく迫ってくる。

バルバロネもこの乱戦でよく戦う。露払いと、他の騎士や兵とと

もにシァンドロスの前で敵兵を薙ぎ倒し、道を開こうとする。
「バルバロネ！　夜もあるぞ、ここで消耗するなよ！」
「ここで消耗しないと、際限がなくなるんです！」
「言うわ」
乱戦にもかまわず、ふたりは馬鹿なことを言いあい破顔一笑する。
それがレオニゲルの耳に入り、彼の屈辱なみなみならぬものがあった。首を獲られようかという時、首を獲ろうとする者が男女の馬鹿話などしようものなら、誰しもが胸をえぐられる屈辱を感じざるを得ないであろう。
屈辱に震え、落ち着きがなくなる。となれば、うまく馬も操れない。
馬は戦場の轟きにおどろき、にわかに前脚を上げた。
「わっ」
とレオニゲルは振り落とされて、落馬。そこをイギィプトマイオスの剣光一閃。
剣が兜に当たり、兜が飛ばされる。レオニゲルは肘も膝も地につけて、慌てて起き上がろうとする。
「ちぇ」
イギィプトマイオスはしとめそこねて舌打ちし、引き返そうとする。というときには、ペーハスティルオーンが槍でレオニゲルの胸板を貫いていた。
心臓を直撃されて、レオニゲルは断末魔の叫びをあげてたおれて、こと切れた。
「スパルタンポリスの王レオニゲルは、このペーハスティルオーンが討ち取った！」
誇らしげにペーハスティルオーンは叫んだ。同時にスパルタンポリス軍は総崩れとなった。大将が討たれれば、もう戦争にならない。
あとはもう、ひび割れた岩石が崩れるのを槌でたたくような手ごたえのなさだった。

第十五章　征服　？

アスラーン・ムスタファーのもとに、ソケドキアとスパルタンポリスの戦いの報せが届く。
タールコ軍四万余はエスダの都ミシォアジーを包囲し、降伏の使者を送っていたところだ。
「なに……」
ソケドキアはスパルタンポリスの王レオニゲルを討ち、スパルタンポリスに着いていた都市国家の半分を傘下におさめ。
残りは互いに手を取り合い、ソケドキアと徹底抗戦の構えを見せているという。イムプルーツァも感心した様子で報せを聞いた。
「我らが北を目指すのと同じく、神雕王は南を目指しているのですな」
「うむ……」
しかしよくやったものだ。
自分たちが北へゆくとき、シァンドロスは南に目を向けたのだから。今から引き返してソケドキアに行けば、落せるかもしれない。
だが、その代わり、旧ヴーゴスネア五ヵ国征服は半端な結果になりかねない。ソケドキアが落ちても、味方の都市国家に身を寄せドラゴン騎士団のように再起をすることも考えられる。
ならば五ヵ国を落とし、その五ヵ国の国力を得たうえで、ソケドキア・シァンドロスと対峙する方がよい。
そう考えた末、五ヵ国をとることにした。
これにより、年が明けたときには、版図は大きく塗り替えられるであろう。
エスダはタールコの進軍に対し迎撃の軍勢をおくらず、都に兵力を結集させて閉じこもる戦法をとっていた。
さきの戦いで降伏したトレイヴィンを討ったことで、エーダヴは降伏に応じようとはしなかったのだ。

ちなみに使者を送るのは二度目だ。使者はエーダヴに語った。
「我らが来るのは三度まで。その三度目までに降伏か否かを決められよ」
その二度目の降伏勧告にも、エーダヴは応じなかった。かといって、徹底抗戦するようでもなく、王城の中で震え使者の前におびえた顔をごまかして笑って会うのが関の山であった。
そこへ、ようやくユオを降伏させたギィウェンとムハマド率いる別働隊が合流し、タールコは十万近い兵力となった。
さてなかなか降伏しないエーダヴをどうやって降伏する気にさせるかという軍議が開かれた。
「こちらは十万近い兵力を有しております。ここは一気に都に攻め入り、いっそ都を焼け野原にしてしまえばよろしいかと」
と言うのはもとリジェカ人のギィウェンだった。功を急ぐムハマドも同意見だった。アスラーン・ムスタファーは反対した。
「多くの民を巻き添えにして、どうしてエスダの国力を得られる。我らの目的は焼け野原をつくることではない、タールコの国力を増し版図を広げることだ」
「しかし、降伏せねばやむをえぬでしょう」
ギィウェンも武人である。獅子王子（アスラーン）の言うことに一応の納得を示すものの、突撃戦法を譲らない。
だがアスラーン・ムスタファーは首を縦に振らない。
むしろ、他の考えが浮かんだようだ。
「民を味方につける。それでゆこう。それでも駄目であれば、そなたの言うとおりにしよう」
軍議が終了するとともに、タールコ軍の陣地から数十人の密使がミシォアジーに向かい、街の中に忍び込んでゆく。
包囲するタールコ軍は動かず、槍や軍旗、ことにアスラーン・ムスタファーの象徴である獅子の旗をたなびかせて林立させ、その脅威を見せつけていた。
己の象徴の獅子の旗を見つめるアスラーン・ムスタファーの脳裏

に、ドラゴン騎士団の存在があった。
翌日、陽が落ちるとともに、ミショアジーの街から、
「王を倒せ！」
「新王を迎え入れよ！」
といった叫び声が轟く。
そう、民衆が革命を起こしたのである。旧ヴーゴスネアは戦乱多く、民の心は荒むとともに、新たな世の中を求める気運も高かった。
それを引き起こしたのは、タールコだった。密使は王にではなく、街の人々に革命を呼びかけたのだ。
いわく、アスラーン・ムスタファーおよび神美帝ドラグセルクセスはエーダヴのような戦争を好む独裁者にあらず慈悲深き王に王子なり、傘下に入れば、人々の生活を保障し、新たな世を生むことを約束しよう、と。
いい加減、貴族たちの王権の奪い合いにうんざりしていた民衆は、なんでもいいから世の中に変わってほしい一心で、タールコを後ろ盾にして蜂起したのだ。
これは、アスラーン・ムスタファーがドラゴン騎士団を手本としてのことだった。
「民衆が蜂起しました！」
との報せを受け、
「王城へゆくぞ！」
とアスラーン・ムスタファーは自分の直属の軍勢のみを率いて、民衆とともに王城を目指した。
途中で略奪や暴行をする者はなく、またたく間にアスラーン・ムスタファーの軍勢に民衆は王城を取り囲んだ。その数は合わせて二、三万はくだらぬであろうか。
エスダの王エーダヴは民衆がタールコに組し王城を取り囲むのが信じられず、悪夢に投げ込まれた思いで衛兵に囲まれて震えていた。
もはや逃げられぬ。衛兵とて人の子、はっきりと負けの見えた戦いであるが、エーダヴはさて命を賭けても守り抜く甲斐のある王か

どうか。

それは、今の様子を見ていればよくわかる。

「ゆこう」

誰かがそう言うと、衛兵たちはさっと王から離れていった。どこへゆく、と王が言っても聞く耳もない。

やがて、轟く喚声が王城の中でこだました。タールコの軍勢や民衆、さらに兵士や衛兵までもが反旗をひるがえして、王城の門を開け放ってしまったのだ。

王城に喚声と悲鳴が響き、エーダヴは駆けて難から逃れようとするが、逃れられるものではなかった。自らの足で王城を駆けるアスラーン・ムスタファーは先頭にたち、幸運にもエーダヴを見つけこれに自ら立ち向かった。

エーダヴは、剣をたずさえきりりと背筋も伸びた、凛とした獅子（アス）王子（ラーン）の姿や立ち居振る舞いに、心を砕かれたようで、立ちすくみ動けず。

気がつけば、剣を突きつけられていた。

「降伏か、死か、いずれか選ぶがよい」

それはまさに王子としての命令であった。

逆らえぬエーダヴは、へなへなとへたり込み、

「こ、降伏を」

と言うのがやっとであった。

第十五章　征服？

降伏したエーダヴは教会に身柄を預けられて、兵士の監視のもと出家し、民衆の自由と己の命と引き換えに、己の権力と自由を手放し、長い余生を神弟子として過ごさねばならなかった。

民衆は、かつて憎んでいたタールコの軍勢をいまは歓喜して迎え入れ、その晩は無礼講の乱痴気騒ぎに明け暮れた。

兵士たちは女をもとめ、女もこれに快く応え、酒樽はあっという間に空になり、兵糧も快く民衆に分け与えられた。

与えた分は後方支援をする征服地がおぎなってくれた。

アスラーン・ムスタファーは王城ではなく、ミシォアジーにある広場でいそぎつくられた高台に上りエスマーイールに傘を差させながら、民衆に向かい、征服という言葉を使わず、タールコ治世による新たな世の始まりを宣言するのであった。

（なんというご立派な）

エスマーイールは乙女の全てを捧げた男性がアスラーン・ムスタファーであることが今も信じられず夢の中にいるようで、改めて見るその男ぶりに身も心も震えるのをこらえて、じっと傘を差しながら、アスラーン・ムスタファーを見つめていた。

側近のイムプルーツァにその隣で傘を差すパルヴィーン、その他ギィウェンにムハマドといった近しい者らもともに高台にあり、民衆に向かい堂々と宣言する獅子王子（アスラーン）に心から信服していた。

「そなたたちは王の奴隷ではない。また我らもそなたたち民衆に奴隷であることを求めぬ。タールコの民であることを望む」

民衆はわっと喚声を轟かせ、

「タールコ万歳！」

「アスラーン・ムスタファー万歳！」

などなど、万歳の声を繰り返し繰り返し、轟かせた。

つい先日までタールコは憎むべき敵であった。しかし、実際はど

うであったろう。王は民のためになにかしてくれただろうか。むしろ己の権力欲のおもむくままに、戦争を繰り返し民はなにもかも取り上げられて、朽ち果ててゆくのみではなかったか。

実際人心や国土がいかに荒廃してゆこうとも、王や貴族は目を背け自分たちの世界に閉じこもり、際限のない欲求の奴隷となって民を奴隷のように扱っていたではないか。

「欲求の奴隷となり、奴隷として奴隷を求める。エーダヴはまさにそんな王であった」

アスラーン・ムスタファーがそうエーダヴを糾弾しても反論はなく、そうだ、そうだ、といった叫びが響いた。

「だが我は獅子王子（アスラーン）である。奴隷ではない。王子が求めるのは、民である。新たな世の始まりである」

新たな世の始まり。

旧エスダの民衆はその言葉に酔いしれ歓喜と歓声尽きることはなかった。

エスダを攻略し、続くはダメドである。

ダメドの王、コントレはタールコ軍が旧ヴーゴスネア四ヵ国を征服し怒涛の勢いで迫っているという報せを受け、ひどく動揺していた。

「もうエスダが落ち、アスラーン・ムスタファーはダメドを目指しているというのか」

「はっ。すでに国境を越え王都フォルネまでまっしぐらに突き進んでおり、止めようもない有様でございます」

「な、なんとかならぬのか」

「……」

王のなんとかならぬのかという声に応える臣下の声はなかった。

皆、勝てないと思っていた。とともに、いかに生き延びるかを今から考えていた。

同盟関係にあったリジェカはドラゴン騎士団と民衆による革命が

あり。ポレアスは今もフィウメに監禁されているというではないか。
エスダの王エーダヴも教会に押し込められ無理矢理出家させられて、監禁同様であるという。
自分も同じ道を歩むのか、という恐怖と絶望が胸を駆けめぐった。
降伏か、いや、全てを奪われて監禁をされるのは死にもひとしい。
ならば、とる道はただ一つ。
「逃げるぞ、支度をせい」
口から飛び出す言葉。これに異を唱える臣下はいない。王が逃げると言えば、自分たちも安心して心置きなく逃げられるというものだ。
早速王や臣下らは逃げ支度をはじめ、金銀宝石を馬車にありったけ放り込んだものだった。
それをさせられる従者は眉をしかめ、自分のかつぐ宝石箱をながめていた。
（国を捨てる王に馬鹿正直にどこまでも仕えろというのか）
財産はある。その財産さえあれば、どこにゆこうともどうにでもなる、と思っているようだ。
なにより、荷運びをさせられる自分たちの報酬は少ない。逃げたとなると、収入のあてがないということになり財産は減る一方。となれば、報酬はもらえなくなるのではないか。
（馬鹿馬鹿しい）
タールコ軍が来るということで、フォルネは混乱していた。軍も浮き足だち、震えながらタールコ軍が来るのを待つという有様。
それを見て、誰かが言った。
「よう、もうこんな王に仕えるのはやめようじゃないか。それこそオレたちが財産もらって、逃げようぜ」
誰かのそんな言葉をきっかけに、そうだ、そうだ、の声があがり。
途端に暴動が起こった。
王も軍も無力、ということを知った従者に召使いたち、それに一部の兵士が、突然貴族たちを襲い財産を奪って逃げ出す。

「うぬら刃向かうのか！」
「ああ、刃向かうのさ！」
止める者がいるにはいるが、いかんせん不満がたまりにたまった暴徒を止めるにはあまりにも数が少なく。あっというまに押し倒されて、踏みつけにされ、されるがままだった。
それは貴族も同じだった。
無残であった。
振るえぬ剣をやみくもに振り回し、暴徒から財産を守ろうとしたが空振りするばかりの剣でなにができるだろう。
「やめろ、やめろ」
と涙声で訴えるも聞き届けられず、目の前でせっかく今まで集めた金銀財宝を奪われてゆくばかり。
その貴族に多くの暴徒がもろ手を伸ばし赤い口を開けて迫り、身体中を掴まれて殴る蹴るのされるがままとなり、幾多の足に踏みつけられて血反吐を吐きぴくりとも動かなくなった。
「何事だ！」
王コントレはさすがに衛兵に守られ暴徒は近寄りがたい。だが取り囲まれて身動きもならない。
王城に秩序はなかった。あるのは不満と欲求の爆発だった。
「ええい、突っ切れ、阻む者は馬車で轢き殺せ！」
号令をくだし御者は馬に鞭打ち、群集に馬車を突っ込ませる。衛兵も騎乗で着いてゆき、群集を馬脚にかけてゆくが、いかんせん数は圧倒的に群集が多いのだ。
容赦なく群集を跳ね飛ばしていた馬車も人のしかばねが輪止めになり、うごけなくなり。また衛兵の騎馬もいかに馬脚をもってしても群集すべてを蹴り飛ばすこともできず、取り囲まれてうごけなくなり。
これに飛びつく者があり、馬ごと転倒し、されるがままだった。
ポレアスの馬車にも群集はつめかけ、王は無様にも群集に引き摺り下ろされて、幾多の手と足にされるがままだった。

さわぎを聞きつけた街の人々も、王城が悲惨なことになっていることを知り取り囲んで成り行きを見守っていたが、そこから数百名といわぬ人々が暴徒となって門をこじあけ、どさくさにまぎれて王城の財産をかすめとってゆく。

ダメドの王都フォルネは無政府状態となり、雪の舞う中寒風を吹き飛ばすかのような群集の怒りの略奪は王城から王都フォルネ全体に及ぶにいたった。

王コントレは、群集に踏みつけにされて蹴り殺され。しかばねは城外に担ぎ出されて、城の門の前で地面に叩きつけられて。

群集となった民衆はいかりのままに、コントレのしかばねに石を投げつけていた。

アスラーン・ムスタファー率いるタールコ軍十万近くがフォルネに着いたとき、そこはまこと王都かと疑うほどに荒れ果てていた。

「暴動が起こったというのはまことだったな」

斥候からの報せは受けていたが、実際目にしてみればそれは悲惨の一言だった。王や貴族のしかばねが王城の前にならべられて、石を好き放題に投げつけられて無残な有様を見せつけている。

「これは捨て置けぬ。イムプルーツァ、ギィウェン、ムハマド、すぐに兵を率い治安の回復に当たれ！」

「承知！」

タールコ軍がフォルネに入るやさすがに暴動は治まったが、完全に治め切るためにはくすぶる火種を始末せねばならぬ。

タールコの兵はいまだに暴れる暴徒を見つけ次第拘束し、街の広場にあつめた。

アスラーン・ムスタファーは王城に入ったが、そこは人の欲求の爆発したあとがのこされて、人や馬のしかばねや武具に、わずかばかりの金貨などがところどころに散らばっていた。

これもすぐに兵に命じて片付けをさせたが、口元を引き締め、不快な思いで城に入る。こんなことは、初めてのことだった。

「ともあれ、これを父上に知らせねばなるまい。すぐに使者を送るように」

従者に言うと、アスラーン・ムスタファーは征服の宣言の前に王都の大掃除の指揮をとらねばならなかった。

第十五章　征服？

まさか自分たちが来る前に暴動が起きて、戦わずして城に入れるなどアスラーン・ムスタファーでも夢にも思わなかった。

最後の五ヵ国目が、これか。

どことなく、納得をしきれぬ征服事業の終わりであった。それが成功であっても。

「この混乱を招き寄せたのも、タールコの強さと偉大さがあったればこそ、タールコに恐れをなした人々が恐慌し、冷静を欠いたからこそ起こったことではありませぬか」

エスマーイールが憮然とするアスラーン・ムスタファーに語った。彼女の言葉を耳にし、一瞬、戸惑いを見せるアスラーン・ムスタファーであったが、考えてみれば確かにそのとおりである。

おかげでタールコは戦力を消耗せずに五ヵ国目に足を踏み入れることができたのではないか。

「そなたの言うとおりだな。おかげで慰めを得た。ありがとう」

「いえ、そんな……」

アスラーン・ムスタファーは優しい笑顔でエスマーイールに礼を言う。

彼女は、獅子王子（アスラーン）に対し出すぎた真似をしたかと恐縮したが、礼が返ってきたので、恥ずかしげにうつむき、精一杯の笑顔をしつつ、頬を紅に染めるのであった。

その彼女の照れもすぐに鎮まる。

視界に飛び込むものが、照れを感じるゆとりを奪った。

（オレは、いや、タールコはそこまで畏れられていたのか）

強きもの、偉大なるものの前に、人がどう変わるのか。それは時として悪しき方向へと変えてしまいかねないことを痛感しながら、アスラーン・ムスタファーは征服事業の締めくくりに入らねばならなかった。

そのために、まずは大掃除。治安の回復であった。荒れた王都で勝利の、征服の宣言をしてなんになろう。

我らは勝ちたり。

新たな地を征服したり。

その勝ち鬨と歓声があがったのは、王都フォルネに入って三日後のことであった。

そんな人の営みなど知らず、空がしんしんと雪を降らせながら、日々は今年の終わりに向かい粛々と進んでゆく。

一方、ソケドキアのシァンドロスはビーニクの戦いにおいてスパルタンポリス王レオニゲルを討ち取り、その強さを見せつけるとともに、名声も一気に上がった。

ことにスパルタンポリスと関係がこう着状態にあったグレースポリスとその同盟都市国家は、今後シァンドロスといかなる関係にあるか議論がなされた。

「シァンドロスは敵に非情であっても味方になる者には慈悲をかける。ここは同盟関係を結ぶのが良いのではないか」

「たしかに、戦争において一歩抜きん出るスパルタンポリスを負かし、しかもレオニゲルを討つなどそうそうできることではない」

「我ら市民の権利を守るためにも、ソケドキアと手を結ぶのが最善の策と思われる」

彼らが守りたいのは何よりも、自分たちの権利である。都市国家市民としての。

「古来からタールコに我らの権利は脅かされてきた。いい加減それに終止符を打たねばならぬのではないか」

「そうだ、シァンドロスをタールコと当たらせて、後顧の憂いをなくすることを考えねばならぬ」

「異議あり！」

突然の異議を唱えたのは、ゲモシレンスという者であった。

「シァンドロスが心変わりせぬ保証はなく、なにかあれば我らに敵

対するのは必定。彼は我らの権利のために戦わぬ。戦うは己の野心のためである。そのような者に我らを守らせられようか」

ゲモシレンスほとんどの者がソケドキアに戦争を任せようとしていたところ、グレースポリスの完全な独立と市民の権利を守るためにも、ソケドキアと手を結ぶべきではない、と主張するのであった。

それから議場は激しい論争が展開された。

「都市国家（ポリス）のありようを見直し、他国の侵略を受けぬ国造りを一からやりなおせば、独立を保つのは不可能ではない」

「そんなゆとりは、ない。考えてもみよ、ソケドキアもタールコももう目の前まで迫ってきておるのだ」

「我ら都市国家の誇りとはなにか。それは独立と権利ではないか。身の安全のための安売りが許されてよいのか。命を賭けてグレースを守り通した先祖に申し訳が立たぬと思わぬか」

「ここで滅べば元も子もない。アノレファポリスを知らぬではなかろう」

「なればこそ、今こそ同盟都市国家一致団結しソケドキアを寄せ付けぬ堅固さを示さねばならぬ」

「しかし、東にタールコ、北にソケドキア。我らはいかに難敵に囲まれていることよ」

誰かがぼやく。

実際のところタールコは征服地に専制政治をしかず、むしろ民主的な政策をとっているのだが、エラシアの人々はタールコは巨大な独裁国家である、との見識を強く持ち。もし征服されれば、市民はすべて奴隷にされてしまうであろうと考えている。

そのため、言論家はとにもかくにも、タールコがいかに野蛮で凶悪な国であるかを主張すること尽きることがなかった。

が、中には売名のためにタールコやタールコ人を貶める者も少なくなかった。

言論家の中には証拠の裏づけのないままに、思いつくままにアスラーン・ムスタファーは若さに任せて征服地において殺戮と淫乱を

ほしいままにしていると唱える者までおり、それを信じる者も多い。
小国の一部の人々にとって、巨大帝国は脅威であると同時に、己の商売の道具でもあった。人の怖れるを利用し、不安を掻き立てることを書き立てて、説き立てて、注目を集める。
売名が目的なのだから、ならばどうすればよいか、までは書かないし、説かない。せいぜい、相手にしない、くらいの具体性のないものである。
哀しいかな、グレースポリスはそんな言論家に世論を動かされているといってもよかった。
だがそれが出来るのも、ここ長い間に戦争がなくて、戦争は対岸の火事である状態にあるからだった。それが、さあ、戦争が目前まで迫ってきたとなったとき、策は批難のようにもともと持ち合わせていないのだから慌てふためくしかないという馬鹿げたところに落ち着くしかなかった。
それまで強硬にタールコとの敵対関係を主張してきた者たちは、ソケドキアの突然の出現に驚き慌てて、おろおろするばかり。
ついには、目前に迫ってくる危機に潰される前にひれ伏し安全を保証してもらおうとするしかなかった。
だがゲモシレンスは譲らずソケドキアとの対立を主張するのである。なにせゲモシレンス自身、巨大帝国を商売道具としてひたすら批難してきた経緯がある。
いまさら後に退けなかった。
「独立と権利とは、魂のみになろうとも守らねばならぬ」
などとついにそんなことを言い出した。征服されるくらいなら、死んだ方がましというのである。
生きていたい人々がほとんどを占める中でそんなことを言えばどうなるか。
冗談ではない、とゲモシレンスに一斉に批難が集中した。
「馬鹿な。そこもとたちは臆して悪にひれ伏すというのか」
それまで巨大帝国への批難で人気を得て賞賛を受けていたことに

ひたりきっていた身に、批難を受けるのは堪えた。
誰か、どこかを批難するのはお手の物だが、いざ自分が批難されると、身が震えるほどの怒りと屈辱と恥辱を覚えた。
さらに絶望をも覚え。ゲモシレンスは、ぶち切れて何も言わず憤然と議場を立ち去った。なにを語るべきかが、何も思い浮かばなかった。
あとは、早いものだった。
早急にシァンドロスへ、同盟を結ぶ旨を伝える使者が送られた。

そのシァンドロスは勝ちの勢いに乗り、スパルタンポリスに足を踏み入れた。
王が討ち取られてその首が敵によって運ばれてきたのである。
いかに戦争に強いこだわりを持つスパルタンポリスといえど、今度ばかりはシァンドロスにひれ伏すしかなかった。
なお敵対しようとする者は、とうに逃げ出し姿をくらましていた。
スパルタンポリスの人々は、騒然とソケドキア軍の入都を見守っていた。そして怖れた。
都市の広場にソケドキア軍は整然と集結し、人々は広場を遠巻きに眺めて固唾を飲んだ。
なんと、シァンドロス自身が王レオニゲルの首を掲げて、臨時にもうけられた演台に上がった。
「見よ、スパルタンポリスよ。これは誰が首か！」
あらんかぎりの声でシァンドロスは叫んだ。
応えはない。
冬の寒風が耳を撫でるように吹くばかり。
スパルタンポリスの人々が震えているのは、なにもこの寒風のせいだけではなかった。またソケドキア軍も震えているのは、寒風のせいばかりではなかった。
ともに震えている。しかし、その理由が違うのは言うまでもない。
応えぬスパルタンポリスの人々にかわり、ソケドキア軍から次々

に、
「レオニゲルの首である！」
との声がこだました。
「初陣のころより、レオニゲルに我にかなわぬところを見せた。にもかかわらず、こやつは我に逆らい続け。挙句の果てに挙兵しソケドキアを陥れようとした」
「制裁を」
「報いを」
「報復を」
「復讐するは我らにあり」
シァンドロスの声に応えるのは無論ソケドキア軍。
スパルタンポリスの人々の恐怖は頂点に達した。まるで悪夢を見ているようだった。
その悪夢は、現実のものとなった。
「諸君の言うこと、もっともである。愚かなスパルタンポリスを、アノレファポリスの二の舞にしてやれ！」
「応ッ！」
獣の叫びが轟く。同時に、レオニゲルの首が放り投げられ、地面に叩きつけられてゆがんだ。
それを合図に、獣となったソケドキア軍はまたたく間に得物を手に、スパルタンポリスにて破壊と殺戮を繰り広げるのであった。
阿鼻叫喚の悲惨な光景が繰り広げられ、屍山血河がまたたくまにつくられてゆく。火の手が上がり、それは赤い竜の舌となってスパルタンポリスを舐め尽そうとした。
シァンドロスはそれを心地よさげに見守っていた。
「馬鹿な」
そう批難するのはヤッシカッズであった。聞こえる声で、はっきりと、批難の声を上げた。
「おやめを。どうか無用の殺生をおやめくだされ。いたずらに恨みを残してなにになりましょうや」

「やめぬ！」
シァンドロスは毅然と言い放った。だがヤッシカッズは食い下がった。
「スパルタンポリスを許せば、後世まで慈悲深き王よと讃えられるでしょう。貢物も喜んで差し出すでしょう。その利を捨てるのでございますか」
「捨てる」
「そのような子どもじみたことを」
「くどい！」
その無情の一言を残し、シァンドロスはヤッシカッズから遠ざかってゆく。
シァンドロスの臣下にしてヤッシカッズの弟子であるガッリアスネスは、師とともに呆然と成り行きを見守るしかなかった。
ペーハスティルオーンとイギィプトマイオス、バルバロネを引き連れ、ゴッズに跨り、破壊と殺戮を不敵な笑みでながめつつ各所をまわった。
兵士が一人、お宝の入った大袋を担いでいた。とても重そうで額から汗を滝のように流している。
「しっかりしろ。それはお前のものなのだぞ」
激励を受けた兵士は重さも忘れて、笑顔でシァンドロスに応えた。
そのそばで、死した赤子を抱いた母親のなきがらが悲しげに横たわっていた。だが見向きもされない。
殺戮と破壊もさることながら、略奪も凄まじかった。
略奪を眺めながら、ペーハスティルオーンは冗談まじりにたずねた。
「このままではあなたの取り分がなくなってしまいますね」
「かまわない」
「しかしそれでは」
「よい、と言っている。オレには希望がある」
たわいもない会話であった。

破壊、殺戮、略奪、暴行……。

それらの悲惨な景色を日常の景色のようにシァンドロスは眺めながら、配下とたわいもない会話をしながら、破壊されゆくスパルタンポリスの各所をめぐった。

第十六章　白い世界の中で　？

タールコが旧ヴーゴスネアの五ヵ国を制し、ソケドキアは南方エラシアのスパルタンポリスを打ち負かして破壊し、グレースポリスと同盟関係をむすび実質上エラシアを制していた。

国境より南の地域が変動する中、北のリジェカは雪に閉ざされて、春の雪融けをまちながら冬篭りをせねばならなかった。

周囲の景色は白一色に雪化粧し、人々は厚着し白い息を吐きながら日々を過ごしていた。

リジェカの王都メガリシの王城の庭の池は凍って、その氷厚く人が乗れるほどだった。

その氷の上を、幼い九つの姫マイアが召使いのメイドどなったカトゥカと一緒に滑って遊んでいた。

先が曲がり平らになった棒（スタッブ）で、丸い石を転がし、互いにその丸い石をきゃっきゃきゃっきゃと笑いながら、ホッケー遊びに興じて取り合っている。

「えい！」

棒で丸い石を弾きながら、カトゥカの追撃をかわそうとするが、どてっと尻から滑ってころんでしまった。それをみて慌てたカトゥカも、

「きゃ」

と声を上げて尻から滑って転び、またそのまま滑ってゆく。目の前にはマイア。

「あ、あ、危ない！」

と言うも滑走はとまらず、咄嗟に身をひねろうとしたがかえって体勢を崩し横倒しになってわき腹から座り込むマイアにぶつかってしまった。

「きゃああ」

笑いと悲鳴を織り交ぜながらマイアはカトゥカのお腹の上に乗り、

一緒になって滑っていった。

幼い王モルテンセンは赤い兵団の長であるイヴァンシムの援護を受けながら内政を執り行っていた。

イヴァンシムは年齢も年齢であるので兵役に関しては引退し、年長者としての経験豊富なことから王より補佐の依頼を受け、その背を押すように助けていた。

その王の召使いとしてクネクトヴァも仕え、かつモルテンセンの友人となり、陰から支えていた。

軍備に関しては、ドラゴン騎士団はメガリシに常駐し、リジェカ軍も再編成された。

ドラゴン騎士団も新たに、軍属の者に対し新入団員の募集をかけ、百から二百へと数を増やした。往年のような、いきなり一万を越える大軍隊にはしない。騎士団としての団結を重んじ、いたずらに数を増やして質の低下することを避けたのだ。

なにより、団長となって騎士団を引っ張るのはオンガルリ人で率いられるのはリジェカ人である。

国は関係ないかもしれない。だがいざというときに、国が違うことがなにかのかたちであらわれるかもしれなかった。

今のところ、革命において功績が大なるので信頼は厚く問題はない。

そのドラゴン騎士団はリジェカ軍の頂点に位置していた。

コヴァクスとニコレット、ソシエタスにとって、オンガルリ復興が現実のものとなりつつあり、徐々にでも骨が組まれて肉付けがなされているような気持ちだった。

そう、ドラゴン騎士団、コヴァクスにニコレット、ソシエタスの一番の目標はリジェカ軍を率いてオンガルリをタールコより取り戻すことだった。

その一方で赤い兵団は数を増やすことなく、従来の兵員でいくこ

とにしていた。
ドラゴン騎士団との連携を密にして、雪の中でも郊外に出ては訓練を怠らなかった。
「寒い、ああ、寒いんだからもう」
セヴナは白い息を吐きつつ、厚手の毛皮の上着を鎧の上から羽織り、仲間たちと雪中行軍の訓練をしていた。
皆徒歩立ちで、
「ハイラ、ハイラ！　進め、進め！」
と白い息を吐きながら、掛け声をかけながら雪を踏みしめ進んでいた。その中でセヴナはついぼやいてしまった。
「余計なことを言うな！」
ダラガナの小言がセヴナに飛ぶ。
ぺろっと舌を出して、ごめんなさい、と笑ってごまかす。
寒さは身に堪えるが身体を動かすうちに暖まってゆく、がそれも動きを止めればすぐに冷たくなってゆく。
コヴァクスとニコレットは先頭に立ち、隊を引っ張るように掛け声をかけながら淡々と行軍していた。
いかに雪が降ろうとも訓練を怠るわけにはいかなかった。
春の雪融けに備えて鍛えておかなければならなかった。
雪深いといえど、情報はわずかでも入ってくる。
タールコのアスラーン・ムスタファーは旧ヴーゴスネアの五ヵ国を、ソケドキアのシァンドロスはエラシアを制したことは知っている。
雪が融ければタールコが迫ってくるのは目に見えていた。なにせ東はもちろん北と南にかこまれているのだ。
だがそれとともに気になるのがシァンドロスの動向であった。南方エラシアを事実上征服したうえに、あろうことか、一度ならず二度までも都市国家（ポリス）を破壊したという。
言葉もなかった。
何かを持っているようだが同時にひと癖もふた癖もありそうな人

物だった。そのひと癖ふた癖が、そういったかたちで出たのか。

さて、シァンドロスとは今後どのように付き合うべきなのか。ある意味タールコよりも難しい相手であるかもしれない。

この状況では、オンガルリの復興よりも南に目を注がなければならなさそうだった。

それにしても、なんという変動の大きさだろう。

昨年の今ごろはそんなことを考えていただろうか。

もうすぐ年も明ける。

今年は翌年を迎えられそうだが、それまでにどのくらいの苦難があったことだろう。

雪中行軍をしながら、コヴァクスとニコレットは今までの道のりを思わずにはいられなかった。

ちなみにソシエタスはメゲッリとともにフィウメにいる。フィウメ独立軍も郊外にあるアウトモタードロムの要塞に常駐している。

フィウメはリジェカの北に位置するので北方地域の動向に目を光らせていた。とともに、空き家に監禁しているポレアスにも目を光らせている。

誰もポレアスを助けに来ようともしない。彼も旧ヴーゴスネア五ヵ国がタールコに征服されたことを知っている。結局、自分たちのしてきたことの結末にひどく打ちのめされて、監禁生活をのんびり過ごすしかなかった。

それはさておき。

春の雪融けに備えて訓練を重ねるドラゴン騎士団であったが、コヴァクスは時として、心ここにあらず、ということがあった。

訓練が終わり、雪の張り付く窓越しに雪雲覆う空を眺めて。

思い出すのは白衣の少女、龍菲（ロンフェイ）。

六魔に襲われた危機に陥った時、ドラゴンの夜の革命のときにもあらわれ、六魔と戦い助けてくれた。

彼女は何者なのであろう。

いまどこにいるのであろう。
コヴァクスに千里眼などないので、まさかシァンドロスの滅ぼしたアノレファポリス跡で冬を過ごしているなど夢にも思わない。
「会いたい」
ぽつりとつぶやく。
それに気付く様子もなく、ため息をつく。
彼女はあらわれるであろうか。
あらわれるとすれば、どのようなときにあらわれるであろうか。
誰か、しかも女性に対しここまでこだわってしまうのは、初めてのことだった。
雪の白さが、白衣の彼女を思い起こさせてしまう。
瞳に白い雪と白い景色を映し出しながら、脳裏に描かれるのは衣はためかせる龍菲の舞う姿だった。

第十六章　白い世界の中で　？

月日は経ち、年を越した。
新年を祝う宴が各地でひらかれたが、リジェカのメガリシも新年の祝いが盛り上がった。
昨年まで権力争いに明け暮れる王が支配していたのが、革命があり世の中がかわった。人々はよいかたちで年を越せたその喜びをあらためて酒をもって爆発させていた。
メガリシ王城においても、モルテンセン王は杯をかかげ、コヴァクスにニコレット、クネクトヴァにカトゥカ、イヴァンシムにダラガナ、セヴナといった出席者らの労をねぎらった。
ちなみにソシエタスは北のフィウメにてメゲッリとともに北の動向を注視している。
ねぎらいながら、これからもリジェカのためによく働いてほしいと、王は厚く懇願した。幼き王が大人の臣下たちに頭を下げるのは、見ていて心が痛かった。
ニコレットは笑顔で、
「もとより我らドラゴン騎士団は、国のへだたりなく、王に、リジェカにお仕えいたします」
と応えた。
笑顔の裏では、本格化するタールコの進出をいかに食い止めるか、ということに心を砕いていた。
タールコには北に東、南と囲まれているのだ。
西方は海なので逃げ場がない。
一般市民はともかく、ここで自分たちまでが舟で逃げ出したらどうなるか。騎士としての面目もへったくれもあったものではない。
今年は、どうなるのだろう。勝利か、死か。そのどちらかしかなかった。それはモルテンセン王もよくわかっているようで、それが頭痛の種であったが、新年一日の一日だけは、世の憂いを忘れた。

隣の姫マイアは無邪気に新年の祝いを楽しんでいた。

雪が周囲を白く染める季節の中で、モルテンセン王は内政にいそしみ、ドラゴン騎士団に赤い兵団は訓練に明け暮れ。

コヴァクスは合い間合い間で気を抜けば、脳裏に龍菲（ロンフェイ）のことが浮かんだ。

オンガルリの復興やリジェカの安寧こそ第一に考えねばならぬことだが、どうにも先に浮かぶのは龍菲のことだった。

（オレに恋心などあったのか）

コヴァクスは自分で自分の気持ちに戸惑っていた。

できるならば今すぐにでも、探しに行きたくなる。

誰にも相談できぬ悩みを一人抱えてしまっていた。

タールコは旧ヴーゴスネア五ヵ国を完全に征服し、その版図に入れた。

最後の征服地、ダメドで新年を迎えたアスラーン・ムスタファーは善政を布き、民に征服の不満がくすぶらぬようとりはからった。

真面目に働く者は重く用い、政（まつりごと）の中心に置き。いらぬ復讐心を燃やすものは容赦なく弾圧した。

アスラーン・ムスタファーは叫んだ。

「我らが望むのは支配ではなく、統一である」

これまで旧ヴーゴスネアは七つの国にわかれて互いに相争い、多くの血と涙が流され。民ですら互いに憎しみあい、悲惨な思いをさせられること数え切れぬほどである。

それを終わらせるのだ。

タールコは、そのための統一である、と征服地に説いて回った。

信教の自由も許され、破壊された町や村もタールコの援助をうけ復興しつつあった。それでもなおタールコと敵対しようとする者は、やむをえず容赦ない弾圧をくわえざるをえなかった。

再びの戦火があがれば、せっかく得られようとしている平和を手

放すことになり、民はまた悲惨な思いをさせられるのだ。
かつて敵対していたタールコが、思いのほか善政を布くので、旧五ヵ国の人々は最初悔しがるものの驚き、年が明けたころには協力的になっていた。
皮肉といえば皮肉であった。
同郷の貴族が民を無視し軽く扱ったのに、敵対した帝国が逆に民をいつくしむ。
これならもっと早くタールコに統一してほしかった、そんなことが仕事終わりの夕食の席で語られることも珍しくはなかった。
そのためか、旧五ヵ国は久しぶりに安穏として新年を迎えることが出来たのであった。

さてソケドキアの神雕王シァンドロス。
彼はタールコが北方をうががっている隙に南方エラシアに進出し、スパルタンポリスを破ったばかりでなく都市そのものまで破壊し、その強さと容赦のなさを徹底的に見せつけることで、もろもろの都市国家に畏怖を与え、同盟というかたちでの支配下にくだすこととなった。
エラシアでスパルタンポリスと並んで有力都市国家であったグレースポリスがシァンドロスと同盟を結ぶ旨を伝える使者を送り、王がソケドキアの王都に向かうことも伝えた。
言うまでもない、実質的な臣下の礼をとるというのである。
他の都市国家の王たちも、ソケドキアの王都ヴァルギリアに向かい、シァンドロスに拝謁しともに新年祝いをしたいという旨を伝える使者を送った。
そして新年を迎えたとき、ソケドキアは今までにないほど豪勢な新年の祝いの宴を開いた。
普段は気軽で地味な格好を好むシァンドロスも、この時ばかりは王らしい豪華な王衣を身にまとい、居並ぶ臣下や都市国家の王たちの前に颯爽と姿を現し。

「ご苦労である」
と王座から見下ろしながら言った。
臣下たちはもちろん、都市国家の王らも拝礼し、もう完全に同盟ではなく、王と臣下であった。
シァンドロスは戦上手。逆らえば滅ぼされる。だが従えば守ってもらえる。
という畏怖の心が、同盟と臣下の礼という言葉を混同させていた。
王座のシァンドロスは、不敵な笑みで王座から見えるものを見下ろしていた。

ダメドとリジェカの間にそびえ立つ山々は高く、今は雪の冠を被って人を寄せ付けない。
アスラーン・ムスタファーはタールコ王都トンディスタンブールへと凱旋するための帰路についている。
本当に戦いたかった相手。
それは雪を被る山々の向こうにいる。
旧ヴーゴスネアの中でも北に位置するリジェカからは雪が深く、冬はリジェカから北へ旅することは難しい。
今ごろ白い世界となっているリジェカにて、ドラゴン騎士団はどう過ごしているだろうか。
雪融けの時が来るのをまさに一日千秋の思いで山々を見つめ。念力があらば、いますぐにでも雪を溶かして山を越えたくてしかたなかった。
愛馬ザッハークにまたがり、エスマーイールに傘を差させ。アスラーン・ムスタファーは山々を見つめながら、未練ありげに、
「雪融けを待っておれ」
とつぶやいた。いかに獅子王子（アスラーン）といえど、雪融けを待つしかない己の身はやはり人間なのだ、と痛感していた。

第十七章　同盟　？

月日は重ねられてゆく。
雪の白さは厚みを増して、人々をこごえさせていたが。寒い盛りをすぎれば、その厚みも徐々に薄まってゆき、雪融け水が沢や谷を流れてゆく。
春が徐々にでも近づき、人々は永遠に続くかと思われた冬の終わるのを名残惜しむことなく待ちかねていた。
そんなとき、オンガルリにて少しばかりの動きがあった。
ヴァラトノにて数名の騎士が深夜マジャックマジルの邸宅に集まり、かねてからの打ち合わせどおり、こっそりとヴァラトノを抜け出してゆく。
騎士、といっても彼らは代官に、もう平穏に普通に暮らしたいと言って下野し、騎士の身分を捨てた、はずだった。
だがそれはかたちだけのものだった。
そう、彼らは雪薄まるのを待ち国境を越えてリジェカにゆくのである。
マジャックマジルは、さすが年も年であるので無理は出来ずゆくことはできぬが、彼らにささやかながら支援をしてやることはできる。
「吉報をお待ちください」
装備を整え、手放したはずの剣を腰に佩き、騎士数名は覚悟を決めた顔をしつつ笑みを見せた。
その顔は希望に溢れていた。
「うむ、待っておるぞ」
マジャックマジルもとめるなど野暮なことはしない。もしこの若い騎士らに万一があっても、それも覚悟の上であるのだから、とめようなどなかった。
暗闇の中、松明もなしに闇に目を凝らし手探りで騎士たちがヴァ

ラトノを抜け出す。
それを見つめる目。
これなんはカンニバルカだった。
機敏なところもあるカンニバルカである、騎士数名がリジェカへゆこうとするのを見逃すはずもない。
「オレの思った通りに動きおるわお前ら」
騎士たちの前に手下たち数名をひきつれ、立ち塞がる。皆手に得物を携え、一触即発の事態だ。
「うむ、見抜いておったか。ならばやむをえぬ」
騎士たちは剣を抜き、応戦のかまえをとる。見つかった以上は、突破するしかない、と思ったのだが。
「早まるな！」
一喝が響く。
騎士たちは無視して突っ込もうとするが。
「お前たちは小龍公と小龍公女を信じておらんのかッ！」
と言われて、動きを止めてしまった。
それからカンニバルカは矢継ぎ早に言葉を繰り出す。そうせねば、騎士たちは隙を見て突っ込み、その耳に入れることはできないからだ。
「お前たちは余計な真似をせず。ここで力を蓄えて、機会（とき）を待て！それがオンガルリのためだぞ」
「な、なんだと……」
正体不明の男、カンニバルカがオンガルリのためなどと言う。これはどういうことであろうか。
にやりと不敵な笑みを浮かべ、カンニバルカは自分の思っていることを言う。そうすれば、動きを止めた騎士たちは唖然として聞き入っている。カンニバルカの言うことは理にかなっており、反論できないでいるようだ。
「オレは小龍公と小龍公女に期待しておる。お前たちも同じように期待して待て」

「わかった。そうしよう……」
騎士たちは、憮然としながらも引き返してゆく。背中から斬りつけられることはなく、マジャックマジルの邸宅までもどると、事の次第を語った。
「左様か……」
マジャックマジルはほとんど放心状態だ。
あのカンニバルカ、何を考えているのか、まったく予想もつかぬ。だがそれだからこそ、味方とも思えぬが敵とも思えぬ。そして極めつけは、その図太さだった。その図太さに圧されてしまうのだった。

故国でそんなことがあるともつゆ知らず、リジェカにてドラゴン騎士団はあいも変わらず訓練に明け暮れた。
雪融けの時期となった。ということは、タールコの進出が迫るということでもあった。
事実上リジェカは幼き王を頂き、まさに若い国として、建国して日も浅い。そんなときだった。
どこからともなく、人が王城を訪ね、門番にあるものを差し出した。
それは蝋印を押された封筒だった。その蝋印は雛の描(くまたか)かれた猛禽類の印だった。
「あっ」
門番は思わず声をあげた。
それはソケドキア神雛王シァンドロスの蝋印だったからだ。ということは、ソケドキアからの使者ということだ。
しかも一人で、旅人の身なりをし。つまりは、密使だ。
すぐに門番は王城に駆け込み、赤い兵団の長であり今は王の補佐をしているイヴァンシムに報告した。
「これは、まことにシァンドロスからの密書」
蝋印を見て眉をひそめた。
リジェカとソケドキアは国境を接してはいない。詳しいことは知

らぬでも、ドラゴン騎士団からシァンドロスとの話は聞いている。
封を解かずとも、内容はだいたい予想できた。
リジェカとソケドキアには共通の敵がある。そう、タールコだ。
雪融けの時期とともに情報も多く入るようになった。タールコの情勢はともかく、ソケドキアの情勢には息を呑むことが多い。
タールコは領土を広げゆくにも、王道を進む。しかしソケドキアは覇道を歩んでいる。
王道と覇道。関わるに面倒なのは、覇道である。
その覇道を歩むシァンドロスはリジェカとどう関わりゆくのであろうか。
「王はもちろん、すぐにコヴァクス殿とニコレット殿にも報せよ」
これは、リジェカの行く末を決める一大局面である。
ついにこの時が来たか、とイヴァンシムはため息をついた。

第十七章　同盟？

モルテンセン、コヴァクス、ニコレット、イヴァンシム、ダラガナ。

円卓を囲み国の重責を担う者たちが王とともにシァンドロスからの密書を読みいっていた。

「シァンドロスは、私と同盟を結びたいそうだ。そしてともにタールコと戦おうとも書かれてている。どうすべきか……」

今年で十三になる幼き王は、重臣たちの前で手を合わせ円卓の中央に置かれた密書を見入っている。

密使は別室にて控えている。

「現実問題として……」

イヴァンシムが重く口を開いた。

「我らは単独でタールコと戦う力がありません」

陽の差す議室で円卓を囲み、皆の間に沈黙が重い空気として流れた。

意気込みはある、しかし戦いは意気込みだけでは勝てぬ。

「では、同盟を結ぶというのですか」

ダラガナが口を開いた。シァンドロスに対し、よい印象をもてぬようである。それもそうだろう、覇道を歩み都市国家（ポリス）を二つも壊滅させた者と手を結んでも良いのかどうか。

コヴァクスもニコレットも、ひと癖ふた癖ありそうだと思いつつも、シァンドロスがそんな男であるとまで思わなかった。

あの不敵な笑みが思い起こされる。

それとともに思い出すのは、バルバロネだった。

粗野な傭兵だったバルバロネは面白そうだからと、そして、いつかコヴァクスとニコレットと喧嘩をするかもしれないと、シァンドロスに着いていった。彼女の行動が、今後のドラゴン騎士団とシァンドロスの関係を物語っているような気がしてならなかった。

共通の敵があるうちはいい、だがその敵がなくなれば、どうなるのであろう。

「将来のことも大事です。ただその将来も眼前の敵をどうにかせねばないものです」

はっ、となった。

コヴァクスとニコレットは何も発言できない。

若さもあって、戦略的なことは弱かった。だから発言は経験豊富なイヴァンシムとダラガナにまかせっきりにしてしまっていた。

今年はどういう年になるのであろう。

敗北か勝利か。いな、もっとあからさまに言えば、生きるか死ぬか。

ここでタールコに敗れて、なおおめおめと生きながらえることができるだろうか。たとえ誇りを捨てて生き残っても、再起する手立てを失い逃げ惑うしかないのではないか。

「では、イヴァンシム殿は、ソケドキアと同盟を結ぶお考えですか？」

とニコレットはたずねれば、イヴァンシムは口をへの字にしながらも、うなずいた。

「同盟を結ばなくても、我らだけで戦う手立てはないものでしょうか」

そうたずねるのはコヴァクスだった。彼としては、なるべくならシァンドロスと組みたくない。

だがイヴァンシムははっきりと、

「ない」

と言った。

コヴァクスは歯噛みをした。確かに、タールコほどの大帝国を相手にリジェカ一国だけでは無理がありそうだ。小さな勝利をものにできても、大きな勝利で局面をひっくり返すことができるかどうか。

「理想を持つことは大事です。私だって、本音を言えばソケドキアはある意味でタールコより厄介な相手だと思います」

王は真剣な眼差しでイヴァンシムの言葉に耳を傾けている。
「ソケドキアがいやならば、タールコの、アスラーン・ムスタファーの慈悲にすがりますか？」
なんともまっすぐな言い方であった。イヴァンシムはモルテンセンを見つめている。まだ幼い王に、国を背負わせるのは大人として忍びない。しかし、現実として王族が国を治めず、自分たちが国を治めれば反逆になってしまう。
赤い兵団として挙兵したのは、なんのためか。そのために、モルテンセンを王と頂くからこそ、敢えて厳しいことも言うのであった。
「それはできない」
それが王の答えだった。
「リジェカはヴーゴスネアから分かれたとはいえ、歴とした独立国。その独立性をたもつためにも、タールコの版図に入るわけにはいかぬ」
「ならば、どうなさいます」
「一時的になら、シァンドロスと組んでもよいだろう」
おお、と思わずコヴァクスはうなった。幼いとはいえ、王として様々な思いを巡らせているのであろう。
「ヴーゴスネアを今さら統一するにしても、世の中は急激に変動している。人の心もばらばらだ。もう、ヴーゴスネアという国は歴史の渦に巻き込まれて消え去ろうとしている。だが、リジェカとして、せめて灯し火を蝋から蝋へと移すようにしてでも、残しておきたい」
幼い王から出た言葉に、一同感心し、イヴァンシムは笑顔になった。
幼いながらも王としての自覚と、今までのイヴァンシムの助言と補佐から、その言葉が出たのであろう。
若いコヴァクスとニコレットは、あまり発言することができなかった。内心それを恥じながら、
（所詮、我らには戦しかないようだ）
とも思っていた。

ドラゴン騎士団は戦いの集団であり、国の政（まつりごと）をつかさどる政治政党ではない。

「シァンドロスのことは、今後の動きを見て決めてゆくのですね」

ダラガナが問えば、モルテンセンはうなずく。

現実としては、それしか選択肢はないようであった。

こうして、ソケドキアとリジェカは同盟を結ぶこととなった。

同盟なる。

その報せとモルテンセン王の蝋印入り書簡をひっさげて、密使はソケドキアに戻ってきた。

望んだ結果が得られ、シァンドロスは満足そうだった。

「よし、これでタールコと戦える」

書簡を、蝋印をながめながらシァンドロスは今後の展望を脳裏に広げていた。

己の歩む覇道にタールコという大きな岩石がたたずんでいる。その岩石を取り除くためにも、リジェカ、いやドラゴン騎士団との協力はどうしても必要だった。

そう、本当に求めたのはリジェカとの同盟でなく、ドラゴン騎士団だった。

その編成こそ新しくリジェカ人の騎士によるものであるとはいえ、率いるオンガルリ人の小龍公コヴァクスに小龍公女ニコレットの存在は侮れない。

あの時、大熊をしとめているのを見た、初めて会ったときから、シァンドロスはコヴァクスとニコレットに一目置いていた。

特に、彼の脳裏にはニコレットの色違いの瞳が映し出されていた。

（ニコレットを手に入れるためにも、同盟は必要不可欠であった）

敵対する者を無理に手に入れようとしても、誇り高い彼女がおめおめとやられるとは思えない。それこそ、あのアノレファポリスの姫のように自害するかもしれない。

なんとシァンドロス、ニコレットをものにしようとしているのだ

った。そう、正妻としての求婚を考えている。
そのための同盟であり、共戦でもある。
ソケドキア神雕王率いる神雕軍とリジェカの、いやコヴァクスとニコレット率いるドラゴン騎士団とで手を取り合いタールコと戦い。これに勝利するなどして結果を出した上での求婚ならば、ニコレットも嫌とは言うまい。
「我が血筋に優れたドラゴン騎士団、小龍公女の血が混ざれば、我が家系に箔もつくというものだ」
愛情、というよりも、それがニコレットを求める一番の理由だった。
夢はタールコに匹敵する大帝国を築き、神雕王あらため神雕帝となることであった。ならば妻となる女も、それにふさわしい者であることが必要だった。
それがニコレットだ。
すべては、己の野心のために。
野心が動機を生み、行動と結果を生み、また野心を深める。
シァンドロスはあくまでも、覇道を歩む男だった。

第十八章　報復の誓い　？

タールコにおいては、アスラーン・ムスタファーが旧ヴーゴスネアの五ヵ国征服の凱旋で賑わい、トンディスタンブールの人々はこれを盛大に出迎えて、

「さすが獅子王子（アスラーン）よ」

ともてはやした。

イムプルーツァをはじめギィウェンにムハマドもまんざらでもなさそうに、トンディスタンブールに入都する。

神美帝と称されるドラグセルクセスの子息は獅子王子（アスラーン）と称され、だれもが後継を信じて疑わず。

タールコの未来は明るいと、喜んでいた。

もうトンディスタンブールは都を挙げての祝祭の様相を呈し。

凱旋から三日は、夜も昼にするほどのかがり火がたかれ人々は眠らず、祝杯を手に飲めや歌えやとおおいに賑わい。

四日目にしてようやく普段の生活に戻ったほどだった。

だが人々の喜びをよそに、アスラーン・ムスタファーは浮かぬ顔をせざるをえなかった。

五ヵ国征服は父である神美帝のはからいによってなされたわけだが、はからった理由がシァンドロスとの戦いに敗れたためだった。

ほんとうならば、アスラーン・ムスタファーは王位継承権を失い、イムプルーツァも死罪であった。それで済むならまだいいが、シァンドロスと戦った勇士たちまでが自信を失いそれがタールコ全体に広がるのを避けるためにも、いまいちど自信をつけさせるために、もっと平易な役目にまわされたからだ。

アスラーン・ムスタファーはそれを重々承知していた。

イムプルーツァも内心ほっとしつつも、心から穏やかにはなれないでいた。

神美帝と謁見したとき、そのことには触れられず、

「よくやった」
とのお褒めの言葉が下されたが、その一言だけであった。五ヵ国も征服しながら。だがそれは、シァンドロスと戦うことに比べればまこと平易なものであった。
だから去年年内に果たせた。
労をねぎらう言葉も少なめに、神美帝は言った。
「次回より出征するときは、予も出る」
それは神美帝ドラグセルクセス自らがシァンドロスとドラゴン騎士団と戦うという意思表示のあらわれでもあった。
シァンドロスは南方エラシアを制し、ドラゴン騎士団はリジェカ国防の要として強い存在感を示している。
今年はその二つと戦わねばならぬ。それに、神美帝ドラグセルクセス自ら当たるというのだ。
これが、何を意味するのか。
アスラーン・ムスタファーは跪き、
「御意」
と一言のみ応えるしかなかった。

天宮の片隅に、王族貴族のための鍛錬場があった。
四方を囲む白い円柱、その上に平らに研磨された大理石が乗る。その鍛錬場に西日が差し、影が伸びる。それとともに、召使いたちは燭台を用意し、いつでも火をつけられるよう火打石を手に構えている。
引き締まった上半身をさらし、ふたりの剣士が剣を打ち合う。
それはアスラーン・ムスタファーとイムプルーツァであった。
王子と臣下であるとともに、ふたりはよき友人でもあり、剣の稽古もよくやったもので。今も、刃引きの剣を用い実戦さながらの激しい剣の打ち合いを見せている。
身体もよく火照り、汗もよく流れ。動くたびに汗が散る。
西日で伸びた影もやがて夜の帳がおちるとともに闇にとかされ、

かわって燭台の火が鍛錬場を闇からすくい出す。
しかし太陽ほどの光りの恵みはなく、ふたりは燭台の火がともるとともに稽古を終えた。
アスラーン・ムスタファーにイムプルーツァは稽古を終えると布で汗を拭い、服を着替えた。
それから、アスラーン・ムスタファーはどっかと座り込み。難しい顔をして地面を睨みつける。
「いかがなされました」
イムプルーツァは気になって声をかけるが、それには応えず、燭台に火を灯した召使いらに、
「ここから出よ！」
と大きな声で命令した。
まさか王子たるものを置いてゆくわけにもいかないと、召使いらは戸惑いつつとどまろうとするが。
「出よ！」
という再びの命令の迫力に圧されて、やむなく姿を消し。イムプルーツァとふたりきりになる。
「それがしも、ゆきましょうか」
何か悩みがあって、ひとりになりたいのであろうか。と思い気を利かせるが、アスラーン・ムスタファーは、かまわない、と言い引き止め、座るようながす。
イムプルーツァ座り込めば、
「聞いてくれ。オレは、悔しい！」
アスラーン・ムスタファーは拳を握りしめながら言った。
凱旋してから人々に笑顔を見せるものの、時折人の少ないところでは険しい顔もする。それが気がかりであったが、やはりアスラーン・ムスタファーの心は複雑なものになっているようだ。
その理由は予測がついている。
「シァンドロスに敗れたこと、オレは本当に悔しい。この悔しさ、胸の中で燃えたぎり鎮まることを知らぬ」

やむをえまい。生まれて初めての敗北であるのだから。
イムプルーツァは言葉がなかった。こんな悔しそうなアスラーン・ムスタファーを見るのは初めてだった。
「ドラゴン騎士団、シァンドロス。この二つを倒さぬ限り、オレの心は鎮まらぬであろう」
悶々としたものを、アスラーン・ムスタファーは抱えていた。それが痛いほどわかった。
また悔しいのはイムプルーツァも同じだった。だが根が単純にできているのか、アスラーン・ムスタファーほどには悔しがることはなかった。
ただ、
「報復あるのみ、でございますな」
と言った。
報復の気持ちはある。
アスラーン・ムスタファーは、力強くうなずいた。

第十八章　報復の誓い　？

五ヵ国を制したあと、次に征くは、ソケドキアかリジェカか。
また軍を二手に分けてそれぞれにゆくか、ということも思案された。しかし、神美帝は軍を二手にわけることは考えていなかった。
まとまった軍勢でエラシアを含むソケドキアにゆき、その次にリジェカにへとゆく、という。
また、別な考えもあった。
軍議において、様々な案があった。それをじっと聞き入るが、神美帝ドラグセルクセスは、
「ソケドキアとリジェカが同盟を結んでいることも考えられぬか」
と言った。
皆はっとした顔になった。
「この二ヶ国、国境を接しておらぬといえども、我がタールコという共通の敵がある。それに対し、同盟を結び共戦の誓いを立てていること、十分に考えられる」
「どちらかが密使を遣わし、タールコを抜けて同盟を結んだというのですか」
「左様。よもや一国のみでタールコに立ち向かう愚はおかすまい」
シァンドロスも、リジェカが擁するドラゴン騎士団も、またイヴァンシム率いる赤い兵団もいる、それらは馬鹿ではない。おかしな理想を掲げず、現実を見据えて、現実に沿った動きを密かに進めていること、確かに十分考えられることだった。
「では、どうなされますか」
アスラーン・ムスタファーが問う。彼は報復に燃えていた。
「トンディスタンブールより西に一日のところ、ガウギアオスの砂丘がある。そこに兵を集める。さすれば、ソケドキアとリジェカ、何かしらの動きを見せるであろう」
「閉じこもるか」

「あるいは、愚かにも迎え撃とうとするか」
ドラグセルクセスの言葉に対し様々な予想が飛ぶ。そんなときだった。
「申し上げます！」
息せき切って、人が一人、あわてて議場に転がり込むように飛んできた。伝令将校だった。彼は息を切らして言う。
「ソケドキア神雕王シァンドロス、出兵しタールコ最前線の砦イッソノを陥落せり！」
議場に落雷のような衝撃が走った。
「なんと」
神美帝ドラグセルクセスは思わず玉座から立ち上がった。ソケドキアの動きは注視している。にもかかわらず、タールコの目を逃れて、いつのまに出兵しイッソノの砦を落としたというのか。
「おそらくキャラバンなどを装い、監視の目を誤魔化した模様。砦より逃れた兵の話によると、突如地から湧くようにしてあらわれたとのことでございます」
虚を突かれた砦は閉門もままならずソケドキア軍の侵入を許し、あとはされるがままで、守るもならずほとんどがやむなく逃げざるを得なかったという。
（やるではないか、シァンドロスめ）
アスラーン・ムスタファーは拳を握りしめ、報復の心をさらに燃え上がらせた。
しかしなんという人を食った男だろう。どうにも、彼のやり方は普通ではない。
出兵する兵士にキャラバンの商人を装わせて砦に近づくなど、なかなかできることではない。
勝つために手段は選ばぬ男だとつくづく思った。
南方エラシアを制し、なるほど次にタールコに進出というわけか。
しかし、一国でタールコと戦おうというのか。
「リジェカとの同盟、疑いなしであろう。でなくばどうして、ソケ

ドキア一国でタールコと戦えるものか」
アスラーン・ムスタファーは言った。
議場の一同は、確かにとうなずいた。
イムプルーツァはアスラーン・ムスタファーの目が輝きを増したのを見逃さなかった。
目は輝きを増し、閃くものがあったのだろう。それは報復の気持ちがそうさせるのであろうか。
「おそらく、我らがガウギアオスにつどえば連合軍を組み、迎え撃つことも考えられます」
アスラーン・ムスタファーの言葉を、ドラグセルクセスはじっくりと聞き、じっくりと考えた。
ありうることだ。
ドラゴン騎士団が無謀なことをするとは思えない。しかし、シァンドロスならば、そしてドラゴン騎士団がシァンドロスと組みともに動くとするならば。
ソケドキア、リジェカ。この二国は黙っていれば追い込まれるのは火を見るよりも明らか。ならばなにかしらの動きを見せ、最低でもタールコを牽制すること、十分にありうる。
黙って滅びの日を待つような真似はするまい。
「ガウギアオスの地に集えば、ムスタファーの言うとおりソケドキア、リジェカの連合軍が来るであろう。そこで、一気に二国を叩く」
それが神美帝ドラグセルクセスの導き出した結論であった。
これにアスラーン・ムスタファーの胸が高鳴るのは言うまでもない。
シァンドロスとドラゴン騎士団と、一箇所で戦えるのだから。
「ガウギアオスには三十万の軍勢を集わす。すぐに支度をせよ」
「はっ！」
威勢よく返事をし、出征の支度をするために臣下たちはすぐさま散った。
三十万など途方もない大軍のように思われるが、タールコにとっ

てはすこし本気を出せば出せる軍勢であった。
それだけの国力が、タールコにはあるということであり。国力を下支えするのは、高い文明・文化とそれを創りあげる人材の豊富さにあった。
すぐに各地の貴族・豪族たちに出征が伝えられ、翌日からガウギアオスの地に次々とタールコの軍勢が終結しはじめた。
真っ先に着いたのはアスラーン・ムスタファー率いる直属の軍勢。その数は五万になる。
アスラーン・ムスタファーはエスマーイールに傘を差させて、まるで目の前にソケドキア神雕軍とリジェカのドラゴン騎士団があるかのように、砂丘の先を見据えていた。

第十九章　ガウギアオスの戦い　？

ガウギアオスの地にタールコの軍勢が集まりつつあるのは、ソケドキアとリジェカ双方にも伝わった。

その数は途方もないもので、両国の斥候は息を切らし、

「すでに十万を越えるも、まだ後から続々と軍勢が集結しております」

と言う。

伝え聞いたシァンドロスはタールコが本気を出したことを知った。奪ったイッソノの砦を前線基地にし、ソケドキアとして集められるだけの軍勢を集めているところだった。

その数は三万になる。

このシァンドロス、エラシアを制して次にタールコを狙い、奪えるものは奪う算段であった。

国力に差があるのはわかっている。それを承知で策をめぐらし、勝てる戦いを進めるのだ。

が、思ったよりタールコは早く動いた。とともに、ドラゴン騎士団らとガウギアオスの地に向かうことを思いつき、すぐに密使を向かわせた。

リジェカの方では、ガウギアオスに大軍が集結していると聞き、国中に戦慄が走っていた。

「いよいよ本気を出したか」

こうも動きが早く、しかも十万をこえ、いやその数は三十万になるであろう、とまた別の斥候から伝え聞き、経験豊富なイヴァンシムでさえいくら水を飲んでも喉の渇きおさまらぬ緊張をおぼえたものだった。

モルテンセンともなればなおさらで、恐怖すらおぼえ頭を抱えた。

おそらく、ソケドキアとの同盟が知られたのかもしれない。だから早い動きを見せているのかもしれない。

斥候が来た時点でこれなのだから、今ごろはどうなっていることであろうか。

リジェカなどどのように軍勢を集めても二万がせいぜいである。そこへ三十万の大軍を遣わされればどうなるか。

「守りを固め、ソケドキアに援軍を要請する密使を送るしかありますまい」

とイヴァンシムは言う。

守備の戦いで実績のあるドラゴン騎士団は、天険の要塞に立てこもりそこでタールコ軍を迎え撃つことを進言し、イヴァンシムとダラガナもそれはいいと喜び赤い兵団、そしてフィウメのフィウメ独立軍など、動員できる者は動員しタールコに備え、立てこもるによい地を探す手はずを整えていた。

そんなときに密使が来て、ともにガウギアオスにゆこうと言うものだから、王はもちろん国の重責を担う臣下たちが驚いたのは言うまでもない。

聞けばソケドキアは三万出せるというから、合わせて五万になるが、それでもタールコ軍三十万との差は大きい。

「我に必勝の策あり。我を信じともに戦わん」

密使はシァンドロスの言葉を伝える。

必勝の策とは、なんであろう。自分を信じろなど、いかにもシァンドロスらしい言い方であるが、シァンドロスは根拠のない自信をもつほど自惚れ屋でもないことは知っている。

ならば、ほんとうに勝てる策を秘めているのか。

円卓を囲み論議がなされた。

天険の要塞に立てこもることを最初に提案したコヴァクスとニコレットは、シァンドロスのガウギアオス行きに乗り気ではなかった。ともに、シァンドロスの大胆さに驚いてもいた。

それとは別に、意外にもイヴァンシムはゆこうと言った。

「天険の要塞を築き立てこもるもよいでしょうが、それはいつまで立てこもるというのですか」

コヴァクスとニコレットは言葉につまった。
篭城戦は援護を期待しながらするものである。シァンドロスに援護に来い、といってもタールコが間に挟まり、それをまたいでこなければならない。となれば到着するにしても時間がかかるか、あるいは、勝利の見込みなしとシァンドロスは断るか。となれば、援護は期待できそうになく、敗れる算段が大きい。
国力に差があり過ぎる。それが一番の課題であった。
あのとき、テハーナに立てこもったときは、リジェカ軍は団結がなかった。だからすこしてこずっただけで、仲間割れを起こしそこを突かれて一挙に壊滅し、挙句の果てには途中でドラゴン騎士団側につき、ともにメガリシにゆく者も多かった。
が、タールコは勝手が違う。
国力に差がある、しかしいずれ決着をつけねばならぬ。その葛藤をリジェカは抱えていた。
モルテンセンは瞳を閉じて、思案にふけっていた。
脳裏に浮かぶのは妹のマイアと、メイドとして仕えるカトゥカ。召使いでありよき友人となってくれたクネクトヴァに、円卓を囲むドラゴン騎士団のコヴァクスとニコレット、赤い兵団のイヴァンシムとダラガナ、そしてリジェカの人々である。
革命の喜びも年が明けタールコ来るかと警戒すること大きく。皆不安を抱いていた。
それだけに、ドラゴン騎士団と赤い兵団に期待するところも大きい。
「いってくれ」
モルテンセンは瞳とともに口を開き、そう言った。
「座して滅びの日を待つか。それとも、いちかばちかに賭けてシァンドロスと共戦し、わかずかな可能性に賭けて戦うか」
モルテンセンは王として、円卓を囲む騎士たちを見つめていた。
「いちかばちかの賭けになるが、避けられぬ戦いでもある。ならばシァンドロスとともにガウギアオスにて戦うしかなかろう」

それはある意味で、王より死ににいけと言われているようなものである。

だがコヴァクスとニコレット、イヴァンシムにダラガナに否やはなかった。モルテンセンも覚悟を決めている、それが痛いほどわかった。

「わかりました。ゆきましょう」

意を決して、円卓の騎士一同、王に決意を語った。

ガウギアオスに集結するタールコの軍勢を迎え撃つため、軍備が急いで整えられて。二万の軍勢はガウギアオスに向かう。

同時に密使に共戦の意を伝え、密使は急ぎシァンドロスのもとに向かった。

シァンドロスと合わせて五万の軍勢で、タールコ三十万の軍勢と戦う。

軍全体に緊張が走る。

それでもゆくのは、ドラゴン騎士団と赤い兵団があればこそ。彼らについてゆけば、という信頼感が、足を動かした。

中には弱音を吐く者もあったが、

「避けては通れない戦いなら、やるしかないじゃない！」

と赤毛の少女セヴナは己を鼓舞しながら同志を励まして回った。

自身の支度をすぐに済ませて、セヴナは愛馬の紅馬を駆けさせながら矢を放つ矢馳せ馬の鍛錬を怠らなかった。

セヴナはもともとユオの生まれで旧ヴーゴスネアの内乱で家族を失い途方にくれていたところを、紅い兵団に拾われて義勇兵として戦いの日々を送っていた。

いつしか悲しみから立ち直り、勇敢に戦い特に馬上から矢を放つことを一番の得意として、かつ持ち前の明るい性格から雰囲気も明るくして、赤い兵団においてなくてはならない存在となっていた。

そんなセヴナが郊外で鍛錬をしているとき、鎧姿も勇ましく色違いの瞳を輝かせ、金髪を風になびかせるニコレットが愛馬の白龍号

を駆って姿をあらわした。
彼女もまた勇み昂ぶる気持ちを抑えられず合い間を見つけ、愛馬を駆っていたところだった。
セヴナはその姿をみとめると、嬉しそうに駆け寄り馬を並べ、
「いよいよなのね！」
と声を弾ませて言った。
ニコレットも笑顔で色違いの瞳にセヴナを映し出し、
「そうね。すべてはこの戦いで決まるわ」
と応えた。
ふたりに臆病はなかった。ともに故国がリジェカではなく、家族もない。後ろに退く道などないと思っていた。死ぬかもしれない。しかし、前に進むしかないのであれば、前に進む途上で死する方がよかったし、またそれも避けられぬことと覚悟を決めていた。
そんなふたりの間には友情があり、また潔い覚悟もあり。
清く正しく美しく、ふたりの姿こそ騎士の姿そのものでもあった。

周辺地域にも、リジェカ・ソケドキア連合軍がタールコとガウギアオスの地で雌雄を決しにゆくことが広く伝えられた。
無謀だ、と多くの人々が思った。
アノレファポリス跡で見廻りをする警備兵も、今回ばかりはさすがに……、とつい口にしてしまった。
それを聞き逃さぬ耳があった。龍菲（ロンフェイ）であった。
（彼らは三十万の軍勢を相手に、五万で戦うというの）
さすがの龍菲もこれには驚きを隠せなかった。
故国である昴（マオ）にも、少数をもって大勢と戦い勝利するという前例はある。例えば、うまく火と風をもちいて、三万ばかりの軍勢で百万の軍勢に勝利するなど。
（私には関係ない）
と思ったが。ふと、コヴァクスの顔が浮かぶ。彼をはじめとするドラゴン騎士団は革命をなしとげ、国を樹立した、ということは風

の噂で知り見廻りの兵の話でも知った。
　未知なる西方世界においても兵法があり、その兵法をもって小で大に当たることは、龍菲にとって新鮮な驚きを覚えさせた。
（どのようにして戦うのだろう）
　興味は無関心を越えて、戦いぶりを見てみたい、と思いアノレファポリス跡を離れて、ガウギアオスの地に向かった。

第十九章　ガウギアオスの戦い　？

そのガウギアオスの地に、砂丘を埋めるかというほどの人馬に戦車が終結していた。
神美帝ドラグセル九セル率いるタールコの軍勢、その数三十万である。
それらはアスラーン・ムスタファーの五万の軍勢を前軍にして、神美帝ドラグセルクセスのいる中軍、後軍に左翼右翼と十字になる陣形をとって威風堂々とガウギアオスの砂丘にたたずんでいた。
さて、このことは周辺地域にも広く伝え広めている。
リジェカやソケドキアはどう動くのであろうか。
無論斥候も多数各地にはなって、動向をさぐっている。
報告が入ってくる。
なんとリジェカとソケドキアはともに戦支度をし、ガウギアオスに向かうというではないか。
「来るか」
軍議の途中、斥候からのその報告が入り、ドラグセルクセスはつぶやいた。
「ドラゴン騎士団、小龍公と小龍公女の臆さず進むこと、まこと父と似ている」
ふと、ドラヴリフトの勇姿が浮かぶ。
ソケドキア神雕王シァンドロスに引っ張られてのことであろうが、兵力差をおそれず立ち向かうところ、まことドラゴン騎士団といおうか。
これにアスラーン・ムスタファーが熱くならぬわけがなかった。
「いかにして戦うというのか。見せてもらいたいものだ」
ザッハークにまたがりエスマーイールに傘を差させて、まだかまだかと臨戦体勢で、今いるガウギアオスの砂丘の向こうから敵が現れるのを弾む心で待ち受けていたが。こういうとき、時がやたら長

く感じるものであった。

ソケドキア、リジェカとてなにもしていないわけではない。着々と戦支度をすすめ、互いに密使を送りあってどこで落ち合うかを決めている。

両軍とも、まっすぐにガウギアオスの地を目指し、敵前で落ち合うのである。

メガリシ郊外。ドラゴン騎士団を頂点とするリジェカ軍総勢二万が、紅の龍牙旗を前に整然と並んでいた。

その横には新たな国旗が立てられていた。ドラゴンが火を噴くという図柄のものだ。ドラゴン騎士団の功績大ということで、モルテンセンは新たな国旗にドラゴンを入れることにしたのだ。

そのモルテンセンも、マイアも、この軍勢の見送りにきていた。そのそばにはイヴァンシムにクネクトヴァ、カトゥカ。さらにカルイェンという臣下。

年のころは四十すこし過ぎ。痩せ身だが賢く、内政においてモルテンセンをよく助けていた。

「リジェカ国、我らの命運はこの一戦にかかっている。心してかかれ！」

二万の軍勢を前に、十を少しすぎたばかりの王はそう叱咤激励した。

赤い兵団とフィウメ独立軍、従来からのリジェカの兵士、騎士たちは若い王に、

「応！」

とこたえた。

「こてんぱんにしてやるんだから！」

セヴナは得物の弓を掲げ気勢をあげた。ふと見れば、気合十分の騎士たちに気圧されてか、マイアは縮こまっている。幼い少女に、二万の軍勢の雄叫びはやはり怖いものか。

マイアは不安そうに、ニコレットを見つめると、ニコレットは微

笑みをかえした。それから、セヴナと目があった。
セヴナも笑顔でこたえ、そこでようやくマイアに笑顔が戻った。
リジェカは実質上は建国されたばかりの若い国だ。モルテンセンとマイアはその象徴だった。
マイアの笑顔はリジェカの騎士や兵士たちの心に多少のゆとりをもたらした。
「どうか吉報をお待ちを」
ニコレットは笑顔でマイアに言った。
「出発！」
コヴァクスの号令で、リジェカ軍二万はガウギアオスに向かって進軍を始めた。
ドラゴン騎士団の龍牙旗、新しいドラゴンのリジェカの国旗がはためき、軍靴と馬蹄の音が響く。
モルテンセンとマイアはそれをじっと見送っていた。
カルイェンも笑みを見せるが、その瞳の奥底には、なにか冷たい光りをやどしていた。
その一方でソケドキアのシァンドロスも三万の軍勢、これら総じて神雕軍と名づけガウギアオスに向かって進軍していた。
数日進軍しタールコ領内に入っても、何の妨害もなかった。これも神美帝のお触れによるものか。タールコとしては、ガウギアオスの砂丘で総力戦をし、それにてすべての決着をつけようというつもりか。
シァンドロスに恐れはなかった。
それは敵前にあってもなんら変わることはなかった。
ソケドキア神雕軍とドラゴン騎士団を頂点とするリジェカ軍、あわせて五万はガウギアオスの砂丘入り口で合流した。
早速軍議がひらかれ、久しぶりにシァンドロスはその不敵な笑みをコヴァクスとニコレットに見せた。
赤い兵団のダラガナもこれにくわわる。シァンドロスは、一旦はソケドキアに仕えようとしながら心変わりし今はドラゴン騎士団と

ともにいる。
「久しぶりだな」
シァンドロスはコヴァクスとニコレットに、ダラガナの手も握り不敵な笑みで愛想よく振舞った。
赤い兵団のことは気にしていないようだった。
「よき主を見つけられたな」
とさえ言った。
「もったいないお言葉でございます……」
ペーハスティルオーンらソケドキアの臣下たちの冷たい視線を無視し、ダラガナは丁重に挨拶をする。
（この同盟は、おそらく長続きするまい……）
ヤッシカッズは場の空気を察し、内心ため息をつく思いだった。
今こうして顔を合わせられるのも、タールコという共通の強敵があればこそ。
この戦いのあと、どうなるのであろう。負ければ同盟は続けざるを得まいが、勝てば……。
勝つことを前提に戦うシァンドロスは不敵な笑みの中に、どのような思惑を抱いてるのだろうか。
ヤッシカッズのみが場の空気を察したわけもなく、コヴァクスにニコレットも、かつて仲間だったバルバロネの視線を感じ、同盟の危うさを感じざるを得なかった。

第十九章　ガウギアオスの戦い　？

軍議は進む。

シァンドロスの策は、策と言えるものかどうか疑わしいものだった。

「これで、勝てるか？」

コヴァクスの問いに、シァンドロスはあいかわらずの不敵な笑みで、

「勝てる」

とこたえる。

もう陽は落ち、燭台の火がぼやけつつもひとびとを夜闇からすくい出す。

幕舎の空気は夜の帳が落ちるとともに冷えつつあるはずだが、その中の人々は大軍と戦う緊張感のなせる業か、身体の芯は際限なく熱くなる。

ことにコヴァクスにニコレットらドラゴン騎士団にリジェカ軍は、シァンドロスの誘いをまさに英断ともいうべき決断で乗っただけに、その緊張、胸が張り裂けそうでもあり。

それとともに、長年の宿敵であったタールコと一大決戦を迎えられる興奮をおさえがたい。

リジェカの者たちはともかく、コヴァクスとニコレット、ソシエタスには、タールコに対し憎しみはなかった。むしろ、愛情や憎悪を超え、戦士としての宿命の敵であるという感情があった。

そしてその先に、オンガルリの復興という夢があった。

復興か、さもなくば、死。

やがて来る一大決戦を前に、コヴァクスとニコレットの瞳はほの暗い幕舎の中でも強い光りを放っていた。

シァンドロスはそれを見逃さなかった。

シァンドロスの野望。コヴァクスとニコレットの悲願。

それが今はひとつにまとまり、一大決戦に挑ませようとしていた。

翌朝、夜闇は払われて青い空に雲が思い思いの姿で泳ぐ空を朝日がのぼっていた。

ガウギアオスの砂丘の入り口で陣取っていたリジェカ・ソケドキア連合軍は待ち受けるタールコ軍三十万の軍容が見渡せる地点まで進軍した。

タールコ軍でも、敵軍が目前にあらわれたことでにわかに動きを見せだす。

「来たか」

アスラーン・ムスタファーは血気盛んに槍を握りしめ前線に駆け出す。

「まだまだ、まだまだでございますぞ」

イムプルーツァが隣で若き王太子を制す。神美帝ドラグセルクセスの下知はまだ出ていない。いかに王太子といえど、勝手な振る舞いはゆるされない。

アスラーン・ムスタファーはエスマーイールに傘を差されながら、相対する敵軍の数に眉をひそめていた。

「話には聞いていたが、まこと少ないではないか」

三十万の軍勢に、わずか五万ばかりでいどもうとするのは、まるで自殺行為だ。タールコ軍がガウギアオスの砂丘に軍勢を結集させたのはソケドキアにリジェカの様子をうかがうためでもあったのだが、よもや恐れを知らずに進軍してこようとは。

もし進軍してこなければ、軍勢を二手に分けてリジェカ・ソケドキアに進む手はずであったが、その手間がはぶけた。

などと、神美帝ドラグセルクセスは思ってはいない。

「よほどの覚悟と勝算があるとみえる」

周囲の臣下にそう言って、決して油断せぬようにと触れて回らせる。実際相手が少ないのを見て、安心しきってしまう兵も少なくなかった。

それはアスラーン・ムスタファーの耳にも入った。もとより、辛酸を舐めさせられた相手であるシァンドロスを侮ってはいない。

「おお、あれは……」

遠目に若い騎士が二名、シァンドロスとともにいるのが見える。一人は、兜からわずかに金髪が見え、その瞳は、よくよく目を凝らせてみれば、左は黒く右は碧い。これなん明らかに小龍公女と称せられるニコレットであろう。ということは、もう一人はその兄で小龍公と称せられるコヴァクスか。

「その姿を見るまで、千の春と秋と過ごしたと思うほど長かった」

アスラーン・ムスタファーは胸にたまっていたものを吐き出すように、大きく息を吐いた。

戦士としてドラゴン騎士団と戦えるという喜びは、またたく間に胸を駆け巡る。

ザッハークも主の意を察してか、鼻息が荒い。

神美帝のおわす大きな幕舎を中心に取り囲むタールコ軍三十万は、リジェカ・ソケドキア連合軍の様子を固唾を飲んで見守っていた。

五万の軍勢を前に、愛馬ゴッズを駆るシァンドロスは意気軒昂に拳を振り上げ、将兵らの戦意を鼓舞する。

「見よ、眼前にあるものを。あれが何に見える」

タールコ軍三十万の大軍である。とともに、シァンドロスはまた別のものと見る。

「あれは、我らの栄光への道を記す道しるべである！」

三十万の軍勢を指差し、シァンドロスは咆えた。

「この戦いで、我らはさらなる大道へと躍り出るのだ。何を怖れることがある。確かに、今夕、夕陽を見ることのかなわぬ者もあろう。だが、それは戦乙女に導かれ天宮にて永遠の命を授けられることでもある。恐れるな！　我らの勇敢さは、天の神々も照覧である。勝利は我らにある！」

振り返りタールコ軍、アスラーン・ムスタファーの姿を一瞥し、

さらにシァンドロスは続ける。
「我らは神雕軍である。神の加護厚く、勝利は約束されているのだ。さあ、ゆこうぞ、勝利の大道を！」
「勝利を！」
ペーハスティルオーンにイギィプトマイオスら将兵は神雕王シァンドロスにこたえ咆え猛った。
ソケドキア軍は若き王シァンドロスへの信頼厚く、揺るぎはないものだった。
ソケドキア軍の象徴である雕（くまたか）の旗は、軍勢の意気を受けるようにはためいていた。
後方では、ヤッシカッズはその様子を書きとどめている。そばには怪我の完治していない弟子のガッリアスネスが控えている。
その一方で、龍牙旗と龍の旗そびえ立つドラゴン騎士団率いるリジェカ軍ではコヴァクスとニコレットが先頭に立ってシァンドロス同様、全軍に向かい戦意を鼓舞していた。
「我らの命運はこの一戦にあり！」
コヴァクスは叫んだ。
「怖れるな！　所詮、我らには進む以外に道はない！」
「私たちは勇者か、臆病者か、避けられぬ戦いをいかに戦うのか。怖れる者は去り、勇者はすべてを我が剣に賭けて、進むのです！」
ニコレットは剣を抜きはなち、高々と掲げた。
「さあ、勇気を奮い起こして、立ち向かいましょう、戦いましょう！　我らは勇者なのですから」
色違いの瞳を輝かせ、ニコレットも叫んだ。
輝きの中には、悲壮の決意も込められていた。
怖い。正直に言えば、怖い。しかし、コヴァクス、そしてニコレットの勇姿は、将兵らの臆病を払うには十分であった。
「応！」
「やろうではないか！」
怒号や叫びがリジェカ軍から響いた。

赤毛の少女セヴナも、愛用の弓を掲げ、
「やるわよ、やってやろうじゃないのッ！」
と意気盛んに叫んだ。

「さあ、どう出る」
アスラーン・ムスタファーはイムプルーツァとともにリジェカ・ソケドキア連合軍の様子を見つめていた。
数のうえで優位に立つタールコ軍は血気に逸ることをよしとせず、相手の出方をうかがっている。
エスマーイールとパルヴィーンはそれぞれ己の傘をかかげて、相手の様子を凝視している。
普段彼女らは合戦がはじまれば後方へと下がるのだが、エスマーイールとパルヴィーンに関しては、それぞれの主とともに戦う決意であった。
熱風が頬を撫で、髪を揺らす。
腰に佩く剣がずしりと重い。
侍女といえど、数に差があるとはいえこの戦いが一大決戦になるであろうことは、うすうす感じることだった。
かげろうが立っている。そのかげろうが、リジェカ・ソケドキア軍の意気によりつくりあげられたものにさえ思えた。
「おう」
アスラーン・ムスタファーは声をあげた。
動いた。リジェカ・ソケドキア軍の五万の軍勢はついに動き出した。
だがそれは、奇妙な動きだった。
中央に一万ほど残し、他四万、リジェカ軍1万五千、ソケドキア軍二万五千の二手に分かれて、鳥が翼を広げるように広がりはじめたではないか。
右翼にシァンドロス率いるソケドキア軍。左翼にコヴァクス、ニコレットドラゴン騎士団率いるリジェカ軍。

「これは」
一瞬アスラーン・ムスタファーは戸惑った。
どういうつもりなのか。
このことは神美帝ドラグセルクセスの耳にも入った。
「左様か」
それだけだった。まるで勝敗には興味がないような、そっけないそぶりであった。
だが前線に立つ者たちまで、そうするわけにはいかない。
「我が軍はドラゴン騎士団およびリジェカ軍を追う！　ムハマド、ギィウェンはソケドキア軍を追え！」
王太子にして三十万の軍勢の副将たるアスラーン・ムスタファーは槍をかざし、咄嗟にドラゴン騎士団を追い始めた。
ソケドキア軍は、ムハマド、ギィウェン率いる五万の軍勢が追った。

第十九章　ガウギアオスの戦い　？

左翼リジェカ軍一万五千、右翼ソケドキア軍二万五千の軍勢は左右に広がって展開してゆく。

正面からぶつかるような真似はすまい、と思ってはいたが、さてどのように戦うのか、タールコ軍は意外にも思いあぐねていた。それもそうだろう、わずか五万でどのように三十万の軍勢と当たるというのだろう。

まず、そんなことは誰しもが避ける。しかし、リジェカ・ソケドキア連合軍はそれをしようとした。

シァンドロスは先頭に立ち愛馬ゴッズを駆けさせ、右へ、方角にして南へ南へと馳せてゆく。それに対しドラゴン騎士団率いるリジェカ軍は左へ、方角にして北へ北へと馳せてゆく。

それを、陣頭に立っていたアスラーン・ムスタファーの軍勢五万と、左翼に陣取っていたムハマド、ギィウェンの軍勢五万がそれぞれ左右に展開しながら、追った。

中央にはソシエタス率いる五千とイギィプトマイオス率いる五千が残った。主に歩兵が中心だったが、ソケドキア側は皆、長槍を繰り出すファランクス隊だった。

そこへ、戦車隊が迫る。

「来るぞ！」

数はやはり五万ほどか。こちらの五倍である。

「決死の覚悟で当たれ！」

まさに決死の覚悟でソシエタスとイギィプトマイオスは叫んだ。

おお、と怒号をはなちながらファランクス隊は整然と並んで槍衾を展開し、五百人が一列となり、十列の厚みある隊列を組んだ。

その左右に、手勢を二手に分けたソシエタス率いるリジェカ軍が展開した。

戦車隊の馬は槍衾にも怖じず突っ込んでくる。そのファランクス

隊の左右から、矢が飛ぶ。
運悪く矢を受けた馬は転倒し、馬車をひっくり返す。
「撃て、どんどん撃て！」
ソシエタスは大声で指示を出しとにかく矢を撃たせた。だが戦車隊もさるもの、出せるだけの速度で駆け、矢を受けたわずかな戦車を尻目に距離をぐんぐんと縮めてくる。
「前進！」
イギィプトマイオスが機を見て前進の指示を出す。ファランクス隊は戦車の馬めがけて槍の穂先を繰り出す。
穂先は馬の喉仏を貫くも、勢いあまって血の泡を吹き出しながらファランクス隊の歩兵を蹄で蹴り、あるいは踏みつけ。さらに車輪で轢く。
だがファランクス隊の厚みある槍衾は前列が突破されてもなお穂先を繰り出し馬を、戦車の将兵を貫く。左右からはリジェカ軍が剣や槍を振りかざし、槍衾にかかった戦車を挟み撃ちにして将兵を引き摺りおろし、あるいは剣で、槍で倒して地面に落とす。
と、一見善戦しているようだが、いかんせん数が違う。
じりじりと、リジェカ・ソケドキア連合軍は退いてゆく。

中央の様子など気にも留めず、シァンドロスは駆けた。タールコ軍との距離はどんどんとひらいてゆく。それを追うムハマド、ギィウェンの手勢。
「やつら、我が軍を見てすんでのところで逃げる気になったようだ」
数の優位もあり、追うタールコ軍は余裕の表情を見せた。
だがアスラーン・ムスタファーはそうは思わなかった。
「追え、なんとしても追いつけ！」
ドラゴン騎士団の龍牙旗のはためきを見て、何かあることを察した。先頭には、かつてシァンドロスの愛馬であったグリフォンを駆る小龍公コヴァクス、その後ろには白馬の白龍号を駆る小龍公女ニコレット。

ふたりの後ろには、紅の龍牙旗を掲げるドラゴン騎士団の騎士、名をアトインビーといった。リジェカ人で新たにドラゴン騎士団に加わった若い騎士だ。

紅の龍牙旗のことは、アスラーン・ムスタファーも知っている。国王自らが下賜したという、ドラゴン騎士団の誇りの旗である。それを最前線に持ってくることの意味は。

（これは逃げているのではない）

ふと、本陣との距離がひらいてゆくことに気づく。

（そうか、やつら我らと本陣を引き離すつもりか）

ふっと閃く。

「獅子王子（アスラーン）！　本陣と離れてゆきますぞ」

イムプルーツァも気づいたようだ。

「小癪な真似をする」

アスラーン・ムスタファーは槍を掲げ、

「とまれ！」

と号令を下し、手勢を止めようとし、さらに急反転し手勢を本陣へと引き返させようとする。

敵軍の様子を見て、コヴァクスは舌打ちする。

気づかれたようだ。

「反転！　全速力で敵本陣へ向かう！」

グリフォンの手綱を操り、急反転し神美帝ドラグセルクセスのいるタールコ軍本陣の幕舎へと向かう。それから、アスラーン・ムスタファーの手勢と駆け比べになった。

そう、この戦いにおいての策とは、自らをおとりとしてアスラーン・ムスタファーをはじめとする主力とドラグセルクセスのいる本陣とを引き離し。その間隙を突いて急反転し、一気に本陣を攻める、というものだった。

実際、左右に展開したリジェカ・ソケドキア連合軍を追った主力、アスラーン・ムスタファーと、ムハマド、ギィウェンの手勢はかなり本陣から離れていた。

本陣からは述べ十五万の軍勢が離れているが、まだのこり十五万いる。しかしそれらも、追撃体勢をとり、動き出そうとしていた。

獲り甲斐のある首がいくつも自ら進み出てきているのだ。優位に立つ余裕から、欲に駆られる者が多数出てもおかしくはなかった。

そのため、軍勢全体の形態は崩れだし、本陣の守りは徐々に手薄になっていった。

それこそが、シァンドロスの狙いだった。

このガウギアオスの戦いを遠くから見つめる黒い瞳。

白き衣を身にまとうその女は、戦況を見守っている。

これなんは、はるか東方の昴国（マオ）の出である龍菲（ロンフェイ）であった。

廃墟となったアノレファポリス跡に身を潜めていたが、コヴァクスやニコレットがわずかな手勢でタールコの大軍を相手に戦うのを聞き、興味に駆られて見に来た、というわけだ。

五万ほどのリジェカ・ソケドキア連合軍は砂埃を巻き上げながら七倍の兵力を相手に合戦している。

およそ一万ほどの歩兵が戦車隊をはじめとする五万の軍勢を迎え撃ちながら、後ろへ後ろへと下がっている。

その一方で北から南へと駆ける手勢が二列、駆け比べをしている。西側の軍勢には龍の牙と龍の姿をあしらった旗印。ドラゴン騎士団にリジェカ軍であろう。

かと思えば、もう一方は二列になってこれも北から南へと駆け比べをしている。これはシァンドロスの手勢とムハマド、ギィウェンの手勢であった。

「無謀な」

自然や要塞を利用することなく、砂丘において兵力差ある相手と戦うなど。だが今のところ互角に渡り合っているようだ。

動きを見るに、策はあるようだ。だがどこまで通用するのであろうか。

「義、のために……」

大軍を相手に戦うのも、なにかしらの「義」あってのことであろう。コヴァクスらのことは詳しくないが、己の欲のために剣を振りかざすことはせぬ「騎士」であることは、わかる。

シァンドロスと手を組んだのも、本意ではあるまい。

タールコ軍の中央には大きな幕舎があり、あれが本陣であろう。コヴァクスの手勢はそこに向かっている。だがそれを追うアスラーン・ムスタファーの手勢。

先に策に気づき、反転したので駆け比べを優位に進めている。

龍菲の脳裏にコヴァクスの苦い顔が浮かぶ。

一方、シァンドロスは自分たちを追うムハマドにギィウェンの手勢が本陣からだいぶ離れたのを見てとり、

「反転！」

と、ゴッズの馬首を反し、まっしぐらにタールコの本陣へと向かった。

これに慌てたのはムハマドにギィウェンであった。

「や、や、逃げているのではなかったか」

まるで鹿でも追うような気軽さでいたため、咄嗟の反転の号令を下しても、うまく動けなかった。

「反転せよ、反転せよ。ソケドキア軍を追え！」

ムハマドもギィウェンもそう怒鳴り散らすが、なかなかうまく反転できず、五万の手勢の将兵らは四方八方にぎこくちなく動き、まとまらない。その間にも、ソケドキアの軍勢は離れてゆき、本陣に迫ってゆく。

第十九章　ガウギアオスの戦い　？

タールコ本陣の周辺といえば、優位な立場から知らず知らずのうちに油断をし、守備の陣形を崩し、リジェカ・ソケドキア連合軍に向かおうとしていた。

形は崩れ、隙だらけ、穴だらけの陣形。

「む、やつらこちらに向かってきておるぞ」

左右に展開していたのが、反転し左右から迫ってくるのを見て、急ぎ陣形をととのえようとする。が、なまじ数がおおいため、うまくまとめられない。

いかに百戦錬磨のつわものぞろいといえど、やはりそこは人である、優位に立つという余裕の誘惑は断じがたかった。

「案じたとおりになったな」

自軍の様子を見聞きした神美帝ドラグセルクセスは嘆息した。

神美帝と称せられるだけに、数のみで勝敗が決すなど考えてもいない。

神美帝ドラグセルクセスはこの陣中にある間、甲冑を身にまとい、そばに控える従者に剣をもたせていた。

いざとなれば己も剣を持って戦う心構えであった。

「馬曳けい！」

臣下らが列を成し、それを見下ろせる壇上の上の玉座に座し戦況を見守っていたが、颯爽と立ち上がると壇上を降り、臣下の列の間を闊歩する。

「神美帝、御自（おんみずか）らゆかれずとも……」

三十万という大軍を擁して五万の軍勢を相手にするのに、神美帝自身が剣を手に戦うなど、臣下にとってあってはならぬことであった。

しかしそんなことをいちいち気に留める神美帝ではない。

幕舎を出れば、従者は見事な栗毛の馬を曳いて控えていた。いう

までもなく神美帝が愛馬とし、名はイスカンダといった。
神美帝ドラグセルクセスはイスカンダに颯爽と跨り、従者はうやうやしく腰帯の金具に剣を取り付ける。
ずしり、と剣の重みを感じつつ、首を左右に振って戦況を自らの目で見る。
龍牙旗を掲げるドラゴン騎士団が、本陣に向かってきている。それを見、ふと、ありし日のドラヴリフトを思い起こしてしまった。
「見ておるか、ドラヴリフトよ」
天を仰ぎ、そうつぶやいた。
ドラヴリフトの子である小龍公、小龍公女がオンガルリ復興の悲願を胸に戦乱の旧ヴーゴスネアを駆け巡り、革命に乗じリジェカの軍の頂点に立った。
よくぞ、と思う。
ドラゴン騎士団は宿敵である。しかしそれとともに、友である、という感情が神美帝の胸のうちにあった。
その友の子が、全てを賭けてこの戦場で戦い、立ち向かってきている。
そして王太子が立ちはだかろうとする。
(時は過ぎゆくものなのだな)
神美帝であろうとも抗うことのできぬ、時というものを、今しみじみと感じとった。
ドラゴン騎士団、リジェカ軍とともに駆ける赤い兵団のセヴナは立ちはだかろうとする王太子の手勢を前に、突破口を開こうと一騎駆けし、コヴァクスに並ぶ。
馬上、弓を引き絞り、王太子アスラーン・ムスタファーに狙いを定める。
(いけえ!)
矢は放たれる。しかし、狙いは外れ、一兵卒の胸を貫いた。
「うむ」
己めがけて矢が放たれたのを見て、アスラーン・ムスタファーは

駆け比べをやめ、
「もうよい。リジェカ軍にぶつかれ！」
と号令を下した。
互いに反転し駆け比べをしていた両軍は、もうすぐ本陣というところでぶつかりあった。
ドラゴン騎士団・リジェカ軍は立ちはだかるアスラーン・ムスタファーの手勢を突破しようとこころみるも、鉄壁の守りをなされ進むもならなかった。
「邪魔するな！」
コヴァクスとニコレットは剣を振るい血路を開こうとする。赤い兵団は咄嗟にコヴァクス、ニコレットを取り囲みこれを守ろうとする。大将が討たれれば戦はしまいである。
セヴナも白兵戦となれば得意の弓は使えず、不得手な剣をもって敵兵を薙ぎ払うしかなかった。
「ああ、もう！」
忌々しく剣を振るいつつ、ニコレットのそばまでどうにかゆく。護衛のつもりだろうが、剣の腕にかけてはニコレットが数段上で、剣光ひらめかせ迫り来るタールコ兵を返り討ちにする様は華麗でもあり、伊達に小龍公女と称されてはいなかった。
「さすが……」
なれぬ剣をもって戦うセヴナは、思わず見惚れてしまい、あやうく迫り来るタールコ騎兵の餌食となろうとしていた。
「あっ！」
驚き、もうだめかと思うとともにニコレットの剣ひらめき、セヴナに迫るタールコ騎兵を薙ぎ倒す。これではどちらが護衛なのかわからない。
「申し訳ありません。ニコレット様」
「いいのよ」
乱戦の最中である。和んだ会話などするゆとりなどなく、言葉短くかわしてひたすら敵兵を払いのける。

さすが王太子アスラーン・ムスタファーの手勢であるといおうか。王太子自ら槍を振るい、敵兵を薙ぎ倒してゆき、将兵らも王太子の勇姿に心打たれ戦意は高く、ドラゴン騎士団・リジェカ軍を取り囲み騎士たちを血祭りにあげてゆく。

この有利な状況にあって、アスラーンム・スタファーは敵軍を率いるコヴァクスとニコレットを目から離すことはなかった。

（大将首は、オレが獲る！）

愛馬ザッハークを駆けさせ、人馬をかきわけ、一気にコヴァクスに迫る。

それに気づかぬコヴァクスではなかった。

槍を掲げて迫る若いタールコの騎士、その気迫の中にある威厳。初めて顔を見るが、アスラーン・ムスタファーであることはすぐわかった。

その後ろに、イムプルーツァにエスマーイール、パルヴィーンが続く。

「うむ」

すわやアスラーン・ムスタファーとの一騎打ちとなるか、と思われたがニコレット、コヴァクスに並び、

「お兄さま、ここはわたくしにまかせて、神美帝を！」

と咄嗟にうながし、コヴァクスはアスラーン・ムスタファーと神美帝ある本陣の幕舎を交互に見て、

「頼んだ！」

と一言叫び、まっしぐらに神美帝ある本陣に迫った。

「王太子にして獅子（アスラーン）王子・ムスタファーをお見受けいたします。いざ、我と雌雄を決せん！」

ニコレットは迫るアスラーン・ムスタファーに迫った。援護とダラガナ率いる赤い兵団も続く。

アスラーン・ムスタファーは自分に迫る女騎士の両の瞳の色が違うのを見てとった。

「女、汝は小龍公女なるか！」

「そのとおり、小龍公女ニコレット！」
ニコレットの剣とアスラーン・ムスタファーの槍がぶつかる。
その一方で、ダラガナはイムプルーツァとぶつかり、
「このお！」
「なんの！」
とセヴナとパルヴィーンはは赤い口を開けて叫びながら、ぶつかった。
「誰びとも王太子の一騎打ちを邪魔することはならぬ！」
エスマーイールは審判のように振る舞い、アスラーン・ムスタファーとニコレットの一騎打ちの周りを駆け巡る。
そのとおり、誰もその間に割って入ろうとはしなかった。
双方目をいからし、輝かせて激しく渡り合う。アスラーン・ムスタファーの槍はニコレットの胸板を貫こうとするが、剣で弾き返されざま、鋭い刺突（しとつ）を見舞われそれを咄嗟にかわす。
（さすが小龍公女、できる）
アスラーン・ムスタファーは内心舌を巻いた、だがそれだけに戦い甲斐があるというものだった。

アスラーン・ムスタファーをニコレットにまかせ、コヴァクスは神美帝のある本陣に迫ろうとしていた。
しかし敵もさるもの、守りが堅くなかなか進むことができない。
早めに反転に気付き守りの体勢をととのえたアスラーン・ムスタファーの機転により、ドラゴン騎士団・リジェカ軍は足止めを食らう羽目になってしまった。
その一方で、シァンドロス率いるソケドキア神雕軍はムハマド、ギィウェンの手勢を振り切り、本陣にぐんぐんと迫ってきている。
このガウギアオスにおける合戦、一番手柄はソケドキア神雕軍なるか。
龍菲（ロンフェイ）は遠くで戦況を見守っていたが、ドラゴン騎士団が王太子の

手勢に立ちはだかられ足止めされ、さらにソケドキア軍が追っ手を振り切りタールコ本陣に迫るのを見て。
ため息をひとつついて、駆け出した。

戦車隊と当たりながら歩兵を中心とした一万のリジェカ・ソケドキア中軍は後ろへ後ろへさがってゆく。この一万の手勢もまたおとりで、いくらかでもタールコの手勢を本陣から引き離すのが目的だ。だから勝つ必要はなかったが、かといって背中を見せて逃げることは許されなかった。
ソシエタス、イギィプトマイオスもよく戦い。ファランクスの槍衾もある程度功を奏し、戦車隊を受け止めるように当たり、後ろへさがる。
ソシエタスは剣を振るいつつ、戦況がどうなっているのかタールコ本陣の方へ目を向けた。
「ううむ」
思わずうなる。
ドラゴン騎士団・リジェカ軍はアスラーン・ムスタファーの手勢に阻まれ、本陣に近づけない。その一方で、ソケドキア軍は追っ手を振り切り本陣に迫っている。
イギィプトマイオスも戦況が気になり本陣、ソケドキア軍に目を向ければ、にやりと笑う。
というとき、ふと、なにかが視界に入り込む。
「女？」
ぽつりと口ずさむ。一瞬見間違いかと思ったが、身間違いではない。確かに、女がこの戦場に紛れ込んでいる。
その女は白い衣に長い黒髪をなびかせ、風に乗るように軽やかに砂丘を駆けていた。
「あ、あれは龍菲！」
思わず叫んだ。
龍菲は中軍と戦車隊のぶつかり合いを避けて、まっしぐらにドラ

ゴン騎士団・リジェカ軍とアスラーン・ムスタファーの手勢がぶつかり合っているところを目指していた。

龍菲はイギィプトマイオスから見れば、妖術ともとれる奇妙な体術を心得ている得体の知れぬ女であった。

それが何の目的あってこの戦場にあらわれたのか。

その姿はソシエタスも目撃している。

「あれは……」

危機に陥った時、縁があるのか彼女が現れては助けてくれた。彼女がいなければ、今こうしてタールコと戦ってはいない。

「女神だ」

思わず、そうつぶやいてしまった。

第十九章　ガウギアオスの戦い　？

彼女の出現で、ドラゴン騎士団・リジェカ軍の危機は脱せられると、強く願った。

みるみるうちに、白い衣と長い黒髪なびかす龍菲（ロンフェイ）の姿はドラゴン騎士団・リジェカ軍とアスラーン・ムスタファーの手勢の乱戦の中へと溶け込んでいった。

それとともに、

「何奴ッ！」

というタールコ騎兵の叫びが上がるや、どおっと地面に落ち、代わって長い黒髪の女が騎馬に跨っていた。

手には、落ちていたものを拾ったのであろう、槍が握りしめられていた。

そして立ちはだかる者をことごとく薙ぎ払い、コヴァクスに迫った。

「小龍公よ、義によって助太刀せん。我に続け」

コヴァクスに並ぶや、それを追い抜き、次から次へとタールコの騎兵歩兵を薙ぎ倒す。

「おお……」

龍菲の姿を目にしたコヴァクスの身体に電撃が走った。

いつの間に来たのか、龍菲は千里眼をもち空も飛べるのか、とさえ思った。なにより、力添えをしてくれる、というのがコヴァクスの心を突いた。

龍菲の行く先に幾多ものタールコの騎兵歩兵が立ちはだかる。それを見て咄嗟に馬から飛び降りるや、だっと駆けて、槍をぐるりと回せば。

タールコの軍兵（ぐんぴょう）は薙ぎ倒され、吹き飛ばされてゆく。

騎乗にての戦いより、徒歩立ちでの戦いが得意なようだった。その白くほそい手によって槍がひと振りされるたび、タールコの軍兵

は突風にあおられたように吹き飛ばされてゆく。
そして道が切り開かれてゆく。
「なんという……」
六魔とはじめて遭遇したとき、ドラゴンの夜の革命のとき、彼女はあらわれて助けてくれた。そのときに見せた強さ。尋常なものではなかった。それはまこと人かと思わせるほど。
龍菲を知らないドラゴン騎士団やリジェカの将兵たち、タールコの将兵は突如あらわれた女によって戦況が大きくかえられようとしていることに度肝を抜かれる思いだった。
「あれはなんだ」
突然のことに、竜巻でも起こったかのように両軍驚く。女がひとりあらわれるや、まさに竜巻でもおこったかのようにタールコの軍兵は薙ぎ倒されてゆく。
それでもタールコの軍兵は突然あらわれた龍菲に驚きつつも取り囲み、しとめようとするが。龍菲は槍を地に突きたてるや、槍を片手でつかんだまま地を蹴り跳躍すると槍を中心にぐるりとまわりまるで地を駆けるように取り囲むタールコの軍兵をことごとく脚で踏みつけるようにして蹴り倒す。
たまらずタールコの軍兵は吹き飛ばされ、人馬でごったがえす戦場において龍菲の周囲のみがぽかりと空いた。進撃を阻むタールコの陣形にほつれが生じる。
それからすぐさまに龍菲は槍を抜き、駆け出した。
「進め、行け！　まっしぐらに神美帝の本陣を目指せ！」
コヴァクス怒号をはなって龍菲に続く。
大将がゆけば、呆気にとられたドラゴン騎士団・リジェカ軍は我を取り戻しわけがわからぬままに、本陣を目指した。
その距離はぐっと縮まった。
一方、ソケドキア神雕軍率いるシァンドロスも異変に気づく。
足踏みしていたドラゴン騎士団・リジェカ軍が勢いづき、本陣に迫るを見て内心焦りが生じる。

この戦いですべては決するのは自分だという自負があった。
（コヴァクス、ニコレット、侮れぬ）
まさか龍菲があらわれたなどということまで気づかず、心の中でそっと、いつかは戦わねばならぬという決意が生まれつつあった。

ニコレットと一騎打ちをするアスラーン・ムスタファーであったが、コヴァクスが一気に本陣に迫るを見てそれどころではないと引き返そうと思った。
が、己から挑んだ一騎打ちで引き返すなど、獅子王子としての誇りが許さなかった。
それでなくとも、ニコレットは逃がさない。
やはりまだ若い王太子、血気に逸りすぎるところがある。ニコレットは剣を繰り出し血気に逸るアスラーン・ムスタファーをしとめるより足止めすることに専念する。
しとめようとするのは難しい、しかし翻弄するのはさほど難しいことではない。鋭い斬撃をはなち、槍で弾かれても返す剣で刺突を繰り出す、父から厳しく手ほどきを受け熟練された剣技はアスラーン・ムスタファーの槍をとらえてはなさないかのようだ。
気がつけば赤い兵団はアスラーン・ムスタファーらを取り囲み、残りの手勢はコヴァクスに率いられて本陣に迫ろうとしている。
その道筋をつけたのは、龍菲であった。
龍菲ふたたび騎兵より馬をうばいとり、槍を振るいタールコの軍兵を薙ぎ倒しコヴァクス率いるドラゴン騎士団・リジェカ軍を導く。
黒髪をなびかせ、勇壮にして華麗な白き衣のその姿、神話に伝え聞く戦乙女を思わせる。

神美帝ドラグセルクセスは愛馬イスカンダにまたがり、戦況をじっと見守っていたが。おもむろにドラゴン騎士団・リジェカ軍の方へと、駒を進めた。進めざまに、剣まで抜きはなった。
「神美帝がゆかれるぞ」

本陣の将兵も続く。
その気配は本陣をめざすコヴァクスも察した。なにかが起こった、と。
「雑魚は引き受けるわ。あなたは大将を」
「わかった」
龍菲はコヴァクスに並んでそう言うや、馬首をかえして踏みとどまってしんがりにつき、ただ一騎タールコ軍を足止めしようとする。
わずか一騎で、と思ったが龍菲を信じコヴァクスはひたすら本陣を目指した。幕舎もはっきりと見えるようになった。
というとき、向こうから剣を掲げこちらに向かってくる騎馬武者がある。
「……ああ！」
思わず声をあげた、豪奢な甲冑に身をつつみ、威厳にあふれたその騎馬武者。これなんほかならぬ神美帝ドラグセルクセス。
「青年よ、そなたの剣を受けてしんぜる」
「望むところ！」
両者は一気に距離を縮め、ぶつかった。
激しく剣が交わる。
神美帝の剣、唸りを上げて風を切り、激しい衝撃をコヴァクスにもたらす。互いの愛馬も乗り手の意志を受けてか鼻息が荒い。
「おお、神美帝御自ら……」
タールコの将兵らは神にもひとしくあがめる神美帝が自ら剣をとり、敵軍大将と渡り合うのを見て、固唾を飲んでこれを見守った。
コヴァクスも引かぬ。雌雄を決するは今と、必死に剣を振るう。
しかし、神美帝の剣、大帝国の頂点に立つにふさわしく、受けるたびにずしりと重みがのしかかる。そう簡単に決着はつくまい、いや、それどころかこちらもやられるかもしれない。
（これが、神美帝か）
どっと、首筋背筋に汗が吹き出る。
だが気持ちも昂ぶる。ここまで来るのにどれほどの苦難があった

であろうか。その苦難を乗り越え切るためにも、神美帝ドラグセルクセスとの戦いは避けられぬ、そして倒さねばならぬ。

両軍いつのまにか戦いの手を休め、この一騎打ちを見守っていた。

「おおッ！」

コヴァクス、剣とともに唸りを上げて神美帝の剣とまじわる。だが軽く受けられ、弾き返される。それから襲い来る斬撃を咄嗟にかわし、また受け流し。すかさず斬撃を送る。

戦いは一進一退のように見えた。

とはいえ両者の目を見れば、コヴァクスは必死なのに対し、神美帝ドラグセルクセスの目は、まるで我が子を見るかのように静かで暖かみさえ感じさせた。

（見ておるか、ドラヴリフトよ）

知らぬうちに、己が謀略によって葬った宿敵に心で語りかけていた。

（できることなら、こうして雌雄を決したかったものだ）

神美帝ドラグセルクセス、このときほど宿敵というものを意識したこともなかったであろう。

もう大龍公ドラヴリフトはいない。しかしその子らがこうして自分に立ち向かってきている。

（時は流れるものだ）

剣を交えつつも、感慨深かった。

だが、手加減をくわえることはしなかった。

神美帝の斬撃、打つごとに重みを増してゆく。コヴァクスは徐々に押される格好になり、後ろへさがってゆく。

（このままやられてたまるかッ！）

どうにか踏みとどまり、神美帝を倒したかった。しかしこればかりは気持ちだけでどうすることもできない。

そしてついには、

「うおッ！」

というコヴァクスの唸りがあがるとともに、神美帝の剣を受けて、

コヴァクスの剣は真っ二つに折れた。
切っ先は宙で弧を描き、地に突き刺さる。
「くっ……」
無念、と神美帝ドラグセルクセスを見据える。その姿はとてつもなく大きかった。
ついにはその剣が、己の首をはねるか、と観念したときであった。
「ソケドキア軍だ！」
という怒号がところどころではなたれる。シァンドロス率いるソケドキア神雕軍がついに本陣に達したのであった。
シァンドロスは乱戦の中を駆け巡り、コヴァクスと一騎打ちをする神美帝ドラグセルクセスをついに見つけ、
「あれが神美帝か！　討ち取れ！」
と怒号をはなって号令をくだした。
タールコの本陣は、神美帝ドラグセルクセス自ら一騎打ちを敵将に挑んだことにより、指揮がおろそかになり、指揮系統にほつれが生じていた。ということは、本陣の守りもほつれが生じることだった。そこをシァンドロスの手勢に突かれ、掻き回され、一気に乱れていった。
ソケドキア軍の乱入により、一騎打ちどころではなくなり、神美帝ドラグセルクセスはコヴァクスを一瞥し、
「勝負は後日」
と馬首を反し、
「退け！」
と号令をくだした。

第十九章　ガウギアオスの戦い　？

ソケドキア軍は迫るムハマド、ギィウェンの手勢を振り切り見事本陣に乗り込んだ。が、それはドラゴン騎士団・リジェカ軍のあとで、しかもコヴァクスは神美帝ドラグセルクセスと一騎打ちをしていたではないか。

（神美帝を討つのは、オレだ！）

シァンドロスはゴッズを駆けさせ、神美帝ドラグセルクセスに迫った。

コヴァクスはといえば、剣を折られすんでのところで討たれるところであった。咄嗟にグリフォンから飛び降り落ちている剣を拾い、すかさず飛び乗った。

その間にも神美帝は去ってゆく。

シァンドロス率いる神雕がそれを追う。

背中を見せるタールコ兵を容赦なく斬り伏せ、その屍を踏み越えてゆく。

「我らも追うぞ！」

コヴァクスも手勢を率い、神美帝を追った。

だが、しんがりをつとめる手勢もあり、それに阻まれて、神美帝ドラグセルクセスの背中がみるみるうちに小さくなっていった。

神美帝の「退け」という号令は、タールコ軍全体に広まり、ニコレットと一騎打ちをしていたアスラーン・ムスタファーもニコレットを忌々しく一瞥し、

「勝負は後日」

と言って去ってゆこうとする。

「追え、逃がすな！」

立ち去ろうとするアスラーン・ムスタファーを追い、ニコレットは容赦なくタールコ軍を追わせた。この戦いにおける勝利を決定的なものにするためには、相手が背中を見せようと手加減してはなら

ぬ。
　一瞬アスラーン・ムスタファーは後ろを振り向いた。色違いの瞳を光らせ、ニコレットが追いかけてくる。
（まだ戦えるというのに）
　しかし父、神美帝からの命令ならば退かねばならぬ。
　イムプルーツァが手勢を率いしんがりとなって、アスラーン・ムスタファーをにがそうとする。
「ええい！」
「なんの！」
　とパルヴィーンとセヴナは激しく剣を交え一騎打ちをしていたところだったが、それどころではないとパルヴィーンはセヴナを睨み、
「おぼえておいでよ！」
　と立ち去ってゆこうとする。
「あ、待て！　逃げるなんて卑怯よッ！」
　セヴナにダラガナをはじめとする赤い兵団も立ち去るタールコ軍を追う。
　セヴナはここぞとばかりに得意の弓矢を取り出し、矢をはなつ。敵の背中に向けて矢を射るのは不本意ではあるが、ニコレットの意志どおり勝利を決定的なものにするためには、やむをえない。
　こういうときは、心を鬼にせねばならぬ。でなければ、不意の反撃を喰らい勝利を逃しかねないのだ。
　セヴナはアスラーン・ムスタファーに狙いを定め、矢を放った。しかし、やはり王太子の守りは堅く、その身を厳重に取り囲んでいるため、当たるのはそれらの将兵たちばかり。セヴナの矢は、人の壁にはばまれて、アスラーン・ムスタファーにはとどかなかった。
　シァンドロスを追っていたムハマドにギィウェンも、退却の命令に驚き急いで退いてゆく。
　まんまと敵軍を本陣に乱入させてしまった。その責めはいかほどになるであろうかと思うと、生きた心地もなかった。
　アスラーン・ムスタファーの副将をつとめるイムプルーツァの手

勢が中心になってしんがりをつとめ、退きつつ退きつつし、リジェカ・ソケドキア連合軍を食い止める。その働きあって、アスラーン・ムスタファーも神美帝ドラグセルクセス、そしてタールコ軍のほとんどはガウギアオスの砂丘地帯を出て、都トンディスタンブール目指し、逃れることができた。

堅牢な城塞都市であるトンディスタンブールに籠れば、わずか五万の軍勢に落とされることはない。

それはリジェカ・ソケドキア連合軍もわかっている。タールコ軍三十万がガウギアオスの砂丘地帯を出たところで追撃をやめた。だがわずかの軍勢で大軍を退かせたと気勢は十分に満ち、将兵らおのおのが、おのずと、

「えい、えい、おう！」

「えい、えい、おう！」

という勝ち鬨をあげはじめた。

勝ち鬨を耳にしながら、イムプルーツァも、

「まだ戦えるというのに」

と苦虫を噛み潰す思いで、退却してゆく。

「勝ったのか」

コヴァクスは退却しゆくタールコ軍を目に、ぽつりとつぶやいた。いつの間にか龍菲が隣にならんでいた。彼女の黒い瞳は、しずかにコヴァクスの、どこか力の抜けた姿を映し出していた。

神美帝ドラグセルクセスとの一騎打ちに挑み、すんでのところで討たれようとしていたのだ。彼にしてみれば、生きた心地もなく死も覚悟した。なにより、神美帝が一旦退却したとて、心から敗北をみとめているとは思えなかった。

「やったぞ、我らは勝利をもぎ取ったのだ！」

シァンドロスは高らかに宣言しながら、コヴァクスのもとまで来ようとして、龍菲の姿を見、一瞬身を硬くした。

（いつの間に……）

あの暗殺者は龍菲に返り討ちにあったのは知っているが、まさかここまで来ていようとは。しかも親しげにコヴァクスの隣にいる。シァンドロスの心に邪推が生まれる。

（このふたり、できているのか）

だが、気を取り直し心のうちを気づかれぬようさりげに近づき、コヴァクスと握手をかわす。

「神美帝こそ討てなかったが、これでタールコの気勢をそぐことは十分できたであろう」

「うむ……」

コヴァクスもつとめて笑顔を作り、うなずく。

そうしている間に、ニコレットにソシエタス、ダラガナらも来る。そして龍菲の姿に、すこし戸惑う。助けてくれるのはありがたいが、コヴァクスの隣に親しげにいて、どういうつもりだろう。

だが、ドラゴン騎士団・リジェカ軍がタールコ本陣にゆけたのは、彼女の働きによるところが大きい。

「たびたびのご助力、かたじけない」

合流したソシエタスが一同を代表するように、龍菲に言った。彼女のことを知らないダラガナやセヴナら赤い兵団に、他のリジェカ将兵は、不思議そうに龍菲を見ている。

「いいえ。気にすることはないわ……」

龍菲は何事もなく返した。別に恩を売ろうとか、取り入ろうとかは、考えてはない。

「義によって、助太刀をしたまで」

「義によって、か……。ありがとう」

コヴァクスは微笑み、手を差し伸べた。その手を龍菲は握り返し、握手をかわした。

その顔は、笑顔だった。

（義士は、いずこの地にもいるものね）

龍菲はコヴァクスに良い印象をもっていた。

が、ニコレットは複雑な思いだった。

（私たちには大願がある。そんなときに色恋沙汰など……）

兄と龍菲がただならぬ仲になり、大願を忘れてしまわないかと、そんな心配があった。

とはいえ、今は、勝ったことが大事だった。龍菲のことは追々紹介するとして、今は勝利の気勢を保ち、タールコに征服された旧ヴーゴスネアの失地を回復し、さらにはオンガルリを復興させるのだ。

そう、大願まで着実に一歩一歩近づいているではないか。

「私たちは勝ちました。勝ったのです。この喜びを、皆で分かち合いましょう！」

ニコレットは高らかに言った。

シァンドロスも調子を合わせ、勝利を高らかに宣言した。

リジェカ・ソケドキア連合軍は、勝利の喜びを爆発させ、天まで届けと高らかに勝ち鬨をあげたのであった。

第十九章　ガウギアオスの戦い　？

一方、迫るリジェカ・ソケドキア軍を防ぎつつ都トンディスタンブールに退却するにいたったタールコ軍、および神美帝ドラグセルクセスは王宮に入るとともに王太子アスラーン・ムスタファーおよび臣下たちを呼び寄せた。

「こたびの戦い、予の不徳のいたすところのゆえに、敗北の憂き目を見ることとなった」

アスラーン・ムスタファーおよび臣下たちは言葉もなかった。三十万という大軍を擁していながら、わずか五万の軍勢に背中を見せてしまったのだから。

指揮をおろそかにし、コヴァクスに一騎打ちを挑んだことで、本陣の指揮系統は乱れ。シァンドロスの軍勢が乱入するや一気に、崩れてしまった。

（予も所詮は、人である）

神美帝といえど、所詮は人であり、あやまちもおかす。そのことを語り、アスラーン・ムスタファーや臣下たちに詫びた。

しかし神美帝ドラグセルクセスの目の色は、濁ってはいなかった。むしろ輝いてさえいた。

都トンディスタンブールは言うまでもなく厳戒態勢が布かれ、各地に守備兵も配置されて守りも堅くしてある。

都は騒然としていた。意気揚々と進軍していった三十万の軍勢が、敗北し都に退却したのだ。勢いに乗った敵がトンディスタンブールに攻め込むことも考えられ、都市民に緊張が走る。

「ついに神美帝の神の威も地に落ちてしまったのか」

と口にする者も、少なくない。

その、勝ちに乗ったリジェカ・ソケドキア連合軍は、勝ちの勢いに乗っているとはいえ、三十万からの軍勢の守備する都市を落せる

算段まではないし、無謀をはたらくほど、そこまで愚かでもなかった。

ガウギアオスの戦いにおいては、トンディスタンブールを陥落させるのとは別の意図がある。

ただちに幕舎が設営され、ソケドキア神雕王シァンドロスにドラゴン騎士団小龍公コヴァクスに小龍公女ニコレットらが一堂に会する。

幕舎の中で一同輪になって、互いを見渡す。

「これよりタールコに征服された旧ヴーゴスネアの国々に向かう」

シァンドロスは一同に向かってそう言った。周囲を見渡すその目、この連合軍の長であり、全てを統べる王であるかのようだ。

見渡す一同の中には、白衣の龍菲（ロンフェイ）もいる。今回は姿をくらますことはせず、コヴァクスに招かれるがままにともに幕舎に入った。

彼女はうつむき加減に視線をさげ、ひとり瞑想をしているようだ。

幕舎に入ったとき、コヴァクスからの紹介はあったが、和んでいる暇はなかった。龍菲のことが気になりつつも、これからの動きにも専念せねばならなかった。

「戦乱により分裂し、ついにほとんどをタールコに征服されてしまったヴーゴスネアの地を再び統一する機会は、今をおいて他にはない」

シァンドロスは語った。そう、ガウギアオスの戦いに勝利したあと、トンディスタンブールに攻め込む無謀はせず、すぐに引き返しタールコに征服された旧ヴーゴスネアの地域を奪還するのだ。

「ガウギアオスでの戦果はただちに広まり、旧ヴーゴスネアの旧貴族・豪族も我らに味方し立ち上がるであろう。そうなれば、ヴーゴスネアの悲願であった統一が再び成し遂げられるのである」

コヴァクスとニコレットはシァンドロスの語りを聞きつつ、統一という言葉を好んで用いることに違和感を覚えざるを得なかった。

戦いに勝ったあと、タールコに征服された旧ヴーゴスネアの地域にゆく、というのは当初からの計画でもあった。またそれが事実上

のソケドキアの版図拡大なのも承知していた。ただリジェカだけはそのままにし、旧ヴーゴスネアはソケドキアとリジェカの二ヶ国体制になって新しい歴史を歩む、はずであり。

そのあと、旧オンガルリにすすみ、復興の悲願が達成されるはずであるが。

拳を握り熱く今後の展開を語るシァンドロスを、ありのまま受け入れるのは、どうにも難しい。

それに、タールコとてこのままトンディスタンブールに閉じこもることはするまい。きっと、次の手を打ってくる。

コヴァクスは、神美帝ドラグセルクセスと一騎打ちをしたときの、あの威圧感と、剣を折られた衝撃を忘れることはできなかった。

そのタールコは、やはり次の手を打とうとしていた。

神美帝ドラグセルクセスは、敗北によって卑屈にはならず、己の不徳と敵の強さを素直に認めたうえで。

「敵はトンディスタンブールにまでは攻め込まず、タールコによって征服された地の奪還にゆくであろう」

と語った。お見通しであった。

ガウギアオスでの戦果は各地に広まり、現地のタールコ人の動揺は大きいものになるであろう。勢いに乗ったリジェカ・ソケドキアの連合軍が、そこを突き、奪い返すことは容易に想像できた。

「ならばどうなさいます」

アスラーン・ムスタファーは問うた。若き獅子王子（アスラーン）には、勝てる戦いのはずであった。しかし「退け」の号令のため不本意にも敵に背中を見せることになってしまった。

この屈辱を晴らす機会がほしいところだ。

「ムスタファーよ、そなたはおのが手勢を率い、リジェカにゆけ」

「リジェカに……」

昨年自分たちが征服した旧ヴーゴスネアの国々の援軍にゆかず、リジェカにゆくというのか。イムプルーツァは得心するようにうな

ずく。
「なるほど。いまなら、リジェカは手薄。そこを突くのですな」
「それもある。だが、リジェカに不穏な動きありという報せが会戦直前に入ってきた。リジェカにすすむ良い機会はまさに今である」
「リジェカに、不穏な動き。それはどのようなものでございますか」
アスラーン・ムスタファーには、リジェカに不穏な動きがあるなど想像できるものではなかった、ドラゴン騎士団を擁し、堅固な国造りをしていると思ったのだが。
「反乱が起こるやもしれぬ」
「反乱……」
ますます信じられぬことである。だが、神美帝ドラグセルクセスの耳に入る報せである。各地に斥候をはなち、民やあるいは兵ともまじわって得た報せは、ことに重大な報せは確認に確認を重ねて神美帝へと届くようになっている。
しかし、ガウギアオスの戦いでリジェカの結束はいっそう強まるのではないか。反乱が起こるなど、やはり信じられぬことである。
「なぜ、反乱が起こるのでございましょう」
「それは……」
神美帝ドラグセルクセスは、伝え聞いた報せがいかなるものかを語った。アスラーン・ムスタファーは、
「ご明察、おそれいります」
と言い、敗北にあってもなお衰えぬ洞察力に感服していた。
それから、ガウギアオスでの敗戦の沙汰はリジェカに向かうアスラーン・ムスタファーの戦果次第ということになり。シァンドロスの先行を許してしまったムハマドにギィウェンの責任はひとまず不問とされ、ふたりはほっと胸をなでおろした。
陽は暮れ、夜の帳がおちるころ。リジェカ・ソケドキア連合軍は一夜戦勝祝いの会食を兼ねた軍議をひらき。以後どのような進路で進んでゆくかを話し合われ。

まずは旧ユオ地域から、ということになった。
ガウギアオスでの戦いを伝え聞いた現地のタールコ人代官は恐れをなし、旧ユオ地域の貴族・豪族は立ち上がり味方についてくれるかもしれなかった。たとえそれがなくとも、戦意高き連合軍である。あるかなきかわからぬ味方を当てにするようなことは考えず、今の軍勢だけでも勝てる算段があった。
話が決まれば、もうあとは好きなままに飲み食いをするだけである。幕舎には豪快な、痛快な笑い声が響き。
それを耳に、コヴァクスとニコレットは感慨深げに、オンガルリ王国再興の大願を胸に描いていた。
龍菲はこの席にはいない。一介の一武術家の身であることを自覚し、戦いが終わってから必要以上に目立とうとはせず、人との接触もなかった。が、リジェカ陣営の端に、その身を置き、夜空を見上げながらひとり物思いに耽っていた。
人と接触はせぬとはいえ、あれだけ人目についた彼女のことは将兵たちのかっこうの語り種(ぐさ)となっていた。
「私もどうかしたわ」
夜空に向かい、ぽそっとつぶやいた。
義によって、とはいえ、なぜコヴァクスに味方する気になったのか、自分でもよくわからない。
「いいかしら?」
セヴナだ。龍菲のことが気になって、来たようだ。龍菲は人とまじわろうとしないところから、孤独を好む性格かと思われた。ならでしゃばった真似をしてはいけないか、と思うものの、はるか東方の帝国・昴(マオ)の者であるということが好奇心を湧き上がらせ。同じ女同士、話せばなにか通じるものがあるかもと思って、声をかけた次第。
「ええ」
龍菲は赤毛の少女が自分を興味津々と見つめるのを見て、ふっと柔らかく笑みを浮かべた。好奇心が赤い瞳を輝かせている。が、嫌

な気分はない。セヴナはいたずらに人に悪意や敵意を抱くような、心の狭いところはない、というのは、その瞳からうかがい知れた。

「昴から来たんですってね。よかったら、昴の話を聞かせてもらえないかなあ、と思って。だめ？」

武術に関することを聞かれたら、こたえないつもりだったが、セヴナは昴への関心が大きいらしい。セヴナは愛想よい笑顔で、龍菲を見つめていた。

「いいわよ」

それくらいなら、と龍菲は故国である昴のことを語り。セヴナはうんうんを相槌を打ちながら、真剣に話を聞いていた。

夜空の月や星星はきらめきながら、地上を見下ろしていた。それらは、地上での人のことなど、お構いなさそうに、ただきらめいていた。

「天、なにをか言うや」

話の途中、龍菲は古代の賢聖の言葉を、ぽそっとつぶやき。セヴナは意味がわからず、ぽかんとしていた。

第二十章　反乱　？

さてガウギアオスでリジェカ・ソケドキア連合軍とタールコ軍がわたりあっているころ。

リジェカの首都メガリシにおいて、若き王モルテンセンは留守を預かり国をよく治めていた。

カルイェンも若い王をよく助けていた。はずだった。

ドラゴン騎士団が、リジェカ軍がガウギアオスに向かったころまでは。

ある日、カルイェンは書物をたずさえ、モルテンセンのもとまでやってきた。

「我がリジェカ国における、農産物の出来具合を記した書でございます。ぜひ、王に目を通していただきたく」

そばにひかえるイヴァンシムとクネクトヴァの助けも借りながら、内政にいそしんでいたときだった。モルテンセンは、書を目にすると、

「読もう」

と手を差し出した。

というときであった。カルイェンの目が、かっと見開かれるや、何を思ったかモルテンセンの顔面に向け、書物を思いっきり投げつけた。

「あっ！」

書物はひたいを直撃し、モルテンセンは頭をおさえた。それから、カルイェンの手には光るもの。それは短剣であった。

「なにをする！」

イヴァンシムとクネクトヴァは咄嗟に飛び出し、カルイェンの短剣を握る手をおさえにかかった。モルテンセンは驚き、急いで身を伏せ、身を転がしイヴァンシムの後ろへと隠れる。

「おいぼれに小僧が、邪魔立てするな！」

「ほざけ、貴公、乱心したか！」
「私は正気だ！」
イヴァンシムとクネクトヴァ、カルイェンはもみ合って、ついには床に転がりながら短剣を奪い合っている。
しかし、カルイェンは内政向きの、普段の彼とは思えぬような剛力を見せ、短剣を離さない。
「これは……」
一瞬モルテンセンが呆然としたとき、城が揺れるように、騒然となった。
「反乱だ！」
「城門が破られた」
と言う声まで聞こえた。
「反乱だと！」
モルテンセンは心臓が飛び出しそうなほどに驚くも、突然のことに動揺して身動きできない。
「クネクトヴァ、ここは私に任せて、そなたは王をお連れして逃げろ！」
「は、はい」
カルイェンと格闘しながらイヴァンシムに言われ、「失礼！」と言いクネクトヴァは素早い動きで王の手を取り、執務室から出ようとする。
逃げ出そうとしたとき、カルイェンに仕える騎士、ヂシラッカが数十名と言う兵士を率い、城内で守備兵と渡り合っていた。
ヂシラッカはモルテンセンがクネクトヴァに手を引かれ逃げようとするのを見止め、
「王をしとめろ！」
と剣を振りかざし、一斉に襲いかかった。
クネクトヴァは懐から、ルドカーンから与えられた短剣を取り出し、モルテンセンの手を引き、迫り来る剣や槍をかわしつつ、その間をすり抜け駆け抜けだ。

守備兵も王を守れと取り囲み、襲撃を払いのける。
ギシラッカには数名の守備兵が当たり、王を逃そうとする。
「これは一体どういうことだ」
モルテンセンは引かれるがままに周囲を見渡し、唖然としつつも叫んだ。反乱というなら、カルイェンが起こしたのか。なぜそんな真似を。
「国を売り飛ばそうとするような、王など、殺してしまえ！」
「リジェカはオンガルリの属国じゃない！」
不意に耳に飛び込む言葉。モルテンセンには、咄嗟には意味は理解しかねた。
「マイアは、マイアは無事だろうか」
モルテンセンが狙われているなら、妹のマイアも狙われるであろう。妹が心配になり、モルテンセンはクネクトヴァの手を振りほどこうとして、マイアの居室へ向かおうとした。
「危のうございます！」
クネクトヴァは手を強く握りしめるが、ついには手を振りほどかれ、マイアの居室へと向かうモルテンセンを追いかけることとなった。
幸いにも、守備兵がモルテンセンのそばにつき、守りを固める。だが攻めの手はゆるむことなく、剣や槍を繰り出してくる。
ギシラッカもさるもの、数名の守備兵と渡り合っていたが、それをことごとく斬り払った。
「余計な手間を取らせおって」
舌打ちし、逃げたモルテンセンを追おうとし。その間も、守備兵と剣を交えこれを斬り伏せた。
この、突然の反乱。カルイェンは書物をわたすふりをしてモルテンセンを襲うなど、なにが彼を凶行に走らせたのだろうか。
（まさか、これらはカルイェンどのが城に入れたのか）
クネクトヴァは、はっとひらめく。この状況、そうとしか言えないではないか。

モルテンセンは夢中になって駆けた。途中で刃が襲いくるもそれをかわし、あるいは守備兵に守られながら、マイアの居室へと駆けた。

すると、むこうから守備兵に守られながらこちらへ向かってくる少女が見えた。言うまでもない、マイアと、メイドのカトゥカだった。

武装勢力はマイアにも襲い掛かったのだ。だが守備兵がよく守り、逃がそうとしていた。

「マイア！」

「お兄さま！」

互いをみとめ、ふたりは守備兵に守られながら手を握り、城から逃げようとする。

「カトゥカ！」

「クネクトヴァ！」

このふたりも、たがいをみとめ、それぞれの主につきながら一緒に逃げ出そうとする。

一方、カルイェンと格闘するイヴァンシムであったが。やはり修羅場をくぐり抜けてきた猛者である、もがくカルイェンから短剣を取り上げ、それを突きつける。

「貴公、これは一体なんのつもりか。この騒動も貴公のしわざか」

カルイェンは顔をゆがめてイヴァンシムをにらみつけた。そこには、憎悪が溢れていた。よき臣下として王を助けていたのが、なにゆえに、このような眼差しをイヴァンシムに向けるのか。

そして王を殺そうとしたのか。

「そうだ、忌々しい異邦人め。リジェカは、リジェカ人だけのものだ」

と、カルイェンは言った。

「どういうことだ」

「言ったとおりだ。リジェカはリジェカとして、リジェカ人のみが

統べるのがよいのだ。しかし、あの王は、いや小僧は、あろうことかオンガルリ人の異邦人を軍の頂点にすえた。それがどういうことか、貴様にわかるか」

「わからぬ」

「なら言おう。ドラゴン騎士団の目的はオンガルリにあり。リジェカなど、オンガルリが復興されれば、その属国にされてしまうではないか。王はドラゴン騎士団にそそのかされ、国を売った売国奴だ」

「馬鹿な」

カルイェンの理屈はあまりにも突飛なように思えた。異邦人とは、ドラゴン騎士団に自分たち赤い兵団のことを指しているのだろう。たしかに、リジェカ人ではない。だが、国を越えて、どれだけリジェカのために働いたと思っているのだ。

オンガルリが復興したら、王がリジェカを売ってオンガルリの属国にされるなど、ありえぬではないか。

コヴァクスにニコレットは日々言っていた、オンガルリが復興されれば、両国はよき同盟国として互いに手を携えてよき国造りにはげもう、と。

「この戦乱の世、そんな戯言を信じられるか！　やつらは王をそそのかしているのだ。オンガルリが復興されれば、ドラゴンの牙はリジェカに向けられるのだ」

カルイェンは、ドラゴン騎士団がリジェカをオンガルリの属国にする気だと、本気で思っているようだ。それも乱世がそうさせたのか。

「ならば、この反乱のあとはどうする。誰が王になる」

「かくなるうえは、私が王となってリジェカを統べる」

「ほざけ！」

ついに本音を吐いた。と、イヴァンシムには写った。この男、リジェカのためと言いながら、ほんとうは己が王位を狙っているのではないか。

「考えてもみよ。ドラゴン騎士団は王をそそのかしたうえに、勝ち

目のない戦いにリジェカを巻き込んだのだ。これだけでも許せぬ」
「だからといって、貴公が王位についてよいという道理があるか」
「ある！　私はリジェカを心から愛している」
もう、理も非もない。カルイェンはどうあっても王位につこうとしているようだった。

第二十章　反乱　？

しかしカルイェンは、王に恭しくつかえるふりをしながら、腹のうちでそんなことを考えていたのか。

恭しく仕えたのも、信用を得ながら、この機会をうかがっていたのか。

まったくもって、まんまとはめられたものだった。

「貴公はいまがどのようなときか、わかっているのか。ドラゴン騎士団をはじめとする我がリジェカ軍が、タールコとわたりあっているのだぞ」

「言ったであろう、その戦は負ける。オンガルリの異邦人に、リジェカ人が率いられてたまるものか」

「まだ言うか」

「異邦人が邪魔をせず、私が王都なってリジェカを統べれば、タールコなどに負けはせぬ」

一体何の根拠があって、このようなことを言うのだろう。彼は自分がそこまで優秀だと言いたいのであろうか。

（よもや、こやつは内戦を見て、そう思うようになったのか）

ヴーゴスネアは国が七つに別れる凄惨な内戦があった。なぜそうなるのか、多くの人々が悩み、苦悶したが。そうするうちに、己の思い描いた理想を現実にするために、王位を狙うようになったのか。

その理想とは、カルイェンが王につき、自分の思い描いた政（まつりごと）を執り行うことなのか。

しかし、突然挙兵して反乱を起こすような者が、どのような政をするのか。

「異邦人や愚かな人間を排し、優秀なリジェカ人のみをもって国を治めれば、おのずとよくなる。そう、純血主義だ。優秀なリジェカ人のみの同一民族をもって治める、同一民族国家主義だ」

「いよいよ戯言をほざく。そのような夢想で国が治められるか」

「やってみねば、わからぬ」
カルイェンは、ドラゴン騎士団にあらぬ疑心暗鬼を生じたのみならず、リジェカが多民族国家であることも憎悪し。同じ民族、国民同士で、かつ優秀な者のみならば、決して争いはせぬと思い込んでいるようだ。
しかし人の素質という者は千差万別であり。またこの大地、様々な民族がひしめき合い、混血も進んでいる。ニコレットのように両の瞳の色が違うというのも、少ない例ではあるが、珍しいことではないし。
この多民族地域で、混血も随分とすすんでいる現実があるのを無視して、優秀な同一民族国家など、まさに夢想というものではなか。しかしカルイェンは疑心暗鬼とともにその夢想にとりつかれているようだ。
問答をするうち、剣を振りかざした兵士が数名なだれこみ、カルイェンとイヴァンシムの間に入り、イヴァンシムに襲い掛かる。その掛け声は、
「くだばれ異邦人！」
だった。
（なんという言葉遣いの荒い）
剣をかわし、素早い動きで兵士の間を駆け抜けその場を脱しながら、ふと、そんなことに気づいた。おそらく、身分の低い兵士であろう。意識せずとも、
「この、くそったれが」
だの、
「てめえこのやろう、死んじまえ！」
だの、
「うらぁー、おらぁー！」
だの、およそ教養があるとも思えぬ、荒い言葉の罵詈雑言が次から次へと耳に入ってくる。「うむ」や「おのれ」と言うのは守備兵ばかりで反乱の兵には少ない。いや言葉遣いだけではない、剣や槍

などの武具の扱い、甲冑の着こなしがお粗末な者までいる。中にはやたらめったら剣を振り回すだけだったり、槍を無分別に突き出すだけの者までいる。もしかしたら、彼らの中には、にわかに動員された非戦闘員も多数いるのかもしれない。

（カルイェンめ、教養のない、身分の低い者をそそのかし、反乱を起こしたのか）

彼らは教養がないゆえに、素直なところがあるといえばある。しかし、その素直さが利用され、異邦人排除をカルイェンによってそそのかされたのだろう。

優秀なリジェカ人が治める国家を唱えながら、このような者を利用し反乱を起こす矛盾。カルイェンは、そのことに気づいているのかどうか。

ともあれ、逃げた王を追ってイヴァンシムは駆けた。

わっ、と大波が押し寄せるように、城内はおろか城外までもが騒然となる。ふと窓から外をのぞけば、城外でも乱闘がはじまっているではないか。

数百の兵士が、あろうことか民衆に襲い掛かり、容赦なく殺戮を繰り広げていた。

（やられた！）

カルイェン、才能ある畜生というか、おそらくリジェカの国造りがはじまるとともに、この反乱の段取りを徐々にでも進めていたのであろう。反乱を起こす以上、成功させねば死罪である。となれば、是が非でも成功させねばならぬ。

カルイェンはリジェカの古い大貴族の出だ。そしてなにより、教養もあった。だからこそ、王は彼を必要として内政における助けをもとめたのだが。

大貴族であるということは、その気になれば数千という規模の軍隊ももてる。おそらく、金や食べ物で身分の低いリジェカ人を反乱に誘い、飼いならしていたことであろう。

王の信頼も得て、まさか反乱を起こすなど夢にも思わなかったが、

その信用をカルイェンはまんまと利用したのだ。
（迂闊であった）
イヴァンシムはそれを見抜けなかったことで自分を責めた。
なにより、いまドラゴン騎士団およびリジェカ軍がガウギアオスでタールコと渡り合っている。本国がこんなことになってしまっては、ガウギアオスで勝っても、その勝ちは意味をなさなくなってしまうではないか。
（どうするべきか）
思案しながら襲い来る刃をかわしながら、駆けた。駆けるうち、守備兵に守られ、城外へ逃れようとするモルテンセンとマイアらに追いつく。
「フィウメにゆきましょう」
モルテンセンらに追いつくと、イヴァンシムはそう言った。
フィウメは信頼のおけるメゲッリが太守をつとめ、よく治めている。まさか彼もが内心あらぬことを企てていることはあるまい。
「フィウメか、そうしよう」
モルテンセンは幼い顔をしかめ、苦々しく言った。もうそれしかないだろう。
十人ほどの守備兵はよく戦い。行く手を阻む刃と渡り合い、これをどうにかしりぞけながら、馬舎までゆく。ここでも守備兵と反乱の兵が渡り合っていた。
「王を逃す馬を用意せよ」
イヴァンシムが叫べば、守備兵の数人かが渡り合いつつも馬を曳き、モルテンセンは駆けてマイアを抱きかかえ急いで飛び乗った。
マイアはモルテンセンにしがみついた。
「お兄さま、こわい」
「しっかりつかまっていろ」
モルテンセンは手綱を操り、馬を駆けさせた。
イヴァンシムに、カトゥカを後ろに乗せてクネクトヴァも馬を駆り、守備兵もそれぞれ騎乗しモルテンセンに続く。

（まだ子供ながら、凛々しいお方だ）

内心、イヴァンシムはモルテンセンに感心していた。この騒動に遭っても、驚きはしたが、王として堂々と振舞っている。末はよき王になるであろうに、反乱に遭い、逃げねばならぬのが不憫であった。

（カルイェンは、それがわからないのか）

悲しいものである。リジェカはよき国として、着実に国造りを進めていたというのに、ひとりあらぬことを考えた者のためにまた争乱状態となってしまった。

「道を開けよ、跳ね飛ばすぞ！」

反乱の兵が行く手をさえぎろうとするのを、思い切ってモルテンセンは突っ切った。言葉通り、跳ね飛ばされる者もあった。

馬蹄響かせ、城外に出てみれば。街では反乱の兵による殺戮が繰り広げられ、さすがにモルテンセンは息を呑み、歯を食いしばり無念さを噛みしめた。マイアはモルテンセンの胸に顔をうずめ、しがみつきぶるぶる震えていた。

「また、争乱か」

モルテンセンは嘆息した。

都メガリシも長い内戦のすえに民衆革命が起こり、モルテンセンとマイアも危ないところであった。ドラゴン騎士団に赤い兵団があらわれなければ、どうなっていたことだろう。

それがおさまり、国造りにはげめる、と思った矢先に、カルイェンの反乱。

（人はなぜ争いを好むのだ）

子供心に、まるで大人たちは悲しみと苦しみを奪い合って喜んでいるように思えた。

守備兵もよく戦うが、不意をつかれ形勢は不利。

「王が逃げやがるぞ」

「逃がすんじゃねえ。ぶっころせ」

「この、売国奴が」

モルテンセンに、刃とともに向けられる言葉。事情を知らぬモルテンセンには、なぜそのようなことを言われなければならないのか、わけがわからなかった。

しかし、反乱の兵のなんと卑しいことであろう。言葉遣いも荒く、それにともない顔つきもよくない。しかも彼らはこの争乱を楽しんでいるようでもあった。

奪いたい放題の殺したい放題。戦争とはそういうものだ、とはいえ、それとも違うように思えた。訓練された軍隊の体をなしていない。

（このような者どもに、都を蹂躙させるとは）

ドラゴン騎士団に赤い兵団がいれば、造作もなく蹴散らしたであろうが、なにぶんいまは出征している。カルイェンはその頃合も見計らったのであろう。

「覚えておれよ。私はきっと帰ってくる」

モルテンセンは叫んだ。無念さを噛みしめ、フィウメへと、ただひたすら駆けた。

第二十章　反乱　？

リジェカ軍の出征中、カルイェンは反乱を起こし、都メガリシを制圧した。

王はわずかな従者をともなって、やむなくフィウメへと逃れた。

悲しいかな、着実な国造りを進めていたリジェカは再びの争乱状態となった。

カルイェンは兵の暴行や略奪、殺戮を一日だけゆるし、好き放題にさせた。そのため都は混乱に陥り、事実上の無政府状態になってしまった。

（これでよい、これで……）

城の窓からその様子を眺め、カルイェンは満足そうにうなずいていた。

（まこと優秀なリジェカ人であるなら、この争乱を生き延びるであろう。死ぬのは、無能なやつらと、異邦人だ）

拳を握りしめる。王こそ逃がしてしまったが、大志を果たせたという達成感が胸に広がる。

「へへへ、やりやしたね」

そばにひかえる反乱の兵も、下卑た笑みを見せ、満足そうだった。

「いいか、一日だけだ。明日もこれを繰り返せば、もうお前たちの面倒は見ぬ」

「わ、わかっていやすよ」

「今日だけ、今日だけっすよ」

そばに控えていた数人の兵は愛想笑いを浮かべたが、カルイェンは眉をしかめた。

（卑しいやつらめ）

兵は、うずうずしている様子を見せた。自分たちも、戦利品を獲りにいきたいのであろう。カルイェンは蝿を追い払うように手を振り、

「行っていいぞ」
と言えば。兵たちは、ひゃはー、などと声をあげながらその場を離れ、城内を駆け巡り負傷兵にとどめをさしたり、備蓄品を奪い取るなどの狼藉を働いた。
それと入れ替えに、ヂシラッカが来て、都の制圧を改めて報告し、以後の指示をもとめた。
「今日一日は、兵の好きにさせ。明日以降は……」
己の思い描いていることを、淡々と語る。ヂシラッカはうやうやしくこれを聞いている。
「これにてリジェカはあなた様の支配下に置かれるのですな」
「そうだ。リジェカを治められるのは、この私をおいてほかにはない」
相当な自負心であった。この反乱を成功させて、さらなる自信もついたであろう。
彼の脳裏には、どのような国造りが描かれているのであろうか。

守備兵に囲まれて、モルテンセンはフィウメ目指して駆けた。
幸い、追っ手はない。どうやら、カルイェンは都のメガリシを掌握することに専念しているようだ。
逃げる最中で見た光景が頭から離れず、モルテンセンはしきりに顔をしかめ、歯を食いしばっていた。
この反乱は、十をすこし過ぎた幼き王には、あまりにも重い試練であった。マイアはあいかわらず、モルテンセンの胸に顔をうずめて震えている。「もう大丈夫だ」と言っても、聞こえないかのように、震え続けている。
知らず知らずのうちに、涙が溢れ、頬をつたう。
(多くの大人たちは、どうしてこのような争いばかり好んで起こすのだろう)
今そばにいる守備兵およびイヴァンシム、そしてコヴァクス、ニコレットのように、信頼できる大人の、なんと少ないことだろう。

ほとんどの大人が、己の欲望のおもむくままに奪い合いをする。かつては、そんな大人たちのために監禁されて、息苦しい思いをさせられたものだった。それから解放された、と思ったら、この反乱。

カルイェンの目は、あのとき自分たちを監禁した大人たちと同じ目の色をしていた。白い部分があっても、碧い瞳をしていても、濁ったような、どす黒いと思わせる目の色。

クネクトヴァにカトゥカは、モルテンセンとマイアを気の毒そうに見つめていた。大人たちに翻弄されて、逃げなければならぬその不遇。

「かわいそう」

「うん……」

カトゥカはぽそりとつぶやき。クネクトヴァも相槌を打つ。

ことにカトゥカも大人たちに冷遇されていたことがあるので、この兄と妹の胸の苦しみが我がことのように迫ってくる。

その大人たちも、無邪気な子供のころがあったはずだが、子供から大人になってゆく過程のなにが、大人をあんな大人にしてしまったのであろう。

ともあれ、一行はどうにかフィウメにたどり着き、驚いたメゲッリは慌てて出迎え。

ことの次第を聞いて、すぐさま守りを固め、斥候を都に放った。

メガリシは無法地帯となっていた。

カルイェンがまず城に入ったあと、ヂシラッカが千を越える兵を率い都に入り、それぞれ半分に分けて、一方は城門を破り城に乱入し、一方は街で好き放題にさせた。

軍は出征中であったために、守りは手薄となり兵も少ない。そこへきて、まさかの反乱。不意を突かれた守備兵はことごとく討たれ、ここにメガリシは敢え無く陥落の憂き目を見ることになってしまった。

反乱の兵は、略奪暴行をはたらいた。ことに、異邦人と見ればこ

れを容赦なく引き立てて、処刑した。
一旦は革命を起こし城に詰め掛けた民衆たちであったが、まさかの反乱になす統べなく、押さえ込まれる一方だった。
「やめて！」
という悲痛な女性の声がした。いや女性だけでなく、ところどころで、老若男女問わず悲痛な叫び声がこだました。
それとともにおびただしい血が流され、しかばねが路地にころがり。
それを嘲笑うかのように、下卑た笑い声がひびいた。
「タールコが攻め込んできた！」
混乱のあまり、そういった話まで噴出し、民衆の中には着の身着のまま都から命からがら逃げ出す者まであった。
しかしそれらは、都の郊外に控えていた別の、千をかぞえる反乱兵と遭遇した。
「タールコの軍勢じゃない！」
見れば、リジェカの軍装である。ほっとしたのも束の間、反乱の兵は逃げ出した民衆に襲い掛かった。
「待ってくれ、おれたちはリジェカ人だ！」
「黙りやがれ！」
友軍であると安心しきっていた民衆は、まさに悪夢に引きずり込まれたかのような思いで襲い来る刃にかかり、ひとり、またひとりと討たれていった。
彼ら彼女らにすればわけもわからず殺されてゆき、無念さばかり胸に詰め込んで息を引き取らざるを得なかった。
その殺戮の最中、都から一騎来たかと思えば、
「お前たちも、都へゆけ、というお達しだ」
と伝えると、待ってましたとばかりに殺戮をやめて、だっと駆けだし都へなだれこみ、すでに好き放題働く反乱の兵にまじって、略奪や暴行、殺戮を働いたのだった。
カルイェンの思想がどうであれ、その下の兵たちには関係なかっ

た。
むしろお上公認で狼藉が働けることだけがすべてだった。
もはや、メガリシは都の体(てい)をなさず、無法地帯へと成り果てていった。

今ごろ、都は悲惨なことになっているであろうと、イヴァンシムは王に代わり、今までのことをメゲッリに語った。
メゲッリは瞳を閉じ気味に、静かに聞いている。が、眉はしかめられていた。
「なんということでござろうか」
このフィウメもかつては革命が起き、かつての太守は首をはねられた、ということがあった。
そう、あのドラゴンの夜である。それから、平穏な日々が続いていたのだが、ひとりあらぬ暴挙に出た者があったためリジェカは再びの争乱状態に戻ろうとしていた。
マイアは疲労から別室で休ませ、カトゥカがそれに付き添っている。
モルテンセンは出された紅茶をすすり、つとめて落ち着こうとしていた。
「もう、予もなにがなにやら、わからぬ……」
普通に考えれば、臣下に背かれるようなことはしていない。よく働いたものには、身分の上下へだてなく、恩賞をあたえていたし、重く用いた。
民もモルテンセンの治世を喜んでいた。
だが、それでもなお、間違いをただそうとする。あらぬ正義感をいだいた者がひとりあらわれて、すべてが変わってしまった。
モルテンセンは、そのことに強い衝撃を受けているようだった。

第二十章　反乱　？

反乱によりメガリシは無法地帯となり、民は歎いた。城も荒れ放題に荒れた。

だが民の歎きをよそに、カルイェンとヂシラッカは、反乱の成功を喜んだ。

荒れた広間をなおさせて、そこで近しいものと祝宴をひらいたのだ。

「これで、リジェカはよき国となりましょう」

「うむ。リジェカは、まこと優秀なリジェカ人のみによって治められなければならぬ。異邦人を軍に迎えるなど、もってのほかであるが、あのモルテンセンはあろうことかそれをし、さらに国を売ろうとしていた」

カルイェンはもはやモルテンセンを呼び捨てにしていた。もう、王とは思っていない。

「あやうく、国がドラゴン騎士団に売られるところでござったな」

「まったくだ。ドラゴン騎士団などにたぶらかされ、リジェカを利用され、挙句の果てにはオンガルリの属国にされようとしていたのだ」

機嫌よく話すカルイェンであったが、モルテンセンを討ち果たせなかったことが心残りのようだ。

「モルテンセンはメゲッリの治めるフィウメに逃げ込んだようだ。都に秩序を取り戻したあかつきに、軍容をととのえ、フィウメを攻める」

「御意」

陽が暮れゆくにつれて、乱痴気騒ぎもおさまりつつあった。カルイェン直属の騎士たちが刃を振りかざし、反乱の兵に略奪をやめさせているのだ。反乱の兵も腹いっぱいに暴れて、素直に従った。

この反乱、ドラゴン騎士団がリジェカ軍の頂点にすえられてから

考え付いたものだ。
都の郊外に邸宅を構えるカルイェンは内戦のとき、どこにもつかず、中立の立場をとっていたが、リジェカがひとまずの落ち着きを取り戻したとき、王に乞われて内政に関わるようになったのだが。
ドラゴン騎士団、赤い兵団がリジェカ軍にいることに、最初から強い違和感を覚えていた。
それのみならず、違和感は日に日に強くなり、心の中で反乱を思い描くようになった。
リジェカはリジェカ人だけのものであるべきだ、と。さらに、そこに優秀な、とつくようにもなった。
先の王、ポレアスの無能ぶりをみていたカルイェンは、無能な者に国を治められぬと見ていた。そこから、優秀なリジェカ人が国を治めるのがよい、と思うようになった。
さてどうするべきか、と考えていたときドラゴン騎士団に赤い兵団をはじめとするリジェカ軍が出征することになった。
（国をただすは、まさにいま）
意を決したカルイェンは反乱を起こし、王を殺し、リジェカをただすのは今、とその本性をあらわしたのだ。
まずは己が城に入り、王に会い、隙を見て暗殺する。
それから、副官であるヂシラッカが二千の兵を率い。まず郊外に千の兵を起き、千の兵で都に入る。
都の人々はリジェカ軍の都入りを怪しまなかった。またどこかに出征をするのだろうか、と思っていたが。それが突然、城門を破り城内になだれこみ、さらに人々に刃を振りかざし襲い掛かったのだ。
まさかそんなことをすると思わなかった城兵に都の人々は虚を突かれ、一方的にされるがままであった。
かくして、王は逃げ、都は無法地帯となり。反乱は成功した。

一夜明けた。
略奪暴行、殺戮は反乱の日のみであると取り決めがなされていた

ので、反乱の兵はしぶしぶながらそれに従い、翌日にはおとなしくなって、戦利品をかかえて、ところどころでいびきをかいて惰眠をむさぼっていた。近くに無念の表情でよこたわるしかばねがあっても、おかまいなしである。

「起きろ！」

とヂシラッカをはじめとするカルイェン直属の騎士たちが、惰眠をむさぼる反乱の兵をたたき起こして回った。

反乱の兵はあくびをし、目をこすりながら起きれば。

「おまえたちの遊びの後始末をしろ。かばねを郊外に埋めろ」

と言うので、しぶしぶ言うとおりにして、戦利品を背中に背負ってしかばねを郊外にはこび、穴を掘ってそこに埋めた。

「やめてくれ、せめて自分たちにちゃんと弔わせてくれ！」

都の民の中には、自分たちの手で犠牲者をとむらってやりたいと申し出るものもいた。だが、

「うるさい！」

怒号とともに刃がひらめき、弔いを申し出る民はその餌食となって、郊外に埋められてゆくのであった。

もはや問答無用だった。

さらに男手を狩り出し、剣をつきつけながら、荒れた都の清掃にあたらせた。

陽が中天にさしかかるころ、清掃もひと段落つき、城の前の広場に人々が呼び集められ。その周囲を反乱の兵が剣や槍をつきつけ、とりかこんでいた。

人々はこれからなにが起こるのか不安な表情で、周囲を見渡していた。

城は人々の気持ちを見下すように、そびえたっていた。

演台が設けられて、そこに騎士たちの護衛つきで貴族らしき男がのぼる。いうまでもないカルイェンである。

カルイェンは演台ののぼり、人々を見下ろし見回し、満足げにうなずくと、大口を開き演説を始めた。

「メガリシの民よ。新たしい時代が来た」
最初の一言がおこると、人々はざわめいた。新しき時代とは、なんだ、と。
「黙れ、黙らんか！　でなければ、斬るぞ！」
反乱の騎士や兵は刃をもって、民を無理矢理に黙らせた。
「王は、いや、モルテンセンなる売国奴はドラゴン騎士団と手を結び、国を売った。良識あるリジェカ人として、これが許せるだろうか！」
馬鹿な、と言う声がした。途端にそれを言った者は引きずり出され、問答無用で首を刎ねられる。
「リジェカは、リジェカ人だけのものである！　いや、リジェカの生まれとて、無能な者はリジェカ人にあらず。そして、異邦人もいらぬ。優秀なリジェカ人のみによって、新しきリジェカをつくりゆくのだ！」
カルイェンは拳を握り手を振り上げながら力説した。民は固唾を飲んで黙って聞くしかなかった。
今ごろは、出征しているリジェカ軍がガウギアオスにてタールコ軍とわたりあっているであろう。そんなときに、この男は何をしでかし、何を言っているのだ。そう思う者が多数いたが、逆らえば命はないので、黙っているしかなかった。
（狂っている）
多くの人々が、そう思った。本国でこのような混乱があれば、ガウギアオスの戦果がどうあれ、タールコに攻め込まれてしまうのではないか。素人でも思いつきそうなものだが、カルイェンはそんな思いはなかった。
「タールコとて、優秀なリジェカ人が結束すれば、赤子の手をひねるようなものである。負けることはない。来るならば、来るがよい。リジェカ人がいかなるものか、やつらに思い知らせてやろうではないか」
演説がすすむにつれ、民の感じる狂気と恐怖の度合いが増してい

った。

立場ある者が、夢想にとりつかれるとどうなるのか。それは昨日さんざん思い知らされたばかりだった。

カルイェンは民が不安げにおのれを見上げるのを満足そうにながめていた。良君とうやまれるよりも、暴君として怖れられる方が嬉しいのかもしれない。

「よき国造りとして、まずは。民を、優秀な者と、無能な者、異邦人とにわけねばならぬ」

言っている意味がわからない。わけるといっても、人は千差万別であるし、多民族地域で混血もすすんでいるこの地で、どうやってそんなことをするのだ。

すると、神父がひとり、杖をつきながら演台にあがった。民の中には、ああ、と歎きのため息を漏らす者が多数いた。

「これなるは、異端審問官なるヴォローゾ神父である。このヴォローゾ神父をはじめとする、異端審問官らに、まことのリジェカ人と、そうでない者の選別を任せる」

ヴォローゾ神父は白髭をはやし白髪頭の老年の神父だったが、その目は異様にぎらついていた。この神父、かつてはメガリシのある教会の神父をつとめていたが。悪魔祓いと称し、人を火であぶることを好み、人々から怖れられていた。

身分の高い者に取り入るのもうまく、先の王ポレアスもヴォローゾを庇護していた。それが、モルテンセンの代になって、あまりにも乱暴な悪魔祓いをすることを理由に追放されたはずだった。

が、どうやらカルイェンのもとに逃げ込み、庇護を受けていたようだ。

ヴォローゾの横に控える弟子の神父の手には、大理石でつくられた白く細く背の高い、杖のような燭台が握られていた。

ヴォローゾ神父は火打石を懐から取り出し、その燭台に火を灯せば。火は燭台のうえ、赤々と燃え上がった。

「これは、神の火である。神がゆるしたまい、この火に焼かれるこ

とがなければ、その者はまことのリジェカ人である」
民は騒然となった。カルイェンは唇をゆがめ、いよいよ満足そうに人々を見下ろしていた。
「もしこの火に焼かれる者あらば、それは無能な者、異邦人であり、神の生け贄となって処刑されるであろう！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8961o/

ドラゴン騎士団戦記

2011年10月20日08時02分発行